

日田市高瀬遺跡群の調査 2

て さき
手 崎 遺 跡

おお べ
大 部 遺 跡

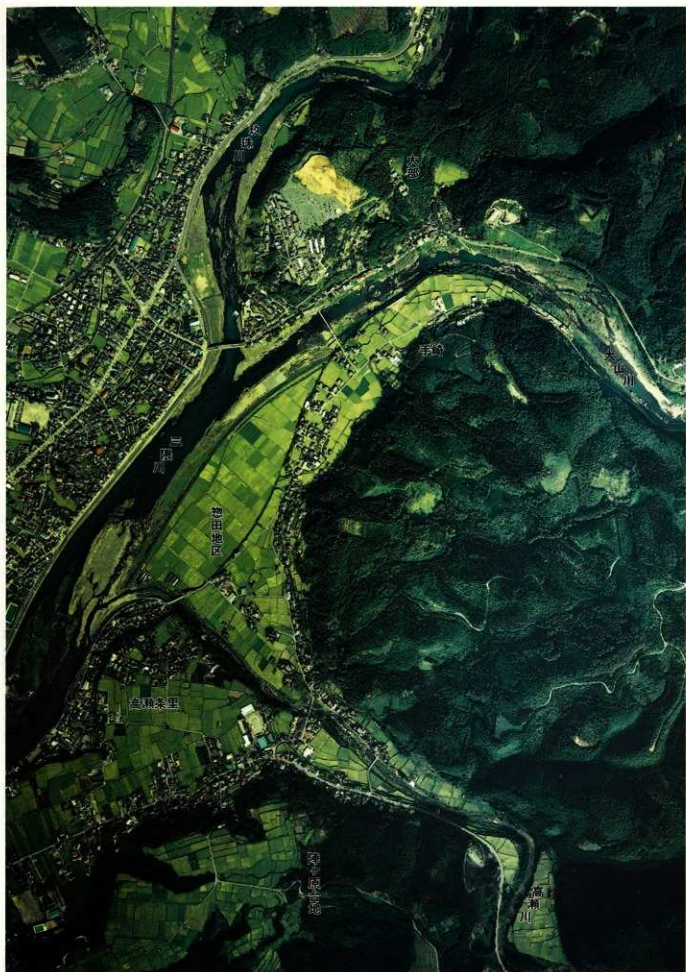
1998

大分県教育委員会

日田市高瀬遺跡群の調査 2

て さき
手 崎 遺 跡

おお べ
大 部 遺 跡



手崎・大塚遺跡周辺空中写真（1976年9月国土地理院撮影）

手嶋遺跡空撮



手嶋縄文住居



序

大分県の西部に位置する日田盆地は、九州を代表する河川である筑後川の上流域にあたり、北部九州と瀬戸内九州の接点として古くから栄え、多くの文化遺産が知られているところがあります。とりわけ、盆地の南側一帯には、国指定史跡ガランドヤ古墳や穴観音古墳が所在しており、奈良時代の「豊後風土記」に記載の石井駅、鏡坂の伝承地でもあります。

この地区に、一般国道210号日田バイパスの建設が計画され、それに伴う埋蔵文化財発掘調査を平成元年から5年度にかけて実施してまいりました。その結果、旧石器時代から江戸時代におよび8遺跡が確認されました。このうち4遺跡については既に報告書を刊行しておりますが、このたび手崎・大部の両遺跡についての発掘調査報告書を刊行することになりました。その成果については、今後の文化財保護や調査研究に寄与するものが大きいと思われ

ます。

おわりに発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力をいただいた関係者各位に対し、心から感謝申し上げます。

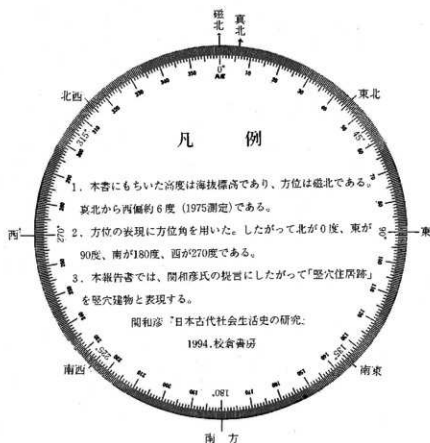
平成10年3月31日

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は、一般国道210号日田バイパスの建設に伴い建設省大分工事事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した日田市高瀬地区遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本書に報告する遺跡は、平成元年に確認調査、平成3年度と5年度に本調査をおこなった遺跡のうち、日田市大字高瀬に所在する手崎遺跡と、大字日高に所在する人部遺跡(以上本調査)の2遺跡である。
3. 本書におさめた各遺跡の概要は以下の概報に速報してあるが、本書をもって正式な報告とする。
田中裕介「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」Ⅲ 1992 大分県教育委員会
田中裕介・高島豊「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」Ⅴ 1994 大分県教育委員会
4. 遺構の実測、写真撮影は各調査担当者が行った。遺物の実測は田中・高島(現大分市教育委員会)・坂本嘉弘・丸尾博忠(現福岡県大野城市教育委員会)・山田尚志(現狭間町教育委員会)が主としておこない、近世陶磁器については吉田寛、石器については緒貫俊一・牧尾義則・萩幸二・志賀智史(以下別府大学学生)・阿南亨・山下宗親の協力を得た。
5. 本報告書の作成にあたっては、県教委文化財資料室において、遺構図面および遺物の整理作業等を実施した。遺構図面の整理は今泉正子・丸尾博忠が主としてあたり、写真撮影は田中・坂本・友岡信彦がおこなったほか、長谷川正美氏の協力を得た。
6. 本書の執筆は、清水宗昭・田中裕介・坂本嘉弘が分担してあった。文責は日次および文末に明記した。
7. 石器の原材産地分析は瀬科哲男(京都大学原子炉実験所)、花粉分析は畑中健一(北九州大学)各氏に依頼した。
8. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。
9. 本書の編集・構成は田中が担当した。



目 次

第1章. はじめに	1
第1節. 調査にいたる経過	1
第2節. 埋蔵文化財調査の経過と調査組織	1
第2章. 地理的歴史的環境	7
第1節. 日山盆地の位置と地形	7
第2節. 三隈川南岸の地形	7
第3節. 日田三隈川南岸の歴史	9
第3章. 手崎遺跡	15
第1節. 手崎遺跡の調査経過と概要	15
第2節. 手崎遺跡の立地	16
第3節. 手崎遺跡の現状	16
第4節. 本調査の方法	16
第5節. 遺構と遺物	19
1) A地区	19
2) C地区	26
3) D地区	44
4) E地区	60
5) F地区	65
6) F地区谷調査区	79
7) 縄文時代の遺構	85
8) 縄文時代の包含層	102
第6節. まとめにかえて	134
遺物観察表	135
写真図版	149
第4章. 大部遺跡	209
第1節. 大部遺跡の調査経過と概要	209
第2節. 大部遺跡の立地と現状	209
第3節. 試掘調査と基本層序	210
第4節. 遺構と遺物	210
1) A地区	210
2) B地区	214
第5節. まとめ	229
遺物観察表	231
写真図版	233
第5章. 自然科学的分析	241
第1節. 日田市手崎遺跡の花粉分析	241
第2節. 日田バイパス(大部・手崎)遺跡出土の サカイト、黒曜石製遺物の原材産地分析	244
第6章. 総 括	252
(報告書抄録)	巻末

挿 図 目 次

第1章 はじめに

- 第1図 日田バイパスの路線と遺跡……………3～4

第2章 地理的歴史的環境

- 第1図 日田盆地の位置……………6
 第2図 日田盆地の位置と地勢……………7
 第3図 三隈川南岸の地形……………8
 第4図 遺跡の位置と周辺地形……………10
 第5図 日田盆地の主要遺跡……………13～14

第3章 手崎遺跡

- 第1図 手崎遺跡の調査区と小字「手崎」内の地名……………15
 第2図 手崎遺跡遺構配置図……………17
 第3図 手崎遺跡A地区1号土壌……………20
 第4図 手崎遺跡A地区2号土壌……………20
 第5図 手崎遺跡A地区遺構配置および遺物分布図……………21
 第6図 手崎遺跡A地区出土縄文土器(1)……………23
 第7図 手崎遺跡A地区出土縄文土器(2)……………24
 第8図 手崎遺跡A地区出土石器(1)……………25
 第9図 手崎遺跡A地区出土石器(2)……………25
 第10図 手崎遺跡A地区出土遺物……………25
 第11図 手崎遺跡C地区2号土壌出土遺物……………26
 第12図 手崎遺跡C地区2号土壌……………26
 第13図 手崎遺跡C地区遺構配置図—弥生時代以後……………27
 第14図 手崎遺跡C地区1号竪穴建物……………29
 第15図 手崎遺跡C地区1号竪穴建物床下の掘り込み……………30
 第16図 手崎遺跡C地区1号竪穴建物出土遺物(1)—石器……………30
 第17図 手崎遺跡C地区1号竪穴建物出土遺物(2)—土器・土器……………31
 第18図 手崎遺跡C地区3号竪穴建物……………32
 第19図 手崎遺跡C地区3号竪穴建物出土遺物……………32
 第20図 手崎遺跡C地区11号土壌……………32
 第21図 手崎遺跡C地区1号掘立柱建物……………33
 第22図 手崎遺跡C地区1号掘立柱建物出土遺物……………33
 第23図 手崎遺跡C地区2号掘立柱建物……………34
 第24図 手崎遺跡C地区2号竪穴建物……………35
 第25図 手崎遺跡C地区2号竪穴建物カマド……………36
 第26図 手崎遺跡C地区2号竪穴建物出土遺物……………36
 第27図 手崎遺跡C地区4号竪穴建物……………37
 第28図 手崎遺跡C地区4号竪穴建物出土遺物……………37
 第29図 手崎遺跡C地区5号竪穴建物……………38
 第30図 手崎遺跡C地区5号竪穴建物出土遺物……………38
 第31図 手崎遺跡C地区5号竪穴建物カマド……………39
 第32図 手崎遺跡C地区6号竪穴建物……………40
 第33図 手崎遺跡C地区6号竪穴建物カマド……………40
 第34図 手崎遺跡C地区6号竪穴建物出土遺物……………41
 第35図 手崎遺跡C地区7号竪穴建物……………41
 第36図 手崎遺跡C地区7号竪穴建物カマド……………41
 第37図 手崎遺跡C地区7号竪穴建物出土遺物……………41

- 第38図 手崎遺跡C地区7号土壌……………42
 第39図 手崎遺跡C地区7号土壌出土遺物……………42
 第40図 手崎遺跡C地区8号土壌……………42
 第41図 手崎遺跡C地区8号土壌出土遺物……………42
 第42図 手崎遺跡C地区1号中世墓……………43
 第43図 手崎遺跡C地区10号土壌と出土遺物……………43
 第44図 手崎遺跡D地区遺構配置図—弥生時代以後……………45
 第45図 手崎遺跡D地区8号竪穴建物……………46
 第46図 手崎遺跡D地区8号竪穴建物出土遺物……………47
 第47図 手崎遺跡D地区8号竪穴建物出土石器……………47
 第48図 手崎遺跡D地区15号土壌……………47
 第49図 手崎遺跡D地区15号土壌出土遺物……………48
 第50図 手崎遺跡D地区13号竪穴建物……………48
 第51図 手崎遺跡D地区13号竪穴建物出土遺物……………48
 第52図 手崎遺跡D地区9号竪穴建物……………49
 第53図 手崎遺跡D地区9号竪穴建物出土遺物……………50
 第54図 手崎遺跡D地区12号土壌出土遺物……………51
 第55図 手崎遺跡D地区12号土壌……………51
 第56図 手崎遺跡D地区13号土壌……………52
 第57図 手崎遺跡D地区13号土壌出土石器……………52
 第58図 手崎遺跡D地区13号土壌出土石器……………52
 第59図 手崎遺跡D地区10号竪穴建物出土遺物……………53
 第60図 手崎遺跡D地区10号竪穴建物出土遺物……………54
 第61図 手崎遺跡D地区10号竪穴建物床下土壌……………55
 第62図 手崎遺跡D地区10号竪穴建物床下土壌出土遺物……………55
 第63図 手崎遺跡D地区31号土壌……………56
 第64図 手崎遺跡D地区31号土壌出土遺物……………56
 第65図 手崎遺跡D地区11号竪穴建物出土遺物……………57
 第66図 手崎遺跡D地区11号竪穴建物……………57
 第67図 手崎遺跡D地区12号竪穴建物……………57
 第68図 手崎遺跡D地区2号中世墓……………58
 第69図 手崎遺跡D地区2号中世墓出土遺物……………58
 第70図 手崎遺跡D地区32号土壌……………59
 第71図 手崎遺跡D地区32号土壌出土遺物……………59
 第72図 手崎遺跡D地区ビット24……………59
 第73図 手崎遺跡D地区ビット24出土遺物……………59
 第74図 手崎遺跡E地区102号竪穴建物……………60
 第75図 手崎遺跡E地区102号竪穴建物出土遺物……………60
 第76図 手崎遺跡E地区遺構配置図……………61～62
 第77図 手崎遺跡E地区101号竪穴建物……………63
 第78図 手崎遺跡E地区101号竪穴建物出土遺物……………63
 第79図 手崎遺跡E地区101号竪穴建物カマド……………64
 第80図 手崎遺跡E地区101・102号溝断面図……………64
 第81図 手崎遺跡F地区203号竪穴建物……………65
 第82図 手崎遺跡F地区203号竪穴建物カマド……………66
 第83図 手崎遺跡F地区203号竪穴建物出土遺物……………66
 第84図 手崎遺跡F地区遺構配置図—弥生時代以後……………67～68
 第85図 手崎遺跡F地区204号竪穴建物……………69

第86回。手崎遺跡F地区204号竪穴建物カマド……70
第87回。手崎遺跡F地区204号竪穴建物出土遺物……70
第88回。手崎遺跡F地区201号竪穴建物……71
第89回。手崎遺跡F地区201号竪穴建物出土遺物……71
第90回。手崎遺跡F地区201号竪穴建物カマド……72
第91回。手崎遺跡F地区202号竪穴建物……72
第92回。手崎遺跡F地区202号竪穴建物出土遺物……73
第93回。手崎遺跡F地区202号竪穴建物カマド……73
第94回。手崎遺跡F地区205号竪穴建物……74
第95回。手崎遺跡F地区205号竪穴建物カマド……74
第96回。手崎遺跡F地区205号竪穴建物出土遺物……75
第97回。手崎遺跡F地区206号竪穴建物……75
第98回。手崎遺跡F地区207号土壇……76
第99回。手崎遺跡F地区207号土壇出土遺物……76
第100回。手崎遺跡F地区203号土壇……76
第101回。手崎遺跡F地区203号土壇出土遺物……76
第102回。手崎遺跡F地区220号土壇……76
第103回。手崎遺跡F地区220号土壇出土遺物……77
第104回。手崎遺跡F地区203号掘立柱建物……77
第105回。手崎遺跡F地区204号掘立柱建物……78
第106回。手崎遺跡F地区205号掘立柱建物……78
第107回。手崎遺跡F地区201号土壇……78
第108回。手崎遺跡F地区201号土壇出土遺物……78
第109回。手崎遺跡F地区谷間窪区出土遺物①—縄文土器①……80
第110回。手崎遺跡F地区谷間窪区出土遺物②—石器①……81—82
第111回。手崎遺跡F地区谷間窪区出土遺物②—石器①……83
第112回。手崎遺跡F地区谷間窪区出土遺物③—石器②……83
第113回。手崎遺跡F地区谷間窪区出土遺物④—土器①……84
第114回。手崎遺跡F地区谷間窪区基準土層図……85
第115回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居……86
第116回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器①……87
第117回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器②……88
第118回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器③……89
第119回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器④……90
第120回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器⑤……91
第121回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器⑥……92
第122回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器⑦……93
第123回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土縄文土器⑧……94
第124回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土石器①……95
第125回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土石器②……96
第126回。手崎遺跡C地区1号竪穴住居出土石器③……97
第127回。手崎遺跡C地区1号溝……97
第128回。手崎遺跡C地区9号土壇……98
第129回。手崎遺跡E地区106号土壇……98
第130回。手崎遺跡E地区118号土壇……99
第131回。手崎遺跡C地区21号土壇……99
第132回。手崎遺跡縄文時代各土壇出土器……100
第133回。手崎遺跡C地区1号集石……101
第134回。手崎遺跡C地区1号集石出土石器……101
第135回。手崎遺跡C地区2号集石……101

第136回。手崎遺跡C地区3号集石……101
第137回。手崎遺跡C地区4号集石……101
第138回。手崎遺跡F地区縄文時代包含層の遺存分佈と土層……103—104
第139回。手崎遺跡E地区縄文時代包含層の遺存分佈と土層……105—106
第140回。手崎遺跡C地区縄文時代包含層の遺存分佈と土層……107—108
第141回。手崎遺跡E地区縄文時代包含層の遺存分佈と土層……109—110
第142回。手崎遺跡E地区地下層出土縄文土器……111
第143回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器①……113
第144回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器②……114
第145回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器③……115
第146回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器④……116
第147回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑤……117
第148回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑥……118
第149回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑦……119
第150回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑧……121
第151回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑨……122
第152回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑩……123
第153回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑪……124
第154回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土縄文土器⑫……125
第155回。手崎遺跡E地区下層出土石器……126
第156回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器①—石核①……126
第157回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器②—石核②……127
第158回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器③—石核③……128
第159回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器④—石核④……129
第160回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器⑤—石核⑤……130
第161回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器⑥—石核⑥……131
第162回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器⑦—石核⑦……132
第163回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器⑧—石核⑧……132
第164回。手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器⑨—石核⑨……133

第4章 大部遺跡

第1回。大部遺跡の調査区……209
第2回。大部遺跡A地区遺構配置図……210
第3回。大部遺跡A地区土層断面図……211
第4回。大部遺跡A地区出土縄文土器……212
第5回。大部遺跡A地区出土土器……212
第6回。大部遺跡A地区出土石器①—石核①……213
第7回。大部遺跡A地区出土石器②—石核②……213
第8回。大部遺跡A地区出土石器③—打製石斧①……213
第9回。大部遺跡A地区出土石器④—石斧②……213
第10回。大部遺跡B地区縄文時代包含層土層図……215—216
第11回。大部遺跡B地区縄文時代遺構配置図および遺物分佈図……215—216
第12回。大部遺跡B地区1号集石遺構……217
第13回。大部遺跡B地区2号集石遺構……217
第14回。大部遺跡B地区3号集石遺構……217
第15回。大部遺跡B地区1号竪穴……218
第16回。大部遺跡B地区2号竪穴……219
第17回。大部遺跡B地区3号竪穴……219
第18回。大部遺跡B地区出土縄文土器①……221

第19回. 大部遺跡B地区出土縄文土器(2)……………222
第20回. 大部遺跡B地区出土石器(1)―石鏃―……………223
第21回. 大部遺跡B地区出土石器(2)―二次加工刮片―……………224
第22回. 大部遺跡B地区出土石器(3)―石核―……………225
第23回. 大部遺跡B地区出土石器(4)―磨石―……………226
第24回. 大部遺跡B地区出土石器(5)―弥生時代?―……………226
第25回. 大部遺跡B地区1号土壌……………227
第26回. 大部遺跡B地区1号土壌出土土師器……………227
第27回. 大部遺跡B地区2号土壌……………227
第28回. 大部遺跡B地区3号土壌……………228

第29回. 大部遺跡B地区4号土壌……………228
第30回. 大部遺跡B地区5号土壌……………229
第5章1. 花粉分析(畑中健一)
第1回. 手崎遺跡下地区谷調査区トレンチ2の花粉 ダイアグラム……………242
第5章2. 石材産地分析(薬科哲男)
第1回. サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地……………245
第2回. 黒曜石原産地……………245

表 目 次

第1章. はじめに

第1表. 日田バイパス埋蔵文化財調査の経過……………5

第3章. 手崎遺跡

第1表. 手崎遺跡出土遺物(弥生時代以後)観察表……………135
第2表. 手崎遺跡出土縄文土器観察表……………140
第3表. 手崎遺跡出土石器観察表……………146

第4章. 大部遺跡

第1表. 大部遺跡出土縄文土器観察表……………231
第2表. 大部遺跡出土石器観察表……………232

第5章1. 花粉分析(畑中健一)

第1表. 日田市手崎遺跡花粉分析表……………243

第5章2. 石材産地分析(薬科哲男)

第1表. 各サヌカイトの原産地における原石群の元 素比の平均値と標準偏差値……………248
第2表-1. 各黒曜石の原産地における原石群の元 素比の平均値と標準偏差値……………248
第2表-2. 各黒曜石の原産地における原石群の元 素比の平均値と標準偏差値……………249
第2表-3. 各黒曜石の原産地における原石群の元 素比の平均値と標準偏差値……………249
第3表. 日田バイパス(手崎・大部)遺跡出土のサ ヌカイト製造物分析結果……………250
第4表. 日田バイパス(手崎・大部)遺跡出土の黒曜 石製造物分析結果……………250
第5表. 日田バイパス(手崎・大部)遺跡出土の黒曜石・サ ヌカイト製造物の原材産地推定結果……………251
第6表. 九州西北地域原産地採取原石が各原石群に 同定される割合の百分率……………251

挿 入 写 真 目 次

第3章. 手崎遺跡

写真1. A地区の包含層……………19
写真2. A地区の南北断面……………19
写真3. 縄文土器出土状況……………19
写真4. C地区2号土壌……………19
写真5. C地区2号竪穴建物土師器環2出土状態……………35
写真6. C地区2号竪穴建物カマド(西から)……………36
写真7. C地区2号竪穴建物カマド(東から)……………36
写真8. C地区5号竪穴建物カマド検出状態……………36
写真9. C地区5号竪穴建物カマド完掘後……………36
写真10. C地区6号竪穴建物カマド検出状態……………40
写真11. C地区2号土壌完掘後……………42
写真12. C地区8号土壌出土状態……………43
写真13. 調査風景……………44
写真14. 賀川委員調査指導風景……………44
写真15. D地区8号竪穴建物内の土壌……………46

写真16. D地区15号土壌出土状態……………47
写真17. D地区13号竪穴建物出土状態……………48
写真18. D地区9号竪穴建物カマド出土状態……………49
写真19. D地区13号土壌出土状態……………52
写真20. D地区10号竪穴建物内土壌2出土状態……………53
写真21. D地区31号土壌出土状態……………56
写真22. D地区2号中世器出土状態……………58
写真23. D地区32号土壌出土状態……………59
写真24. D地区ピット4青磁碗出土状態……………59
写真25. E地区101号竪穴建物完掘後……………63
写真26. F地区203号竪穴建物No.1・7出土状態……………65
写真27. F地区201号竪穴建物内土壌出土状態……………72
写真28. F地区202号竪穴建物No.9出土状態……………73
写真29. F地区202号竪穴建物No.10出土状態……………75
写真30. F地区220号土壌検出状態……………76
写真31. F地区谷調査区トレンチ1調査風景……………79

写真32. F地区谷調査区トレンチ2実測風景	79
写真33. F地区谷調査区畑中委員花粉分析資料採取風景	79
写真34. C地区1号溝完掘時	97

写真2. B地区B2区断面十層	214
写真3. B地区1号炉穴遺物出土状態	218
写真4. B地区包含層出土状態	220
写真5. B地区3号土壇順序	228

第4章 大部遺跡

写真1. A地区の土層	211
-------------	-----

写真図版目次

第3章 手崎遺跡

図版1. 全景、C地区空中写真、A地区空中写真	149
図版2. C・D地区空中写真、A地区空中写真、E地区空中写真	150
図版3. A地区全景・出土状態・1号土壇	151
図版4. A地区2号土壇、C地区1号竪穴建物	151
図版5. C地区1号竪穴建物、3号竪穴建物	153
図版6. A地区11号土壇・1号掘立柱建物・2号掘立柱建物	154
図版7. C地区2号竪穴建物	155
図版8. C地区4号竪穴建物	156
図版9. C地区5号竪穴建物、6号竪穴建物	157
図版10. C地区7号竪穴建物、7号土壇	158
図版11. C地区1号中世墓	159
図版12. D地区8号竪穴建物、9号竪穴建物・12・13号土壇	160
図版13. D地区12・13号土壇、10号竪穴建物	161
図版14. D地区10号竪穴建物	162
図版15. D地区10号竪穴建物床下土壇	163
図版16. D地区11号竪穴建物、12号竪穴建物	164
図版17. D地区32号七壇、2号中世墓	165
図版18. D地区2号中世墓	166
図版19. E地区102号竪穴建物、101号竪穴建物	167
図版20. E地区102号竪穴建物、101・102号溝	168
図版21. F地区全景	169
図版22. F地区竪穴建物群・203号竪穴建物	170
図版23. F地区203号竪穴建物	171
図版24. F地区204号竪穴建物	172
図版25. F地区201号竪穴建物	173
図版26. F地区202号竪穴建物	174
図版27. F地区205号竪穴建物	175
図版28. F地区205号竪穴建物	175
図版29. F地区206号竪穴建物、203・207号土壇	177
図版30. F地区谷調査トレンチ1	178
図版31. F地区谷調査トレンチ2	179
図版32. F地区谷調査トレンチ2	180
図版33. C地区1号竪穴住居	181

図版34. C地区1号竪穴住居	182
図版35. C地区9・106号土壇	183
図版36. C地区1・2・3・4号集石	184
図版37. F地区包含層	185
図版38. F地区包含層	186
図版39. C地区包含層	187
図版40. E地区包含層	188
図版41. C地区1号竪穴建物出土遺物	189
図版42. C地区1・2・3・4・5・6号竪穴建物出土遺物	190
図版43. C地区6・7号竪穴建物、8号土壇、D地区8号竪穴建物、15号土壇、13・9号竪穴建物、12号土壇出土遺物	191
図版44. D地区9号竪穴建物、12・13号土壇、10号竪穴建物出土遺物	192
図版45. D地区10号竪穴建物床下土壇、31号土壇、11号竪穴建物、2号中世墓出土遺物	193
図版46. D地区2号中世墓、32号土壇、Pit 24、E地区102・101号竪穴建物、F地区203号竪穴建物出土遺物	194
図版47. F地区203・204・201・202号竪穴建物出土遺物	195
図版48. F地区202・205号竪穴建物、203・220号土壇出土遺物	196
図版49. C地区縄文時代1号竪穴住居出土遺物(1・2)	197
図版50. C地区縄文時代1号竪穴住居出土遺物(3・4)	198
図版51. C地区縄文時代1号竪穴住居出土遺物(5)、縄文時代各土壇出土遺物	199
図版52. 包含層出土縄文時代早期土器(1)	200
図版53. 包含層出土縄文時代早期土器(2)	201
図版54. 包含層出土縄文時代早期土器(3・4)	202
図版55. 包含層出土縄文時代前期土器・後晩期土器	203
図版56. A地区、C地区1号竪穴、D地区13号土壇、C地区1号集石、F地区谷調査区出土石器	204
図版57. C地区1号竪穴住居出土石器	205
図版58. C・D・E・F地区包含層出土石器(1)	206
図版59. C・D・E・F地区包含層出土石器(2)	207
図版60. C・D・E・F地区包含層出土石器(3)	208

第4章 大部遺跡

図版1. 遠景、A地区.....	233	図版4. B地区1・3号炉穴.....	236
図版2. B地区.....	234	図版5. B地区1・2号土壇.....	237
図版3. B地区1・2・3号集石遺構.....	235	図版6. B地区3・4・5土壇.....	238
		図版7. 出土縄文土器・石器1.....	239
		図版8. 出土石器2.....	240

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経過

一般国道210号は、福岡県久留米市を起点とし、大分県日田市を経て大分市にいたる九州中部を横断する主要幹線道路である。しかし近年、交通渋滞や事故多発のために、幹線道路としての機能は低下しつつある。特に日田市街では、現道の幅員が約10mと狭いうえ、沿道の都市化により交通の隘路となった。さらに九州横断自動車道の開通にともなう交通量増加も予想された。

幹線道路の機能低下

このような事態に対応して計画されたのが日田バイパスである(第1図)。建設省九州地方建設局大分工事事務所により事業着手された。計画区間は日田市大字石井字串川から大字日高字小ヶ瀬にいたる延長5.3kmである。西半の大字石井字串川から大字高瀬字上ヶ追にいたる延長2.2kmが2上区、東半の大字高瀬字上ヶ追から大字日高字小ヶ瀬にいたる延長3.1kmが3上区である。1977(昭和52)年度に事業化され、1983(昭和58)年6月28日に都市計画決定された。1987(昭和62)年度から用地着手がおこなわれ、その進捗にともなって1988(昭和63)年度から工事着手した。3上区は1993(平成5)年12月3日に完成し、供用開始した。2上区は現在用地交渉および工事中である。

日田バイパス

大分県教育委員会では、日田バイパスの路線が遺跡の存在する可能性の高い台地上を貫くことと、この地域が奈良時代には石井駅がおかれ、古代官道の路線にあたることから、路線内の遺跡の保存措置が必要と判断し、建設省九州地方建設局大分工事事務所と協議を開始した。それに基づき、1987年1月に路線内の遺跡分布調査を実施した。その結果、9ヶ所の遺跡および遺跡推定地を確認した(第1図)。東から大部遺跡(1)、手崎遺跡(2)、琴平山遺跡(3)、高瀬遺跡(4)、陣ヶ原遺跡(5)、上野第1遺跡(6)、上野第2遺跡(7)、寺内遺跡(8)、護国寺遺跡(9)である。このうち上野第1遺跡から護国寺遺跡までの4遺跡が2上区に、大部遺跡から陣ヶ原遺跡までが3上区に所在する。

県教委の対応

分布調査

この分布調査の結果に基づき、建設省と大分県教委文化課の協議を進め、89年度から上記の9遺跡について発掘調査を実施することになった。

第2節 埋蔵文化財調査の経過と調査組織

第1表を参考にしながら年度をおって、日田バイパスの埋蔵文化財調査の経過をのべる。なお1988(昭和63)年度から1994(平成6)年度までは「報告1」(註1)でまとめているので、手崎・大部遺跡に関わる部分以外は省略し、1995(平成7)年度以後の経過と組織をのべる。

1991(平成3)年度 大宮大橋工事がおこなわれる手崎遺跡・大部遺跡の調査にかかることになった。まず手崎遺跡の丘陵部の試掘調査(A・B・C・D地区)を先行し、その後大部遺跡の試掘・本調査をおこなった。両遺跡とも縄文時代から近世にいたる遺構が重なっており、大規模な調査となった。この年度の調査概要は、川中裕介「手崎遺跡 大部遺跡 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ-1」(1992. 3 大分県教育委員会)に速報されている。この年の調査組織は以下のとおり。

91年度の調査

調査組織

調査主体	大分県教育委員会 宮本尚志(教育長)
調査委員	貫川光夫(別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員) 木村幾多弘(大分市歴史資料館館長)
調査総括	秋本正昭(教育庁文化課課長)

	徳九欽也 (同 参事)
	林英輝 (同 課長補佐)
	今水一成 (同 管理係長)
調査主任	清水宗昭 (教育庁文化課埋蔵文化財第1係係長)
調査担当	田中裕介 (同 主任)
調査員	坂本憲弘 (同 主査) 安倍聡子 (同 嘱託) 富田修司 (同 嘱託)
	後藤晃一 (同 主査) 後藤幹彦 (同 嘱託)
	阿部みゆき (同 嘱託) 後藤万彦 (同 嘱託)
調査事務	西哲弘 (同 埋蔵文化財第2係長主査) 山口淳史 (同 管理係主事)
	原浩一 (同 管理係主事)

93年度の調査 1993(平成5)年度 91年度の本調査をおこなった手崎遺跡の交差点接続部が工事にかかることになり、南側2次調査(E地区)、北側を3次調査(F地区)として本調査をおこなった。この調査によって3工区のすべての遺跡の調査を終了した。

概 報 V この年度の調査概要は、田中裕介・高島豊『上野第1遺跡(平原・米田地区) 上野第2遺跡 手崎遺跡(2・3次) —一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報V—』(1994. 3 大分県教育委員会)に通報されている。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織	調査主体 大分県教育委員会 高本高志(教育長)
	調査委員 鎌中達一(北九州大学文学部教授) 櫻沢一男(宮崎大学教育学部教授)
	調査総括 末広利人(教育庁文化課課長)
	岡忠夫 (同 課長補佐)
	郷野守止 (同 課長補佐兼管理係長)
	調査主任 清水宗昭(教育庁文化課埋蔵文化財第1係係長)
	調査担当 田中裕介(同 主任) 高島豊(同 嘱託)
	調査員 坂本憲弘(同 主査) 吉田寛(同 主事)
	王永光洋(同 埋蔵文化財第2係主査) 吉武敦子(同 嘱託)
	小林昭彦(同 埋蔵文化財第1係主査)
調査事務	西哲弘(同 埋蔵文化財第2係主査) 竹中啓司(同 管理主査)
	原浩一(同 管理係主事)

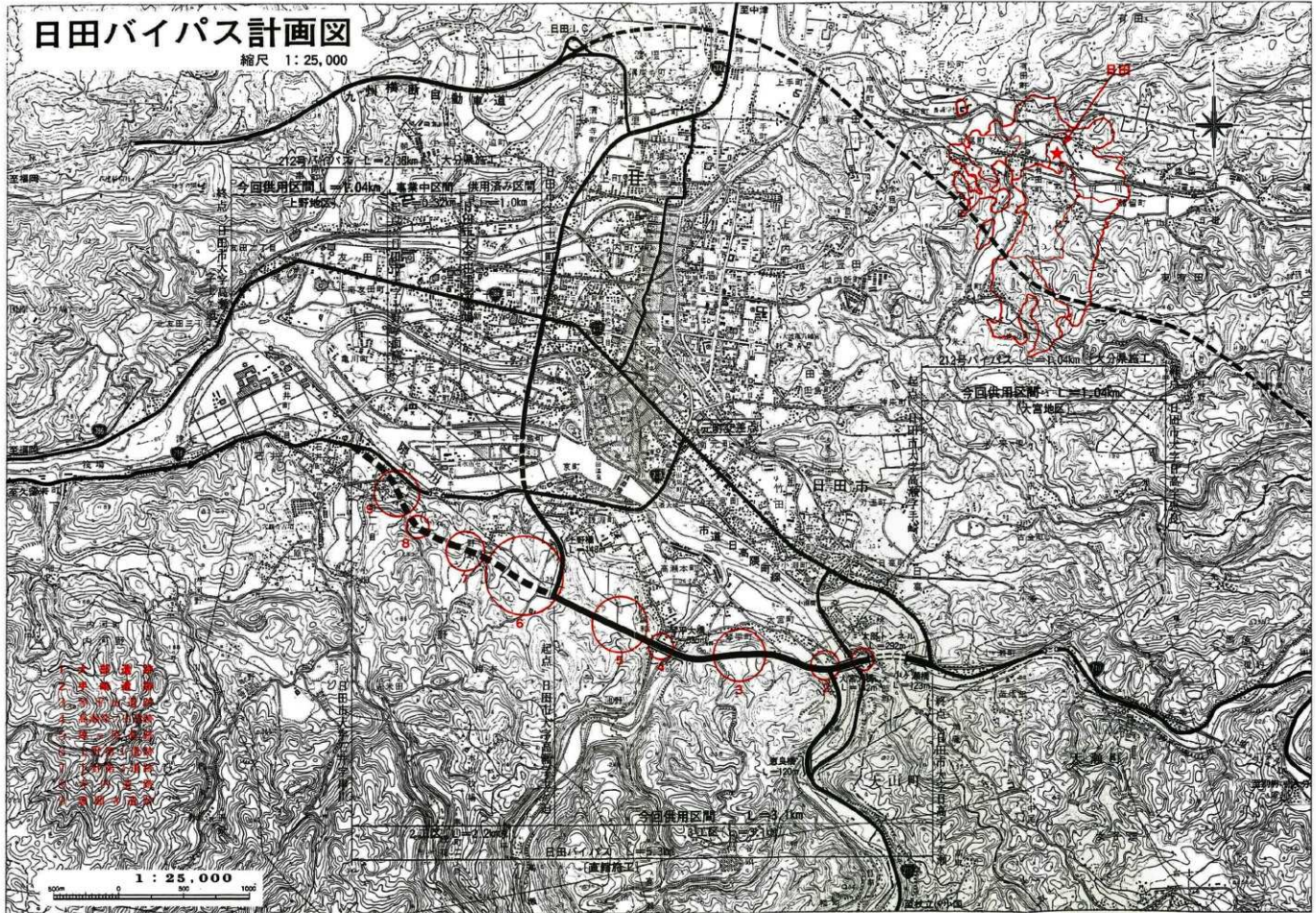
95年度の調査 1995(平成7)年度 本年度は3工区の東半分(高瀬川以東)で調査した手崎遺跡・大部遺跡の2遺跡と上野第1遺跡の整理作業をおこなうことになった。整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室でおこない、資料もそこに保管している。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織	調査主体 大分県教育委員会 帯川哲人・田中恒治(教育長)
	調査総括 末広利人(教育庁文化課課長)
	野田武志(同 課長補佐)
	小野貴吉(同 課長補佐兼管理係長)
	調査主任 清水宗昭(教育庁文化課埋蔵文化財第1係係長)
	整理担当 田中裕介(同 主任)
	調査員 高島豊(同 嘱託) 山田尚志(同 嘱託)
	丸尾博恵(同 嘱託)
調査事務	西哲弘(同 埋蔵文化財第2係主査)
	小野高寛(同 管理係主事)
	整理作業 中山ツヤ子 大谷久美子

96年度の調査 1996(平成8)年度 本年度は手崎遺跡・大部遺跡の2遺跡と上野第1遺跡の整理作業を続行するとともに、護国寺遺跡試掘調査にはいった。なお護国寺遺跡からの東の寺内遺跡は一連の遺跡のためこの2遺跡を総称して寺内遺跡と呼ぶことになった。その寺内遺跡から中世の遺構が予想どおり確認され、次年度に本調査をおこなうこととなった。整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室でおこない、資料もそこに保管している。この年度の調査組織は以下のとおり。

日田バイパス計画図

縮尺 1:25,000



(建設省大分工事事務所編 日田バイパスパンフレットより)

第1図 日田バイパスの路線と進捗

第1表 日田バイパス埋蔵文化財調査の経過

No.	遺跡名	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	(年度) 備 考
1	大 部				▲●				◆	◆	■	
3	琴 平 山		▲									試掘調査のみで終了。
4	高 瀬	▲	●					◆■				高瀬深ノ出遺跡と改名。
5	陣ヶ原		▲	●				◆■				陣ヶ原辻遺跡と改名。
	誠和神社裏			▲●				◆■				工事用道路。
	後藤家墓地			○				◆■				工事用道路。確認調査のみ。
6	上野第1	▲	●	▲	●	●			◆	◆	◆	
7	上野第2					▲						一部試掘調査。
8	寺 内											
9	渡 瀬 寺									▲	●	一部本調査。寺内遺跡に。
	概 報	I	II	III	IV	V						
	本 報 告							I			II	

▲ 試掘調査 ● 本調査 ◆ 整理 ■ 報告

調査組織

調査報告 大分県教育委員会
 田中旭治 (教育長)
 調査連絡 後藤一郎 (教育庁文化課課長)
 野田武志 (同 課長補佐)
 山崎靖信 (同 課長補佐兼管理係長)
 調査主任 清水宗昭 (教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係係長)
 試掘担当 高橋敏 (教育庁文化課埋蔵文化財第1係副主幹)
 整理担当 田中裕介 (同 埋蔵文化財第2係主任)
 調査事務 西哲弘 (同 埋蔵文化財第1係主幹) 渡辺重昭 (同 埋蔵文化財第1係)
 小野高寛 (同 管理係主幹)
 整理作業 中山ツヤ子 大倉久美子

97年度の調査

1997(平成9)年度 本年度は手崎遺跡・大部遺跡の2遺跡の報告書作成と上野第1遺跡の整理作業をおこなうとともに、現地では寺内遺跡の本調査にはいった。寺内遺跡では弥生・古墳時代の住居跡の古墳の周溝が調査された。整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室でおこない、資料もそこに保管している。この年度の組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体 大分県教育委員会
 田中旭治 (教育長)
 事務連絡 後藤一郎 (教育庁文化課課長)
 田原基之 (同 課長補佐)
 秋吉心良 (同 課長補佐)
 河野孝一 (同 課長補佐兼管理係長)
 調査連絡 清水宗昭 (同 主幹兼埋蔵文化財第2係係長)
 調査主任 坂本基弘 (同 埋蔵文化財第2係副主幹)
 整理主任 牧尾義則 (同 埋蔵文化財第2係副主幹)
 調査担当 松本隆弘 (同 埋蔵文化財第2係主任)
 整理担当 田中裕介 (同 埋蔵文化財第2係主任)
 調査事務 西哲弘 (同 埋蔵文化財第1係主幹) 渡辺重昭 (同 埋蔵文化財第2係)
 小野高寛 (同 管理係主幹)
 調査事務 西哲弘 (同 埋蔵文化財第1係主幹) 渡辺重昭 (同 管理係主幹)
 宮崎春彦 (同 管理係主幹)
 整理作業 大倉久美子 金丸涼子 二宮志子

註1 『日田市高遊路群の調査1』(一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1)
 1995 大分県教育委員会



第1図 日田盆地の位置

第2章 地理的歴史的環境

第1節 日田盆地の位置と地形

高瀬遺跡群の所在する日田盆地は、九州のほぼ中央に位置する(第2図)。現在の行政区分では大分県日田市に属し、古代以来の行政区画では西海道豊後国日田郡にあたる。日田市は大分県の最西部に位置し、水系的には筑後川流域に属し、北部九州と関係が深い。また盆地中央から見ると、西に筑後川に下ると福岡県肥前・朝倉にいたり、東に遡ると玖珠盆地にいたる。北に大石峠をこえると豊前平野にでる。北西に山を越えると福岡県の豊前川流域にでる。さらに南に大山川を遡ると熊本県小国町にでて阿蘇に通じる。日田盆地は一見山間の小平野のように見えるが、このように筑前・筑後・豊前・豊後・肥後にいたる交通の要衝に位置し、江戸時代には九州全体を支配する西国郡代が置かれている。

九州の中央

筑後川水系

第2節 三隈川南岸の地形

第3図は千田昇氏の地形分類図(註1)をもとに、調査遺跡と湧水点を加え、本報告の内容に従って改変したものである。この地図をみながら手崎・大部遺跡がその東端に位置する三隈川南岸の地形を説明していこう。

2-1 地形区分の説明

下位沖積面 三隈川南岸地域の北は三隈川の沖積地に接し、東は大山川を東限とする。大部遺跡はさらにその東の半島状の丘陵上に位置する。地形の全体は北から南に高くなり、高瀬川と石井川の2つの中河川が北流して三隈川に合流する(註2)。基本的な地形変化を標高の低い三隈川の本流

大山川



第2図 日田盆地の位置と地勢

現在の水用

小河川流域

「原(はる)」

大部遺跡

湧水谷

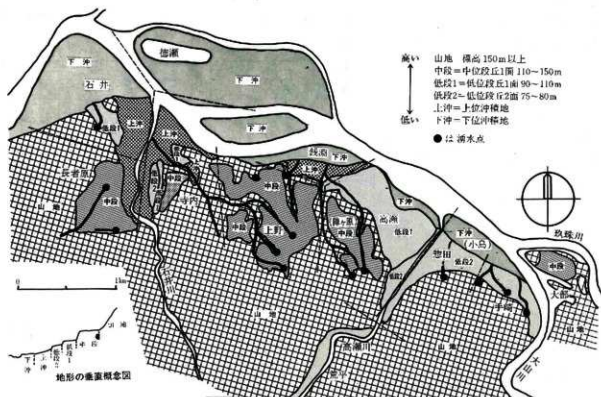
域からみていくと、まず沖積地としては東から惣田地区の小島沖積面、銭潮の下位沖積面、石井地区北側の三隈川の蛇行部に位置する沖積面が分布する。これらの沖積地はいずれも三隈川本流の旧河道が埋積した地形で、洪水時には河川敷に戻ってしまうという性質をもっており(註3)、現状では全面水田化されている下位沖積面が水田化されたのは近世であって、標高の高い微高地面まで開発するため、三隈川の本流よりも水位の高い小河川に井堰を築いて取水している。たとえば惣田地区の小島は大山川に、石井地区の沖積面は石井川の河口近くに井堰を設けて水路導水をしている。

上位沖積面 小河川流域に分布する沖積面をこう呼んで区別する。流域面積は狭いものの下位沖積面に比べて洪水の影響を受けにくく、井堰から水田までの距離が短く、周辺の段丘や山地から流れこむ天水などを多角的に利用できるという利点をもっている。三隈川南岸にはこのような上位沖積面は3箇所存在する。銭潮の上位沖積面は障が原と上野の両段丘の間を流れる零細な小河川を水源とする沖積面で、流域面積は狭隘だが洪水の心配はない場所である。寺内の谷底沖積面は石井川のさらに支流の小河川が流れる谷底の低地である。もう1ヶ所は石井川の下流域で、この沖積面は流域面積が広く下位沖積面と同じ性質をもつが段丘の縁部部は比較的安定している。

低位段丘 以下にのべる段丘とは、日山地方で「原(はる)」と呼ばれている台地のことである。千田氏の研究による低位段丘は標高の低い2面と標高の高い1面があり、手崎・惣田地区に低位段丘2面、高瀬地区に低位段丘1面、寺内地区に低位段丘1・2面と、石井地区に低位段丘1面の4箇所が分布している。

中位段丘 千田の分類による中位段丘1面である。この地域では最も高位の段丘面で、背後に山地が連なる。高瀬地区の障が原中位段丘、上野地区の中位段丘、寺内地区の中位段丘、長者原の中位段丘の4箇所に分布する。また大部遺跡の所在する玖珠川と大山川にはさまれた半島状の丘陵先端にも中位段丘が分布する。

段丘地形の特徴 地形の特徴として段丘面上には湧水点が何箇所もあり、その湧水が開析する浅い湧水谷が平坦な段丘面上にアクセントをつけている。湧水谷は比較的水田開発が容易であるが、



第3図 三隈川南岸の地形(千田昇「日田・玖珠地域の地形」日田・玖珠地域 自然・社会・教育-1992, 大分教育庁と改変)

段丘面そのものは大規模な灌漑施設を建設しないかぎり水田化は不可能である。とくに河川との比高差の著しい中位段丘はその傾向がいちじろしい。したがって段丘面は高地の開発対象となりやすい。以上の段丘地形は三隈川南岸の景観の特徴をなすものであり、上位沖積面よりもはるかに広い面積を占めている。

ところで現在の段丘面上はかなり平坦な景観を呈しているが、この景観は、近世の墓地整理、近代の水田開拓をへて整えられた人工景観である。上野中位段丘面に立地する上野第1遺跡の調査で段丘面の旧地形を観察したが(註4)、その結果近世の墓地整理以前は、比高1m内外の小起伏が適っており、かなり凸凹した景観であったと推定される。

湧水谷 湧水谷とは、段丘上に点々と所在する湧水が流れ下る際に開析した狭い浅い谷である。湧水点が山地から段丘面への変換点に存在するため、段丘面上では緩い傾斜の浅く広い池状の地形になるが、段丘の斜面を開析する際には急傾斜で狭く深い谷となるという地形の特徴がある。そのために湧水点に近い段丘上のほうが開発しやすい状況である。少面積ながら安定した湧水を利用した湿田として利用されており、収量は乾田に劣るが早稲時にも不作になることはない安定度の高い水田となる。

山地 段丘の南に連なる急峻な地形の部分で平坦地は少ない。現在はほとんど杉林になっているがかつてはかなり天然林を残していた。森林資源・動物資源の採集対象地として縄文時代以来利用されてきたが、現在水田化高地化されているところはほとんどない。

2-2 手崎・大部遺跡周辺地区の地形(第3図・4図)

三隈川と大山川に面する東西に長い低位段丘1面があり、その西半は大字惣田、東半は大字手崎となる。さらに南は山地になる。この低位段丘1面には湧水点が4箇所あり、そこから開析した湧水谷が4箇所存在する。

手崎低位段丘1面 この段丘面には手崎遺跡のすぐ側の湧水谷と、さらに西側に「古田」と呼ばれる湧水谷が存在している。明治20年の地籍図によれば、水田化されていたのはこの2箇所の湧水谷のみで、周辺はなおその時点ですべて畑地であった。東側の大山川との比高差は10mをこえ、河川のすぐ側に位置しながら、大山川から取水することは不可能な場所であった。ちなみにこの明治の畑地が水田化したのは昭和初年のことである。一見氾地のように見えるが地形的には中位段丘と同じである。つまり本来なら「はる」と呼ばれてよい場所である。

大部遺跡は大山川を挟んで手崎低位段丘の対岸の山地から派生する尾根の鞍部に位置し周辺はまったく段丘面はない。しかし南側の山地の尾根上をたどると南は天瀬の丘陵地帯にいたり、縄文時代には狩猟地にいたる通路の可能性が高い。

第3節 H田三隈川南岸の歴史

高瀬地区を中心とした三隈川南岸に焦点をあてて、日田盆地の歴史を略述する。(第5図)

旧石器・縄文時代 旧石器時代の遺物が採取できる場所が、日田盆地各所に点在している。三隈川南岸には段丘上に点在する。石井地区の長者原遺跡(8)ではナイフ形石器・細石刃が採集され、さらに長者原遺跡の南西に位置する平野遺跡でも三稜尖頭器が採集されている(註5)。H田バイパス開通では低位段丘上の手崎遺跡で腰岳産黒曜石製の石核が採集されている(註6)。

湿田

杉林

湧水谷

畑地

山地の入口

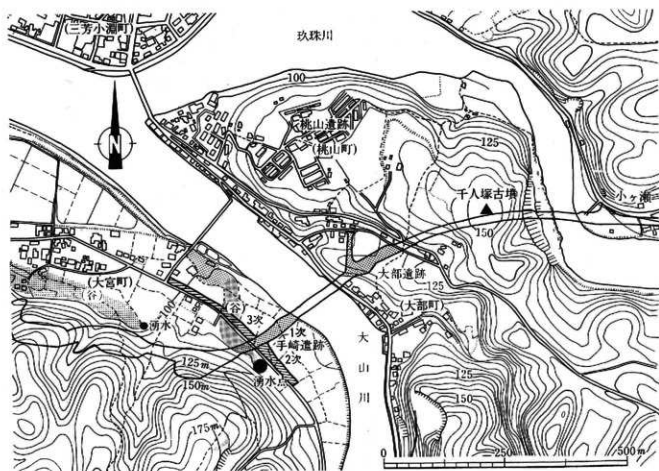
旧石器時代

縄文時代 縄文時代になると遺跡は数を増し、段丘上に点々と存在するようになる。とくに三隈川南岸一帯は日田盆地のなかでも縄文遺跡の多いところである。低位段丘面から中位段丘面に致しておく存在し、手崎遺跡(A)や長者原遺跡(8)のように近隣に湧水点を望む条件のよい場所には、縄文時代早期から晩期にかけて繰返し居住地として使われている(註7)。このような繰返し利用される「拠点遺跡」とは別に、特定の時期のみ立地する小遺跡が知られている。大部遺跡で早前期と晩期、誠和神社裏遺跡で早期、上野第1遺跡(D)で晩期の遺物が知られており、日田盆地の環境に適応しつつ生活の拠点をここに定めた縄文集団が盆地内に創興したと考えられる。

弥生時代 弥生時代 前期後半から始まる吹上遺跡(4)、小迫辻原遺跡(1)をはじめ、前期末から中期にかけて、弥生集落が盆地全体に分布するようになる。その大半が沖積地を見下ろす台地の縁辺部に立地する。高瀬地区でも陣ヶ原遺跡(12)、高瀬遺跡(13)がそうである。一方沖積地の微高地上にも徳瀬遺跡(6)・柳木遺跡(15)等の集落が立地する。

古墳時代 古墳時代 この時代は後の奈良時代に成立する五郷の前身となる政治的単位が成立する時代である。小迫辻原遺跡(1)の「豪族居館」の出現からみて、古墳時代の当初から前方後円墳体制に組み込まれたことは明らかであるが、前中期には前方後円墳は存在せず、後期になって初めて首長墳に前方後円墳が採用される。すなわち後の互理郷に天満1・2号墳、有田郷に有山古墳、石井郷に護願寺1号墳(34)が築かれる。互理郷には前方後円墳ではないが法恩寺古墳群(43)が営まれる。高瀬地区を含む三隈川南岸地帯は後に石井郷に編成され、その前身となる政治単位の首長は石井地区のガランドヤ古墳(31)・穴観音古墳(32)に移動する。高瀬地区にも中期の円墳、塚塚古墳や、惣田地区には後期の横穴式石室墳惣田塚古墳が知られている。また惣田地区の背後の山地にも集落が進出するようになる。

後期の
前方後円墳



第4図 遺跡の位置と周辺地形

古墳時代後期には日田地域に「比多国造」がみえ、盆地全体がひとつの政治的領域とみなされたと推定される。欽明朝には日下部君の祖色阿自が鞍部として仕えたという記事が『豊後因幡十記』にみえる。

「風土記」

奈良時代 その後日田郡は豊後国に属することになり、701年の大宝律令の制定により日田郡となる。日田郡は鞆部・石井・在田・亘理・夜開の5郷からなり、高瀬地区は石井郷に含まれる。また石井郷内には石井駅がおかれていた。その具体的所在地については定説はない。しかし駅が置かれているのであるから、高瀬地区周辺に古代官道が存在した可能性は高い。日田郡制はいずれも日下部姓を名乗っている。

石井郷

条里制の遺情としては高瀬の低位段丘上に高瀬条里があるほかは、三隈川南岸には明確な条里はない。高瀬地区周辺では、手崎遺跡・陣ヶ原辻原遺跡・上野第1遺跡・長者原山遺跡等の奈良時代の集落遺跡が知られている。

条里

平安時代 11世紀中ごろには日下部為行による「別名」開発がおこなわれ、三隈川南岸でも「石井別符」の開発が行なわれている。同時にこの開発が日下部氏による最後のものであり、以後日田郡は大蔵氏の時代になる。12世紀の大蔵氏の抗争のなかで、大蔵氏「重代の部従」として高瀬氏が文献にはじめて登場する。「高瀬」氏を称する点からみて、三隈川南岸の高瀬地区に土着した土豪であり、現在の高瀬条里付近を拠点にして成長したと推定される。以後高瀬氏は16世紀までその地位を継承する。12世紀後半に日田盆地の大半は日田大蔵氏によって寄進され日田荘（金剛院領）となり、三隈川南岸は石井別符をのぞいて、すべて日田荘にぞくしたと推定される。

「別名」

鎌倉・室町時代 日田大蔵氏は地頭職を源頼朝より安堵され御家人となった。以後15世紀中ごろに大蔵姓日田氏は断絶し大友姓日田氏に交替するが、大友姓日田氏も16世紀前半に断絶し、以後戦国時代には、守護大友氏より指名された「郡老」にゆだねられた。その当初の郡老6名のなかに高瀬山城守の名があり、中世をつうじて日田氏の有力被官として推移したことを示している。

大蔵氏

この時代の遺跡としては、高瀬低位段丘上に立地する中世寺院永平等（いひじ）跡があり、現在水田内に礎石と板碑群が残り、板碑には1311（応長元）年と1313（正和2）年の銘がある。12世紀中ごろに創建され、16世紀中ごろ廃寺になったと伝えられている。

惣山地区には14世紀中ごろ創建されたと推定される普門寺がある。1409（応永16）年銘の木造笑巖和尚像が伝来している。

江戸時代 大友氏除国後、豊後国は太閤蔵入地となり、高瀬氏は帰農して高瀬村の庄屋となる。日田地方は大半が江戸幕府直轄領として幕末にいたる。高瀬地区は当初高瀬村その後、北高瀬・高瀬の3村となっている。

天領

近現代 明治維新により1868（明治元）年日田地方は日田県となり、1872（明治4）年大分県に編入される。高瀬地区は大分県日田郡となり、1875（明治8）年北高瀬・南高瀬・西高瀬の3村は合併して高瀬村に、さらに1889（明治22）年に上野村を合併し、推移する。1940年（昭和15）年日田市に編入され現在にいたる。

＜註および参考文献＞

註1 千田昇「日田・玖珠地域の地形—とくに台地地形について—」「日田・玖珠地域—自然・社会・教育—」1992 大分大学教育学部

註2 本稿では、近世以後に開発された三隈川本流域を大河川、その支流の大山川・高瀬川・石井川など奈良時代以後の技術段階ではじめて直接取水可能となった川を中河川、それ以前の技術段階で利用可

能な中河川の支流を小河川と呼び分ける。

- 註3 近代になっても1889年、1953年の洪水では水田全体が流出するような被害にあり、復興に10年以上の歳月をついやしている。
- 註4 田中裕介「上野第1遺跡—一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報VI—」1993 大分県教委
- 註5 穴井通照「旧石器・縄文時代」『日田市史』1990 日田市史
- 註6 田中裕介・高島豊「上野第1遺跡(平原・米田地区) 上野第2遺跡 手崎(2・3次)—一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報V—」1994 大分県教委
- 註7 この大規模な2遺跡でも縄文時代中期の遺物はきわめて少なく、大分県全体の動向と一致する。

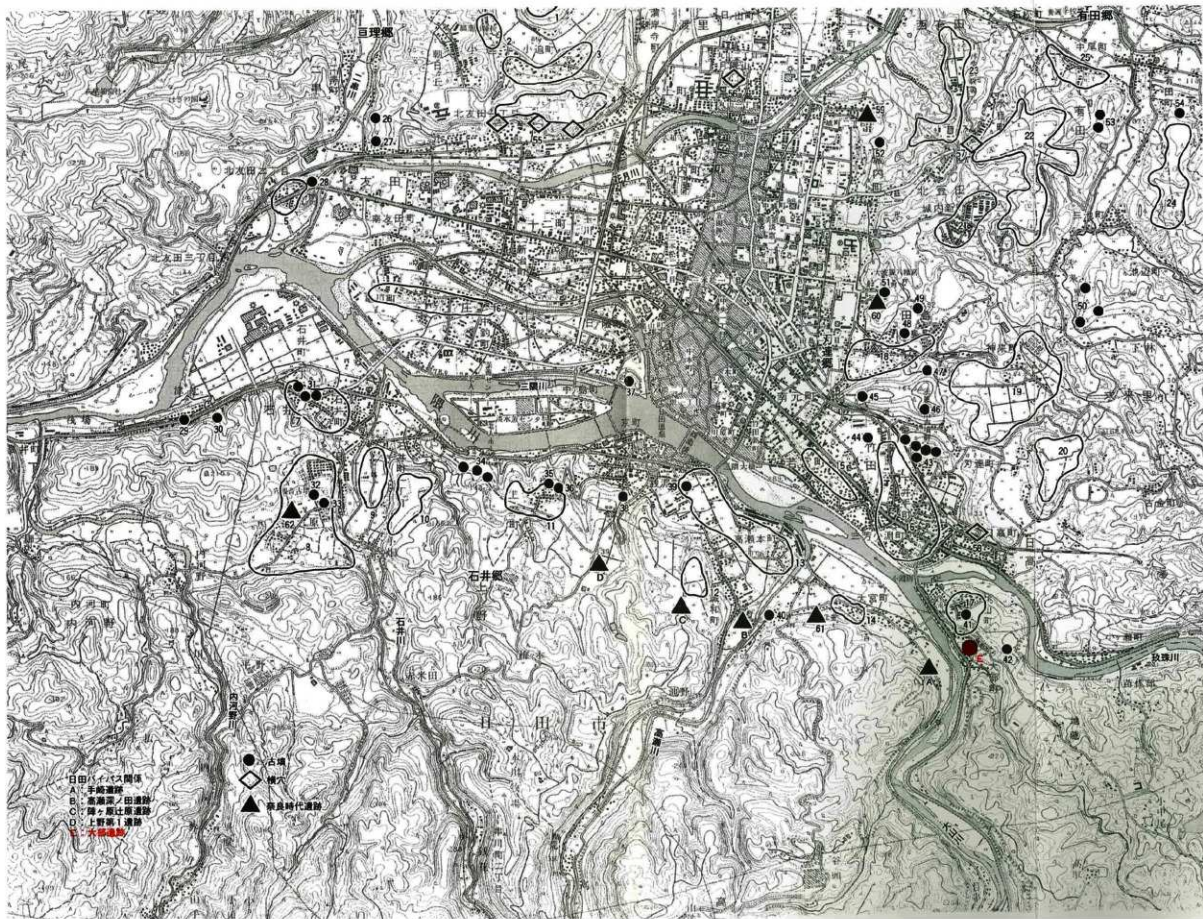
以上の記述にあたっては、とくに次の文献を参照した。

『日田市史』1990 日田市

『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』1992 大分大学教育学部

『大分県土地改良史』1979 大分県耕地課

『日田市高瀬遺跡群の調査1』1995 大分県教委



第5図 日田盆地の主要遺跡 (1/25,000)

弥生集落跡

1. 小治比原
2. 森本
3. 鏡台置廻り
4. 吹上
5. 三尾丸
6. 徳瀬
7. 尾園
8. 長者原
9. 尾坪
10. 赤塚
11. 上野
12. 陣ヶ原
13. 高瀬
14. 惣田
15. 柳の本
16. 上井手
17. 横山
18. 会所官
19. 元官
20. 東寺原
21. 海尻
22. 中尾原
23. 佐寺原
24. 狐迫
25. 宮ノ下

古墳・横穴

26. 鳥島古墳
27. 片山古墳
28. 三郎丸古墳
29. 津辻1号墳
30. 津辻2号墳
31. ガランドヤ古墳群
32. 穴懸寺古墳
33. 倉原古墳
34. 護国寺古墳群
35. 蛇塚古墳
36. カグネ塚古墳
37. 日隈古墳
38. 鏡瀬古墳
39. 総塚古墳
40. 惣田塚古墳
41. 千人塚古墳
42. 牧原古墳群
43. 法恩寺古墳群
44. 鳥家古墳
45. 鳥羽塚古墳
46. 会所山古墳
47. 田島古墳
48. 丸尾古墳
49. 丸尾神社古墳
50. ガノ古墳群
51. 薬師堂山古墳
52. 丸山古墳
53. 中尾古墳群
54. 平島古墳
55. 北友田横穴群
56. 月渡横穴群
57. 水目横穴群
58. 東寺横穴群

奈良時代遺跡

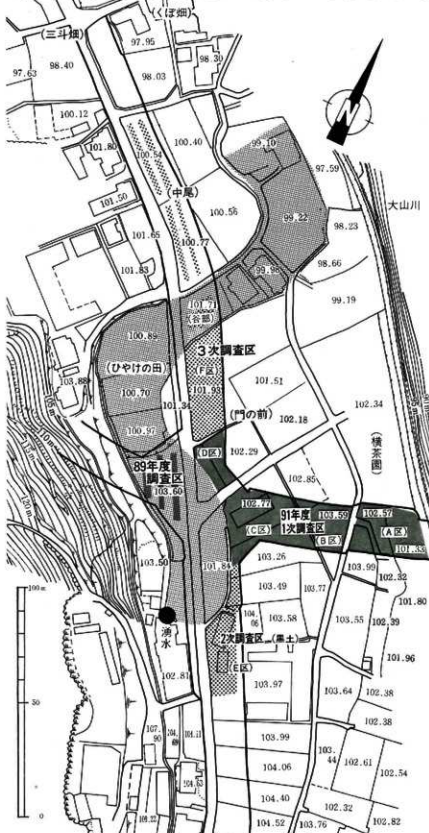
59. 藤原山
60. 大流瀬
61. 惣田
62. 長者原田跡

第3章 手崎遺跡

第1節 手崎遺跡の調査経過と概要 (第1・2図)

90年度の試掘調査において段丘面上で縄文時代の包含層と弥生時代以後の遺構を確認したが、谷の部分では遺構はまったく発見できなかった。そこで91年度に段丘面を東西にのびる本通工事

調査経過



部分に東からA・B・C・D地区を設定して調査をおこなった。さらに93年度に交差点部分の南北を本調査することとなり、まず第2次調査として交差点南側のE地区を、つづいて交差点北側のF地区を第3次調査としておこなった。またF地区では湧水谷を調査区が横切るので、そこに谷調査区を設定し、トレンチ調査をおこなった。

概要

A地区は大山川に接した段丘中央部より2mほど低い地区で縄文早晩期の包含層が自然層の上に堆積していた。B地区は調査区最高所で水田床を除去するとすぐに礫層になり遺構は検出されなかった。C・D・E・F地区は縄文早期から晩期にわたる二層の縄文包含層の堆積があり、その上から弥生時代・古墳時代・奈

第1図 手崎遺跡の調査区と小字「手崎」内の地名

良時代・中世・近世の遺構が重なって掘りこまれていた。その結果竪穴建物22基、掘立柱建物7棟、土椽30基前後、墓2基、溝2条を検出した。

調査は各時代の遺構が錯綜するなかで行なわれた。そのため時期を認定するのが困難な遺構や、掘立柱建物の復元ができなかった例があると思われる。また時期の不明な遺構の多くは報告から割愛した。

第2節 手崎遺跡の立地 (第2章第4図、図版1上)

段丘面上

手崎遺跡は大山川の西岸の高瀬河岸段丘上のもっとも奥まったところに位置している。標高約100m。大山川との比高は約10mで、現在では水害の影響の少ないきわめて安定した場所になっている。くわえて遺跡の西西南山側に自然湧水点があり、この湧水が往時の生活を支えたことは疑いない。ところで調査の結果、このような地形の状況が出現したのは縄文時代前期以後であったと推定される。というのは縄文時代早期の包含層上あるいは包含層中には大量の河原石が含まれており、その当時この段丘面そのものが氾濫原であったことをうかがわせるからである。そしてF地区谷調査区の谷部最下層では縄文前期の上層から流入がはじまり、それ以前の遺物の流入が認められなかった。そのことは湧水谷そのものが縄文前期以後の大山川の川床の低下に伴って開析を開始したことを示している。こうして縄文時代前期にできあがった現在に近い地形環境のなかで、縄文時代前期以来現代にいたる生活が展開したと考えられる。

湧水と谷

第3節 手崎遺跡の現状

現在の水田

手崎遺跡は調査地点の南北にさらに広がるが、現状は全体が水田となっていた。水田化したのは1920年代の昭和初期で、それ以前は桑畑であった。水田は湧水点から流れる小さな谷格でわずかにおこなわれていたにすぎない。現在の水田は旧地形の削平と盛土によって造成されており、高所のB地区は全体に削平・攪乱が進み、低所のA・C・D・E地区では遺構の保存は良好であった。F地区は水田造成により調査区の北半分が削平されていた。

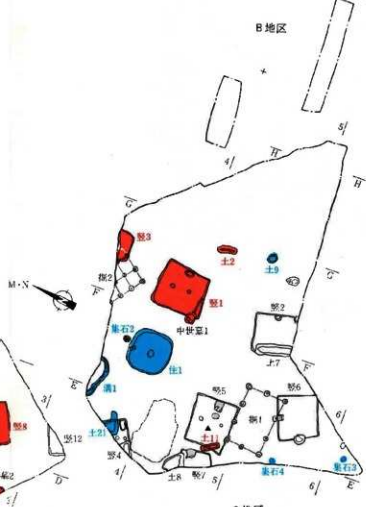
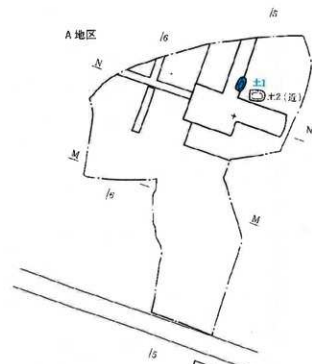
地名

地名の聞き取りと水路調査によれば、手崎遺跡の湧水点から北に流れ落ちる谷は「ひやけの田」と呼ばれ、手崎遺跡の北半は「門の前 (もんのまえ)」、南半は「黒土 (くろつち)」、大山川沿いの一段低い部分は、「横茶園 (よこぢやえん)」、湧水谷の北側の低丘陵部が「中尾 (なかお)」と呼ばれ、その北側は「くぼ畑 (くぼぼたけ)」「三斗畑 (さんどぼたけ)」といい、三斗畑の西側のもう一つの湧水谷は「古田 (こでん)」と呼ばれていた。以上の地名は小字手崎の中のしこ名である。地名から推定されることは、ひやけの田と古田の2箇所の湧水谷は古くから水田として開発され、それ以外の台地部分は畑地として利用されていたのではないかということである。これを証明するように現在の水田の水がかりをみると、ひやけの田と古田は現在でも湧水を利用し、黒土・門の前の流れる現在の主水路はひやけの田を横切って中尾に流れる際に、ひやけの田の水路と立体交差している。またE地区では近世の畑地境界溝 (101・102号溝) を検出しており、黒土が水田化以前は畑地であったことを証明している。したがって湧水谷以外の現代の水田は1920年代に開発されたという記録と調査の結果が合致したことになる。

第4節 本調査の方法

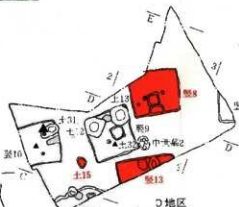
調査方法

各地区とも水田床土と造成土を重機で除去したのち遺構検出をおこない、まず弥生時代以後の遺構の調査を先行した。その作業後あるいはそれと併行して、10m方眼の調査区を設定し、包含層を掘り下げていった。その際遺物の集中地点の周囲や層序の変わり目ごとに、遺構検出作業をおこない、縄文時代の遺構を検出した。包含層の遺物採り上げは基本的に全点20分の1で記録した。

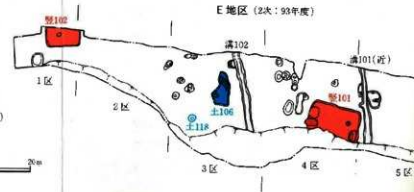


藍 瓦火建物
 赤 瓦火建物
 土 土構
 紫 掘立柱建物

青は、縄文時代
 赤は、弥生・古墳時代



▲ 竪穴土器出土遺構



第2図 手嶋遺跡遺構配置図 (1/400)

第5節 遺構と遺物

1) A地区(第5図、図版3下)

A地区は、西側の礫層の広がるB地区と2mほどの崖を境として一段低くなった場所で、東側は

段丘崖

大山川の河床に向う崖となっている。河床との現在の比高差は10mをこえる。

早期の包含層(第4層)は薄く、自然層の上面に広がっていた。大量の河原石がひろがり、その中に包含層が形成されていた。縄文時代早期の押型文期までは、河原石が大量に移動するような洪水が起こる地形であったと推定される。そのため晩期の包含層(第3層)と層序的に遺物を区別する

河原石の堆積



写真1 A地区の包含層(B地区を望む)(東から)



写真2 A地区南北断面(北東から)



写真3 縄文土器出土状況

ことはできなかった。明確な遺構は少なく、土器片と石材片が散在する状況であった。土器は押型文土器と無文土器が中心でそれに少量の晩期の土器が含まれていた。

1、縄文時代の遺構と遺物

第4a層上面で遺構検出作業を行い、土壇状の3つの落ち込みと柱穴をいくつか検出した。そのうち縄文時代に属するものは1号土壇のみで、そのほかはすべて近世以後の場所が畑地であった時代のなんらかの遺構と推定される。

土壇1基

1号土壇(第3図、図版3下)

第3層掘り下げ時に検出した。長さ約230cm、幅130cmの長円形の土壇で、深さは50cmほどである。底面はあまり平坦ではない。埴土は大量の拳大から人頭大の円礫がまじる暗黄褐色砂質土で、ほかの遺構の埴土とは明らかに異なる。押型文土器片以外に縄文時代晩期の土器小片が数点混じていた。そのためこの遺構を縄文時代晩期と認定した。

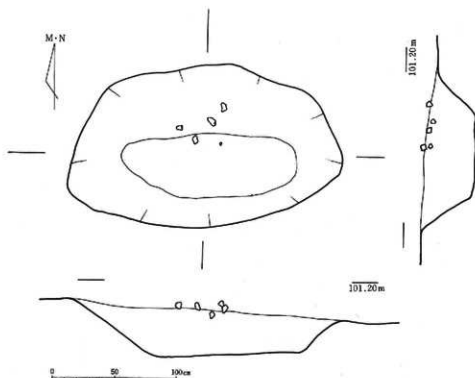
2、近世の遺構と遺物

土壇を1基検出した。それ以外の柱穴状の掘り込みはすべて埋土が2号土壇と同一なので、近世のものと考えられる。

土壇1基

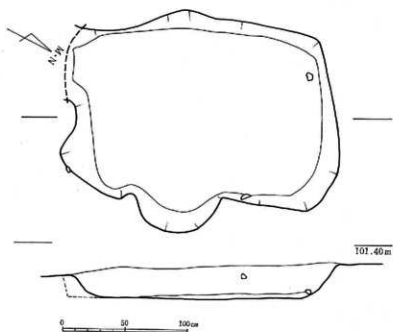
2号土壇(第4図、図版4上)

底面が平坦に整えられた長さ約210cm、幅110cmの長方形の土壇で、深さは30cmほどである。埴土は単一の

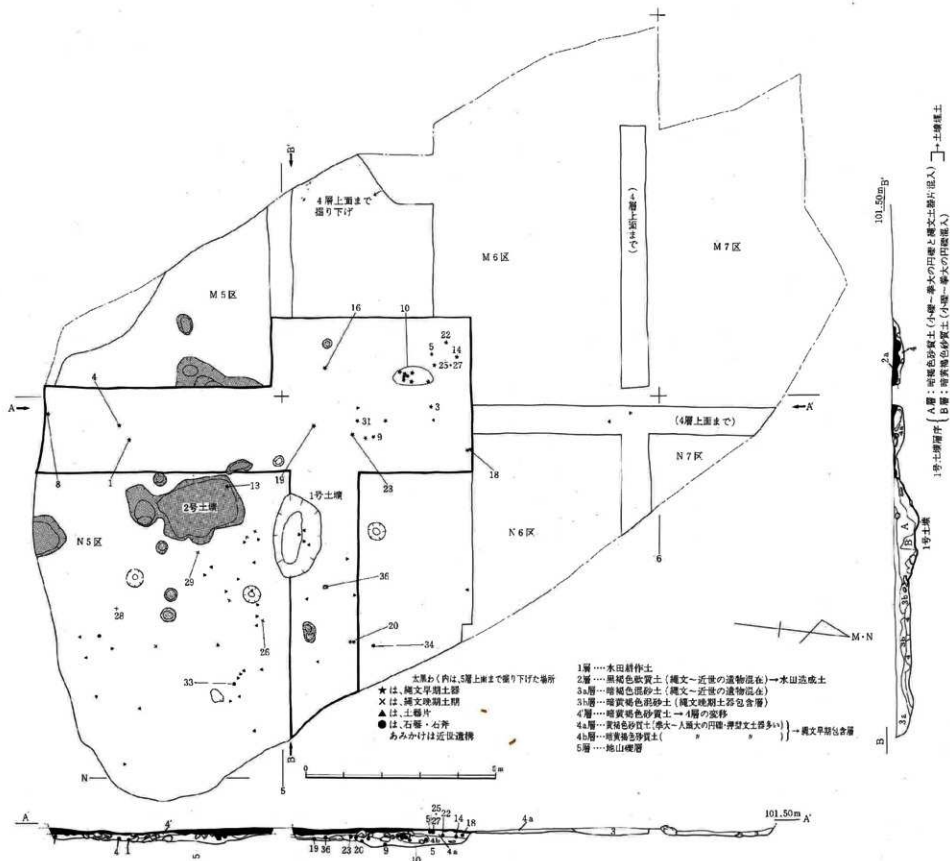


第3図 手船遺跡A地区1号土壇 (1/30)

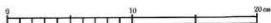
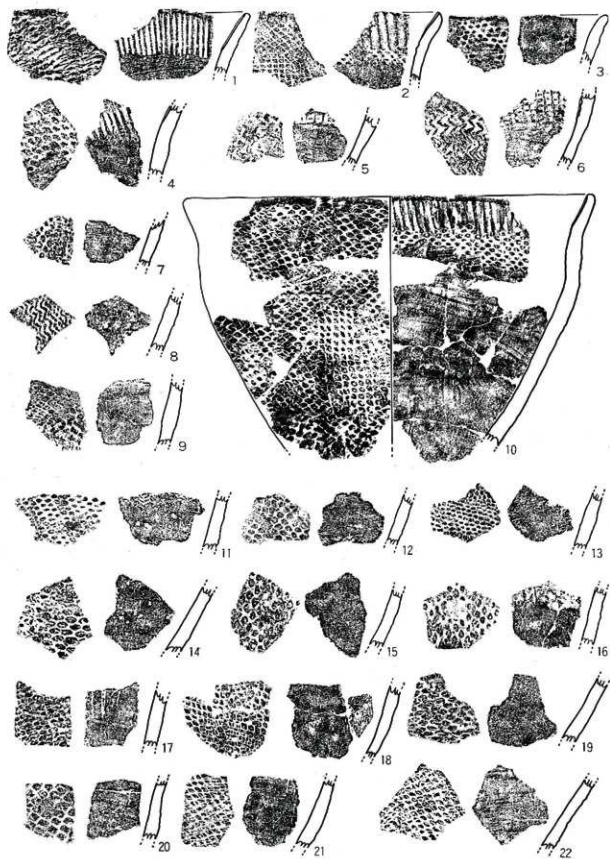
円礫を多く含む黒褐色軟質土で、混入した押型文土器片以外に近世陶磁器の破片が出土したので近世の遺構とした。



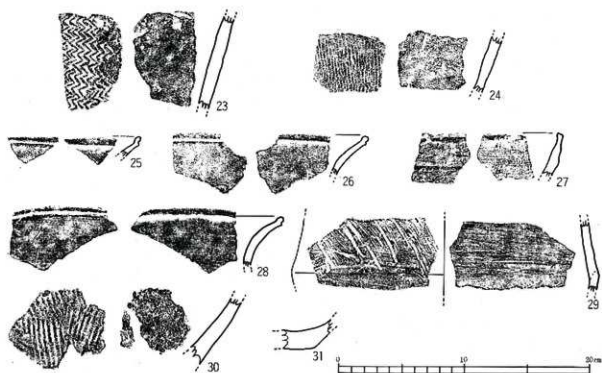
第4図 手船遺跡A地区2号土壇 (1/30)



第5図 手紡通跡A地区遺構および遺物分布図 (1/100)



第6图 手繪遺跡A地区出土繩文土器(1) (1/3)



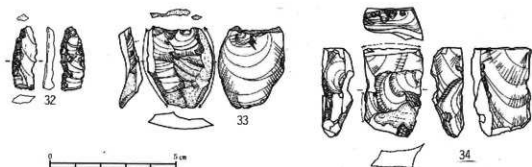
第7図 手前通跡A地区出土縄文土器(2) (1/3)

3、包含層(第5図、図版3中)

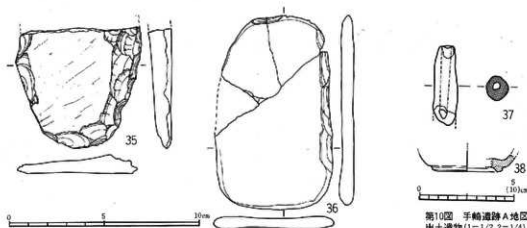
- 層序** 20世紀の水田化のために、包含層の上面は削平されていると推定される。層序は第1層が「床土を含む現水田層」、第2層がその水田を作るために低いところに盛った造成土である。第3層は砂混じりの暗褐色土で、近世の遺物から縄文土器まで含む上部の暗い層を第3a層、縄文晩期の土器が主体になる明るい層を第3b層とした。第3層中には小円礫を含むが、第4層のような大量・大型の円礫(河原石)を含むことはない。少なくとも第3層堆積中にはすでに大量の河原石が堆積するような洪水を被ることがこのA地区の面ではなくなったことを暗示している。これに対し第4層は押型土器を多量に含む黄褐色砂質土層で、拳人から人頭大の円礫を多量に含み、かつてこの場所が河床であったような状態である。押型土器の出土状態もこの円礫の間や下などに挟まるように出土しており、二次的に移動している可能性が高い。(以上田中)
- 第4層**

出土縄文土器(第6~7図、図版52上)

- 早期** A地区からは縄文早期土器がまとめて出土している。押型文は楕円文を主体に山形文や格子目文、熱糸文などが見られる。楕円文はあまり粗大化しておらず、施文方向は横を主体とするものの、斜めや縦も見られる。また口縁部は外反しており、内面の文様は、原体条痕の下位に横方向の押型文を施文する第6図2・10や、原体条痕のみの1・4・16などがある。こうした土器は、前者が下管生B式土器、後者が田村式土器と呼ばれ、前者から後者への編年業が提示されている。しかし、田村式土器の楕円文が粗大化していない点から、前者に近い時期と考える。
- 晩期** A地区からは、この他、第7図25~31のような縄文晩期の土器も出土している。器種は25・26・28が浅鉢形土器で、27・29~31は深鉢形土器である。時期は浅鉢の口縁部の形態から、縄文晩期の前葉と考える。(坂本)



第8図 手崎遺跡A地区出土石器(1)(2/3)



第9図 手崎遺跡A地区出土石器(2)(1/2)

第10図 手崎遺跡A地区
出土遺物(1=1/2, 2=1/4)

出土石器 (第8・9図、図版56上)

剥片石器では、伊万里産とみられる黒曜石を使用した剥片石器3点と石核1点が出土している。32は薄手の剥片の1辺を両面、他を片面加工している小型の削器とみられるものである。33は、自然面をのこす幅広い剥片で両辺に使用痕とみられる微細な剥離痕がみられる。なお、打面は自然面である。34は、折損面をもつ残核である。折損部に細かい二次的剥離があるが、使用痕かどうかは不明である。これらは、時期的には、剥離面の風化はそれほど進んでいないことからみて、縄文後晩期のもつとみられる。

35は、安山岩の板状礫を使用した扁平打裂石斧の半欠品。両辺の剥離は両面にいいに施されている。36は、結晶片岩の扁平礫である。とくに加工した部位はみられないが、長辺と一面にやや磨耗が顕著であり、手持ちの砥石として使用された可能性もある。いずれにしても、地元の石材ではなく、遠地の結晶片岩を産する地域からもたらされたものである。(清水)

出土石器 (第10図)

37は土製の有孔土錘である。38は小型の須恵器坏身底部片で、8世紀前半代の製作である。いずれも第3層で出土した。(田中)

小括

A地区は遺構の保存状態こそよくなかったが、この場所の地形変遷を考える上で重要な知見をえた。すなわち縄文時代早期押型文期にはこの手崎遺跡付近は大山川の氾濫原であった可能性が高く、その後に温暖化にともなう大山川の河床低下と手崎遺跡の段丘化が進行した可能性を指摘できる。

(田中)

石 器

土 錘

縄文早期の
地形

調査区
の位置

2) C地区 (第13図、図版1中・2上中)

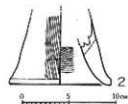
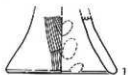
C地区は段丘面の中央の東から西に向ってゆるく下向き、東部はB地区から続く雑層が露出する。雑層に入れ替わるように縄文時代の包含層(第3b・4層)が湧水谷の方向に向って広がっている。この包含層を切って弥生時代以後近世にいたる遺構が同一平面で検出される。ここでは弥生時代以後の遺構を解説し、縄文時代の遺構と包含層のちにまとめてのべる。

(田中)

1、弥生時代の遺構と遺物

2号土壌 (第11・12図、写真4、図版41)

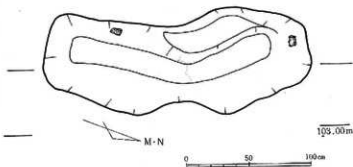
雑層中に掘りこまれた長さ約2m、幅50cm、深さ約80cmほどの深い土壌で、底面は平坦であった。やや深すぎ平面形が歪むことから墓の可能



第11図 手崎遺跡C地区
2号土壌出土遺物 (1/4)



写真4 C地区2号土壌



第12図 手崎遺跡C地区2号土壌 (1/30)

落し穴か?

性を考えるよりも、底面に杭痕跡はないが落し穴遺構と考えた方がよいであろう。1・2はともに弥生土器の器台脚部片である。弥生時代中期の可能性が高い。土壌埋土中から出土の以上の土器片から弥生時代中期の遺構と判断した。

(田中)

2、古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として竪穴建物2基と土壌1基を検出した。なお1号土壌も土器片からみてこの時期である。

1号竪穴建物 (第14~17図、図版4中下・5上・41・42・56中)

中型竪穴
2本柱

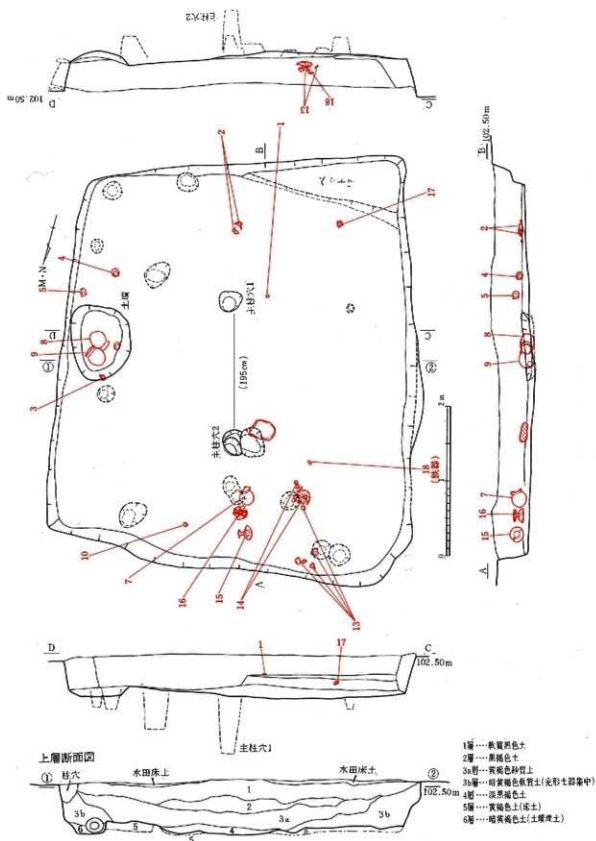
調査区の中央で検出した長辺約5m、短辺約4.5mの方形竪穴建物跡で、床面積は約20㎡強である。主柱穴は長軸中央にそって2本で、この時期のものとしては珍しい例である。長辺にそって浅い土壌があり、竪穴使用時のものか廃絶時に掘削したものか判断できないが、竪穴廃絶時に存在し開口していたと考えられる。また南西隅が三角形に掘り残されていて、変形のベッド状遺構と思われる。床は黄褐色粘土と黒色土をまぜた土を貼っており、主柱穴の上部をふさぐようにはられていた。その床をはぐと、第15図のような凸凹の地山面があらわれる。竪穴掘削時の痕跡と推定さ

貼り床

矢印は断面上層の位置
第142図をみよ

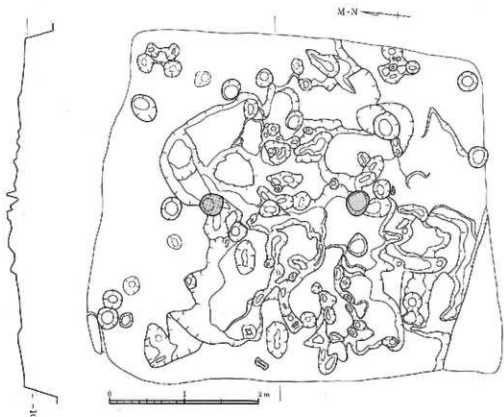


第133図 手給遺跡C地区遺構配置図一弥生時代以後- (1/150)



第14図 手船遺跡C地区、1号竪穴建物 (1/50)

れる。竪穴中央の主柱穴の間の床面上には、炭片の分布が多かったものの焼土面をもつ地床炉は検出されなかった。後述するD地区8号竪穴建物にもよく似た状態が観察され、古墳時代中期の竪穴建物の火所の一様式といえるかもしれない。 炉?



第15図 手嶋遺跡C地区1号竪穴建物床下の掘り込み (1/50)

埋没状態

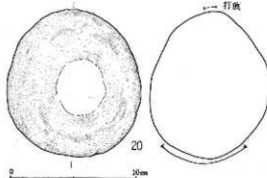
埋没過程はまず、開口していた土壌内に完形の甕が横倒しに2個おかれ、そこに暗黄褐色土(6層)を埋めて、そのあとは壁際から埋没し(3b・4層)、その際3b層堆積中に多くの土器が、完形のままあるいは破壊されておかれている。そこまでは短期間に埋まり、その後はゴミ捨て穴(3a・2・1層)として利用されたと推定される。

土器供献

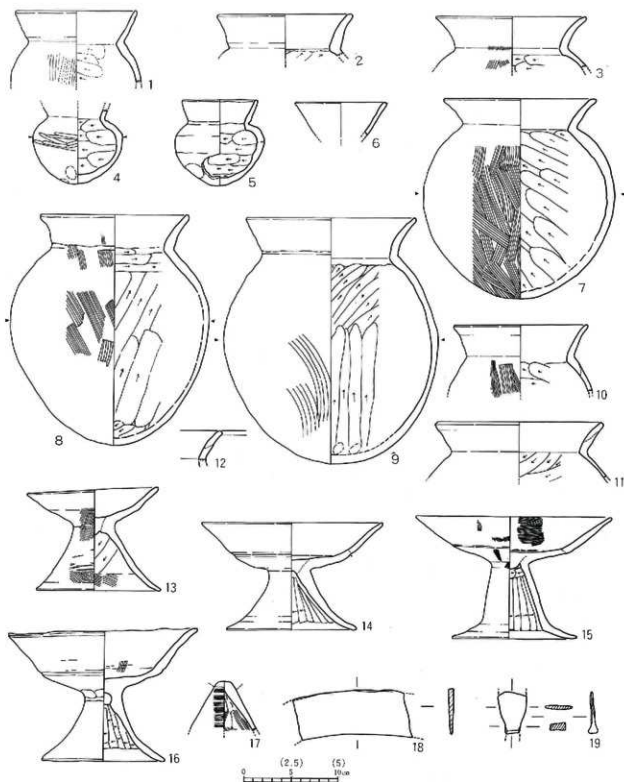
遺物出土状態。東壁際中央の土壌内より完形の甕が二個体出土した(8・9)。竪穴建物廃絶時におこなわれた祭祀行為によるものと考えられる。層位的にはほかの土器群より古い。これを1回目の祭祀とする。ほかに床面中央に石皿と考えられる石器がおかれていたが、埋土中には円礫や磨石(20)などがあり、縄文時代の遺物の混入と区別がつかないため、この竪穴建物に伴うかどうか明らかでない。さらに北壁際からもまとめて甕1個体(7)、高坏2個体(15・16)が床面直上から出土した。またこれらの遺物と同様に廃絶時の祭祀行為に使用されたと推定される土器が、やや床面から浮いた状態で出土しているが、層位的には先の上器群と同じである。土器の内訳は小型丸底甕2個体(4・5)、高坏2個体(13・14)である。このうち土壌内より出土した甕2個体を除くと降が原止原遺跡4号竪穴建物出土土器器群のセット関係と類似する(註1)。13・14のみは以上のような完形の土器群のなかにあつて破砕されている。また小型丸底甕5には祭祀時に穿孔されたとみられる焼成後の孔が体部側面下部にあり、口縁部径は胴部最大径より小さくなっているが、口縁部に二重口縁の名残をとどめている。13・14・16は高坏で脚部の屈曲が少ない点に特徴がある。以上が2回目の祭祀といえる。以上の一括廃絶遺物以外は堀中中に流れこんだ遺物である。17は古墳時代前期の精製胎土の小型器台で、混入したものである。

廃絶祭祀

20は、1号竪穴建物出土の磨石である。



第16図 手嶋C地区 1号竪穴遺物(1)-石器-(1/3)



第17図 手崎C地区、1号竪穴建物出土遺物(2)―土師器、鉄器―(1-17=1/4、18・19=1/2)

磨石は長軸の幅広い端部に敲打兼用としての面があり、他の長軸端部には敲打痕がみられる。

土師器の特徴から竪穴建物の廃絶時期は5世紀前葉から中頃の時期を推定しうる。その際、完形土師器を供献する形式の祭祀行為が2回行なわれたと考えられる。(丸尾・田中、石器は清水)

古墳時代
中期前半

註1、田中哲介「障が原辻原遺跡」、『日田市高瀬遺跡群の調査』I 1995 大分県教育委員会

小型竪穴

3号竪穴建物 (第18・19回、図版5下・42)

調査区外の半分が未調査の遺構である。かなり礎の多い場所に掘り込んだ小型の方形竪穴建物と考えられる。床面は貼らずに踏みしめている。竪穴建物か土塚か迷うが床面が存在したので竪穴建物とした。

出土状態

遺物出土状態。遺物の大半は床面よりも5ないし10cm浮いた状態で出土。ただしかなり土器の破片は接合する。竪穴埋土は単一の暗褐色土で分層不可能である。堆積状態を復元するのはむづかしいが、一気に埋没した可能性がある。

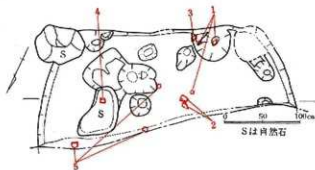
土器

土器は薄手の破片や丁寧なつくりのものが多く、1号竪穴建物出土土器より古い型式で古墳時代前期に

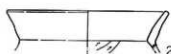
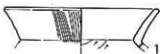
さかのぼるものである。1～4は土師器甕口縁片。5は土師器掬。

古墳時代前期

竪穴建物の時期は土師器からみて古墳時代前期と推定される。



第18回 手崎遺跡C地区 3号竪穴建物 (1/50)



0 5 10cm

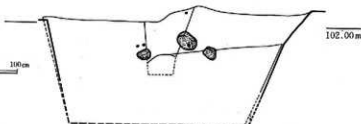
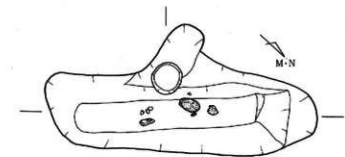
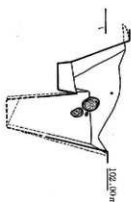
第19回 手崎遺跡C地区 3号竪穴建物出土遺物 (1/4)

11号土塚 (第20回、図版6上)

5号竪穴建物に切られた長さ2m、幅50cm、深さ80cmほどのかなり深い土塚で、底面は平坦であった。当初縄文時代の落し穴遺構かと考えたが、底面に杭痕跡がなく土塚埋土中から土師器片が出土したことから古墳時代の遺構と判断した。ほぼ同時期に周辺に1・3号竪穴建物などが存在することからみて、落し穴とは考えがたく、土塚墓の可能性が残されている。

落し穴?

墓?



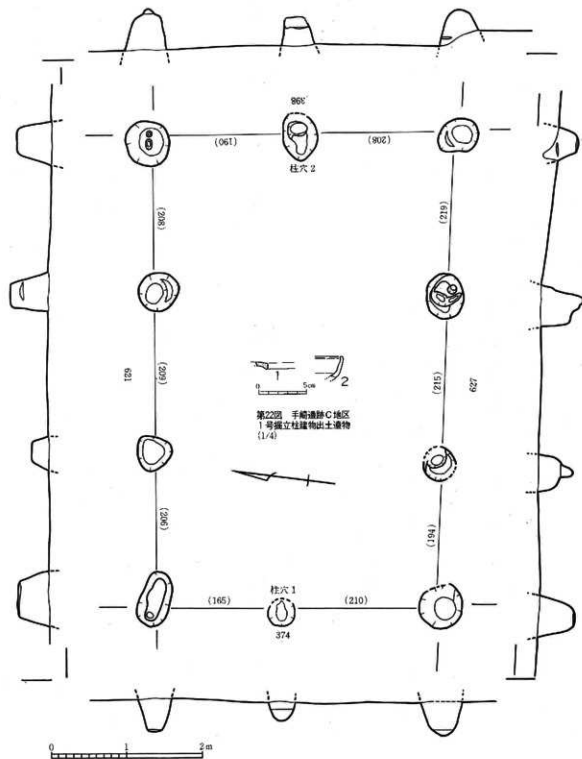
第20回 手崎遺跡C地区 11号土塚 (1/30)

3、奈良時代の遺構と遺物

以下にのべる掘立柱建物2棟、竪穴建物5基、土塋2基以外に10箇所の柱穴から奈良時代の遺物が出土している。掘立柱建物がなお相当数存在した可能性が高い。

1号掘立柱建物（第21・22図、図版6中）

2×3間で長軸をほぼ東西にむけた掘立柱建物で、長さ約620cm幅約380cmの床面積23.6㎡である。2×3間
柱穴1から土師器精製坏片2が、柱穴2から須恵器坏蓋片1が出土し、奈良時代の建物と考えられ



第21図 手船遺跡C地区 1号掘立柱建物 (1/50)

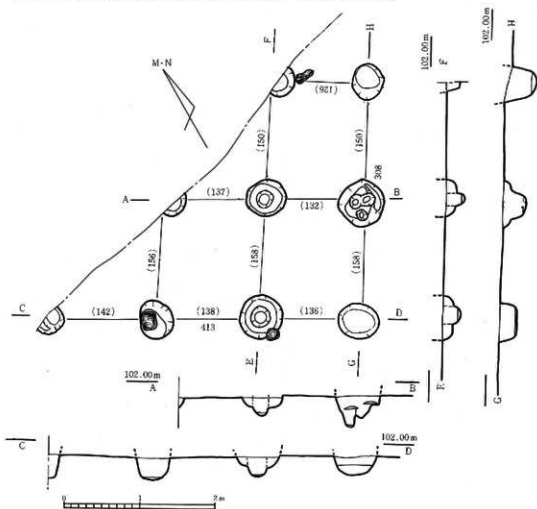
る。5・6号竪穴建物を切って作られている。

2号掘立柱建物 (第23図、図版6下)

2×3間以上

3号竪穴建物の埋土上から掘り込まれた2×3間の総柱掘立柱建物である。調査区外にのびているので桁行が3間で完結するかどうか不明であるが、2×3間とすると310×410cmの床面積12.7㎡となる。柱穴内には古墳時代の土師器片が混入していたが、それは3号竪穴建物を切りこんでいるためである。積極的に奈良時代とする根拠はないが、この掘立柱建物が高床倉庫だとすれば、周辺に奈良時代の竪穴建物がないことは逆に、倉庫周辺に居住用竪穴建物をおかない景観が予想できる。そうであるならば奈良時代の竪穴建物群と同時期の可能性が高くなる。

倉庫



第23図 手簡遺跡C地区2号掘立柱建物 (1/50)

2号竪穴建物 (第24-26図、写真5-7、図版7・42)

中型竪穴

市端が調査区外に残るが、南北4.5m以上、東西約4.0mで、床面積18㎡以上の長方形の竪穴建物である。両端が7号土蔵によって切られている。床下には掘削時の凸凹が残るが床は貼り床ではなく踏みしめて堅くなっている。柱穴は検出されなかった。

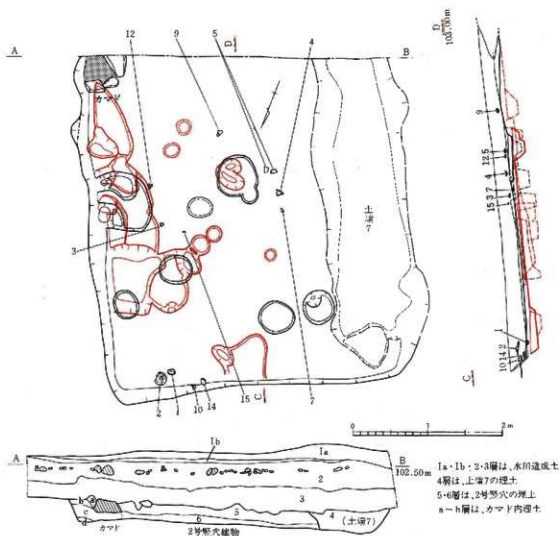
無柱穴

カマド

カマドは南東隅に設置されている。燃焼部が壁面の外にやや飛び出す作りで側石と天井石および袖の一部が残存し、よく焼けていた。天井石が落下していたものの、破壊の痕跡はなく土器も出土していない。天井石は安山岩角礫、側石は河原石を用いている。

出土状態

遺物出土状態。床面直上からの出土はない。ただし土師器坏蓋2が北東隅に正位で完形のままおかれた状態で出土した。それ以外は流れ込みである。5・6層が2号竪穴建物の埋土で、その層を



第24図 手簡遺跡C地区 2号竪穴建物 (1/50)

切って7号土壌が掘られている。須恵器環壺1の破片の一部が7号土壌の埋土である4層から出土していることは7号土壌の掘削によって2号竪穴建物跡の一部が破壊されたことを裏付けている。1・2・10・14が壁際に同時に流れこんだ状態で、それ以外の遺物は6層中に流れこんだゴミ穴転用後初期の廃棄品である。



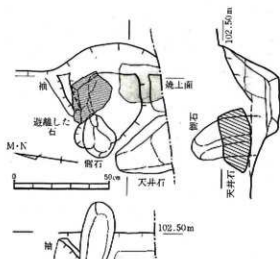
写真5 北壁際、土師器環壺2出土状態

遺物。食器である須恵器環(1・3~9)と土師器精製環(14~18)が主体で、土師器製の破片(10~13)がつづく。11の上師器壺は精製胎土の製品である。2は形態・製作技術はまったく須恵器技法だが、胎土・焼成は粗製土師器と共通する環壺である。

時期。須恵器環の形態と手持ちヘラケズリの残る土師器から推定して8世紀前半の竪穴建物である。竪穴の構造とカマドの造り方は、隣接する2号竪穴建物とよく似ている。(丸尾・田中)

遺物

8世紀前半

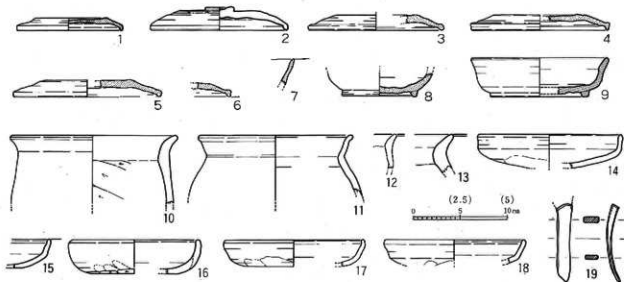


第25図 手崎遺跡C地区2号竪穴建物カマド (1/20)



写真6 カマド (西から)

写真7 カマド (東から)

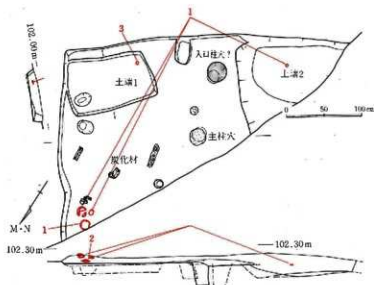


第26図 手崎遺跡C地区 2号竪穴建物 出土遺物 (1~18=1/4, 19=1/2)

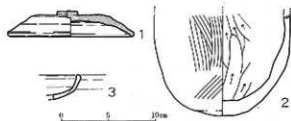
4号竪穴建物 (第27・28図、図版8・42)

調査区外に伸びるため半分以上未調査の、方形と推定される竪穴建物である。主柱穴は1本のみ検出したほか、南壁近くで壁に向う柱を想定できる柱穴を検出した。入り口施設であろうか。竪穴内には隅に2箇所の土塚があり、土塚1は埋土が固くしまり、竪穴建物使用中にはすでに埋まっていたと推定される。

方形竪穴



第27図 手跡遺跡C地区 4号竪穴建物 (1/50)



第28図 手跡遺跡C地区 4号竪穴建物 出土遺物 (1/4)

遺物出土状態は床面上に炭化材・焼土・土器片が混在した状態であった。焼土建物の可能性があるが同時に円礫が多く混ざる点から、二次的なかたづけの可能性が高い。また遺物のまじりまりが1箇所認められる。炭・焼土の集中の中に、内面を上にした須恵器坏蓋(1)と正位で置かれた土師器甕下半部(2)がある。

遺物と出土状態

ほかの土器片は小片で散在する。(3)は土師器精製坏片である。

坏蓋からみて8世紀前半の竪穴建物と推定される。(丸尾・田中)

8世紀前半

5号竪穴建物 (第29-31図、写真8・9、図版9上・42)

南北約4.4m、東西約5.0mで、床面積約22㎡の長方形の竪穴建物である。深さ10cm程度の保存状態であった。東側短辺中央にカマドがあり、長軸は東西方向を向く。主柱穴は2本柱で、床面は踏み締めの状態である。

中型竪穴
2本柱

カマドは破壊された状態で出土した。焼土・炭混じりの土のなかに被熱した凝灰岩角礫が散らばり、それを取りのぞくと、側石の抜き取り痕2箇所と炊き口手前の小土塚があらわれた。内部には焼土がつまり、底面の一部は焼けていた。遺物は少なく破片が交じっている状態である。土器を供献する形式のカマド廃絶祭祀は行なわれていない。

カマド

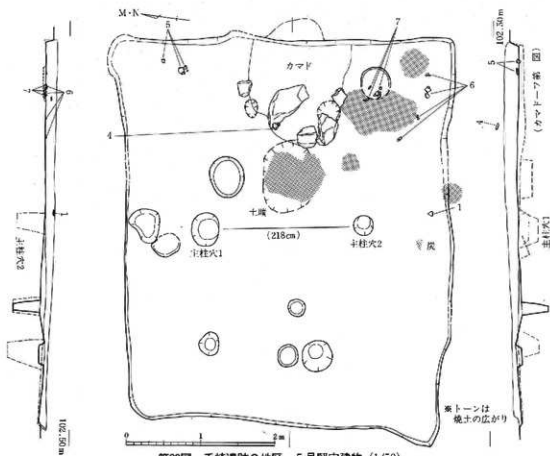
遺物出土状態。東側のカマド周辺に遺物の出上が偏る傾向がある。ただし量はそれほど多くない。定形の土器はみられず、破片がちらばる。

遺物

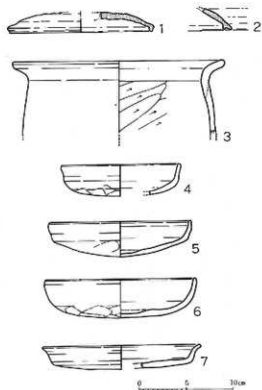
須恵器坏蓋(1・2)、土師器粗製甕(3)、土師器精製坏片(4-7)が出土した。またカマド破壊層の中から逆錐形の焼塩用製塩土器の破片が出土している。

出土遺物から8世紀前半でもやや古い竪穴建物である可能性がある。

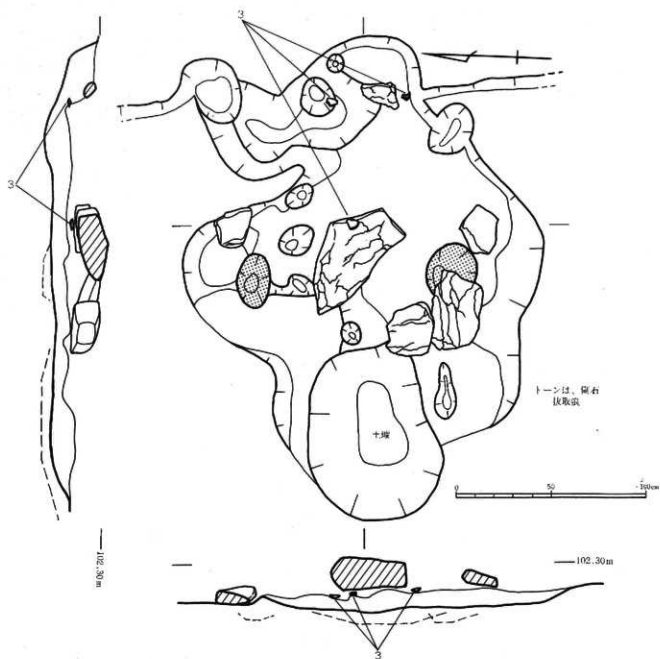
(丸尾・田中)



第29図 手稲遺跡C地区 5号竪穴建物 (1/50)



第30図 手稲遺跡C地区 5号竪穴建物出土遺物 (1/4)

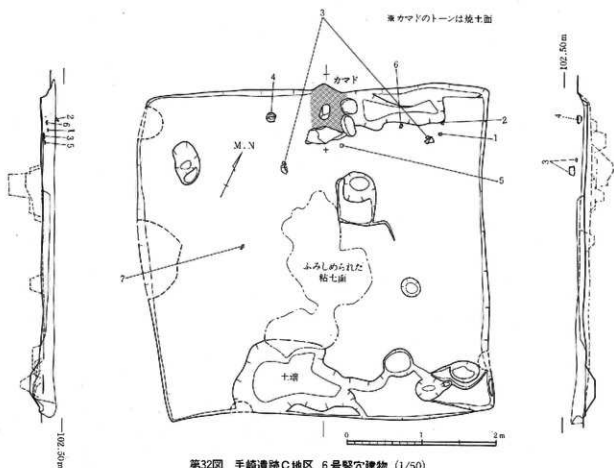


第31図 手嶋遺跡C地区 5号竪穴建物カマド (1/20)



写真8 カマド検出状態 (西から)

写真9 カマド完掘後 (西から)



第32図 手崎遺跡C地区 6号竪穴建物 (1/50)

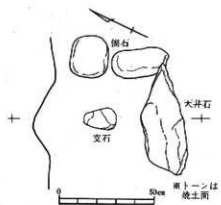


写真10 カマド検出状態 (南から)

中型竪穴
無柱穴



カマド



出土状態

1層…凝結土灰黒褐色粘質土
2層…凝結土茶褐色粘質土

第33図 手崎遺跡C地区 6号竪穴建物
カマド (1/20)

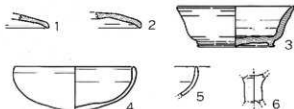
南北約4.4m、東西約4.5mで、床面積約20㎡のほぼ正方形である。深さ20cm程度の保存状態であった。北壁中央にカマドがある。7号竪穴建物と同じく明確な主柱穴は検出されなかった。床面は踏み締めの状態である。

カマドは保存状態がよく、河原石を2個使用した側石と落下した凝灰岩角礫の天井石、カマド内部の支石がのこり、内部と石はよく焼けていた。

5号竪穴建物同様遺物の出土量が少ない。小破片がカマドの周辺に散在する。土師器精製碗4が完形でカマド左側にやや浮いて正位に置かれていた。カマド左側の側石がなくなっており、そのあとに置かれたかのような状態である。

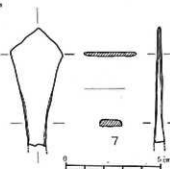
カマド廃絶祭祀のひとつの形式と推定される。3の須恵器坏身が床面直上から破片が別れて出土している。廃絶直後の廃棄である。それ以外の遺物は埋土中に流れこんだ遺物である。1・2は須恵器坏蓋片。5は4と同一型式の土師器精製碗。6は手づくねのミニチュア品で、胎上からみて製埴土器ではない。7は鉄鎌。

須恵器の年代から、8世紀前半代の竪穴建物と考えられる。東にある2号竪穴建物と竪穴の構造カマドの造りが類似する。(丸尾・田中)

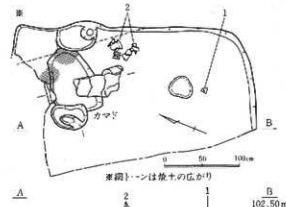


第34回 手崎遺跡C地区
6号竪穴建物出土遺物

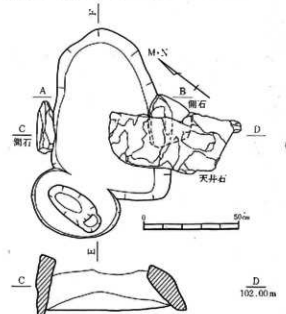
($\frac{1}{7} = \frac{1}{4}$)



8世紀前半



第35回 手崎遺跡C地区 7号竪穴建物 (1/50)



A-B断面土層図



1層…灰黒褐色砂質土
2層…赤褐色紅土質砂質土

第36回 手崎遺跡C地区 7号竪穴建物カマド (1/20)

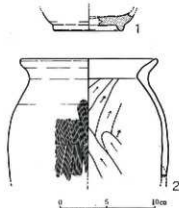
7号竪穴建物 (第35~37回, 図版10上中・43)
調査区外に伸びるため半分以上未調査の、小型方形と推定される竪穴建物である。8号土壇によって切られる。東壁の北に偏ってカマドがあり、楕石と大井石が残っていた。ともに凝灰岩製で、とくに2個の楕石は接合し、1枚の板石を二分して利用していた。カマドは右方向につぶれたような形で検出され、内部に土師器精製の裏の破片が集中し、右外側には土師器粗製甕2が一個体床面直上に横列しにつぶれていた。須恵器坏身1は床面からかなり浮いた土器だが、この土器からみて竪穴の時期は8世紀前半と推定される。カマドの位置と竪穴の規模は後述するF地区205号竪穴建物によく似ている。同時にカマドの作り方と壊し方は、隣接する5号竪穴建物と非常によく似ている。

小型竪穴

カマド

遺物と
出土状態

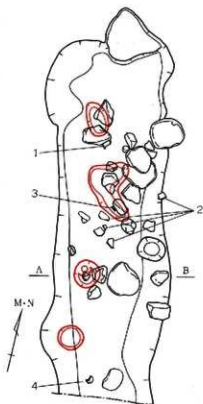
(丸尾・田中)



第37回 手崎遺跡C地区
7号竪穴建物 出土遺物 (1/4)

2号竪穴を
利用

出土遺物



第38図 手崎遺跡C地区 7号土壌 (1/40)

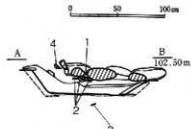


写真11 7号土壌完掘後

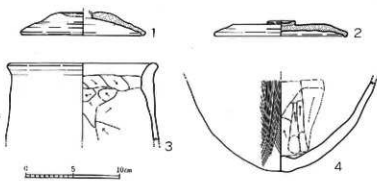
7号土壌 (第38・39図、
写真11、図版10下)

2号竪穴建物の壁をそのまま利用し、底面もその床面を利用した土塚である。まだ完全に2号竪穴建物跡が埋没していない時点で掘られた、と推定される長円形の長い土塚である。多量の円礫とともに七器が投棄されており、埋土は単一の暗茶褐色砂質土である(第24図4層)。短期間に埋没したと推定される。

土器はいずれも破片化



第38図 手崎遺跡C地区 7号土壌 (1/40)

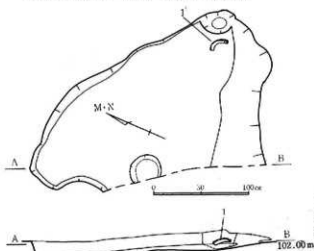


第39図 手崎遺跡 7号土壌 出土遺物 (1/4)

しており、2号竪穴建物と時期差を認めがたい。須恵器坏蓋(1・2)と土師器粗製甕(3・4)があり、その時期は8世紀の中葉と推定される。(丸尾・田中)

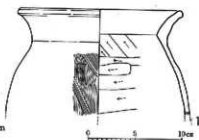
8号土壌 (第40・41図、写真12、図版43)

7号竪穴を
切る



第40図 手崎遺跡 C地区 8号土壌 (1/40)

7号竪穴建物を切って掘り込まれた不整形の土塚だが、出土遺物からみて7号竪穴建物と8号土壌は七器型式で区別できない程度の時期差しか示さない。土師器粗製甕1が出土した。(丸尾・田中)



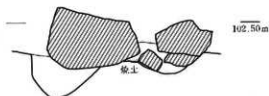
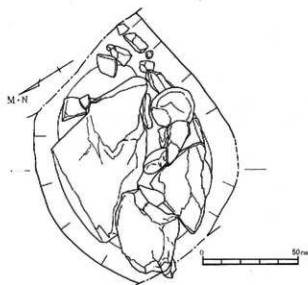
第41図 手崎遺跡 C地区 8号土壌出土遺物 (1/4)



写真12 8号土壙出土状態(東から)

4、中世の遺構と遺物

中世の墓1基と土塚3基を確認した。そのほかに柱穴の中に中世の上層器片を検出した例があるので、中世の掘立柱建物が存在した可能性は高い。



第42図 手崎遺跡 C地区 1号中世墓 (1/20)

4・5号土壙 (第13図)

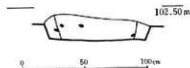
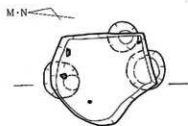
4号土壙からは鎧造弁紋の青磁碗の破片が出土し、5号土壙からは回転糸切り痕の残る土師器坏小片が出土し、いずれも13世紀前後の中世前期の上塚と考えられる。(田中)

1号中世墓 (第42図、図版11)

凝灰岩の大型角礫が土塚を覆うようにおかれ、その下から浅い掘り込みを検出した。土塚の底にはわずかだが焼土が認められた。当初墓とは考えなかったが、D地区2号中世墓と構造がまったく一致しているので、墓とかがえる。副葬品は全くなかった。この中世墓の特徴は埋葬後ひと抱えもある大型角礫を数個覆うように置いていることで、墓内で類例は今のところない。

10号土壙 (第43図)

不整形の小型の上塚である。塚土から白磁皿口縁片1が出土し、そのため13世紀ごろの遺構と推定される。



第43図 手崎遺跡 C地区 10号土壙 (1/30)

角礫でおお
う



第43-2図 手崎遺跡 C地区 10号土壙 出土遺物 (1/4)

3) D地区 (第44回、図版2上)

D地区はC地区の北側に幅5mの
道路を挟んで連続する調査区である。
現状は1枚の水田で、水田床土とそ
の下の水田造成上をはぐと西の谷に
向ってゆるく傾斜する第3層があら
われた。その上面で遺構検出作業を
行なった結果、検出されたのが第44
回の遺構配置図である。竪穴建物6
基・土壇6基・竪1基のほかに76基
の柱穴を検出した。柱穴は建物を構
成する可能性が高いのだが、調査中
と整理の段階で再構成することはで
きなかった。(田中)



写真13 調査風景

1、古墳時代の遺構と遺物

竪穴建物2棟・土壇1基が古墳時
代の遺構であるが、30基の柱穴から
古墳時代の土師器・須恵器の破片が
出土している。



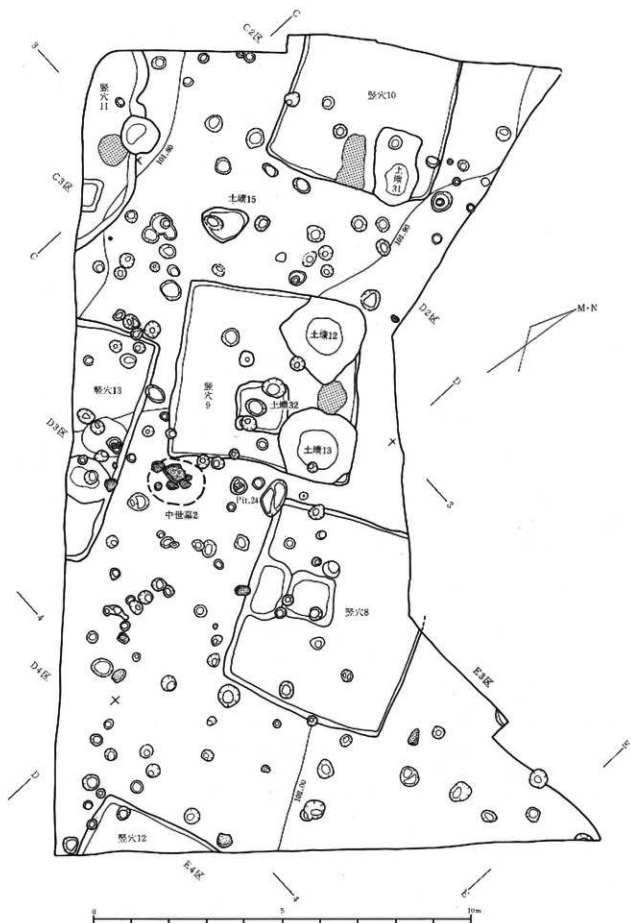
写真14 賀川委員 調査指導風景

8号竪穴建物(第45～47回、写真15、
図版43・56中)

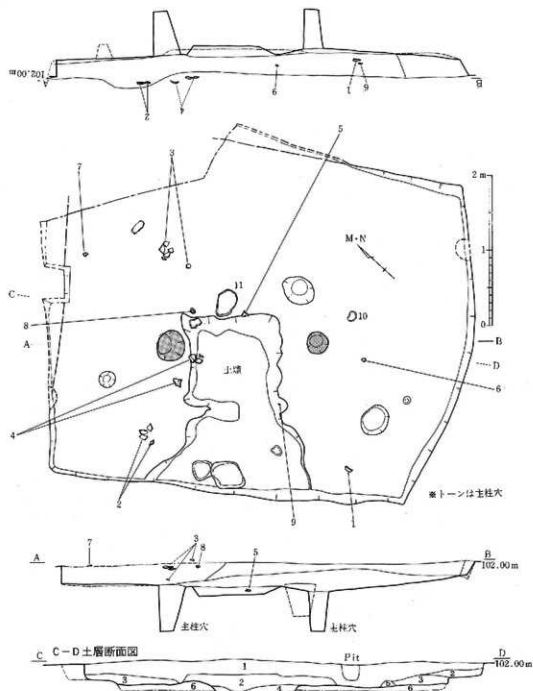
長辺約5.4m・短辺約4.5mの長方
形竪穴建物跡で、床面積は約24㎡で

ある。主柱穴は2本で、1号竪穴建物と同じである。床は黄褐色土と黒色土を混ぜた土(6層)で
貼り床を行なっている。主柱穴の間に浅い方形の土壇があり、竪穴使用時のものか廃絶時に掘削し
たものか判断できないが、竪穴廃絶時には開口していたと考えられる。この土壇内には炭片の混じ
る暗黄褐色軟質土(4層)が堆積していたが、焼上面や焼土の堆積はなく地床炉ではない。この8
号竪穴建物とC地区1号竪穴建物は通常的地床炉とは異なる形態の炉があった可能性がある。その
中央の土壇の西から壁際にかけて不整形の土壇が残っている。この土壇も竪穴廃絶時には開口して
いたと推定される。

廃絶時に残されていたと推定される遺物は5の小型土師器と11の台石である。特に台石は被熱
して割れている。また壁際の上層内にも大量の大型円礫が外側から落とし込むように堆積していた。
それ以外の遺物は炭片や礫などととも1層中に破片化して混じていたもので、この竪穴建物は
廃棄後ゴミ穴に転用されたことを物語っている。廃絶時の土器を使用した祭祀行為は行なわれてい
ない。



第44図 手嶋遺跡 D地区遺構配置図 一弥生時代以後一 (1/100)



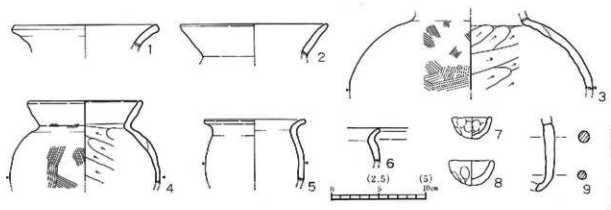
第45図 手簡遺跡 D地区 8号壺穴建物 (1/50)



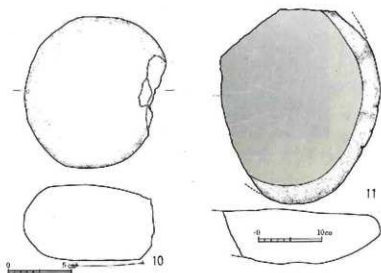
写真15 8号壺穴建物内の土壇

- 1層. 暗褐色軟質土(炭・土器等多い)
- 2層. 黒褐色硬質土(炭片多い)
- 3層. 暗黄褐色土
- 4層. 暗黄褐色軟質土(壺穴底部等に浮遊した土層の残土)
- 5層. 地山土ブロック
- 6層. 黄褐色土と黒色土の混層(木面上)

壺穴裡土



第46図 手崎遺跡 D地区 8号竪穴建物出土遺物 (土器1~8=1/4、鉄器9=1/2)



第47図 8号竪穴建物出土石器 (10=1/3、11=1/6)

遺物は上節器甕 (1・2・4・5・6)、
 壺 (3) を中心に、ミニチュアの土師器小碗
 が2個体出土した
 (7・8)。9は、器
 種不明の鉄器。10はや
 や扁平な円礫の一面を
 利用した磨石。11は安
 山岩の大型の扁平礫を
 使った台石(石皿?)で
 あるがやはり火熱をう
 けて周縁が剥落してい
 る。甕や壺に長制化が
 認められない点から、

遺物

1号竪穴建物の廃絶時一括遺物より古く、竪穴建物の時期は古墳時代前期後半と推定される。

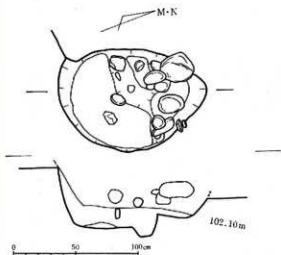
(田中・石器は清水)

古墳時代前期

15号土壌 (第48・49図、写真16、図版43)



写真16 15号土壌出土状態 (北から)

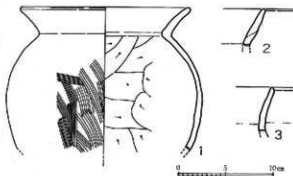


第48図 手崎遺跡 D地区 15号土壌 (1/30)

小土壙

概報で土壙30と報告した遺構である。不整形の小土壙で、内部には多量の円礫と土器片が堆積していた。土壙掘削の目的は不明だがすぐにゴミ穴に転用されている。遺物は土師器甕(1・2)である。3は混入した弥生時代の器台片。1の特徴からみて8号竪穴建物と同じく古墳時代前期後半と推定される。

(田中)



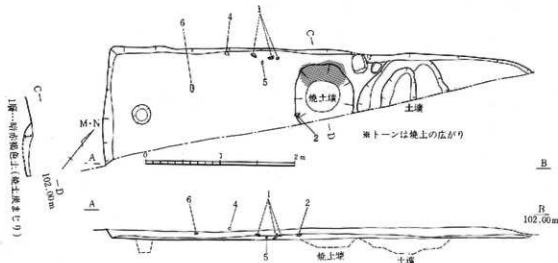
第49図 手嶋遺跡 D地区 15号土壙出土遺物 (1/4)

13号竪穴建物 (第50・51図、写真17、図版43)

中型竪穴

一部を検出した方形竪穴建物で東辺5.5mを測り、その中央にカマドの痕跡がある。燃焼部底面とその焼上面が残っていたが、石材等はまったくなく腐絶時に取り除かれた可能性が高い。遺物はいずれも竪穴の埋土内に破片化して検出された。廃絶直後に廃棄されたものだが、祭祀等の意図的な様子はうかがえない。須恵器坏身1、土師器榎製甕2・土師器精製碗3〜5と刃部をもつ鉄器6が出土している。須恵器と瓷から古墳時代後期末、7世紀前半代の竪穴建物とみられる。(山中)

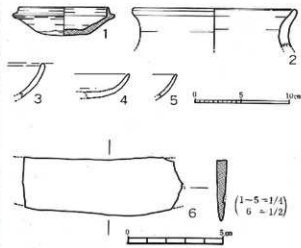
古墳時代後期



第50図 手嶋遺跡 D地区 13号竪穴建物 (1/50)



写真17 13号竪穴建物出土状態 (西から)



第51図 手嶋遺跡 D地区 13号竪穴建物出土遺物 (1/4)

2. 奈良時代の遺構と遺物

竪穴建物 4 棟・土塚 4 基のほか、奈良時代の遺物が出た柱穴が11基ある。

9号竪穴建物 (第52・53図、写真18、図版12・43・44)

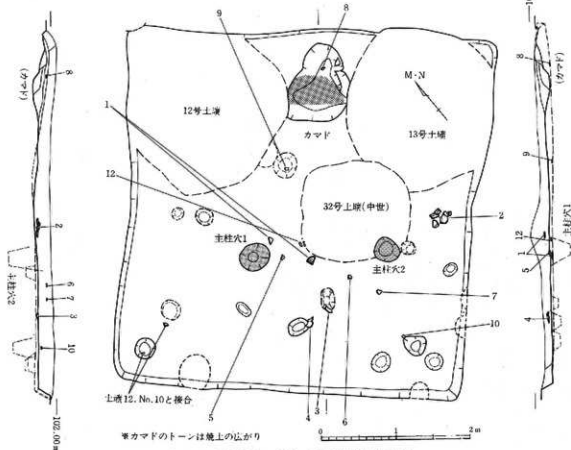
方形プラン 2 本柱の竪穴建物である。床の長軸約4.7m、短軸長約4.4mでやや長方形である。床面積は約20.7㎡。床面から20～30cm程が残り、北東部中央にカマドの痕跡がある。長軸のカマド方向を建物の方向とすると方位角43度で北東方位である。12・13・32号土塚によりかなりの部分が破壊されている。主柱穴は2本である。

カマドは焼焼部の下部とその底部に堆積した焼土が遺存していたのみで、本来あったはずのカマド上部の施設は取りのぞかれていた。すなわち廃絶時にそのような祭祀行為があったことを推測させる。しかしその行為に伴うとみられる土器廃棄等の痕跡は認められなかった。あるいは12・13号土塚のその後の掘り込みにより、消失したのかも知れない。

遺物出土状態として、土器は小破片化し散乱した状態で検出され、床面直上での良好なセットはない。し



写真18 9号竪穴建物、カマド出土状態 (南西から)

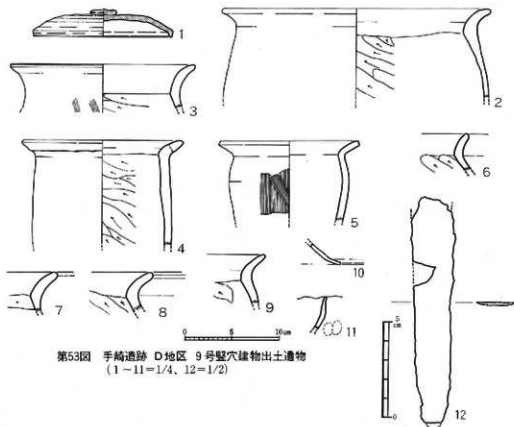


第52図 手繪遺跡 D地区 9号竪穴建物 (1/50)

中型竪穴
2本柱

カマド

出土状態



第53図 手崎遺跡 D地区 9号竪穴建物出土遺物
(1-11=1/4, 12=1/2)

たがって人為的な遺物の廃棄状態はなく、竪穴建物廃絶後にはゴミ穴として利用されていたとみられる。

遺物

遺物 須恵器は1の坏蓋が中央部に破片として遺存していたほかは、ほとんどが土師器の粗製甕である。土師器甕2～9は口縁部径からみて大中小に分類される。2は口縁部径28.6cmの大きな甕である。南東壁際より破片がまとまって出土した。3・4は口縁部径19.6cm・17.2cmと中型である。2～4は内面ヘラケズリ外面ハケのちナデ調整で、胎土には角閃石・長石・石英の小粒子と白色・茶色の粒子を含む在地産の粘土を使用する。5は小型で径15.0cm、口縁部の稜が明確で内面ナデ調整で、2～4とは異なる甕である。しかし胎土は同じ在地産の粘土を用いる。6～9は口縁の破片である。10は高坏の脚部片で精製胎土を使用している。11は逆錘型の焼壇用製壇土器である。12はやりがんなかと思われる鉄器である。

床面上より出土した甕の口縁部形態や須恵器坏蓋の時期から判断して8世紀前半の建物と推定される。(丸尾・田中)

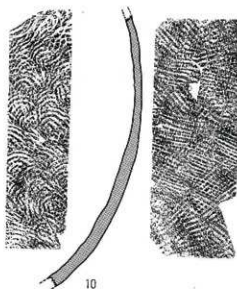
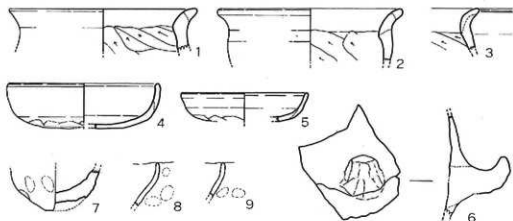
12号土塼 (第54・55図、図版13上・43・44)

9号竪穴を切る

9号竪穴建物の竪穴の壁にあわせて掘り込まれた径が2mをこえる円形の土塼で、底部は平坦ではない。9号竪穴建物の壁を意識していることから、9号竪穴建物廃絶後間もなくつくられたものと思われる。

「ゴミ穴」

遺物は、円標とともに土師の破片が散乱した状態で出土した。土取りを目的とした穴なら竪穴埋土を掘り込むわけがないので、当初からゴミ穴として使用する目的でつくられたと思われる。このような土塼は、C地区の2号竪穴建物に対する7号土塼、10号竪穴建物に対する31号土塼などで



0 5 10cm

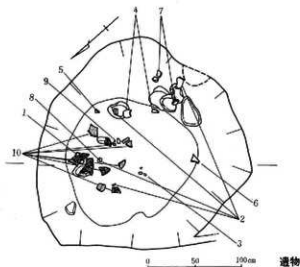
第54図 手崎遺跡 D地区 12号土壌
出土遺物 (1/4)

認められる。

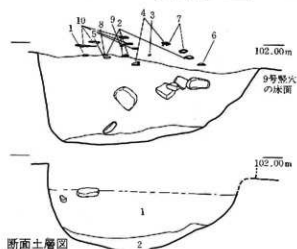
廃棄された土器は土師器が主体で、粗製の甕1～3、精製の坏4・5・精製甌6、に製塩土器が加わる。7は砲弾型の六連鳥式、8・9は逆錐形の焼塩用製塩土器である。10は須恵器の甕で、9号堅穴建物の埋土中の破片と接合したので、本来9号堅穴建物に廃棄されていた破片であろう。また5の破片は13号土壌にも廃棄されており、12号と13号土壌が同時に作られたことを示唆している。また、6の破片の一部が10号堅穴建物の床面で出土しているので、12号土壌と10号堅穴建物でも同時に遺物が廃棄されていたことになる。すなわち9号堅穴建物→10号堅穴建物→12・13号土壌の順序を想定する手がかりとなる。

(丸尾・山中)

13号土壌 (第56～58図、写真19、図版13中・44・56中)



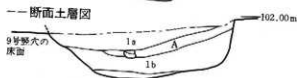
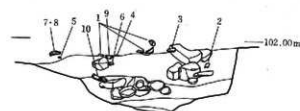
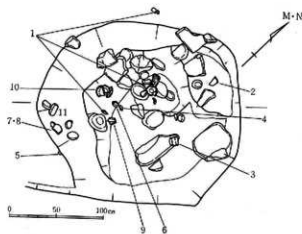
遺物



断面土層図

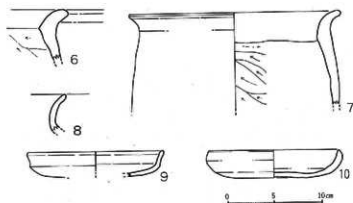
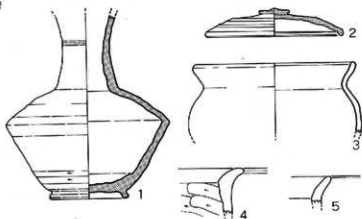
1層…暗褐色軟質土(円礫・須恵器小片多く含む)
2層…暗黄褐色軟質土→掘削成後に埋積した土

第55図 手崎遺跡 D地区12号土壌 (1/40)



1a層 暗褐色軟質土…1a層に土器集中 } 土層12の
 1b層 暗褐色軟質土 } 1・2層に対応
 2層 暗黄褐色軟質土
 A層 灰黄色土+フロック暗褐色土

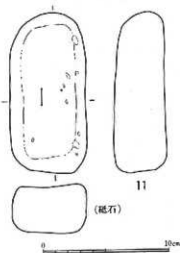
第56図 手崎遺跡 D地区 13号土坑 (1/40)



第57図 手崎遺跡 D地区 13号土坑出土土器 (1/4)



写真19 13号土坑 出土状態(西から)



第58図 13号土坑出土土器 (1/3)

9号堅穴を切る

「ゴミ穴」

遺物

9号堅穴建物の堅穴の際にあわせて掘り込まれた径が2mをこえる円形の土塚で、底部も平坦ではない。9号堅穴建物の礎を意識していることから、9号堅穴建物廃絶後間もなくつくられたものと思われる。12号土塚とまったく同じ形態で、埋没状態も酷似する。12号土塚同様当初からゴミ穴として使用する目的でつくられたと思われる。なお12号土塚と13号土塚の出土遺物のなかに接合するものがあるので、同時に機能していたと推定される。

遺物出土状態は12号土塚と同じで、円礫とともに土器の破片が散乱した状態で出土。上層(1a層)と下層(1b層)に分離でき、2・7・8・10は下層出土。10の土器器坏のみは完形に接合した。そ

れ以外は上層出土で、1の須恵器長頸蓋は破片が9号竪穴建物の埋土内にも散乱していたので、本来9号竪穴建物廃絶後に廃棄されていたものが二次的に移動したと推定される。

出土遺物は1・2は須恵器、3・9・10は上師器精製甕と坏、それ以外は粗製の甕(4~7)である。11は、砥石とみられる鏝である。一面にやや凹んだ面があり、安山岩であるが砥石として使用されたとみられる。

出土須恵器と掘削の順序からみて12・13号上層は8世紀中葉ごろとみられる。(丸尾・田中)

10号竪穴建物(第59・60図、写真20、図版13下・14・44)

南壁の中央にカマドをもつ、ややいびつな方形の竪穴建物で、2本柱が確認される。北側が現水田によって破壊されており長さは不明だが幅は4.3mである。2本の主柱穴はカマド側に偏っており、削平された部分を考えて、本来4本柱であった可能性も残る。床は貼り床で、黄色砂質土と黒色土を混ぜた土を使っている。カマドが南壁につくのは手崎遺跡ではこの竪穴建物だけである。側石等がなく燃焼部の焼けた底面だけが残っており、竪穴建物廃絶時にカマドをかたづけた可能性

中型竪穴
2本柱?

カマド



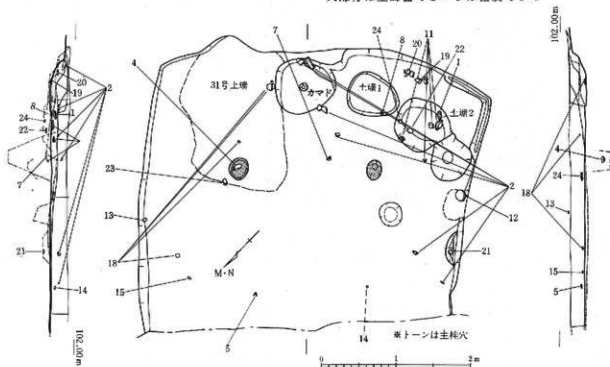
写真20 10号竪穴建物内土壌 2 出土遺物(北西から)

が高い。また南隅に小土壇が3つ並んでいた。内部には土器片が多く廃棄されており、竪穴埋土内の破片と接合するものが多く、竪穴建物廃絶時に掘られたか、少なくとも廃絶時に開口していた穴である。

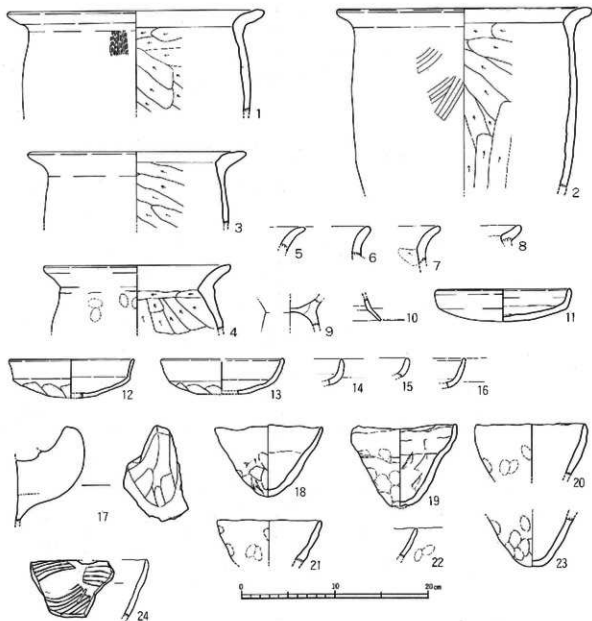
上器はすべて破片となって散在しており、廃絶まもなく廃棄された状態であった。

土器には須恵器・土師器があり、須恵器はいずれも小片で図示していない。大部分は上師器で1~9は粗製で9の

遺物



第59図 手崎遺跡 D地区 10号竪穴建物(1/50)



第60図 手崎遺跡 D地区 10号竪穴建物出土遺物 (1/4)

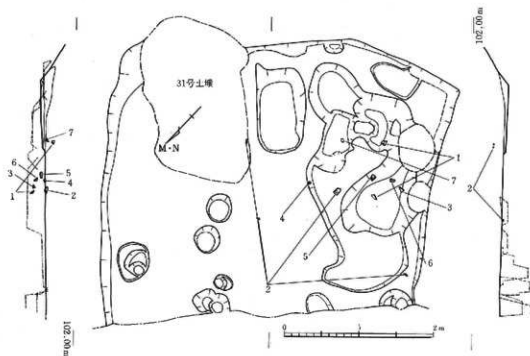
製塩土器

高坏以外は甕である。10～16が精製の土師器で、10の高坏以外は坏である。17は粗製の甕、18～24は逆錐形の焼塩用製塩土器で、24は内面に貝殻条痕が残る。廃棄された土器に製塩土器が多いのが特徴である。土師器の特徴からみて8世紀前半代に使われた竪穴建物と推定される。(田中)

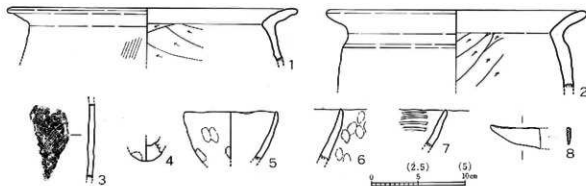
10号竪穴建物床下土壌 (第61・61図、図版15上・45)

10号竪穴建物の床面をはいだ時点で検出した不整形の土壌である。この土壌の上面を貼り床の土がやや厚くおおい、そのなかに混じる土器と下部の土器片が接合するので、竪穴建物掘削以前に存在した土壌ではなく、10号竪穴建物使用中に掘削され、再度床をはって埋められた土壌と考えられる。埋土には焼土と土器片が多く混ざっていた。

10号竪穴内の土壌



第61図 手輪遺跡 D地区 10号竪穴床下土壌 (1/50)



第62図 手輪遺跡 D地区 10号竪穴床下土壌出土遺物 (1~7=1/4、8=1/2)

1・2は土師器粗製の甕で、3~7は製塩土器である。特に3・4は砲弾型の焼塩用製塩土器で内面に布目織がある。4はその底部片。5~7は逆錐形の焼塩用製塩土器で、7は内面に貝殻条痕が残る。8は鉄器で刀子の先端。

遺物

8世紀前半の10号竪穴建物使用中のある時点で掘られた土壌である。

(田中)

31号土壌 (第63図、写真21、図版15下・45)

10号竪穴建物が埋没した段階で掘り込まれた不整形の土壌で、底面の凸凹からみて、本来ゴミすて穴として掘られたものと推定される。土師器粗製小型甕1個体(1)と多量の碎片化した製塩土器(2-16)が廃棄されている。小型甕は製塩土器同様被熱している。

製塩土器はいずれも逆錐形の焼塩用で、完形に復元できる個体(2)もある。胎土は在地の土器

製塩土器

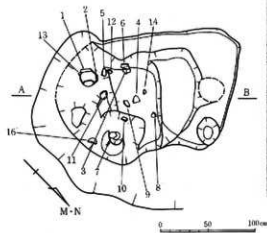
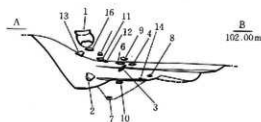
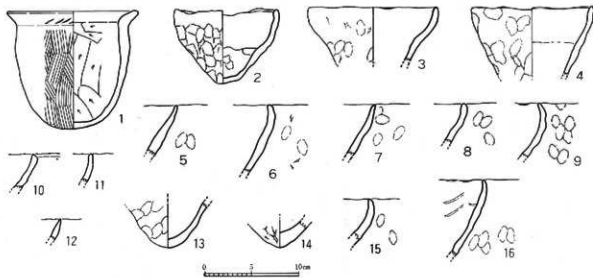


写真21 31号土壌出土状態(北東から)



第63図 手崎遺跡 D地区 31号土壌 (1/40)

とは異なり、石英粒子や金雲母を混入する搬入品である。塩は生産地から幾重にも人の手を経ながらも、手崎遺跡までは製塩土器に入れられたままの状態まで到達したと考えてよい。その製塩土器が壊されて、この上層のすぐ側で塩を取り出したと推定される。少なくとも10個体を超える量が一度に廃棄されていると考えられ、多量の塩を同時に取り出す行為が行われたことを物語っている。またその際改めて火に掛けて塩の固形化をすすめた上で取り出した可能性が高い。製塩土器が碎片化し散



第64図 手崎遺跡 D地区 31号土壌出土遺物 (1/4)

らばっているからであり、その点だけをみれば海岸部の製塩遺跡の在り方と同じだからである。生産地で土器が壊れない程度に焼塩として焼成がおこなわれて運搬されたのち、手崎遺跡で再度土器が砕け散るまで焼成されて固形塩としてとりだされたのではなかろうか。とすれば手崎遺跡は塩の消費地ではなく、「焼塩壺」に入った塩が、焼塩そのものに流通の形態をかえる中継点と評価される。消費地はさらに大田川流域の村々すなわち奈良時代の「石井塚」にあたる領域にあたろう。

8世紀中葉

土器と遺構の切り合い関係からみて、土壌の年代は10号祭穴建物廃絶後の8世紀中葉ごろと推定される。(田中)

11号竪穴建物 (第65・66図、図版16上中・45)

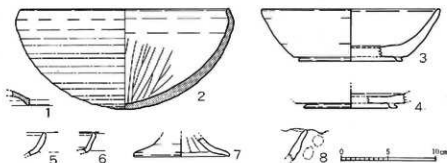
はたして竪穴建物としてよいかまよう竪穴遺構である。他の竪穴建物と同様の貼り床が認められたので竪穴建物とした。東壁際に焼上のつまった土壌がある。しかし焼けた面や施設はなく、カマドとは考えられない。埋土中には須恵器・土師器の破片がかなり含まれていたが、意図的に置かれたものではなく、いずれも竪穴建物廃絶後ゴミ穴に転用されたのちに廃棄されたものである。

1・2は須恵器で、特に2は鉢で手崎遺跡で唯一の出土である。3は粗製土師器の胎土を使って、須恵器の技法で作られた大型の坏身である。4は精製土師器の坏身。5-7は精製土師器。8は逆錐形の焼塩用製塩土器の破片である。

須恵器からみて8世紀前半代に利用された竪穴建物といえる。

12号竪穴建物 (第67図、図版16下)

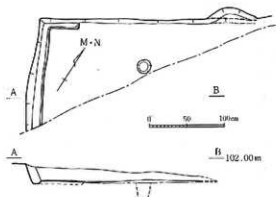
コーナーの一端を検出した方形竪穴建物である。壁周溝がめぐり、その上にかぶさるように、厚さ5cmほどの貼り床が施されている。出土遺物は少なく、内面ヘラケズリの土師器粗製甕の破片から奈良時代の遺構と推定される。(田中)



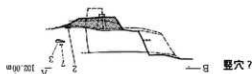
第65図 手崎遺跡 D地区 11号竪穴建物出土遺物 (1/4)

小括

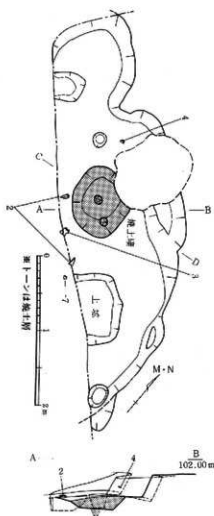
10号竪穴建物、床下土壌、さらに31号土壌では多量の焼塩用製塩土器の廃棄が認められた。一括して廃棄されている状態からみて、同時に多量の塩が製塩土器から取り出されたことを意味している。ほかの竪穴建物・土壌でも数点づつ破片が検出されているが、上記の3遺構は様相がことなっている。各竪穴建物の生活において使用するためやカマド廃絶の祭祀などに消費する蓋にしては多すぎるのではなかろうか。手崎遺跡がいわば塩流通の中継点として8世紀前半代のある時点で機能していたことを示しているのではあるまいか。手崎遺跡は生産地において「焼塩甕」につめられた状態で流通する際の終点としてあり、ここで取り出された塩は流通時での染すなら単位をかえて再び後背地にもたらされるのではないだろうか。(田中)



第67図 手崎遺跡 D地区 12号竪穴建物 (1/50)



竪穴7



遺物



製塩土器の廃棄

- 1・II層は基本層位
 A1層…陶質褐色土(焼土・土師器混入)
 A2層…は、A1よりやや軽い
 B層…暗褐色軟質土(黄色ブロック・焼土・炭含む)
 C層…良後土・灰・写真褐色土→建物使用中または廃絶後の層位
 D層…煎焼土質褐色土 } 焼土ではなく、後土に内包土。
 D層…煎焼土質赤褐色土 }

第66図 手崎遺跡 D地区 11号竪穴建物 (1/50)

塩の中継点

3、中世の遺構と遺物

墓1基と上城1基のほか中世の遺物を含む柱穴を9基検出している。

2号中世墓 (第68・69図、写真22、図版17中下・45・46)

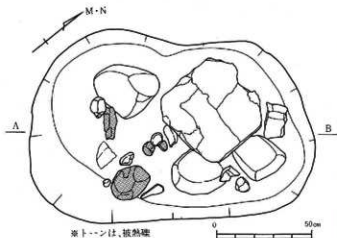
角礫でおお

青磁碗割葬

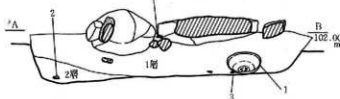
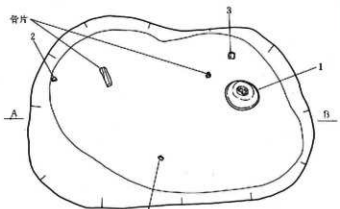
破片割葬?

13世紀

大型の角礫でおおった配石土墳墓である。土墳の規模は長軸約150cm、短軸約90cmほどで、頭の横に青磁碗を割葬していたと推測され、そうであれば頭位は北東方向と推定される。残存した骨の位置から膝を曲げた屈葬であったと思われる。頭の横に置いたと推定される青磁碗1は完形品で、銅造弁内面花文の13世紀鎌倉時代の中国製輸入青磁である。この青磁碗の口縁端部内面には小さな剥離があり、人為的な打ち欠きの可能性がある。埋葬行為に関わる民俗習慣であろうか。2は青磁碗の口縁部小片で、混入したものだ。3は口禿の白磁皿の口縁部片で3×3cm大の四角い破片であった。混入したとするよりも破片割葬の可能性が高い。4は配石中に落ちていた土師器小皿の破片。配石は青磁碗の上に四角い大型の安山岩角礫が置かれ、その周囲に河原石を配している。なかには焼けている石もある。大型角礫は被葬者の頭部を意識して置いたと推定される。割葬された青磁・白磁の年代は13世紀後半前後とみられ、土師器小皿の年代観とも矛盾しないので、その時期が墓の年代と推定される。



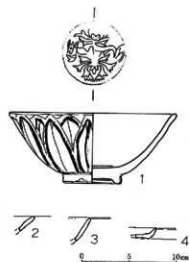
*ト---は、被熱石



第68図 手嶋遺跡 D地区 2号中世墓 (1/20)



写真22 2号中世墓出土状態 (南西から)



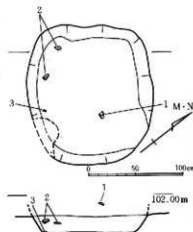
第69図 手嶋遺跡 D地区 2号中世墓出土遺物 (1/4)

32号土壇 (第70・71図、写真23、図版17上・46)

9号竪穴建物中央に切って作られる。隅丸方形の土壇である。底面から東播系の須恵質摺鉢2が、1層から青磁碗片1が出土。3は土師器小皿片である。摺鉢の年代から14世紀代と推定される。

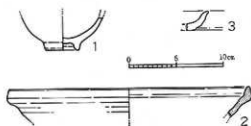
14世紀

(丸尾・田中)



第70図 手崎遺跡D地区32号土壇 (1/40)

写真23 32号土壇出土状態 (南西から)



第71図 手崎遺跡 D地区 32号土壇出土遺物 (1/4)

ビット24 (第72・73図、写真24、図版46)

2号中世墓のすぐ傍の柱穴から柱抜き取り後埋納されたと考えられる青磁碗1が出土した。口縁の一部を欠いて横向きに入れられていた。鎮座弁の13世紀鎌倉時代の中国製輸入青磁である。このような青磁埋納柱穴は、日田市内でも小迫辻原遺跡の鎌倉時代建物群などで認められ、掘立柱建物の建て替えに関係

柱穴に青磁碗埋納

するものと推定される。

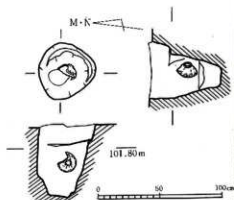
小括

C・D地区で1基ずつ中世前期の配石上墳墓を検出したが、かなり離れていて単独に存在する。そして建物こそ調査で構成することはできなかったが、ビット24のような柱穴が存在する点から、周囲に同時期の掘立柱建物が複数存在することは疑えない。この付近のしこ名が「門の前」とよばれ近世以前に屋敷が存在したことを推測せしめることから、それは13世紀ごろに存在した屋敷に由来する地名と推定される。そうであれば1・2中世墓は屋敷の内部あるいは極近くに造られた屋敷墓といえよう。

屋敷の存在

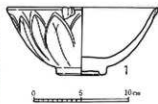
屋敷墓

D地区 ビット24出土



第72図 手崎遺跡 D地区 ビット24 (1/30)

写真24 D地区 ビット4 青磁碗出土状態



第73図 手崎遺跡 D地区 ビット24 出土遺物 (1/4)

4) E地区 (第76図、図版2下)

遺跡全体の中で最も南側に位置する調査区である。遺跡の西側を流れる湧水谷に接して調査区で西側に今も大量に湧き出る湧水がある。竪穴建物2棟と、13基の土竈、2条の溝を検出した。さらに遺構検出層そのものが縄文時代の包含層であった。

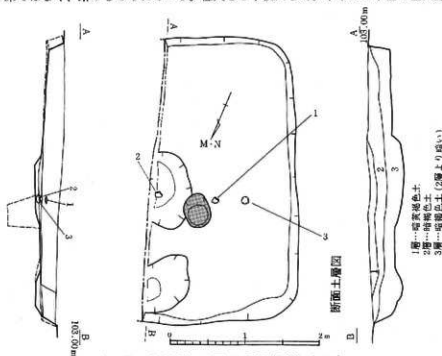
1、弥生時代の遺構と遺物

調査区の北端で1棟の竪穴建物が検出されている。

102号竪穴建物 (第74・75図、図版19上・46)

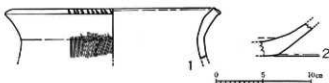
小型竪穴

E区北端で検出した。調査区境界付近だったため全掘できなかったが、一辺3.5mほどの方形である。床面は貼り床ではなく、踏みしめられている。柱穴を1本検出した。本来は2本柱の竪穴建



第74図 手嶋遺跡 E地区 102号竪穴建物 (1/50)

物と推定される。床面には浅い皿状の凹みを2箇所検出したが、焼土や焼けた面はなく地床炉ではなかった。埋土は自然埋没の過程を示すレンズ状の堆積で、下層から小破片の長麗の壺片1が出土した。土器の特徴から弥生時代後期後半から終末の時期と判断される。2は平底の底部片。上層には全く遺物を含んでおらず、竪穴建物廃絶後ゴミ穴になっていない。ということは廃絶後埋没するまで周囲に人の居住がなかったことをうかがわせる。竪穴建物の時期は土器からみて弥生時代後期後半と推定される。



第75図 手嶋遺跡 E地区 102号竪穴建物出土土器 (1/4)

弥生時代
後期

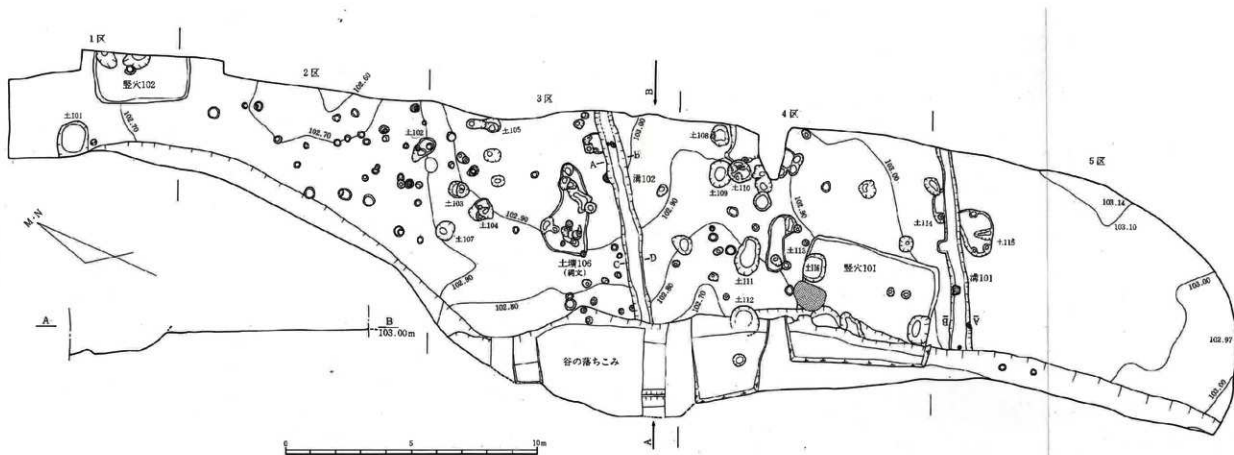
(高島・九尾・田中)

2、古墳時代の遺構と遺物

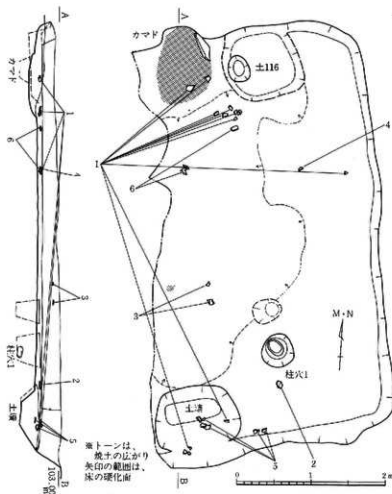
湧水点近くで1軒の竪穴建物を検出した。

101号竪穴建物 (第77-79図、写真25、図版19下・20上・46)

湧水点のきわめて近くにたてられた一辺4.5mほどの方形の竪穴建物であるが、西半分が後世の



第76図 手嶋遺跡E地区遺構配置図(1/150)



第77図 手崎遺跡 E地区 101号竪穴建物 (1/50)

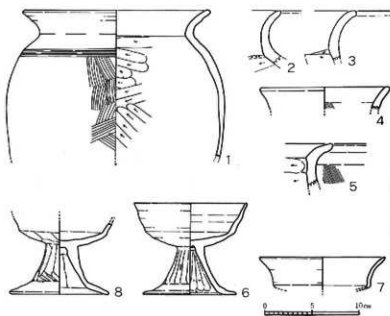
湧水谷の拡大のために失われている。北辺中央と推定される位置にカマドがあり、その右側は後世の116号土壌により破壊されている。カマドとあい対する南面に土塊があり、床面は中央に硬化面が広がる。柱穴は1本のみ検出したが、その位置からみて本来は4本柱構造であったと推定される。

4本柱?

カマドは幸運にも削平を免れて遺存しており、煙道部が竪穴の掘形より外に出る形式のもので、袖の粘土は失われ、支柱も抜き取り痕しか残っていないが、右の袖石が原位置からやや離れて遺存していた。土器片が竪穴

カマド

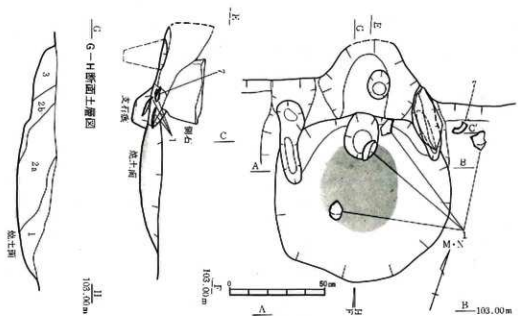
のカマド周辺と対面する壁際の土塊周辺に集中して認められる。土師器壺1はカマド内より出土し、破片は竪穴全体に広く散在する。この土器は確実に竪穴建物廃絶時に伴うものである。



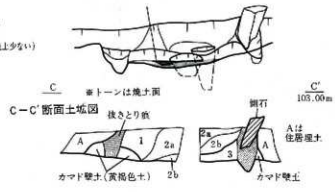
第78図 手崎遺跡 E地区 101号竪穴建物出土遺物 (1/4)



写真25 101号竪穴建物、完掘後、(真上から)



- 1層 …… 暗褐色土 (泥焼土・炭)
- 2a層 …… 泥焼土褐色土
- 2b層 …… 暗焼土褐色土 (2aより焼土少ない)
- 3層 …… 黒灰色土



第79図 手崎遺跡 E地区 101号竪穴建物カマド (1/20)

遺物

遺物は須出器を含まず、土師器のみである。1の壁で口縁部は肥厚することなく、胴部内面は口縁部直下までヘラケズリを施すものである。2-5も土師器甕である。6-8は小型高坏で、脚部内面にタテ方向の、内面に横方向のヘラケズリを施し、脚部の内面屈曲部は面とりする。坏部と脚部の屈曲は明瞭である。なお高坏の胎上は精良で砂粒をほとんど含まない精製土師器である。これらの特徴から、遺物は古墳時代中期後半にまで遡る可能性を考えたい。したがって竪穴建物の時期も5世紀後半代である。

古墳時代
中期後半

(高島・丸尾・田中)

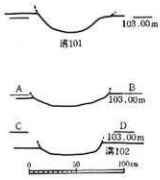
3、近世の遺構と遺物

E地区では近代の水山化による削平を免れて、近世の畑地として地表面が利用されていた時代の遺構が残っていた。調査区を東西に横切る2条の溝と、土壌である。108・110・112号土壌は近世陶磁器の混入から明らかに近世のものである。

101・102号溝 (第80図、図版20下)

畑地境界溝

ともに幅1m程の浅い円弧状の溝で、やわらかい黒褐色砂質土が充填していた。畑地の耕作土と同質の土である。このような溝は手崎遺跡周辺の降ヶ原土原遺跡・上野第1遺跡などで、確認されている(註1)。畑の境界溝と考えられる素掘の溝で近世のものとして理解したい。



第80図 手崎遺跡 E地区 101・102号溝断面図 (1/40)

註1、田中裕介編『口山市高瀬遺跡群の調査』I 1995 大分県教育委員会

5) F地区 (第84図、図版21・22)

遺跡全体の北西部にあたる調査区で、現在の水田2枚にまたがっている。北側の水田面の下はその水田造成によって大きく削平されており、すでに上部の遺構は消滅していた。これに対し南側の水田面下には古墳時代以後の遺構が良好に保存されていた。

調査区的位置と現状

1、古墳時代の遺構と通物

古墳時代後期6世紀代の竪穴建物2棟が発見されている。

203号竪穴建物 (第81-83図、写真26、図版22下・23・46・47)

奈良時代の202号竪穴建物に南コーナーを破壊された2本柱構造の3.4m×3.4mで床面積約10m²の小型方形の竪穴建物である。短辺南側にカマドをもち、204号竪穴建物をわずかに切っている。床面は掘形底面を踏みしめたもので貼り床ではない。特に中央からカマド周辺がよく硬化している。

小型竪穴2本柱

カマドは煉造部が竪穴の掘形から外に出ない形式で、軸石の一部や支柱石、笑口の天井石が残っていた。石材にはいずれも河原石を利用している。左側の圓石は、その痕跡があるにもかかわらず存在せず、抜き取られたと推定される。

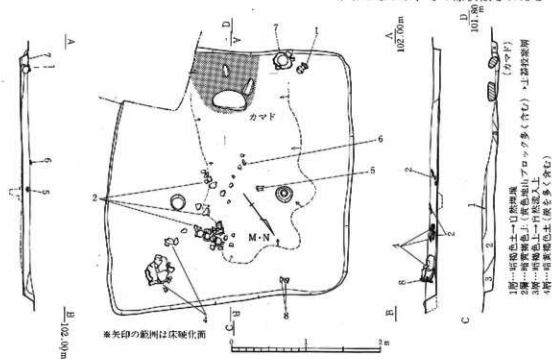
カマド

出土状態



写真26 203竪穴建物 No.1、7出土状態

遺物出土状態。カマド脇の土師器小型甕7と須恵器甕1は床面直上で出土しており、そのうえ蓋は口縁部を下にひっくりかえておかれた状態で完形に復元できた。甕は口縁部を欠損しているが、横倒しの状態であった。これらは住居廃絶時に人為的に投棄されたものと考えられる。カマドの右側石がぬかれた状態からみて、竪穴建物廃絶時にカマド祭祀がおこなわれ、その際供献されたと



第81図 手嶋遺跡 F地区 203号竪穴建物 (1/50)

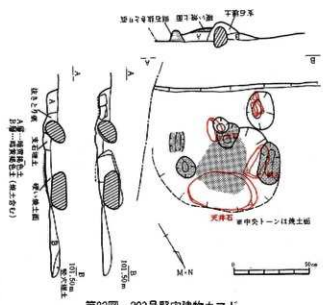
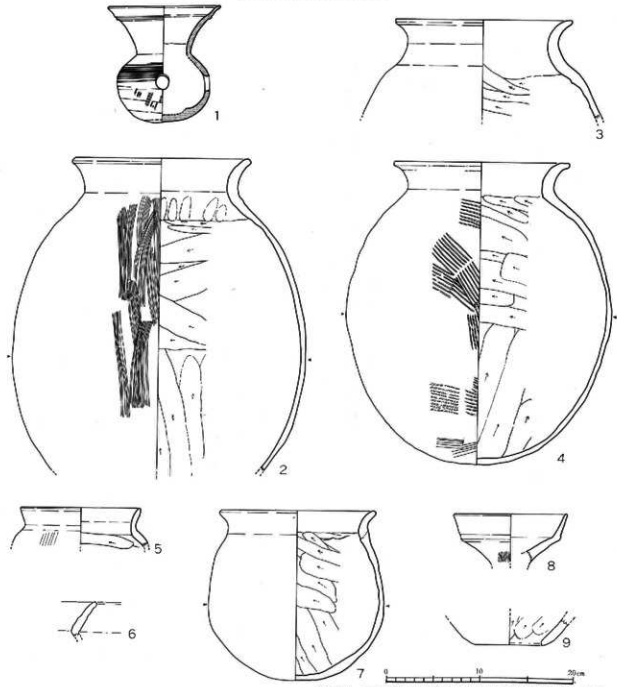
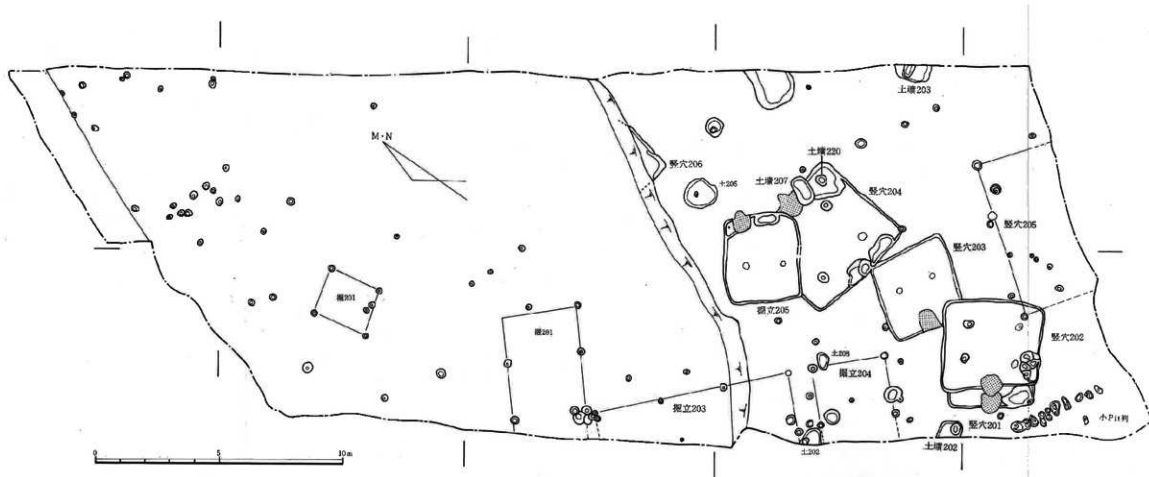


図1 手廻り土
図2 土質
図3 手廻り土
図4 土質
図5 手廻り土
図6 土質
図7 手廻り土
図8 土質
図9 手廻り土
図10 土質

第82図 203号竪穴建物カマド



第83図 手廻り土 F地区 203号竪穴建物出土遺物 (1/4)



第84图 手帕湾F地区遺構配置图 (1/150) -弥生时代以後-

推定される。また中央部に土師器甕2・4が横倒してつぶれた状態で出土した。これらは埴土2層中でやや床面から浮いており、廃絶時祭祀に伴うものではなく、ゴミ穴に転用されたごく初期に一括して廃棄されたと推定される。それ以外の土器はゴミ穴転用後に流れこんだものである。

第83回1は床面より出土した須恵器甕で、口縁部径が胴部径より大きく、陶色番号MT15形式にあたる。2～4は土師器粗製甕。5・6は同じく小型の粗製甕で、中央部に流れこんだもの。8は土師器精製の高坏片。9は土師器粗製の甗片。

須恵器甕の年代からみて、堅穴建物の廃絶は6世紀前葉に位置づけられる。

(高島・丸尾・田中)

204号堅穴建物 (第85～87回、図版24・47)

奈良時代の205号堅穴建物に大きく切られており、205号堅穴建物の貼り床の下からも本堅穴に属するとみられる遺物が出土している。4本柱構造で、北辺中央にカマドを作り付けた4.5×4.6mで床面積約21㎡の方形堅穴建物である。カマドに対面する南辺中央に上壇1、その隣の壁際に土壇3があり、カマド右脇の隅に土壇2がある。土壇1は廃絶時には開口しており廃絶時に土器片が投棄されている。土壇2・3は堅穴建物埋土1層とは異なる土で埋没しているため、堅穴建物使用中に掘られかつ埋められた土壇と推定される。床面は貼り床ではなく踏みしめた状態であった。

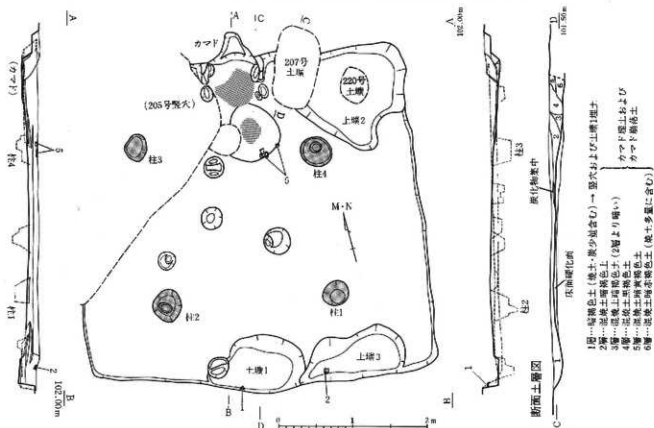
カマドは燃焼部が壁面の外にやや張り出し、煙道が外にのびる作りで、袖は側石をはめて粘土でかためている。個石が左右2個づつ使われた痕跡があった。燃焼部の底面は一段低くなってその底はよく焼けていた。またカマドの焚き口手前に浅い土壇があり、その底も焼けていた。カマドの石材はすべて抜き取られており、内部には3の土師器小型甕と5の土師器鉢、4の土師器精製高坏が破砕されて投棄されていた。カマドを破壊する廃絶時の祭祀行為に伴う投棄と推定される。

遺物

6世紀前葉

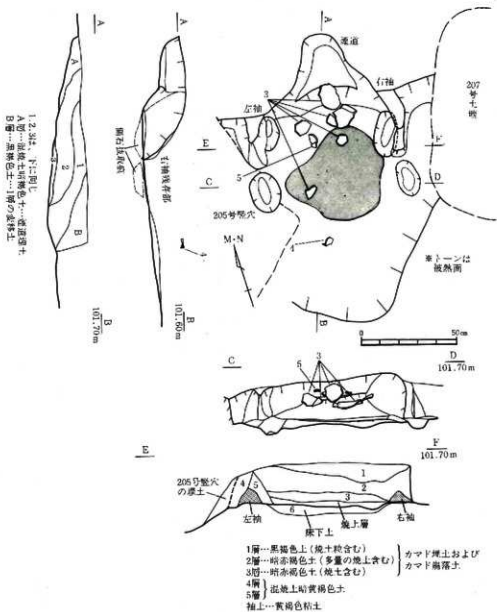
中型堅穴
4本柱

カマド



第85回 手崎遺跡 F地区 204号堅穴建物 (1/20)

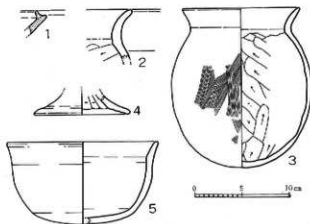
- 断面土器図
- 1層…埴土(赤土・黒少量含む)→堅穴および上壇1埋土
 - 2層…埴土(赤土・黒少量含む)
 - 3層…埴土(赤土・黒少量含む)
 - 4層…埴土(赤土・黒少量含む)
 - 5層…埴土(赤土・黒少量含む)
 - 6層…埴土(赤土・黒少量含む)
 - 7層…埴土(赤土・黒少量含む)
 - 8層…埴土(赤土・黒少量含む)
- カマド埋土および
カマド側石土
カマド埋土(埴土・黒少量含む)
- 断面土器図



第86図 手崎遺跡 F地区 204号竈穴建物カマド (1/20)

1・2は南壁際に廃絶直後に流れこんだと推定される須恵器坏身と土師器粗製甕である。1と4・5の形態からみてこの竈穴建物の廃絶時期は6世紀末から7世紀前半にあたりと推定される。(高峯・田中)

6世紀末



第87図 手崎遺跡 F地区 204号竈穴建物出土遺物 (1/4)

2、奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構はF地区で竪穴建物3基と土塼9基を検出した。竪穴建物はいずれもカマドをもつ方形の作居であるが、床面積は10-14㎡と、C・D地区の該期の竪穴建物に比べ小規模なものである。201号竪穴建物と202号竪穴建物は切りあっており、201号から202号の順序で作られている。

(高島・田中)

201号竪穴建物 (第88-90図、写真27、図版25・47)

この竪穴建物が廃絶したのちに202号竪穴建物が同じ位置に作られている。

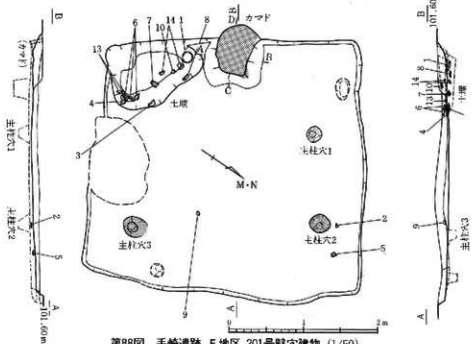
方形プラン4本柱構造の比較的小型の竪穴建物である。床の長軸長約3.8m、短軸長約3.5mでやや長方形である。床面積は約13㎡。床面から10cm程が残り、西壁中央にカマドの痕跡があり、カマド左側のコーナーに土塼がある。この土塼内からカマド左側に向かって床面の高さから上に顔をだすように土器の投棄が認められたので、この土塼は竪穴建物廃絶時には開口していたとみられる。柱穴は3本しか確認されなかったが、4本柱構造と推定される。床面は貼り床ではなく踏みしめたままである。

カマドは燃焼部が壁面の外にやや張り出し、袖は側石をはめて粘土でかためている。側石が左右1個づつ使われた痕跡があった。燃焼部の底面は床面と同じ高さで、その底はよく焼けていた。カマドの石

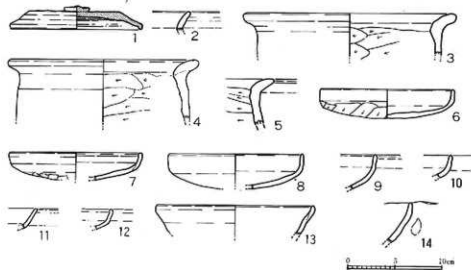
小型竪穴
4本柱

遺物

遺物



第88図 手簡遺跡 F地区 201号竪穴建物 (1/50)



第89図 手簡遺跡 F地区 201号 竪穴建物出土土器 (1/4)

材はすべて抜き取られており、カマドを破壊する廃絶時の祭祀的な行為があったと推定される。

土器はカマド脇の土塼からの出土が多く、完形の須恵器坏蓋1が裏返された状態でカマドに最も近い位置に置かれていた。

ほかに3・4の土器器粗製甕、6・7・8・10・13の上陶器精製坏、14



写真27 201号竪穴建物内土壌出土状態(北東から)

の逆蹄形の製造土器などを破砕して投棄した状態で出土した。2・5・9・11・12の精製土師器は竪穴建物埋土(第91図A層)出土。土壌内の遺物とはほとんど時期差がない。

8世紀前半

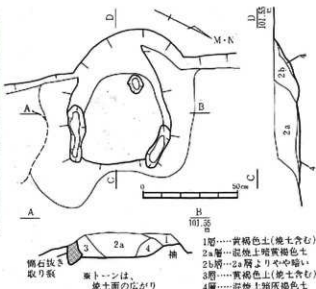
須惠器杯と七師器杯の形態から竪穴建物の廃絶時期は時期は8世紀前半と考えられる。

(丸尾・田中)

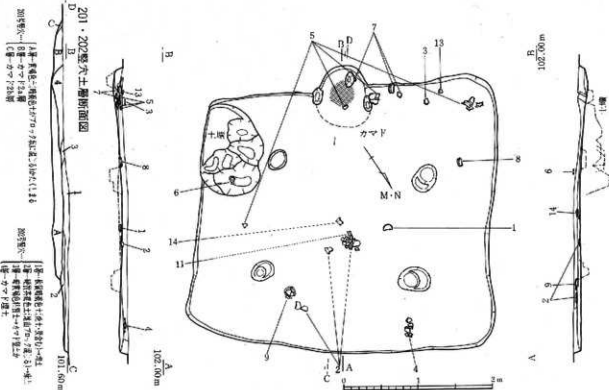
202号竪穴建物(第91-93図、写真28、図版26・47)

小型竪穴
4本柱

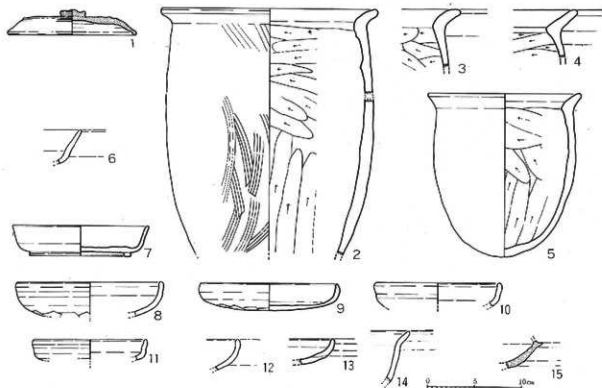
201号竪穴建物を切っ、ほとんど重なるように作られている。カマドの位置を東にずらして竪穴建物を建てなおした状態である。床面の高さも数cmあげているだけである。方形プラン4本柱構造の小型の竪穴建物である。床の長軸長約3.9m、短軸長約3.6mでやや長方形で、床面積は約13㎡。床面から10cm程が残り、西壁中央にカマドの痕跡があり、カマド左側のコーナーに土壌がある。こ



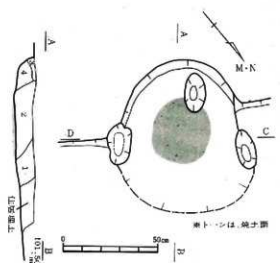
第90図 手嶋遺跡 F地区 201号竪穴建物カマド (1/20)



第91図 手嶋遺跡 F地区 202号竪穴建物 (1/50)



第92図 手嶋遺跡 F地区 202号壑穴建物出土遺物 (1/4)



1. 混焼土・炭 暗褐色上
2. 赤褐色土(焼土・炭多(50))
3. 黒褐色土(焼土・炭含む)
4. 暗黄灰褐色土(焼土・炭含む)

第93図 手嶋遺跡 F地区 202号壑穴建物カマド
平面図・断面図 (1/20)

らかに低くなり、その底はよく焼けていた。カマドの石材はすべて抜き取られており、カマドを破壊する廃絶時の祭祀行為があったと推定される。



写真28 202号壑穴建物、No.9 出土状態

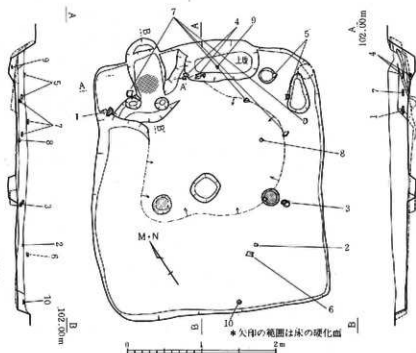
の土壌内では床面の高さから上に顔をだすように土器の投棄が認められたので、この土壌は壑穴建物廃絶時には開口していたとみられる。床面は一部貼り床で、残りは踏みしめたままである。

カマドは燃焼部が壁面の外に半分張り出し、側石を壁際にはめて粘土でかためていたと推定される。側石が左右1個づつ使われた痕跡があった。燃焼部の底面は床面からな

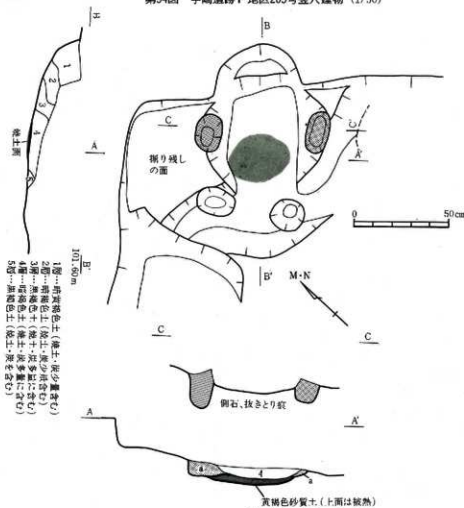
カマド

遺物

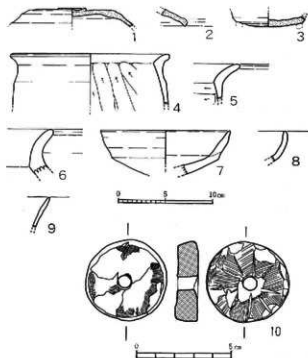
土器はカマド
周辺と中央部から
の出土が多い。5
の土器器環身は
カマド周辺に破
砕して廃棄され
た状態でいずれ
も完形に近く復
元できた。竪穴
建物廃絶時のカ
マド祭祀に伴う
廃棄品と推定さ
れる。1・2・4
・9・14は竪穴
中央の床面に
に廃棄されていた
もので、竪穴
がゴミ穴に転用



第94図 手崎遺跡 F 地区 205号竪穴建物 (1/50)



第95図 手崎遺跡 F 地区 205号竪穴カマド (1/20)



第96図 手繪遺跡 F地区 205号竪穴建物出土遺物
(1/4, 10=1/2)

は6世紀後半の須恵器坏身で、古い時代からの残留遺物。遺物をもとほとんど201号竪穴建物出土遺物と時期差をうかがえない8世紀前半の製品である。

201号と202号竪穴建物では切り合い関係から明らかに201号竪穴建物の方が古いが、廃絶後それはど時を置かず建て替えられたと推定され、同一構造・同一規模・同一のカマド構造が再現すること、その位置からみて、「家族」等の同一集団が引き続き居住したものと推定される。

(丸尾・山中)

205号竪穴建物 (第94-96図、写真29、図版27・28・47)

2本柱構造で、北西隅にカマドを作り付けた3.5×2.9mで床面積約10㎡の長方形小型竪穴建物である。カマドの右側北壁中央に土壇があり、遺物の出土状態からみて、その土壇は廃絶時に開口していたと推定される。床面は貼り床で、中央部からカマドにかけてはよく硬化していた。

カマドは燃焼部が壁面の外にやや張り出し、煙道が外にのびる造りで、袖は地山を掘り残して作られ、側石をはめて粘上でかためている。側石が左右1個づつ使われた痕跡があった。燃焼部の底面は一段低くなってその底はよく焼けていた。カマドの石材はすべて抜き取られており、竪穴建物廃絶時に破壊されたものと推定される。廃絶時に意図的に置かれたり、破砕して廃棄されたような遺物はなく、すべてゴミ穴に転用してから廃棄されたものである。その中で10の断面台形の石製紡錘車は南側の壁近くで出土している。1・2は須恵器坏蓋片。3は高台の付く須恵器坏身片。4-6は土師器粗製高坏。7は土師器精製高坏。8は土師器精製坏片。9は逆鐘形の製塩土器片。須恵器の形態からみて8世紀前半に廃絶した竪穴建物である。

(田中)

206号竪穴建物 (第97図、図版29上)

下段の現水田造成時に大半が削平された方形竪穴建物でコーナーに周溝が残る。土師器の粗製坏片・精製坏片・製塩土器の小片が出土しており、8世紀前半代の竪穴建物とみられる。

(田中)

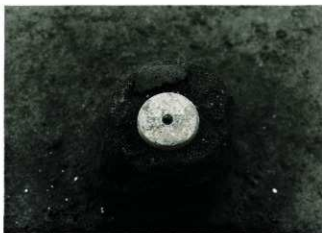


写真29 205号竪穴建物 No.10石製紡錘車出土状態

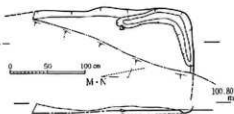
されたごく初期に一括廃棄されたと推定される。1は須恵器坏蓋片。2・4は土師器粗製高坏。9は完形で正位に置かれていた土師器精製坏片。14は土師器精製坏片。それ以外の遺物は埋土中に流入した破片である。3は土師器粗製高坏の口縁部片。6は土師器精製高坏の口縁部片。8・10-13は土師器精製坏の破片。15

8世紀前半

小型竪穴
2本柱

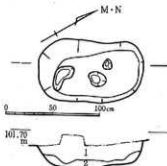
カマド

8世紀前半



第97図 手繪遺跡 F地区206号竪穴建物 (1/50)

小土壇



1層…黒褐色土
2層…暗褐色土(黄土スロップを多量に含む)
第98図 手崎遺跡 F地区 207号土壇 (1/40)



第99図 手崎遺跡 F地区 207号土壇出土遺物 (1/4)

土壇

土壇は40～50cmの深いものが多く、竪穴建物から離れて掘られている。土器の小片や焼

土・炭化物が出土するものが多く、もともとの機能はともかく、最終的にはゴミ穴として用いられたものであろう。しかし、時期のわかる遺物が乏しいため年代についてはなお問題を残している。

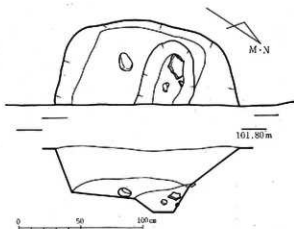
207号土壇 (第98・99図、図版29下)

204号竪穴建物カマド横に掘りこまれた長円形の小型の土壇で、

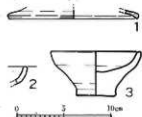
奈良時代の遺物の小片が出土している。1は須恵器坏蓋の破片で、203号土壇の1と接合。2は土師器精製碗片。8世紀代の土壇と推定される。

203号土壇 (第100・101図、図版29中・48)

調査区外に伸びる半円形の土壇で、円礫とともに土器片が廃棄されている。1は須恵器坏蓋の小片で207号土壇1と接合した。2は土師器精製の碗。3は土師器精製の碗あるいは蓋である。底部



第100図 手崎F地区 203号土壇 (1/30)



第101図 手崎遺跡 F地区 203号土壇出土遺物 (1/4)

はよくなでられているが切り離し方法は不明。

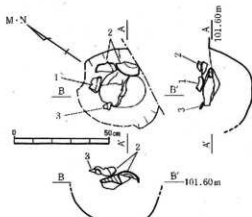
この他に201・205号土壇が出土遺物から奈良時代の遺構と推定される。(田中)

小竪

3、平安時代の遺構と遺物

220号土壇 (第102・103図、写真30、図版48)

柱穴状の土壇である。204号竪穴建物の屋上から掘り込まれており、完形に近い土師器碗、土師器粗製甕の破片とカマドの柚石椽の焼石が出土した。1は小型の上土師器粗製甕片。2の土



第102図 手崎遺跡 F地区220号土壇 (1/20)



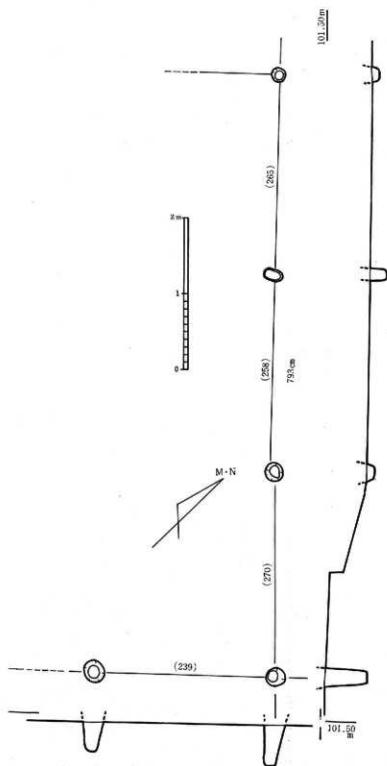
写真30 220号土壇、横出時(東から)



第103図 手崎遺跡 F地区 220号土壌出土遺物 (1/4)

師器坯は、底部は回転ヘラ切りによっており、口縁端部がわずかに内汚して内面側がやや肥厚するなど9世紀前半の特徴を示す。3は上師器精製の坯片で奈良時代からの残留遺物。(高畠・田中)

9世紀前半



第104図 手崎遺跡 F地区203号掘立柱建物 (1/50)

4、時期不明の遺構
203号掘立柱建物(第104図)

2×3間と推定される掘立柱建物の東半分を検出した。柱間距離が1間半で、柱穴も深い。長辺約8mでかなり大型の建物である。出土遺物はないが、柱穴埋上が黒褐色土なので中世以後の掘立柱建物と推定される。

中世以後

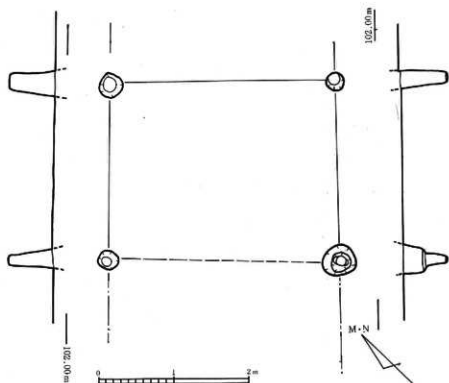
204号掘立柱建物(第105図)

残存1×1間で調査区外に伸びると推定される掘立柱建物で、203号掘立柱建物と柱筋が一致しており、203号と併存していたものと考えられる。

205号掘立柱建物(第106図)

2×3間と推定される掘立柱建物の北半分を検出した。柱筋は通るが柱間距離は揃わない。時期を判定できる出土状態の遺物はない

3者の関係

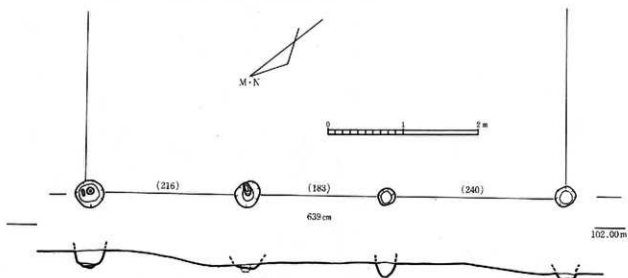


第105号 手崎遺跡 F地区204号掘立柱建物 (1/50)

が、203・204号掘立柱建物の方向と90度振れる方向にあり、同一時期の掘立柱建物と推定される。

なお201・202号掘立柱建物は全く時期不明で、201号は堅穴建物の削平後の柱穴である可能性が高く、202号は掘立柱建物を構成するかどうか不明である。

(山中)



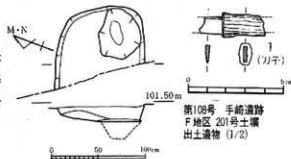
第106図 手崎遺跡 F地区 205号掘立柱建物 (1/50)

奈良時代の遺構補遺

201号土壇 (第107・108図)

半円形小型の土壇を半分検出した。1の木質の残る鉄製刀子片以外に製塩土器・土師器粗製甕・精製坏の小片が出土しており、8世紀前半代の遺構とみられる。(田中)

8世紀前半



第107図 手崎遺跡 F地区 201号土壇 (1/40)

6)、F地区谷調査区(第109~113図、写真31~33、図版30~31)

谷の旧流路と想定される部分には、近世以前にも湧水を利用した水田の存在が予想されたため、これに平行・直交する2本のトレンチによる確認調査をおこなった。その結果、古代にまでさかのぼる水田または水田様の土層が確認され、さらにそれ以前の植物遺体堆積層を検出した。

トレンチ調査

水田探査



写真31 谷調査区、トレンチ1調査風景

1・2層は現水田耕作土と床土で、3層は1920年代に創設の台地上が水田化した際、嵩上げされた土であり、古代・中世の遺物を多量に含んでいる。土の採取先は隣接するF地区の削平された部分だと考えられ、ここに該期の遺構が存在していたことを示している。

4~9層は砂質土を積みながらほぼ水平に堆積したシルト質土層である。4層には酸化鉄濃集層が数枚認められ、近世以降には乾田に近い状態であったことがわかる。

一方5~9層には酸化鉄濃集が認められず、湿田であったと考えられる。9層下部より出土した須恵器坏は体部が直線的に開いて口縁部はわずかに外反し、底部は回転ヘラ切り後にナデで仕上げている(第113図22)。10・11層は、谷の底部に水平堆積した層で12層以下とは不整合に接し、11層堆積前に谷の底面が水平に造成されたことを示している。10層からは8世紀代の土師器(第113図18~21)も多く出土しているのが奈良時代まで遡ると考えられる。11層からは古墳時代後期の須恵器坏蓋が出土している(第113図17)。先の遺物から少なくとも8世紀前半には谷の湧水を利用した水田であったと考えておきたい。また谷底の水田化が古墳時代に遡る可能性も指摘しておきたい。また花粉分析の結果、11層以上に対応する資料7以上からイネ科植物の花粉が検出しはじめる点が指摘されており、その量比が少ないことから畑中先生は水田の存在に否定的

水田層
奈良時代

花粉分析



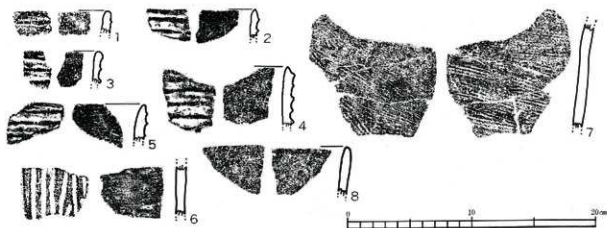
写真32 トレンチ2、実測風景

写真33 畑中委員花粉分析資料採取風景

であるが、層序からみて生産力が低いながらも湧水を利用した谷底の湿地の水田化がはじまっていたと考えられる。

下部層

12層と16層は植物遺体を多量に含む層で、11層をはさんで上層とは不整合に堆積している。特に12a層と



第109図 手斧遺跡 F地区谷調査区出土土器実測図 (1/3)

縄文時代

湧水谷の
形成

12b層は植物遺体のみからなる褐色の泥炭層で、木の枝葉がそのまま残っていた。またドングリ・トチなどの堅果類も各層から出土した。これらの上層は谷を流れる水による侵食によってえぐられた蓋蓋礫層の凹みに、堆積したものであろう。縄文前期の上器片が12b層から出土している（第109図）が、同じ層から縄文時代後晩期の扁平打製石斧も出土しており、また12層以下からは弥生時代以後の遺物が全く出土しない点と考え合わせると、谷底の泥炭層の堆積は縄文時代後晩期と考えられる。したがって前期の土器は谷底への流れ込みと推定される。ところでこの谷地形の中、特に12層以下には不思議なことに縄文時代早期の遺物がほとんどない。このことはこの谷の侵食が縄文早期の包含層形成以後に始まったことを示しており、縄文時代前期以後は湧水と谷が存在し、そこが土器などの流れこむ場所となったことを示しているとみられる。（高島・田中）

出土縄文土器（第109図）

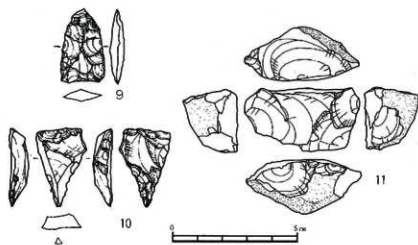
12層

竊B式

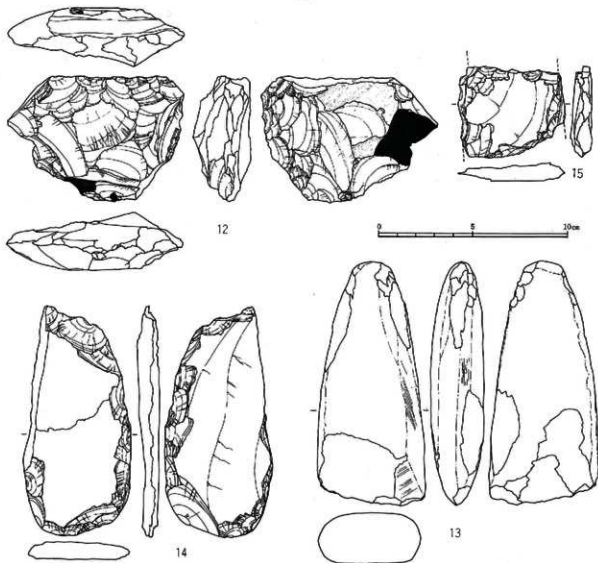
手斧遺跡のある自然堤防の西側には湧水があり、それから流れる水は、浅い谷を形成して北流し、自然堤防の北端を切って大山川に注いでいる。F地区の北隅はこの谷部にあたる。この谷は、古代以降水田化された痕跡がある。縄文土器は、水田化される以前の12層を中心に出土している。出土した縄文土器は、1-5のように口縁部に平行に数条の隆起文をめぐらす竊B式土器を主体としている。これらの土器は内面の条痕が撫で消されており、竊B式土器でも後出的なものである。また、6は沈線による施文から、酋瓶式土器と考えられる。そして、7・8も条痕の後に撫でられており、竊B式土器に伴うものと考えられる。（坂本）

出土石器（第111-112図、図版56中）

9はサヌカイト製の打製石鎌、ていねいな加工を両面に施している。剥離面も新しく、縄文時代のものとは判断できない。10は、片面を鎌状に加工したものである。石材はサヌカイトを使用しており、縄文時代のものとみられる。11は直角礫を利用した石核である。石材はそれほど均質でなく、剥離面も粗さが目立つもので、良好な剥片が得られたとは思われない。石材は珍珠川産の硅化木系統とみられる。12はサヌカイトの盤状の石核である。一部に自然面をのこすが、両面ともによく剥離作業がすすんでいる。剥離は平門部を交互に施している。一、二の剥離面が他より著しく新しいものがあるが、これは二次利用を目的としたものであろう。本来縄文時代の古い段階のものともみられる。13は頁岩製の磨製石斧。両側面にはまだ敲打痕を多くのこしてあり、両面の研磨の仕上げも十分でない。刃部は一部を除いて二次的剥離が施されており、その後刃部は被熱している。ともあ



第111图 手庵遗址F地区谷调查区出土石器-1-(2/3)



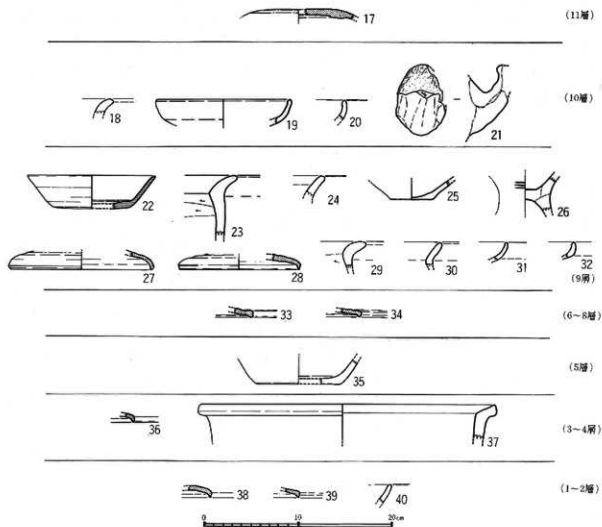
第112图 手庵遗址F地区谷调查区出土石器-2-(1/2)

扁平打製石斧

れ、研磨された刃部が破損部に二次加工を加え、再使用されている。14、15は結晶片岩製扁平打製石器である。14は完形品で、一部の節理面をのぞいて両面の加工によって形を整えている。刃部には軽い磨耗痕がみられ、明らかに使用されている。15は、両端を欠いているもの的一端はその後、再加工した形跡がみられる。横断面は片側に薄くなっておりあるいは石庖丁の用途としたかもしれない。(清水)

9～13は、11層以上の水田層内への残留である。14・15の扁平打製石斧は、12b層以下の泥炭層出土である。扁平打製石斧は、縄文時代後・晩期の遺物と推定されるので、12b層ほかの堆積は、縄文後期以後の形成で、それ以前に堆積していた前期の土器を、形成時に含みこんだと考えられる。

(田中)

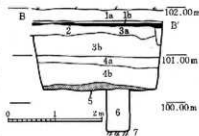


第113図 手崎遺跡F地区 谷調査区出土土器 (1/4)

7)、縄文時代の調査

先の報告したA地区をのぞく、C・D・E・F地区の縄文時代の遺構をまとめて報告する。

まず基本的な層序を説明しておきたい(第114図)。まず第1層は現水田層で、第1a層は現水田耕作土、第1b層はその水田床土、第2層はその水田を造成した際の盛り土層である。第3層は弥生時代以後の遺物と縄文時代の遺物が混在する上部の第3a層と縄文後晩期の遺物が主に分布する第3b層に分かれる。その下に円礫が多く混じって縄文時代早期の遺物を主体に包含する第4a層がある。第4a層の下部は砂質が強く基本的に無遺物の第4b層が厚く堆積する。E地区ではこの第4b層を掘りぬいてその下部の層に達した。その層を第5層とした。その層中からは縄文時代早期の古式の押型文土器を検出した。なおC・D・E地区ではこの基本層序の対応が明確であったが、F地区との対応は明確でない。土器の出土状態から推して、F地区の第2a層が第3層に、第2b層が第4層に対応すると考えられる。



第114図 手崎遺跡 F地区
基本土層図 (1/80)

C地区では集石遺構4基、後期西平式期の竪穴式住居跡1基と貯蔵穴様の晩期中葉の円形土壇1基が検出された。遺地はいずれもA地区同様、跡層のない場所に掘りこまれている。E地区においては土壇を2基検出した。後期三万田式期の不整形土壇と、晩期の小土壇である。C地区の遺構はいずれも包含層掘り下げ途中の第3b層から第4a層中で検出した。E地区の遺構は第3b層上面で検出した。

(田中)

1、遺構と遺物

C地区1号竪穴住居 (第115図、図版33・34)

1号縄文住居跡は後晩期の包含層(第3b層)をやや掘り下げたところで検出した竪穴遺構で、南北約4.5m・東西約4.5mの円形と隅丸方形の中間の平面形態である。床面積は約14m²である。深さは30cmほどで壁の立ち上がりは垂直に近い。床面は中央部にいくほど、よく踏みしめられている。住居跡中央に深さ5cmほどの浅い掘り込みがあり、焼上が堆積していた。石や土器の抜取り痕跡はなく、地床炉と推定される。床面が明確で、最終的には床面下まで掘り下げて検出につとめたにもかかわらず、柱穴は認められなかった。

円形竪穴

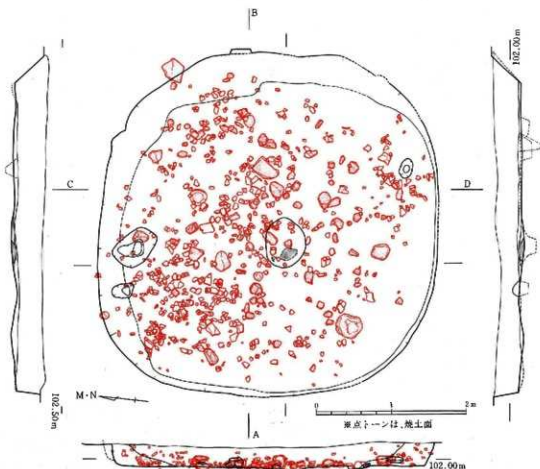
地床炉

遺物はいずれも住居跡発掘直後から投棄された状態で大量に検出された。土器は縄文時代後期西平式のみで、器種は精製粗製とも深鉢ばかりである。石器は大量の土器片に混じって石皿・磨石・一部研磨痕のある円礫がある。また石匙などの製品のほかに大量の剥片・石片が伴出している。石皿などの原材は手崎遺跡のそばの河原などで手にはいる礫であるが、利器は安山岩のほかに姫島産・津江産・佐賀腰岳産の3種類の黒曜石が認められる。

出土状態

後期西平式

(田中)



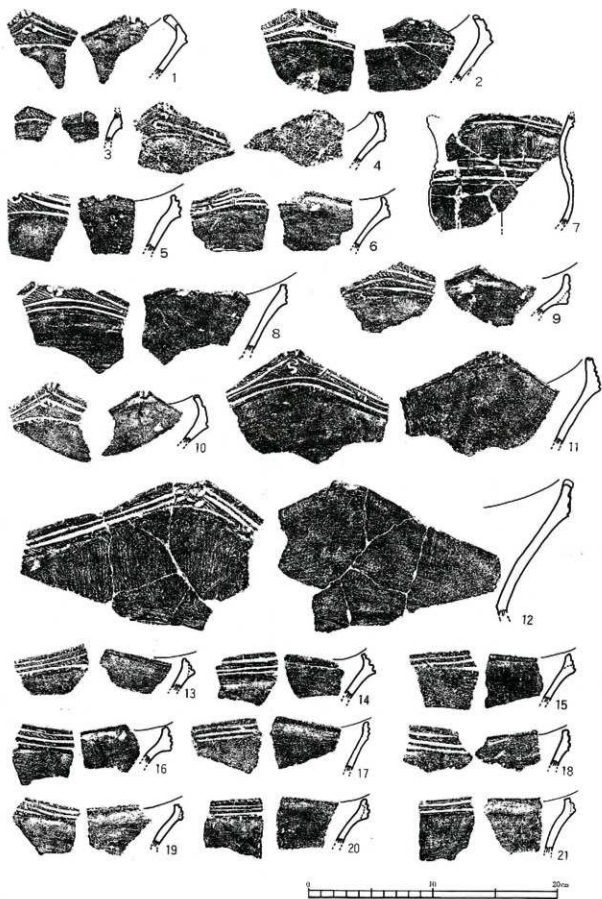
第115図 手崎遺跡 C地区 縄文時代1号竪穴住居 (1/50)

出土土器 (第116～123図、図版49～51上)

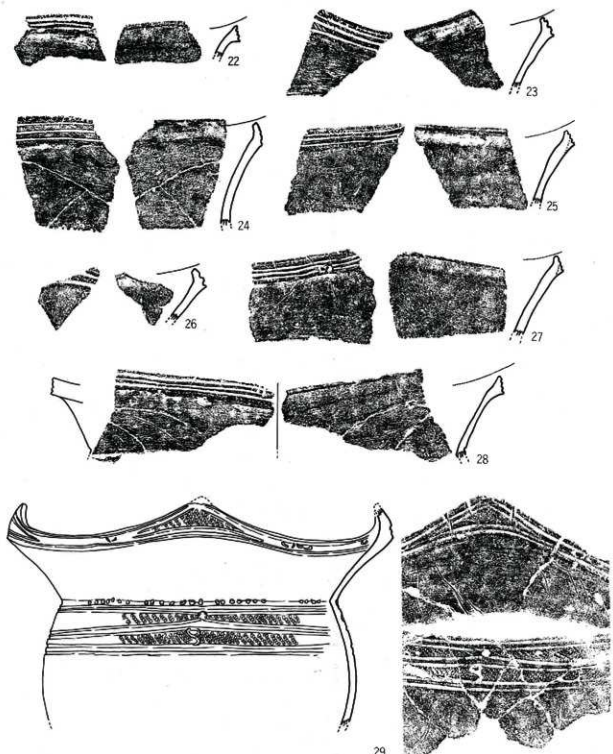
手崎遺跡の1号竪穴住居からは多量の縄文土器が出土した。時期もほぼ一時期のものと考えられる。器種は第119図48が浅鉢の可能性はあるが、他はすべて深鉢形土器である。この深鉢形土器は大きく磨消縄文を施文する有文土器と文様の無い無文土器がある。さらに有文土器の器形には口縁部が波状になるタイプ(第116・117図)と平坦なタイプ(第118・119図)が、一方無文土器は、器面を横方向に丁寧にへら磨きするものと、条痕のままの土器(第123図102)がある。前者の口縁部は、平坦なものが多いが、第122図83は波状口縁である。また、条痕を残す第123図102は、器形も他と異なり、外面にはススが付着している実用的な土器である。

西平式

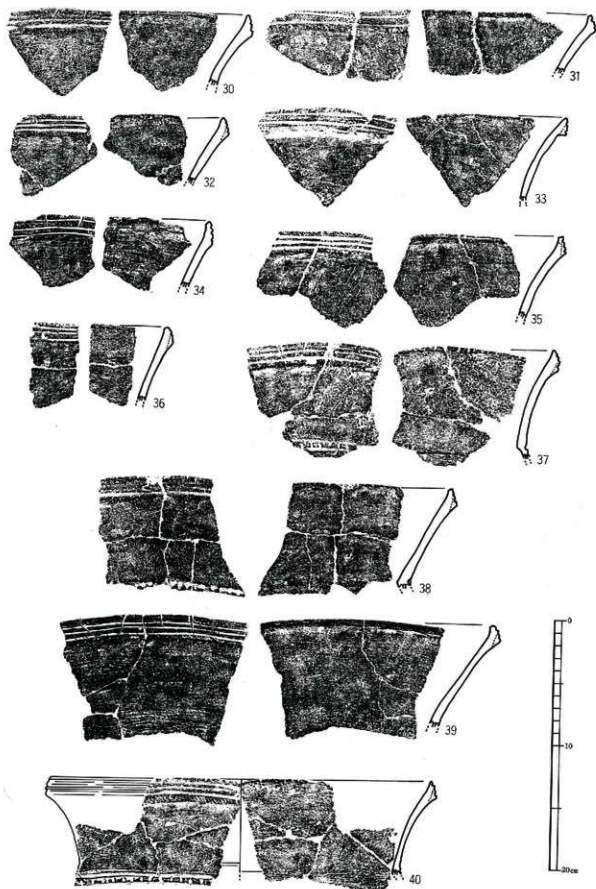
以上の土器は、縄文時代後期中葉の西平式土器で、近年筑後川上流域の、九重町都原遺跡でも、中央に石組炉を持つ円形住居が2基報告されている。(坂本)



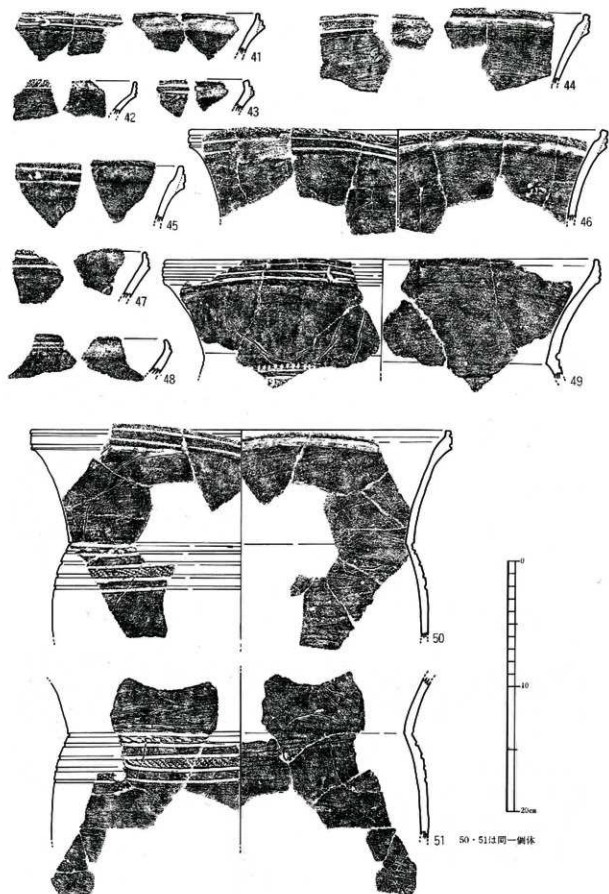
第116图 手崎遺跡1号壑穴住居出土土器(1)(1/3)



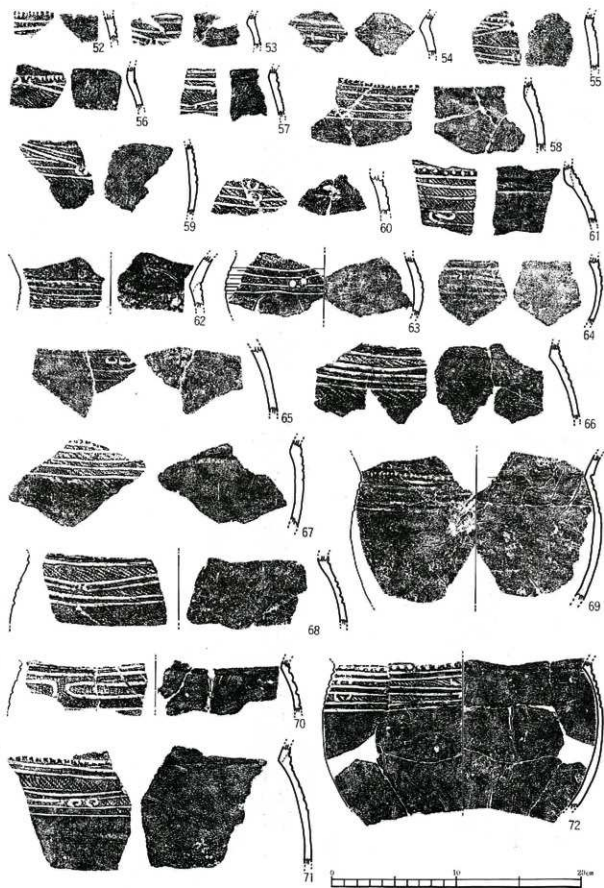
第117图 手陶遺跡1号壑穴住居出土土器(2)(1/3)



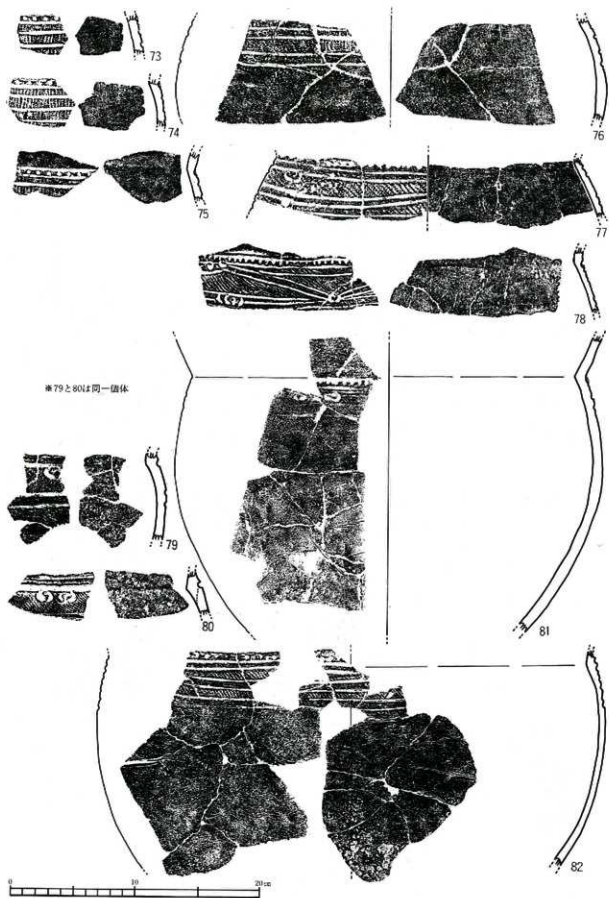
第118图 手制遗跡1号整穴住居出土土器(3) (1/3)

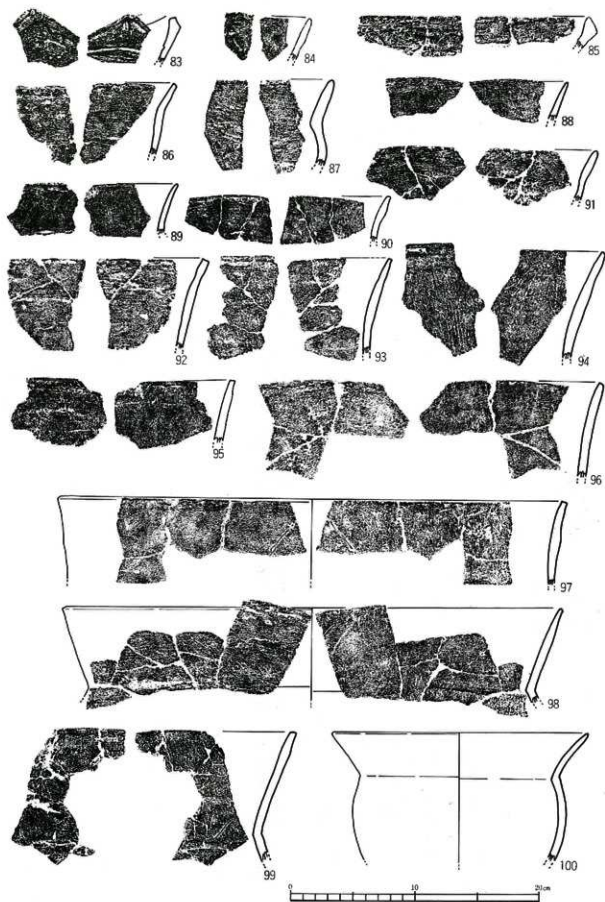


第119図 手織遺跡1号竪穴住居出土土器(4) (1/3)

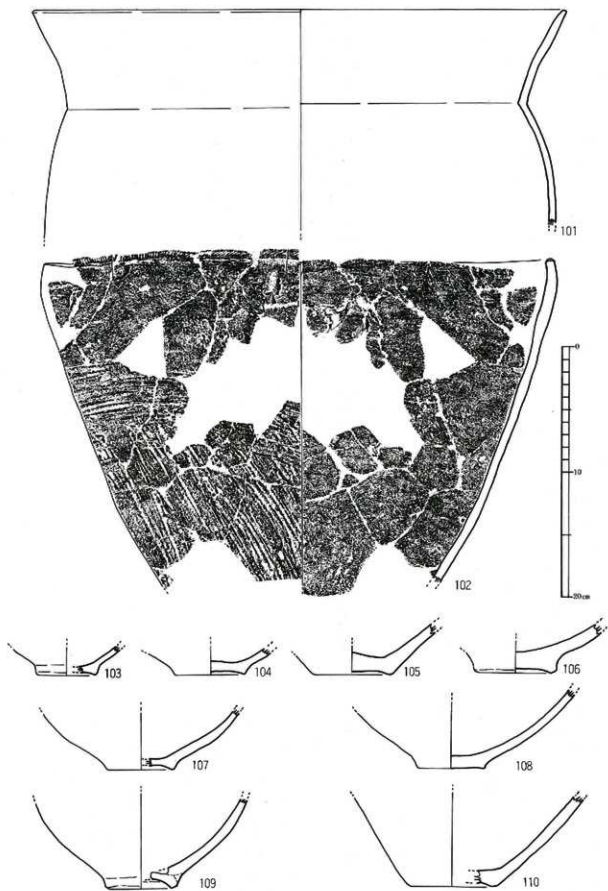


第120图 手崎遺跡1号竪穴住居出土土器(5) (1/3)





第122图 手繪遺跡1号整穴住居出土土器(7)(1/3)



第123圖 手嶋遺跡1号竪穴住居出土土器(8) (1/3)

出土石器 (第124-126図、図版57)

縄文後期西平式に伴う1号壑穴住居内出土の石器で、一括的な出土を示している。剥片石器類の111は、縦長剥片の打面側の両側ノッチを入れた石匙状の削器、112・113は石刃状の縦長剥片にわずかの加工をしたもので、サイドブレイドの用途をもつものとみられる。114・115・116はいずれもやや不定形な縦長剥片を利用した二次加工剥片あるいは使用痕のある剥片である。117は両面加工によって薄く仕上げられたヘラ状の削器である。118は、大山産とみられる黒曜石の残核である。111・112・113の黒曜石は伊万里産とみられる。なお、116はホルンフェルス製であり、旧石器の可能性もある。

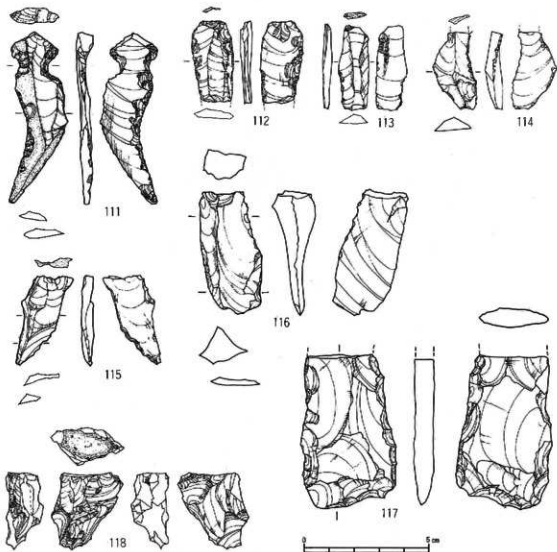
119-126はいずれも板状の安山岩を素材とする扁平打製石斧である。完形のものはいくつか、121と124の接合例によれば長さ約19cmの長軸が少しカーブした形態を示す。また、121は、半折後に折損面に二次加工を加えて再生したものである。素材が板状のため、概して周辺部の加工は粗い。123・124の刃部には磨減痕がみられる。これらいずれも晩期の扁平打製石斧に比して大ぶりである。なかでも126はとくに大きい。これは加工も粗いことから加工途中ともみられる。

127は長円礫の両側辺を磨面・敲打面として利用したものである。129は増長度がすすんだ磨石の破片である。またわずかな側面には敲打痕もみられる。制産の状況からみて、被熱による破砕とみられる。石材は珍しく砂岩を用いる。伊石に転用したものとみられる。128は台石(石皿?)の破片である。これも伊石に転用されたものとみられ、火熱をうけて破砕した一部である。集石1の台石の破片と接合する。これによれば、径20cmほどの扁平円礫に復元することができる。

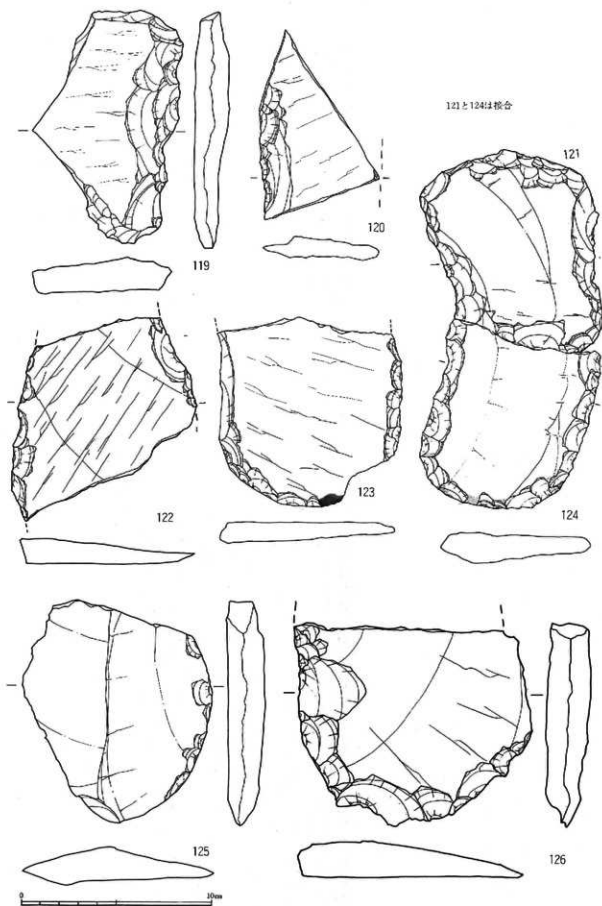
剥片石器

扁平打製石斧

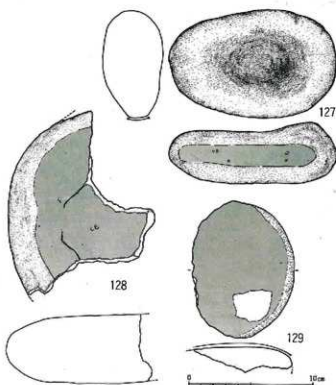
磨石器



第124図 手越遺跡1号壑穴住居出土石器-1-1(2/3)



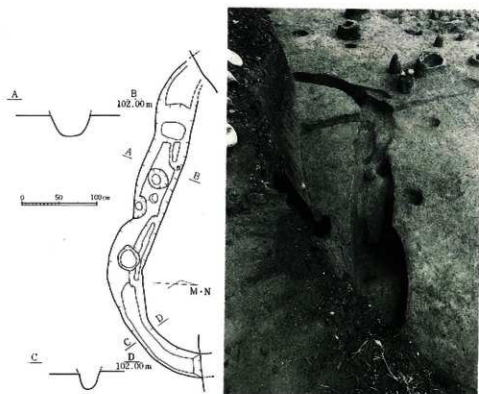
第125図 手崎遺跡1号竪穴住居 出土石器-2- (1/2)



第126図 手簡遺跡 1号竪穴住居出土石器-3- (1/3)

C地区1号溝 (第127図、写真34)

1号竪穴住居近くの4b層上面で検出した、湾曲した溝状の遺構である。埋土内には縄文後晩期の小土器片がはいっているが、どのような性格の遺構かは不明である。



第127図 手簡遺跡C地区1号溝 (1/50)

写真34 1号溝、完掘時 (西から)

C地区9号土壌 (第128・132図、図版35上中・51下)

C地区のちょうど礫層と交替する接点に掘り込まれた径1m前後の長円形の土壌である。底面は平坦で、周辺地形の高さからみて、本来深さ1m程度に復元される。そのような構造からみて貯蔵穴の可能性が高い。

貯蔵穴?
晩期中葉

埋土中から人頭大の円礫と縄文時代晩期中葉の土器片を廃棄された状態で検出した。

E地区106号土壌 (第129・132図、図版35下・51下)

浅い不整形の土壌で底面も凸凹しているが、規模3.6×1.8mの大きな土壌である。内部には、円礫と土器片が散乱した状態で、土器は縄文時代後期の三万田式土器であった。

三万田式

E地区118号土壌 (第130・132図、図版51下)

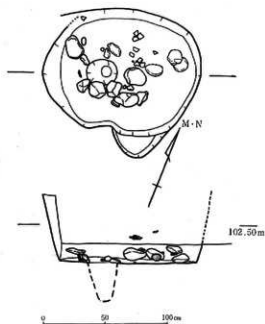
3区谷寄りで検出された円形の小土壌である。内部に数個体の縄文晩期の深鉢の破片が大量に堆積していた。遺構として調査中に認識したのはこの小土壌のみであるが、周囲の包含層からも同

晩期

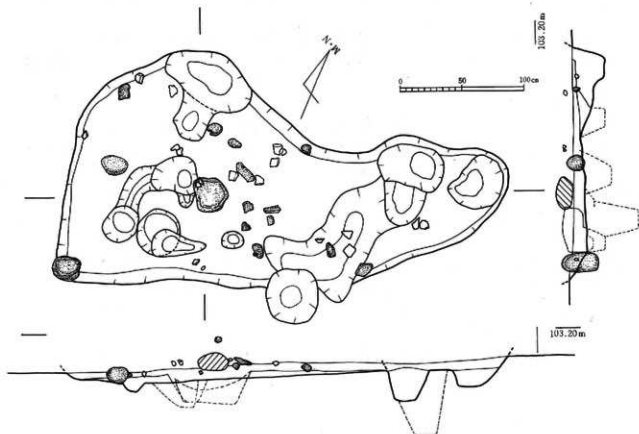
一時期の土器片が、この土壌を中心にして径4mの円形に分布する。堅穴住居跡であった可能性が

堅穴住居跡

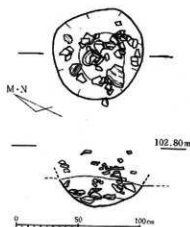
ある。かりにそうだとすれば、この小土壌は堅穴住居跡にともなう施設であろう。



第128図 手嶋遺跡C地区9号土壌 (1/30)



第129図 手嶋遺跡E地区106号土壌 (1/30)

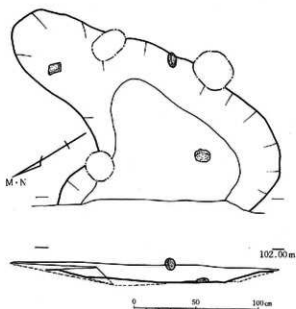


第130回 手崎遺跡E地区
118号土壌 (1/30)

C地区21号土壌 (第131回)

4号堅穴建物を調査したのち、その下の包含層中(4a層)で検出した不整形の土壌である。円礫と土器の小片が出土

したのみなので時期の特定はできないが、層位からみて縄文時代の遺構と推定される。(田中)



第131回 手崎遺跡C地区21号土壌 (1/30)

土壌出土土器 (第132回)

手崎遺跡では縄文時代の土壌を4基検出している。しかし21号土壌からは小破片しか出土しておらず、時期決定が困難である。そこで、ここでは、9・106・118号土壌出土の土器を報告する。

9号土壌 (第132回1-3)

9号土壌からはリボン状突起が口縁部に付く浅鉢形土器と、外面に格子状の細い沈線を描く深鉢形土器が出土している。このような形態や文様の土器は、縄文晩期のもので、深鉢形土器の形態や浅鉢のリボン状の突起から中葉と考える。

晩期中葉

106号土壌 (第132回4-5)

106号土壌から出土した土器は深鉢形土器のみである。文様は5の口縁部内面に細い沈線が1条、6の肩部に3条の沈線がめぐる。このような文様は東九州では縄文後期の三万田式土器に見られる。手崎遺跡のある筑後川上流域でも、玖珠町西田遺跡や九重町二日市洞穴で類似する土器が出土している。

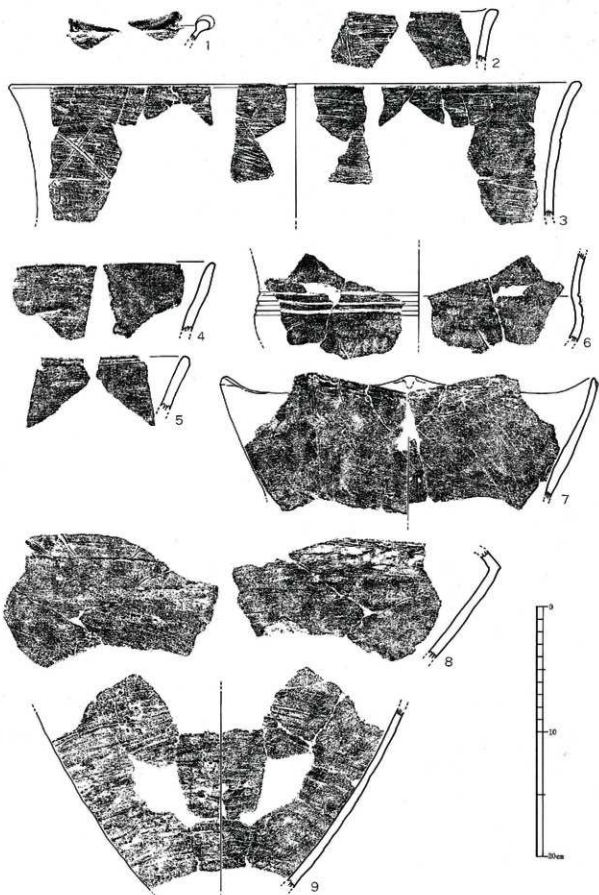
三万田式

118号土壌 (第132回7-9)

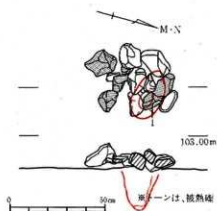
118号土壌から出土した土器は、1が鉢形土器の可能性があり、8・9は深鉢形土器である。8の胴部の原曲状況から縄文晩期の可能性が強い。しかし7は波状口縁になっており、波頂部の調整方法から縄文後期後半の土器とも考えられる。遺構は縄文晩期で、埋まって行く段階で混入したものと思われる。

晩期?

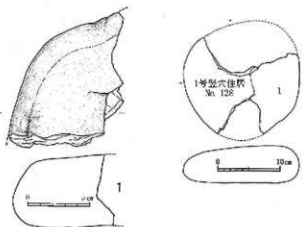
(坂本)



第132図 手繪遺跡縄文時代土壙出土土器(1-3は9号土壙、4-6は106号土壙、7-9は118号土壙)(1/3)



第133図 手崎遺跡C地区1号集石 (1/20)



第134図 1号集石出土の台石片とその接合資料 (1/3)

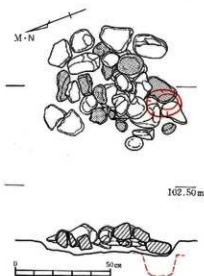
集石遺構

いずれもC地区包含層の4a層上向で検出した小規模な集石遺構である。

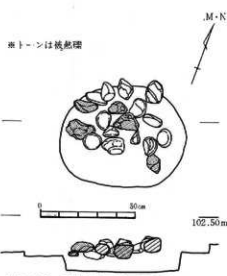
C地区1号集石(第133・134図、図版36上・56中)。円礫と角礫をあつめた集石で、多くの石が被熱している。石器(第134図1)は台石(石皿?)の破片である。1号壱穴住居出土の128の破片と接合するもので、知石に転用されたとみられる。C地区2号集石(第135図、図版36中)は最も大きな集石で、かなりの石が被熱している。C地区3号集石(第136図、図版36中)とC地区4号集石(第137図、図版36下)は1号同種小規模なもので、4号は被熱していない。石器を伴わなかったので時期の特定はできないが、1号集石の接合した台石と層位からみて、縄文時代後期以前の遺構であると推定される。

後期以前

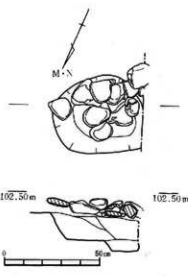
(田中)



第135図 手崎遺跡C地区2号集石 (1/20)



第136図 手崎遺跡C地区3号集石 (1/20)



第137図 手崎遺跡C地区4号集石 (1/20)

2、縄文時代の包含層（第138～141図、図版37～40）

概説

B地区を中心に南北に伸びる礫層の西側から、湧水谷にかけての南北100～150m、幅30～50mにわたり縄文時代の包含層がひろがっている。包含層は南から北に次第に低くなり、礫層側から湧水谷に向かってやや傾いて堆積している。

上層包含層 3～4a層

包含層は大きく上下に分かれ上層は第3層・第4a層を中心とする包含層である。この上層包含層はC・D・E・F地区のすべての調査区で確認された。厚さは30～50cmで北にいくほど薄くなる傾向がある。この上層は縄文時代後晩期の遺物を中心に分布する第3層と、縄文早期押型文期の稲荷山式以後の早前期の遺物が中心に分布する第4a層に分けることができるが、層の厚さが薄くまた境界も不明瞭で遺物を層序で明確に分離することはできなかった。この上層の下部すなわち第4a層は単なる遺物包含層ではなく、遺物とともに大量の円礫が包含され、B地区やC地区の一部ではまさに礫層を形成している。すでにA地区の記述のなかでのべたように、第4a層堆積時に円礫すなわち河原石が大量に堆積するような大山川の氾濫をこうむっていると推定される。

下層包含層 5層

C・D地区では上部包含層より下の第4b層上部で遺物が検出できなくなったので、その下の第5層までは調査を行っていない。E地区では部分的に第5層の調査を行なった結果、縄文時代早期帯状施文の山形押型文土器と、多量の無文土器を伴う包含層を第5層上面で検出した。その調査は部分的なものにとどまったが、F地区ではE地区の第5層に対応する3・4・5層まで掘り下げたところ遺物は出土せず、C・D地区の第4b層の上部では、調査したかぎり遺物はほとんどなかった。第5層上部の下層包含層は、E地区を中心として限定され、分布範囲を異にするかと推定される。

4b層の 評価

ところで縄文早期押型文期の稲荷山式以後の早前期の遺物が中心に分布する第4a層と第5層の間には厚さ50cmほどの第4b層が堆積している。この層は、下部に包含層がある場合にはE地区のように下位からの浮き上がりで推定される少量の遺物を包含するが、基本的には無遺物層であった。そしてこの層は均質の濃灰褐色砂質土からなり、第3・4a層に多量に混入していた円礫は少量しか含まなかった。この事実は第1に第5層包含層が形成されてから、押型文土器稲荷山式土器の包含層が第4a層として形成をはじめまでの縄文時代早期のある時期に、大量の砂が堆積するような大山川の氾濫があったことを意味する。そして第2に手崎遺跡が氾濫にあうということは、当時の河床が現在と比べてはるかに高く、まだ河岸段丘の形成が進行していなかったことを意味する。第3に氾濫時の流出物が第4b層では砂層、第4a層では河原石すなわち円礫に変化したということは、手崎遺跡の立地するこの場所が大山川氾濫原の下流部から上流部へと変化したことをしめしており、この変化は大山川の河川浸食と段丘形成の進行が背景にあり、上流域で進行していた河川浸食が次第に手崎遺跡に近い下流域に移ってきたことを意味している。

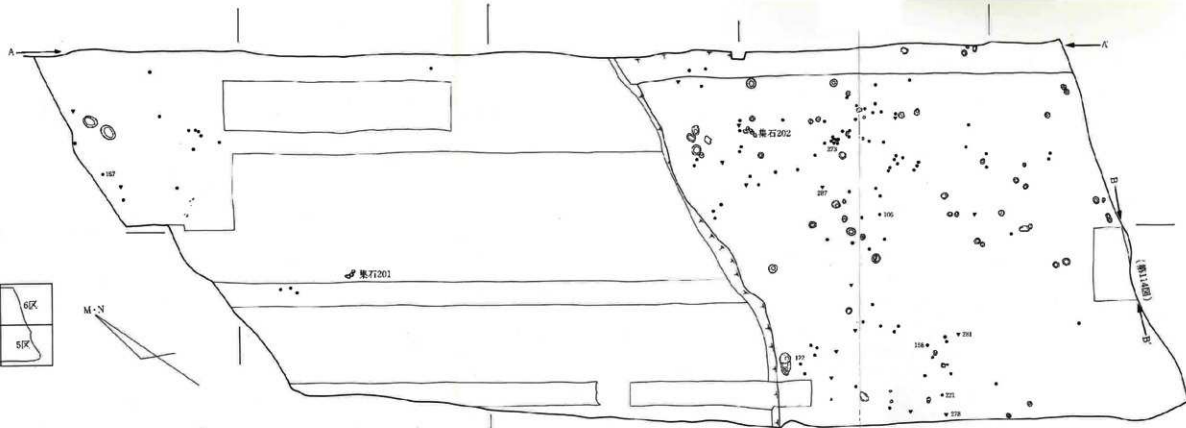
大山川の 氾濫

またF地区谷調査区で指摘したように、湧水谷の浸食の開始は縄文前期からで、早期にはさかのぼらないとすれば、湧水谷の形成の開始そのものが、大山川の浸食と河岸段丘形成に伴う地形環境の変化によるものと考えられる。そして湧水谷が形成されるのは縄文時代早期の大山川の浸食による河床低下と段丘形成を原因とするものであったと推定される。

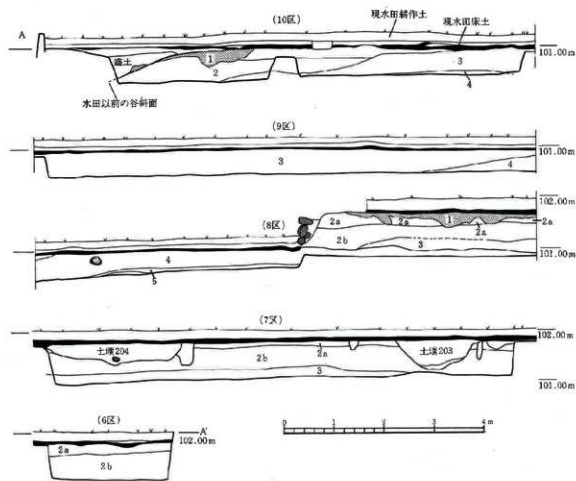
湧水谷と 段丘の形成

以上まとめると次のような手崎遺跡周辺の地形環境の変化を推定できる。まず縄文早期前半の第5層包含層形成時には、まだ大山川の河床は現在の段丘面と大きな差がなく、大山川の上流域で進行しつつある浸食過程で流失した砂が氾濫にともなって堆積するような、いわば手崎遺跡を含めた現在の段丘面までが、広い意味の氾濫原であったと推測される。早期後半には大山川下流域の浸食が進み、それによる流出物も円礫が主体となる。この時点までは湧水は現在の位置であったかもしれないが、その湧水の浸食による小さな谷地形の形成はまだなかったと考えられる。そして縄文時代前期には湧水谷が形成されはじめた。つまり大山川の浸食で段丘地形が形成され、その地形にあわせて湧水谷の形成方向が決定されたと考えられる。以上のように縄文時代早期の地形変化の結果と

- 土器
- 106: 縄文・前期
 - 122: #
 - 157・158: 縄文・後期前半
 - 221: 縄文・後期後半
- 石器
- 273: スクレイパー
 - 278: #
 - 281: 割片石器
 - 287: #



2a層における縄文遺物の分布



- 1層: 赤褐色土層(かたい)→水田化以前の田畑表土
 2層: 明褐色土層(白色の山崩れアロップ多、よくしまる)
 2a層: 黄褐色砂質土→縄文前期以後の灰土層 } C-D・E地区の3a~4a層に対応
 2b層: 黄褐色砂質土→上部は、縄文前期のすずい包含層
 3層: 褐色砂状土層(ときどき円礫混入)→無遺物層
 4層: 灰褐色砂層(部分的に硬層になる)→ } E地区の5層に対応
 5層: ザクザクの灰褐色砂層



写真35 F地区10区東壁セクション



写真36 201号集石



写真37 202号集石



写真38 D地区3層出土状態



写真39 4層、磨製石沖出土状態

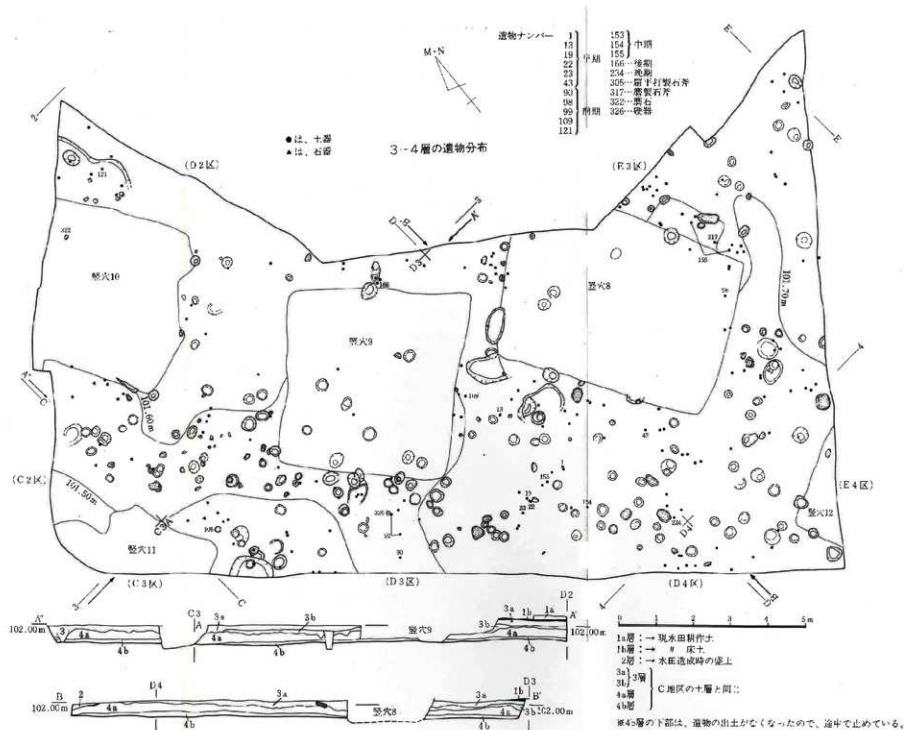
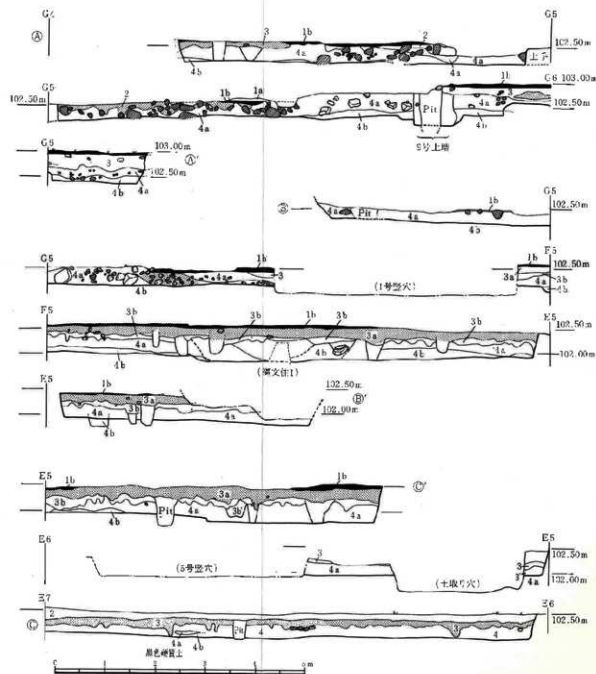
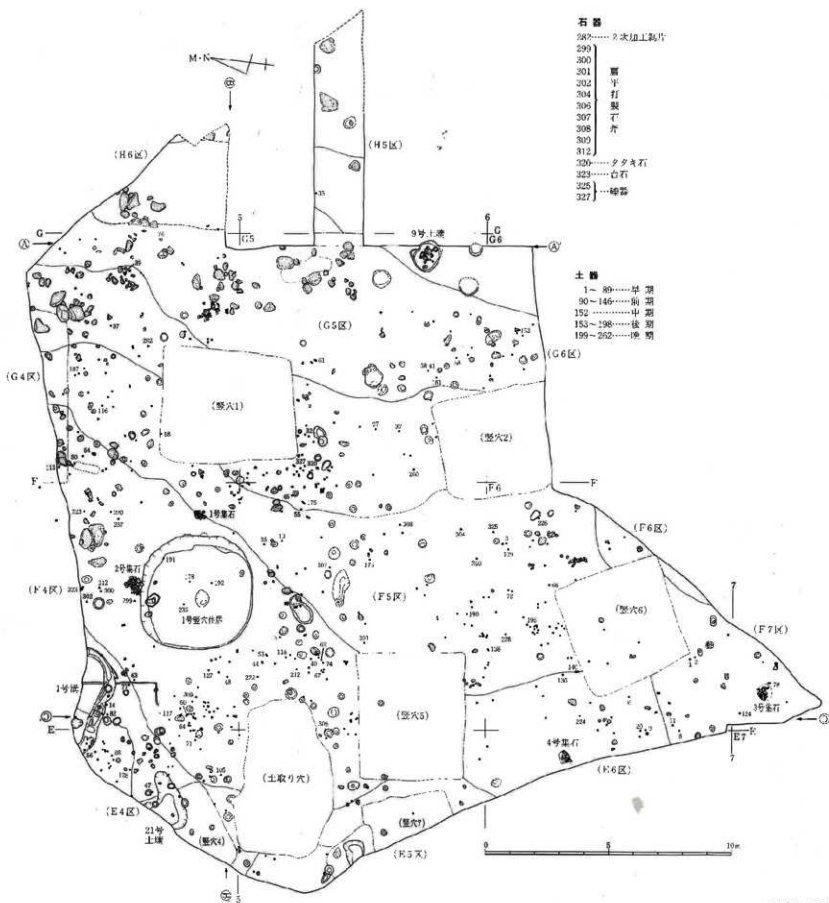
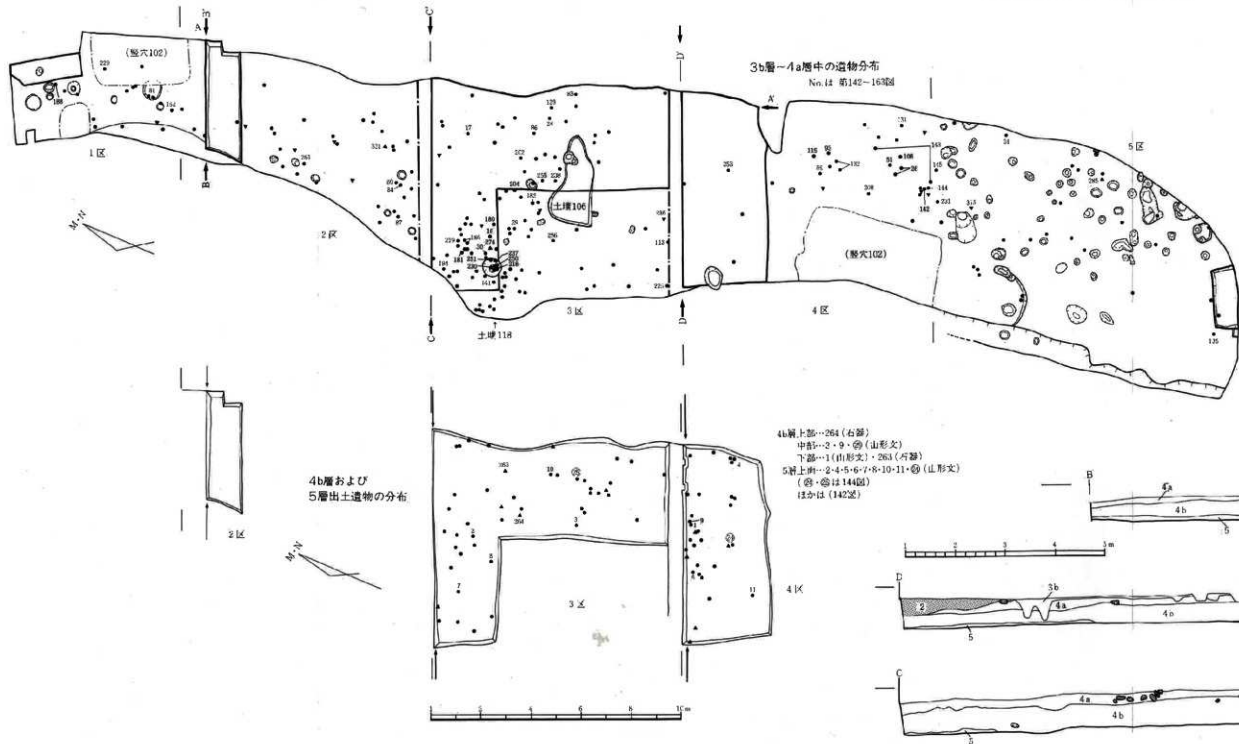
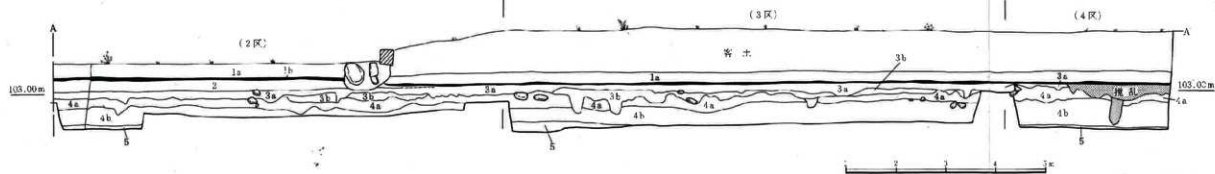


図139 手続遺跡D地区、縄文時代包含層の遺物分布 (1/100)



第140図 手崎遺跡C地区縄文時代包含層の遺物分布 (1/150)

写真40 C地区、4層、出土状態



- 1a層：縄文口部等土
 1b層：縄文土層上
 2層：暗褐色土→水田凡石部の深部土層上にある。水田遺跡の暗褐色土
 3a層：暗褐色土(2層より暗く暗色帯状をなす)
 3b層：暗褐色土(3a層より暗く暗色帯状をなす)→下方で、後述年代別の遺物分布
 4a層：黄褐色砂質土(4-5区では多量の円礫を含む) 3a層
 4b層：淡灰褐色砂質土(2とんど砂のみからなり礫は少ない) 3a層
 →礫の上層を押しむき、5層の礫の上より採れる。
 5層：暗褐色土(硬くしり、小礫を含む)。この層から遺物を採る。縄文層の包含層

※以上の1-5層は、C・D地区の1-5層とは対応する。

遺物ナンバー	161	162
	17	193
	24	181
	26	182
	28	186
	29	188
	30	194
早期	51	202
	80	204
	81	208
	82	215
	84	213
	87	229
	88	225
	89	239
	93	330
	98	231
	108	237
	113	338
	115	250
	129	251
	131	253
	132	253
	135	330
	141	251
	142	274
	143	285
	144	285
	145	285
後期		
	274	スケルトン
	285	土器片
	286	割片
	312	磨製石斧
	321	基石

- 4b層上部→264(台跡)
 中部→2・9・9(山形文)
 下部→1(山形文)・263(円跡)
 5層上部→2・4・5・6・7・8・10・11(山形文)
 (筒・壺は144個)
 (3カ所(1425))

4b層および
5層出土遺物の分布

して現景観の基本ができあがるのは、縄文時代前期であったと推定される。

したがって縄文時代の包含層を形成した人々の生活環境は縄文早期と前～晩期とでは大きく異なることが明らかとなった。

(田中)

包含層出土土器 (第142～154図、図版52～55)

筑後川の支流である大山川の河岸段丘上に立地する手崎遺跡では、古墳時代以降の遺構検出面である明茶褐色の砂層が遺物包含層や遺構確認面になっている。また、調査区の一部には礫層が露出しており、遺物を出土しない部分も認められた。さらに、調査区の北側は谷部になっており、自然遺物も検出された。

そこで包含層出土の縄文土器については、調査区順序に従いA・B・C・D・E・Fの6調査区に分けた。この内B調査区は表土直下に礫層が露出しており、遺物はほとんど出土しなかった。このため、大山川沿いのA地区は他の調査区とは離れ、独立した状況になった。そこで、このA地区は他の地区とは別に報告した。

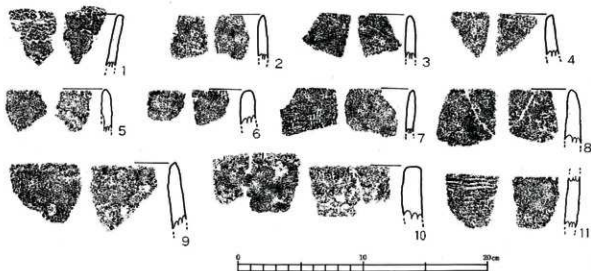
次に、C・D・E・F地区はそれぞれ隣接する調査区で、F地区は遺物包含層が削平されているため遺物の出土が少なかったが、他の3地区の遺物包含状況は同じであった。その包含層は、約20cm堆積した第3～4a層の明茶褐色砂質土層で、上位から縄文後晩期、下位から縄文早前期の資料が出土する傾向は把握できるものの、明確な分層はできなかった。そこで、これらの資料は、これまでの九州の縄文土器研究に従い分類して報告する。

ところがE地区の調査の際、この4a層の下に約40cm堆積した砂層(4b層)があり、その下位に硬くしまったローム状土層があることがわかった。そして遺物が、このローム状土層上面から上位の砂層中で出土した。そこで、明らかに時期の異なるこの土器群を第5層の遺物としてとらえた。

(坂本)

包含層と調査区

第5層



第142図 手崎遺跡E地区最下層(5層)出土土器 (1/3)

E地区第5層 (第142図)

- 第5層** E地区第5層からは、数量は少ないものの、安定した状態で、土器が出土した。その様相は、器面を横ナテした無文土器が主体となり、1の1点のみ山形押型文土器が出土した。この土器は、山形のネガティブ部分が6段で、約1cmの無文部分を残してさらに下位に横回転の押型文を施文している帯状施文押型文土器である。このような施文方法の押型文土器は、西日本では最古の時期に属し、これまでの編年案では、川原田式土器や稲荷山式土器に伴っている。最近では、宇佐市中原遺跡で、丸底の無文土器や押型文土器出現以前の条痕文に伴って帯状施文押型文土器が出土している。こうした帯状施文押型文土器を出土する遺跡では多量の無文土器が出土する。そうした状況から見ても、手崎遺跡のE地区第5層の土器群は縄文早期の押型文土器出現期の様相と言える。(坂本)

C・D・E・F地区遺物包含層 (第143～154図)

- C・D・E・F地区の上部遺物包含層からは縄文時代各時期の土器が出土している。先にも述べたが、上位(第3層)から縄文後晩期の土器が出土し、下位(第4a層)から縄文早前期の土器が出土する傾向は把握できた。ここでは縄文早期から報告する。

- 早期** 縄文早期の土器は押型文土器と無文土器がある。押型文土器には、楕円文と山形文がある。第143図は楕円文の資料であるが、これまでの東九州での押型文土器の編年研究から見ると、数型式が含まれる。第143図1は楕円も小径で、器壁が薄く、口縁部が外反せず、内面にも楕円文が施文されている。こうした要素は、稲荷山式土器の特徴と同じである。また、2は外反する口縁部の外向に横や斜めの楕円文が重複して施文され、内面は原体条痕がありその下位にも楕円文が施文されている。こうした土器は下甞生B式土器と呼ばれている。さらに3は、大きく外反する口縁部の外面に縦方向の楕円文が施文され、内面には原体条痕が見られる。こうした特徴は、田村式土器に近い。

- 山形文** 第144図の山形文も、24は外反しない口縁部の外面の上端を無文帯にし、その下位に横方向の山形文を施文し、内面は原体条痕と横方向の押型文を施文する。これは早水台式土器の要素と同じである。また26の文様要素は24と同じであるが、口縁部が外反することから下甞生B式土器といえる。25は外面の山形文が、縦方向であり、内面は原体条痕のみである。口縁部の形態はやや異なるが、文様は田村式土器に近い。

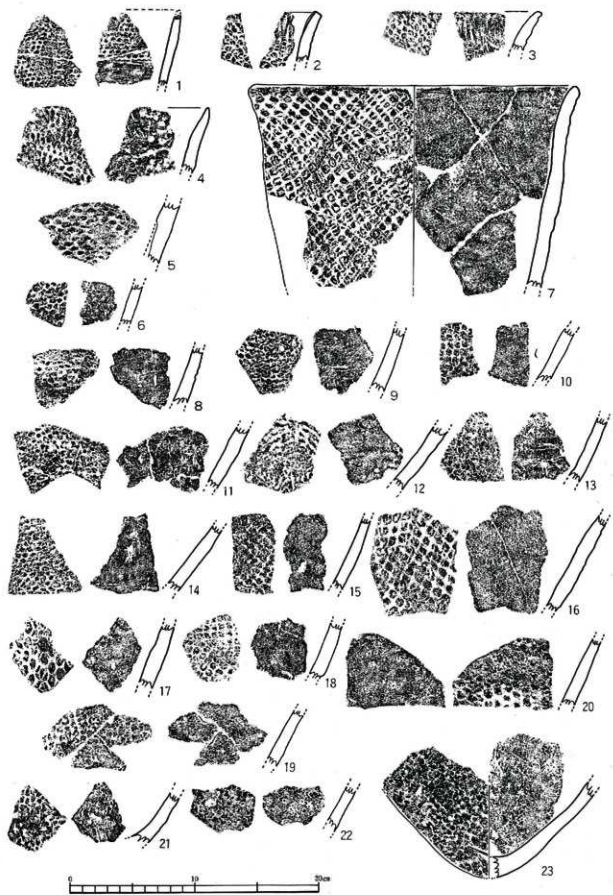
- 無文土器** このように押型文土器は稲荷山式土器-早水台式土器-下甞生B式土器-田村式土器と編年されている各型式が見られる。そうした中、第144図31～46、第145・146図に図示した口縁部が内傾する無文土器は、東九州の編年では稲荷山式土器と早水台式土器に伴い多量に出土し、下甞生B式土器以降は出土量が減少する。こうした傾向から考えると、無文土器の時期は、第143図1や第144図24に伴う可能性が強い。また、第147図76の無文土器は、下甞生B式土器以降のものとする。

- 手向山式** 第147図77～81は同じ土器の器面に、押型文と隆帯文や沈線文が組み合わさって文様を構成する手向山式土器である。これらの土器は、九州では押型文土器最終期の土器型式として認識されており、縄文後期後に編年されている。

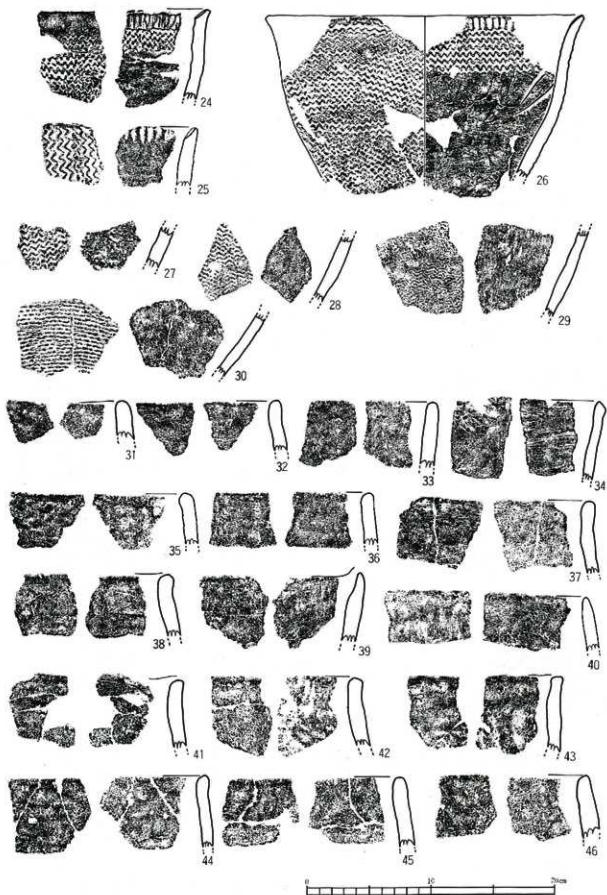
- 平格式** 82～85・87は胴部の資料であるが、器面には沈線文や列点文が施文されている。前述の手向山式土器の胴部の可能性もあるが、文様構成から、平格式土器と考える。また86・88・89は、86に見られる胴部の細い沈線や、89の器形や沈線文と列点文などが大分県萩町京西遺跡の土器と類似することから壺ノ神式土器と考える。

- 前期** 第148図は、器面を条痕で成形した後、直口する口縁部や胴部に致状の細い粘土紐をめぐらせ文様を構成する。こうした文様や器形は、縄文時代前期前半の轟B式土器の特徴と言える。

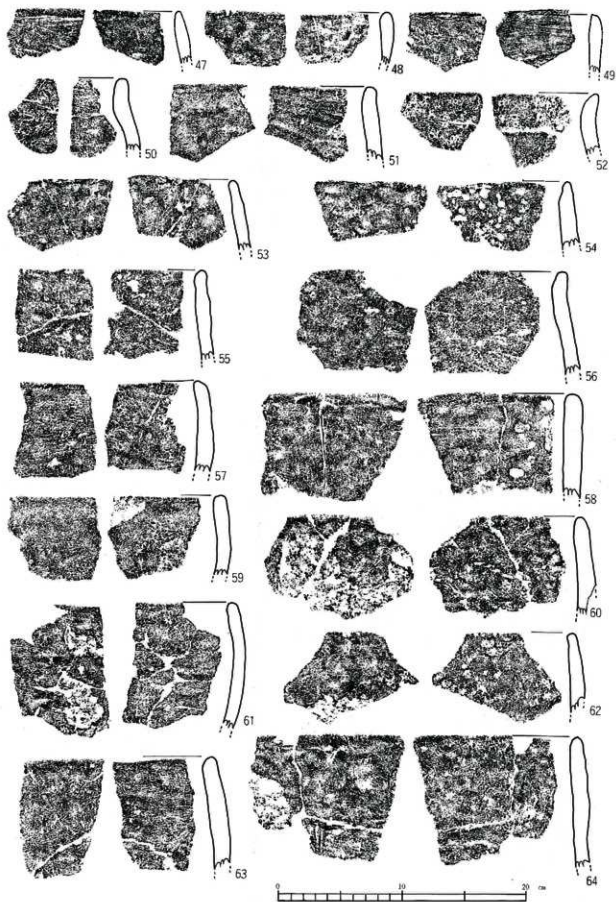
- 轟B式** 第149図116～118は文様構成や金色の雲母を含む胎土、焼成状況から同一個体の可能性が高い。細い条痕状の沈線を縦方向に施文し、1条の細い粘土紐をめぐらせている。前期の土器と考える。第149図119～126は器面に短い沈線で幾何学的な文様を描く土器である。こうした文様は縄文時



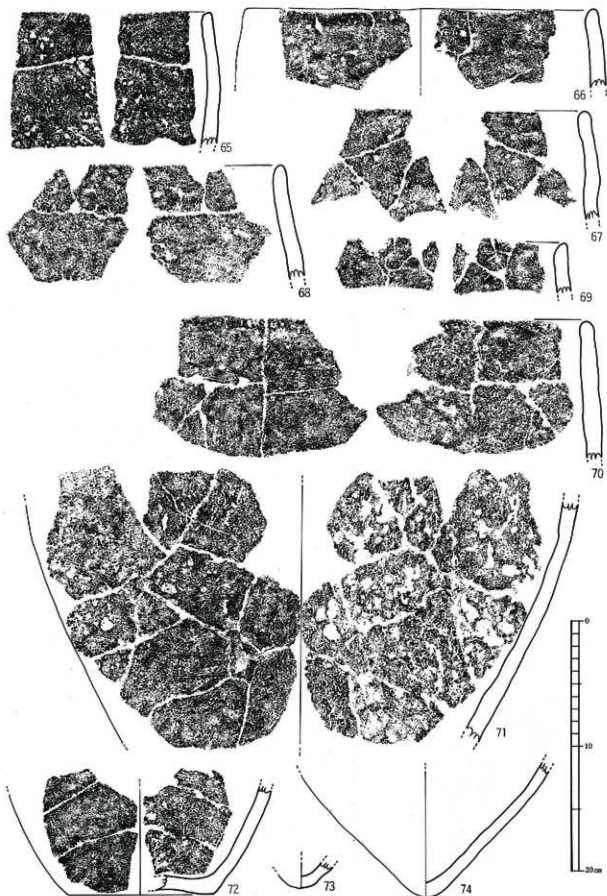
第143图 手織遺跡 C·D·E·F地区出土土器(1) (1/3)



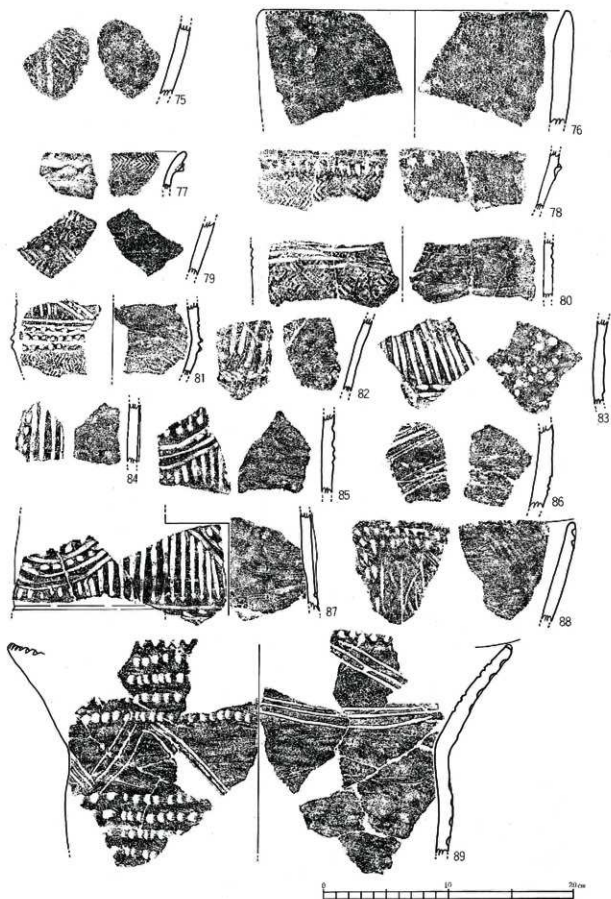
第144图 手捺遺跡 C·D·E·F地区出土土器(2) (1/3)



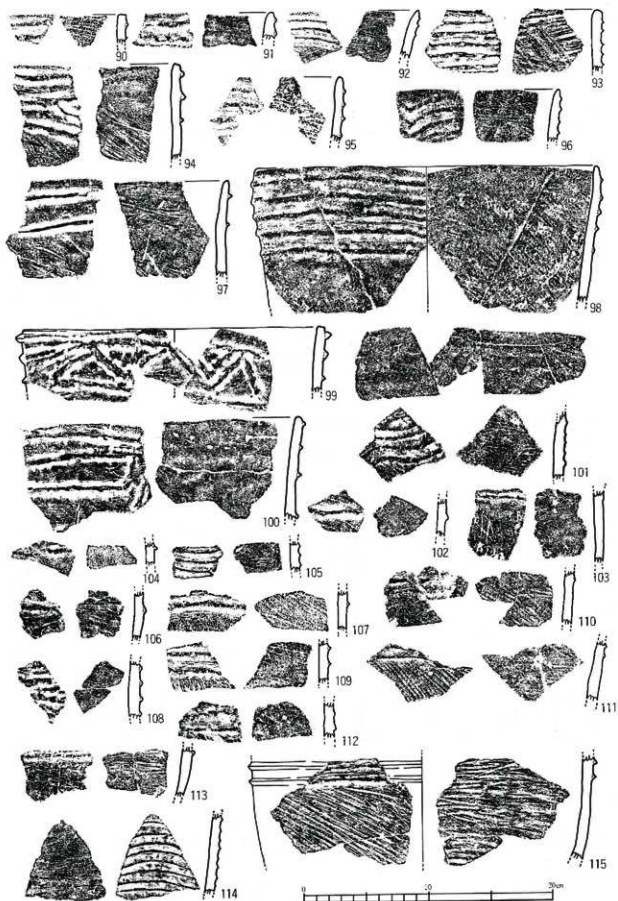
第145图 手筒遺跡 C・D・E・F地区出土土器(3) (1/3)



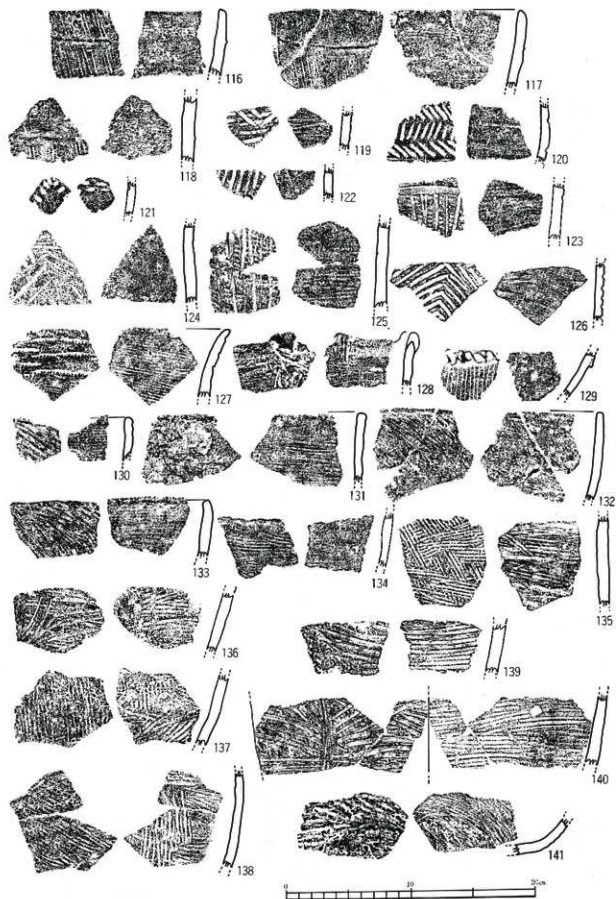
第146图 手嶋遺跡 C・D・E・F地区出土土器(4) (1/3)



第147图 手编遗跡 C·D·E·F地区出土土器(5) (1/3)

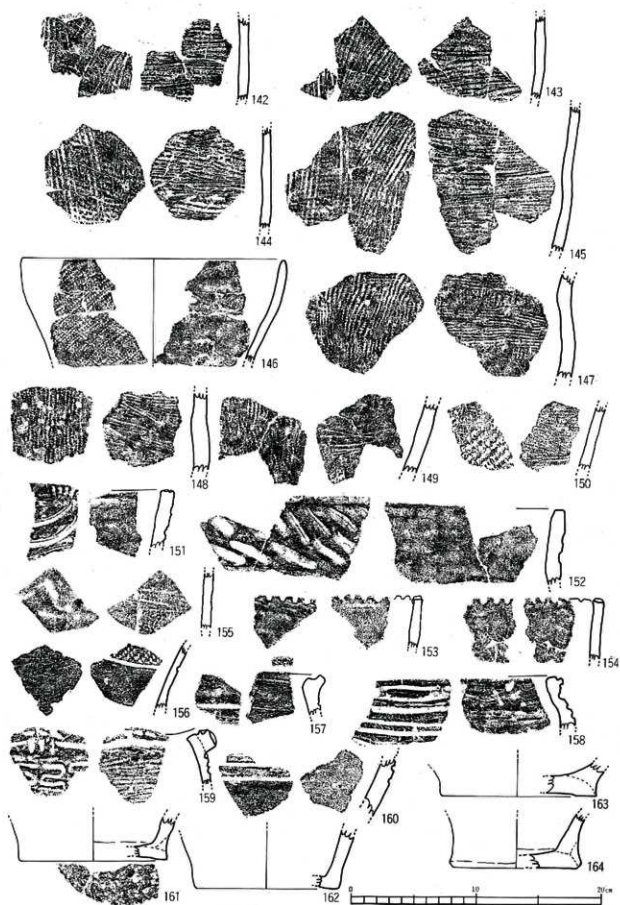


第148图 手筒埴钵 C·D·E·F地区出土土器(6) (1/3)

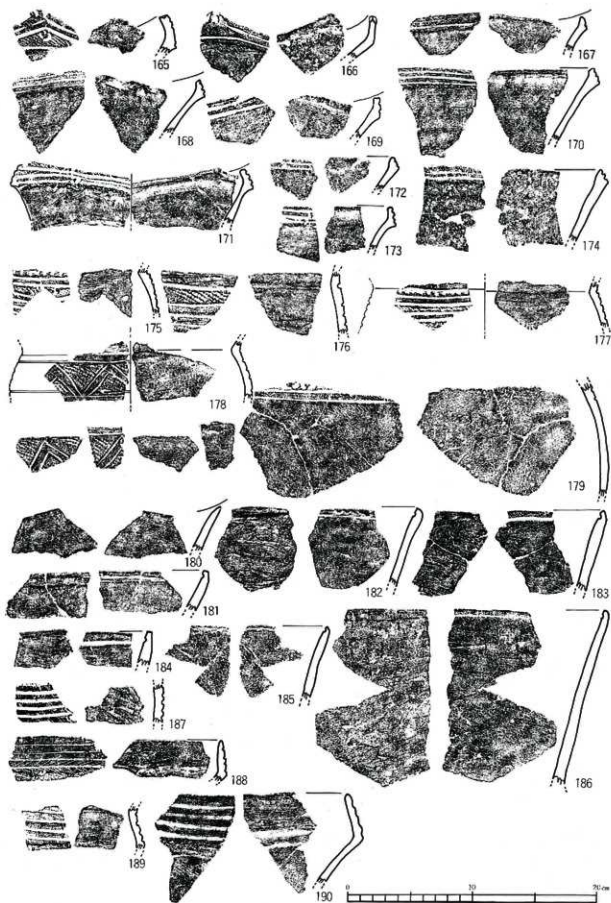


第149图 手筒遺跡 C·D·E·F地区出土土器(7) (1/3)

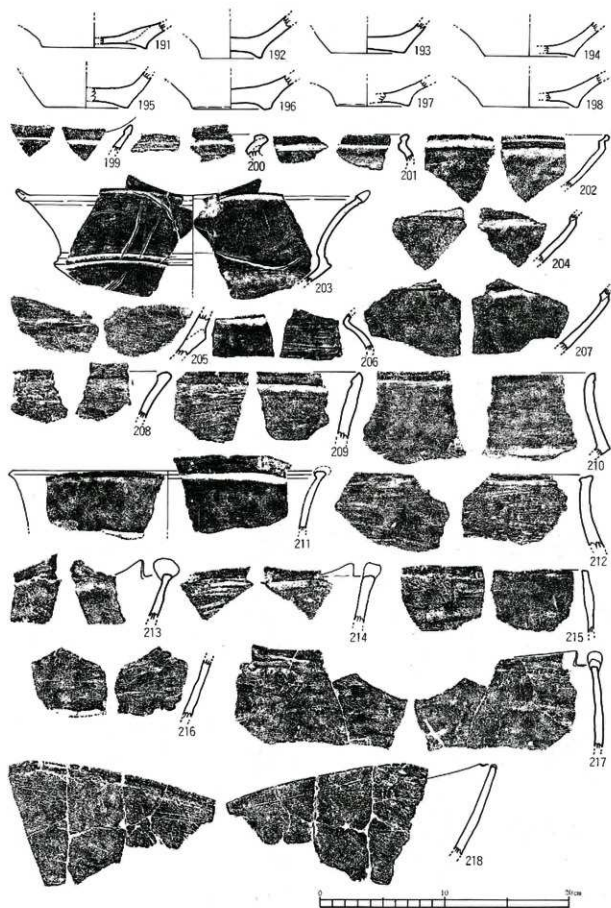
曾畑式	<p>代前期の曾畑式土器の特徴であり、この土器型式の胎上には、しばしば滑石が混入している。手締遺跡でも119・120・122・126の上器に滑石が含まれる。</p> <p>127は外反する土器の外面上に、放射肋のある貝殻による刺突文が見られる。また、内面には条痕もあり、縄文時代前期の土器と考える。</p> <p>128は口縁部に粘土溜を付ける緩い波状口縁である。波頂部の内外面に雑な沈線文が施文されている。時期は明確にしないが、縄文時代前期か後期前半の可能性が強い。</p> <p>129は刻目のある隆帯文の下に、燃余文がある。燃余文は九州では縄文早期にのみ施文される文様で、他の文様との組合せから、縄文早期後葉の燃余文系の牽ノ神式土器の可能性が強い。</p> <p>第149図130～141と第150図142～145は直口する口縁部の内外面に条痕で成形した土器である。第149図141はその底部であり、こうした器形や器面調整の方法から縄文時代前期の、轟B式土器に伴う条痕土器と考える。</p>
中期 船元系	<p>第150図146～150は、内面に条痕が残るが、外面は全面縄文を施文している。このような文様施文をする土器は、九州には無く、瀬戸内地方の縄文時代中期の船元式土器系の影響と理解されている。</p> <p>151～155のうち、151・152・155の外面上には、太い沈線と連続的な短沈線が施文されている。こうした文様は、九州の縄文時代中期の阿高式土器やその系統の土器と共通している。また口唇部に刻目のある153・154の土器は、阿高式土器やその系統の土器に併存する土器で、縄文時代後期初頭まで見られる。</p>
阿高式 後期	
中津式	<p>156の店消縄文のある土器は、精製土器で、器面も薄く、沈線も細いことから、縄文時代後期初頭の中津式土器と考える。</p>
鐘崎式	<p>157～160のうち、157～159の口縁部は、外端部を肥厚させ、外面には沈線文や磨消縄文が施文されている。これらは縄文時代後期前葉の鐘崎式土器で、160はその胴部の破片である。</p> <p>161～164は、以上151～160の土器の底部と考える。</p>
西平式	<p>第151図165～179は、先に報告した縄文時代後期の1号竪穴住居跡出土の土器と、器種や器形・文様、器面調整の方法などが同じで、縄文時代後期中葉の西平式土器である。</p>
三万田式	<p>第151図180～190のうち、181～186は、口縁部内面に沈線が一糸めぐること特徴としている。このような土器は古式の三万田式土器の特徴である。また、187～189は口縁部や胴部に平行沈線がめぐり、188には羽状文も施文されている。大分県大野町駒方C遺跡では、こうした土器が多量の181～186のような特徴を持つ土器と一緒に出土しており、同時期と考えることができる。</p> <p>190は「く」の字状に屈曲する口縁部の外面に凹線が4糸めぐり、このような土器も三万田式土器と考えているが、180～189により後出する、宮内克己が編年した三万田式土器である。</p> <p>第152図191～198の底部は、底面が凸レンズ状の上げ底になり、先の第150図161～164の底部とは形態が明らかに異なる。この第152図の8点の底部の形態は、縄文時代後期の西平式土器以降、縄文時代晩期初頭までの特徴である。</p>
底部	
晩期	<p>199～207のうち、205以外は器面をヘラ磨きし、黒褐色に焼成した精製の浅鉢形土器である。器形は口縁部が小さく屈曲する202・204・207と扁球状にふくらむ200・201・206がある。後者は縄文時代晩期後葉の黒川式土器の浅鉢形土器の特徴である。なお、203は胴部に凹線が2条走り、黒川式土器より、古式の土器と考える。</p>
黒川式	<p>208～218は深鉢形土器または鉢形土器である。口縁部のリボン状突起が目立つ。これらも黒川式土器並行期のものと考えられる。</p> <p>第153図220～237は条痕文をナデやヘラ磨きで器面調整した無文土器である。所属する時期は明確にはできないが、手締遺跡の1号竪穴住居からも類似する土器が出土している。また、縄文時代後期の無文土器とは器面調整や器壁の厚さが異なる。このことから、これらの土器は、西平式土器</p>



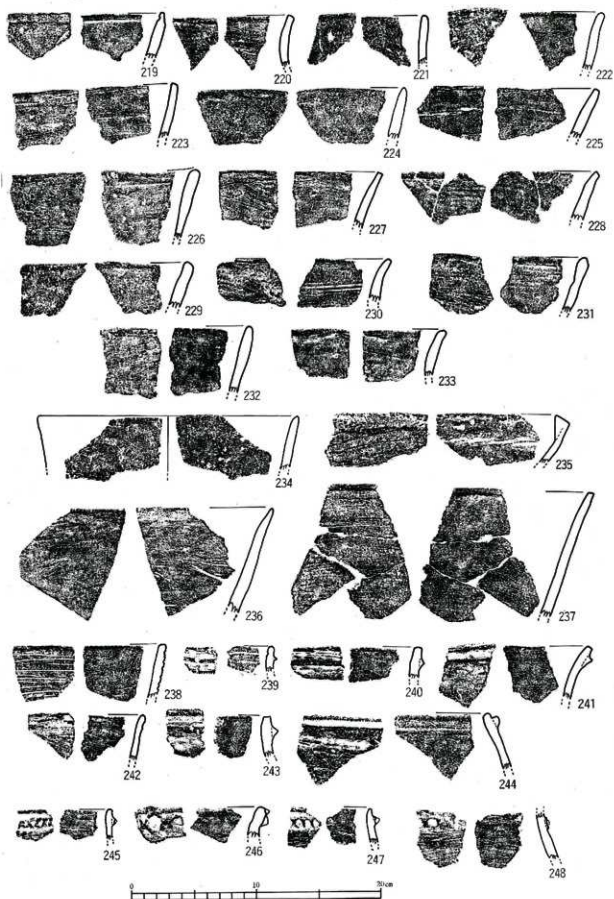
第150图 手织遗跡 C·D·E·F地区出土土器(8) (1/3)



第151图 手制陶器 C·D·E·F地区出土器(9) (1/3)



第152图 手輪遺跡 C・D・E・F地区出土土器(1/3)



第153图 手筒造跡 C·D·E·F地区出土土器(Ⅱ) (1/3)

以降から縄文晩期前半にかけての時期と考える。

238は外傾する口縁部外面に数条の細い沈線がめぐる。この多条化する沈線は縄文時代晩期初頭以降に顕著になる。こうしたことから、この土器は縄文時代晩期中葉と考える。

239～244は口縁部外面に刻目の無い断面三角形の突帯が1条めぐる深鉢である。こうした土器は大分県竹田市上笠生B遺跡などで出土しており、次に編年される刻目突帯文土器の直前の形態と考えられている。また、239の内面に沈線が1条めぐる。

無刻目突帯文

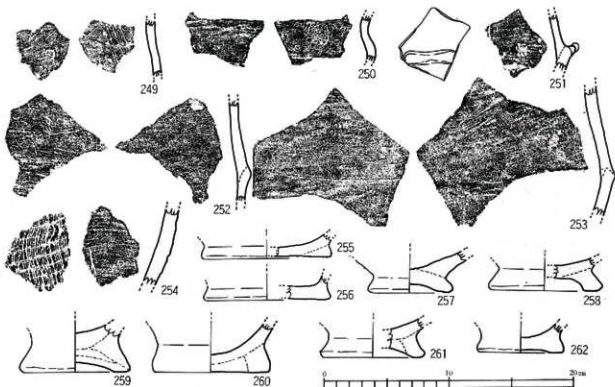
245～248は口縁部外面に刻目突帯が1条めぐる深鉢形土器である。この土器は、縄文時代晩期末に位置付けられている。

刻目突帯文

第154図249～254は第153図236から第154図248にかけての深鉢形土器の別部の資料である。特に251のリボン状の貼りつけや、254の組織状痕は黒川式土器の時期によく見られるものである。また、255～262の土器底部は先に述べた、第150図161～164・第152図191～198の2群の底部とは明らかに形態が異なり、接地部が「ハ」の字状に外側に張り出し、一部は円盤貼付状になる。こうした形態は縄文時代晩期中葉以降の特徴と言える。

胴部

(坂本)



第154図 手崎遺跡C・D・E・F地区出土土器03 (1/3)

包含層出土の石器

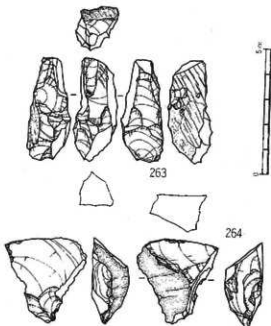
C・D・E・F区出土の縄文石器包含層から主として出土した石器群である。出土状況は土器の項で既述しているように、上位から縄文後晩期、下位から縄文早前期が出土する傾向にあるが明確な分層ができなかった。ただし、E区的最下層(第5層)から帯状施文押型文土器と、無文土器を包含する層が確認されており、ここから数点の石器が出土している。(清水)

最下層の石器

第5層の石器(第155図)

第5層ローム状土層からの出土品である。

263は、腰岳産黒曜石製の小石核である。一見細石核に類似するが、連続した楕状剥離はみられない。縦長の小型剥片の母材とみられる。打面は平坦、背部に大きく自然面をのこす。264は、陸化木の分厚い幅広剥片を素材とする台形様石器である。両側の刃遺し状の剥離は、主要剥離面側と背面側からの片面加工である。後期旧石器の所産かどうかは一点のみの出土であり、断言できない。(清水)



第155図 手嶋遺跡E地区下層出土石器(2/3)

上層包含層

C・D・E・F包含層の石器

石核ほか

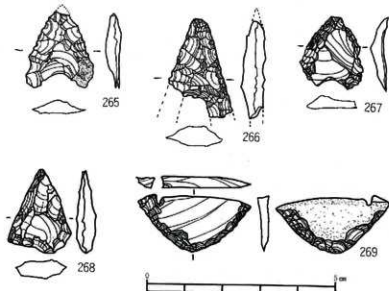
265-268は打製石器である。265は陸化木、266・267は漆黒色の黒曜石、268はサヌカイト製である。形態的にみて、265、266は縄文早前期の可能性が高い。269は薄い幅広剥片の縁辺を細かく両面加工したスクレイパーの一部である。素材は漆黒色黒曜石。

剥片石器(その2)(第157図)

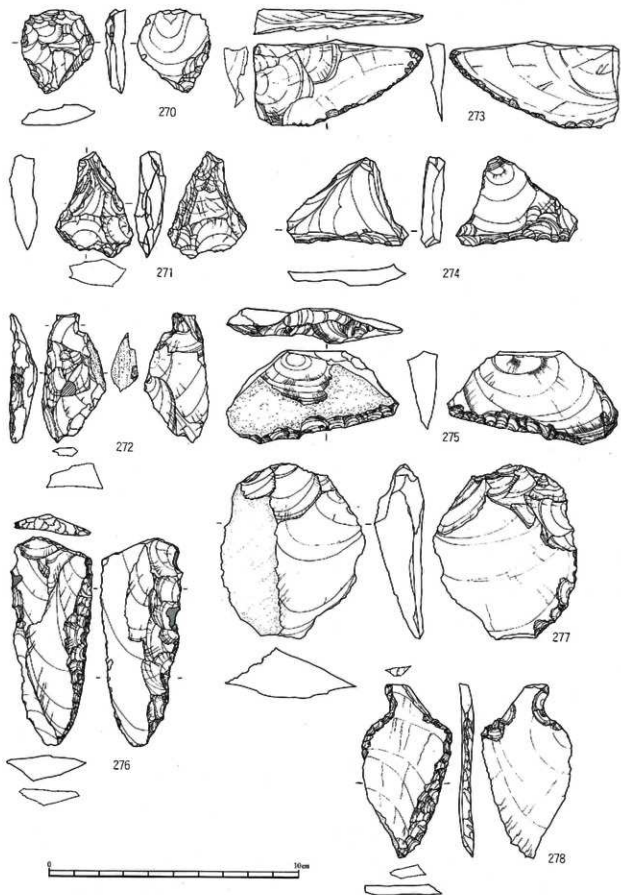
275を除いてサヌカイトを素材とする

スクレイパー

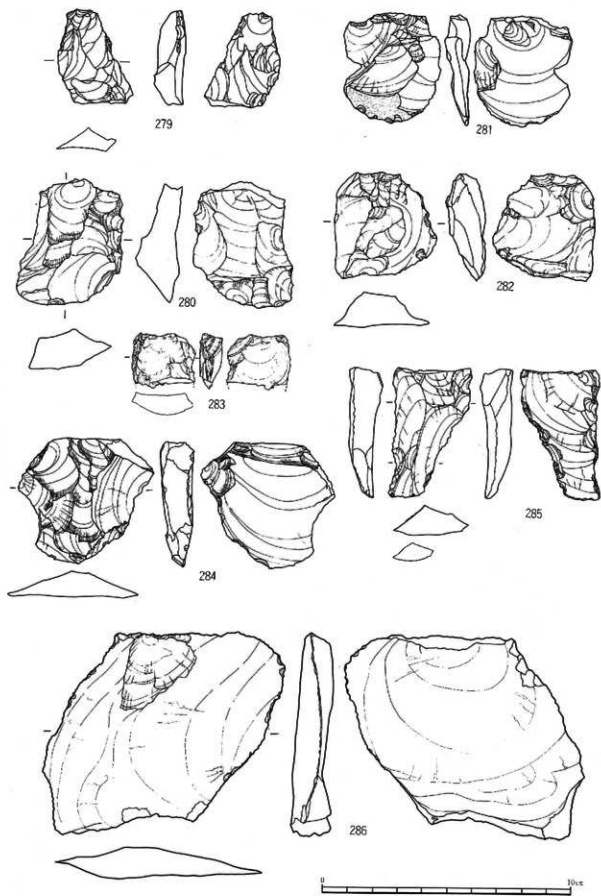
スクレイパー類である。270、271、273、274、275は両面加工、272、276、278は片面加工である。278は石匙状に加てされており、ノッチ部は両面からの加工である。275は姫島産ガラス質安山岩である。270、272、274、277はいずれも風化面が古く、275とともに縄文早前期の所産とみられる。277は縁辺部とは別にとくに打面部



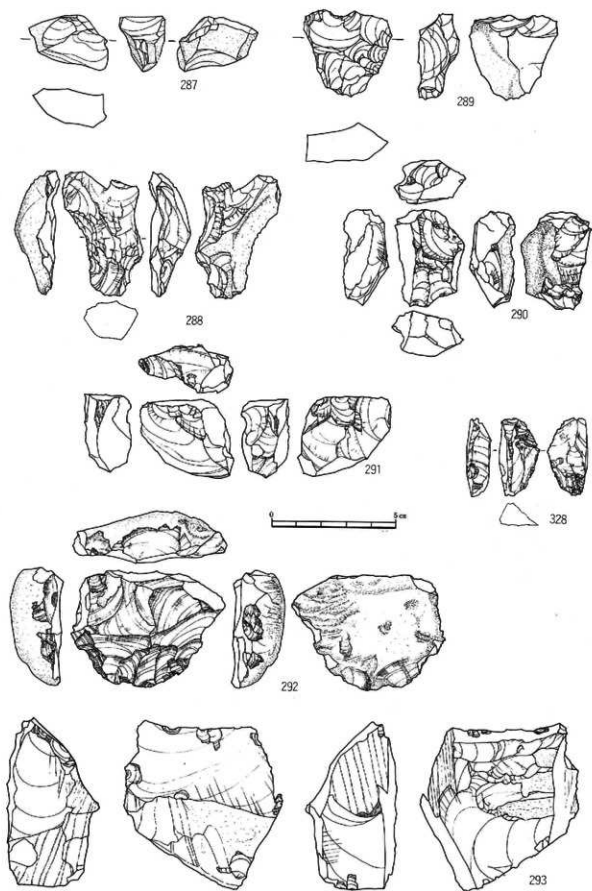
第156図 手嶋遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器(1)-剥片石器1-(1/1)



第157图 手嶋遺跡C·D·E·F地区包含層出土石器(2)-剥片石器2-(2/3)



第158图 手端遗址C·D·E·F地区包含层出土石器(3)-剥片石器3-(2/3)



第159图 手崎遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器(4)-石核-(2/3)

に大きな剥離を加えて全体の形状を整えている。276は錯交刺離状の削器であり両者の加工に粗密がみられる。

剥片石器 (その3) (第158図)

スクレイパー
ほか

スクレイパー類 (279、280、283、285) および使用痕のある剥片 (281、282、284、286) である。284、286はサヌカイト、他は珪化木、玉髄等の類である。283は片割は刃潰し状、他はノッチ状の加工である。285は両側面のほぼ片面に加工を施したものである。

石核 (第159図)

石核

剥片石器の母材となる石核類である。石材は大きく黒曜石系 (287、292、293、294) と珪化木系 (288、289、290、291) に分けられる。287は西北九州 (佐世保市周辺) 産の灰色黒曜石の小石核。打面は自然面である。288は背部に自然面をのこす残核。289も打面を2面もつもので、スクレイパーとして使用された可能性もある。290は両端に打面をもつ小石核。291は単一打面の小石核。292、293は伊万果市腰岳産の黒曜石とみられるもので、292は円礫状、293は角礫状の原石である。292の剥離は円盤状、293はそれほど剥離作業が進行していない。他に介在物を多く含む大山産とみられる長径6 cm程の多面体の石核がある。328はいわゆるピーエスエスキューユといわれる形態に近いものである。

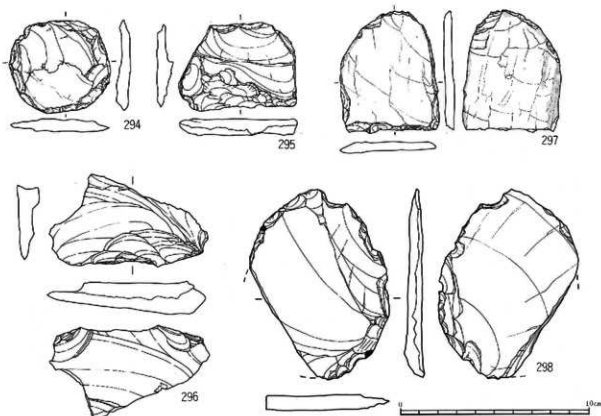
扁平石器 (第160図)

一種のスクレイパー類である。294は円形に両面加工したもの。295は台形に二辺を加工したもの。296は薄い一辺に両面加工を施したものである。298も薄い縁部の三方に加工を施し、刃部としている。297は扁平打製石斧の破片ともみられるが、破断面を再加工した形跡があり、295に近い形態である。294、295、297は結晶片岩製、296、298は火山岩系の素材である。縄文後晩期の取換具の可能性がある。

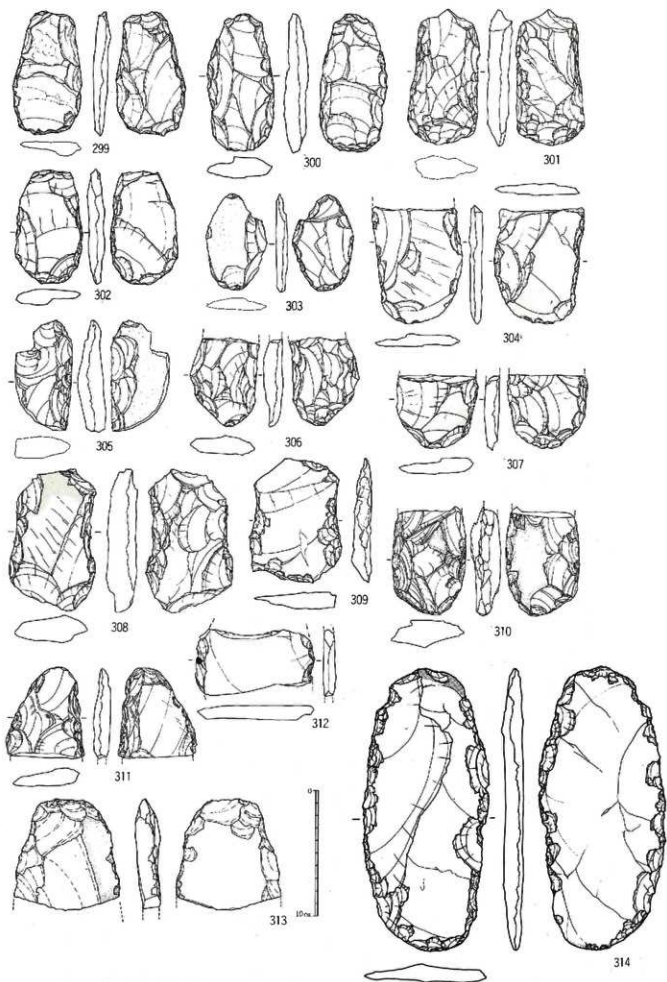
扁平打製石斧 (第161図)

扁平打製石斧

縄文後晩期の所産とみられる打製石斧類である。いずれも板状に剥離し易い安山岩、結晶片岩を



第160図 手嶋遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器(5) - 扁平石器 - (1/2)



第161图 手制遗跡C·D·E·F地区包含層出土石器(6)一扁平打製石斧一(1/3)

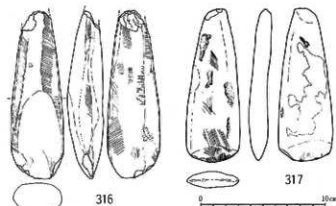
大型と小型 用いており、刃部等に使用による磨耗痕をもつものも多い。大きさは小型と大型の2種に大別できる。小型のものは長さが10cm程のもので、大半を占める。大型のものはその2倍の長さをもつものが1点(314)ある。299、302、303、304は結晶片岩製、他は安山岩(凝灰岩質)である。314は長さ22cmの大型品であるが横長の大型薄片の周縁を細かく調整し、長円形に仕上げている。先端部に少し磨耗痕がある。小型のものと同様に土耕具として使用されたものであろう。



磨製石斧 (第162図)

斧

315は小型、扁平な片刃状の磨製石斧、手斧とみられる。316は細身であるが厚い、やや片刃状、317は細身かつ扁平な形態である。ともに蛇紋岩製。318は安山岩(凝灰岩質)製の未製品。尚側面と主要剥離面側に研磨痕がみられる。あるいは打製石斧に用いた際に破損した可能性もある。317は縄文前期、316は後晩期の可能性がある。



第162図 手続遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器(7)-磨製石斧-(1/3)

礫器 (その1)

(第163図)

石鐘

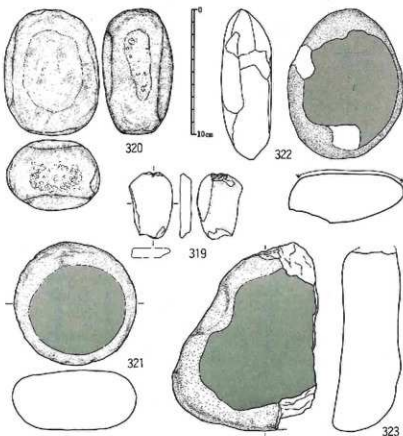
319は、結晶片岩の小型扁平礫の長輪両端に加工を加えた石鐘。他は安山岩の内礫をそのまま利用した磨石、たたき石類である。

磨石

320は、とくに長端部の打痕による磨滅が著しい。321、322は磨石であるが磨耗は少ない。323は石里もしくは小型の台石。他にも台石に使用されたと思われる大型の扁平礫がいくつか出土している。

台石

320は、とくに長端部の打痕による磨滅が著しい。321、322は磨石であるが磨耗は少ない。323は石里もしくは小型の台石。他にも台石に使用されたと思われる大型の扁平礫がいくつか出土している。



第163図 手続遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器(8)-礫器1-(1/4)

礫器（その2）（第164図）

自然礫に打撃を加えた礫器類である。324は、おそらく剥片剥離を目的とした石核かとみられるが、材質の脈理等によって所期の目的は達せられなかったようである。玉髄質のやや扁平な転石を使用している。325は扁平な礫の一端の両面を加工したチョッピングツール。326は交互計3回の剥離しかもたないもの。327は一鋸辺にていねいな両面加工を行ったチョッピングツールである。325、327については、縄文早期の可能性がある。

まとめ

第5層上部のローム状七層に伴う石器については、旧石器的な形態と風化面を有するもので、縄文早前期と同層を扶むところからも縄文早期前半の時期とみられる。

上部の包含層の石器についても明確に層序は分けられないものの石鏃、スクレイパー類についても縄文早前期と後晩期のものにある程度分別することができる。さらに、扁平打製石斧については、前述の西平期の縄文住居跡内出土のものと比較して、全体的に小ぶりで加工も入念であること。石材も凝灰質安山岩、結晶片岩を使用しており、晩期に伴うものとみられる。チョッピングツール状の礫器については、縄文早前期のものとみて差つかえないであろう。

剥片石器の素材については、伊万早腰岳産の黒曜石、サスカイト等は西北九州方面からの搬入品であるが、硅化木類は玖珠川の河床にみられるようであり、地元産と思われる。結晶片岩については、福岡県八女地方から選ばれたものと思われる。

（清水）



第164図 手続遺跡C・D・E・F地区包含層出土石器(9)―礫器2― (1/3)

奈良時代の集落	<p>第6節、まとめにかえて</p> <p>大部遺跡を含め手崎遺跡を中心としたまとめは第6章にゆずり、ここでは奈良時代前半期の集落の特徴をまとめておきたい。</p>
遺構	<p>奈良時代の遺構は掘立柱建物2棟・竪穴建物13ないし14棟・土塼8基である。ほかに多数の柱穴が存在するが、中世の柱穴と分離できなかったのが確実な数は判明しないが、何棟かの掘立柱建物が存在したと推定される。掘立柱建物では1号掘立柱建物は2×3間の住居、2号掘立柱建物は2×3間以上の総柱の倉庫であると推定される。竪穴建物は床面積20㎡強の中型竪穴と10㎡強の小型竪穴にわかれる。いずれも方形住居跡で、すべて一辺にカマドをつくりつけている。竪穴建物廃絶時にはカマドを破壊する祭祀行為が行なわれている。支柱穴は無柱穴・2本柱・4本柱である。中型の5号竪穴が二本柱で、小型の201・202号竪穴が4本柱であるというように、柱の本数は床面積の大小には対応しない。</p>
建物配置遺跡	<p>建物配置の特徴として、高床倉庫と推定される2号掘立柱建物の周辺には竪穴建物がなく、15m程の距離を費した周間に竪穴建物群が造られている点がある。倉庫を造る一面と竪穴建物群を造る場所が区別されていたと推定される。さらに竪穴建物は同一の場所で建て替えられたと推定される。F地区の201・202号竪穴建物の関係はその事実を典型的に示している。すなわち4本柱方形カマドの床面積13㎡の201号竪穴建物が、わずかにその位置を東にずらして同一構造・同一規模の202号竪穴建物に再現されている。カマドの構造とカマド祭祀の在り方も一致しており、同一小集団(例えば家族)が引き続き居住したものと推定される。彼らが同じ場所に竪穴建物を造ったことは、手崎遺跡の奈良時代集落の内部に、境界は不明瞭ながら一定の「宅地」が成立し、その敷地の中で建物が造られたことを意味しよう。このような竪穴建物と「宅地」の関係は、C地区2号・6号竪穴建物、C地区5号・7号竪穴建物、D地区9号・10号竪穴建物の間でも認められる。2号・6号竪穴建物はいずれも柱穴を床面に残さない構造の竪穴建物で、カマドは袖の側石には河原石をもちいるが天井石には安山岩の大型角礫をもちいる点で共通する。さらに竪穴建物廃絶時にはカマドの一部を壊すのみで土器の供献は明確ではない。5号・7号竪穴建物は2本柱穴構造で、カマドは側石は左右1個ずつと天井石をともに角礫を使用し、河原石を使用しない。廃絶時の壊し方も共通し、カマドをそのままこわし石材は放置している。近接しているので同時併存は考えられず、建て替えの関係にあったと推定される。9号・10号竪穴建物は2本柱穴構造とともに廃絶時にカマドをきれいに除去する行為が行われており、この2つの竪穴建物に関係する遺構には製埴土器が多量に投棄されている。9号→10号の前後関係が想定される。以上の少なくとも4単位の竪穴建物群はそれぞれ同一の「宅地」内で建て替えられたものと推定される。</p>
「宅地」	<p>ではその建物群の存続時期はどうであろうか。概報では以上の集落の時期を8世紀中葉～終末の時期とした(註1)が、土師器の精製杯の製作技法が手持ちヘラケズリであること。須恵器杯の形態として蓋の天井が高く、杯の高台の位置が内側であること、11号竪穴建物の須恵器鉢(第65図2)・D地区13号土塼の須恵器壺(第57図1)の型式からみて、8世紀第2四半世紀を中心としていると推定される。その意味で8世紀前半代という表現をおこなった。かつその前後の型式を小量認められることから、8世紀第2四半世紀を中心とした長くても前後40～50年程度の集落存続時期を想定したい(註2)。すなわち8世紀初めをのぞく前半代から8世紀中葉のある時期までである。集落の存続時間がこのように短期間であったとすれば、先の「宅地」内の建物の建て替えが1度あるいは2度程度である事実と合致しよう。</p>
集落の存続時期	<p>以上のように手崎遺跡の奈良時代集落は倉庫と「宅地」群からなり、8世紀のある短期間、突然成立し、また忽然と消滅したと推定される。各「宅地」内の竪穴建物はそれぞれ相互に構造・カマドの作り方と壊し方が異なっており、あたかも竪穴建物に関する民俗を異にする「家族」すなわち母集団を異にする小集団が、倉を中心に寄り集まってひとつの集落を形成していたかのようなのである。</p>
8世紀第2四半世紀	<p>註1、田中裕介「日田バイパス調査概報3」1991 大分県教育委員会 註2、田崎博之「千湯遺跡出土土器の編年」「千湯遺跡」(2) 1980 福岡県教育委員会 山村信榮「八世紀初頭の諸問題」『大宰府陶磁器研究―森田勉氏追悼論文集―』1995 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 (用中)</p>

第2表-1 手結遺跡出土縄文土器観察表

遺物番号	出土位置	時期分類	文様の特徴と器作遺棄の方法				胎 七				備 考
			外 観	色 調	内 観	色 調	角四角	長 尺	右 真	その他	
(P2)	1 A-N52-4層	早期	横刃文が重複	茶褐色	ナデ+器体条痕	茶褐色	○	○			
	2 A-N52-4層	早期	横刃文は口縁が横、下位は斜行	茶褐色	横刃文+器体条痕	茶褐色	○	○			内側にスチ付
	3 A-N52-4層	早期	横刃文→ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	4 A-N52-4層	早期	横刃文→ナデ	茶褐色	ナデ+器体条痕	茶褐色	○	○			
	5 A-N52-4層	早期	縦方向の粗大山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			No5と同一個体
	6 A-N52-4層	早期	縦方向の粗大山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			No5と同一個体
	7 A-N52-4層	早期	縦方向の粗大山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	8 A-N52-4層	早期	縦方向の粗大山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	9 A-N52-4層	早期	横刃文→ナデ	茶褐色	上端に横刃文+ナデ	茶褐色	○	○			
	10 A-N52-4層	早期	横刃文、肩縁は縦、斜目方向	茶褐色	横刃文+器体条痕	茶褐色	○	○			
	11 A-N52-4層	早期	横刃文	茶褐色	山形文+横ナデ	茶褐色	○	○			
	12 C-6層穴	早期	横刃文	明褐色	ナデ	茶褐色	○	○			
	13 A-1号土版	早期	異方向の横刃文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	14 A-N52-4層	早期	横大横刃文	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	15 A-N52-4層	早期	横大横刃文	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○			
	16 A-N52-4層	早期	縦方向の横刃文	茶褐色	ナデ+器体条痕	茶褐色	○	○			
	17 C-6層穴	早期	横刃文+横ナデ	明褐色	横ナデ+器体条痕	明褐色	○	○			
	18 A-N52-4層	早期	横、斜目方向の横刃文	白灰色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	19 A-N52-4層	早期	横大横刃文	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	20 A-N52-3層	早期	横刃文	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○			○
	21 A-N52-3層	早期	横刃文が重複	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	22 A-N52-4層	早期	横刃文	明褐色	茶褐色+横ナデ	茶褐色	○	○			
(P24)	23 A-N52-4層	早期	縦方向の粗大山形文	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	24 A-N52-4層	早期	横糸文	黒褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	25 A-N52-3層	晩期	横方向のヘラ研磨	黒褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	26 A-N52-3層	晩期	横ヘラ研磨	黒褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	27 A-N52-3層	晩期	横ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	28 A-N52-3層	晩期	横ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	29 A-N52-3層	晩期	斜目方向の条痕、黒色産	茶褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○			
	30 A-N52-4層	晩期	条痕	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	31 A-N52-4層	晩期	ナデ	明褐色	ナデ	茶褐色	○	○			
	109層 (P8)	1 P-谷津窪区	前期	陰文文+横ナデ	多褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
2 P-谷津窪区		前期	陰文文+横ナデ	淡褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			2ト+128層
3 P-谷津窪区		前期	陰文文+横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			2ト+128層
4 P-谷津窪区		前期	陰文文+横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			2ト+128層
5 P-谷津窪区		前期	陰文文+横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			2ト+128層
6 P-谷津窪区		前期	陰文文+横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			2ト+128層
7 P-谷津窪区		前期	ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			2ト+128層
8 P-谷津窪区		前期	条痕	茶褐色	茶褐色	茶褐色	○	○			2ト+128層
114層 (P8)	1 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	白灰色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	2 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	3 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	4 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			○
	5 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			増減
	6 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	7 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	8 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	9 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	10 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	11 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
117層 (P8)	12 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	13 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨、ナデ	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	14 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	黒褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	15 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	16 縄文住1	後期	縄文→沈線→ナデ、ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	17 縄文住1	後期	沈線→ナデ	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	18 縄文住1	後期	沈線→ナデ	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	19 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨、ナデ	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	20 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	21 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	黒褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			スチ付否
	22 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨?	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
117層 (P8)	23 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	24 縄文住1	後期	沈線→ヘラ研磨、下に連続線文	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	25 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	26 縄文住1	後期	縄文→沈線	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	27 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
	28 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			金雲母
	29 縄文住1	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			白色粒

第2表—2 手跡遺跡出土属文土器觀察表

遺物番号	出土位置	時期分類	文様の特徴と彫削施彩の方法				胎土				備考
			文	面	色調	内	色調	角閃石	長石	石英	
11854 (P91)	30 縄文住I	後期	沈線→ヘラ研磨		白色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		厚紙
	31 縄文住I	後期	縄文→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	32 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	33 縄文住I	後期	沈線→ヘラ研磨	口縁部に沈線	白色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
	34 縄文住I	後期	沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
	35 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	36 縄文住I	後期	沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	37 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨・ナデ		茶褐色	緑ナデ	茶褐色	○	○		厚紙
	38 縄文住I	後期	沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
	39 縄文住I	後期	沈線→横ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
	40 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
11926 (P90)	41 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	42 縄文住I	後期	口縁部に斜行の沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	43 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	44 縄文住I	後期	沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		厚紙
	45 縄文住I	後期	口縁部に縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		No66234 一断片
	46 縄文住I	後期	口縁部に縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		No512 同一断片
	47 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	48 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		浅緑赤土器
	49 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
	50 縄文住I	後期	口縁部と腹面に縄文→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		No512 同一断片
	51 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	緑→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		No50214 一断片
12058 (P91)	52 縄文住I	後期	縄文→ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	53 縄文住I	後期	縄文→沈線→ナデ→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		スズ付着
	54 縄文住I	後期	沈線→ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		厚紙
	55 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	56 縄文住I	後期	縄文→沈線→ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	57 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	58 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		No67214 一断片・スズ付着
	59 縄文住I	後期	縄文→沈線→ナデ→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	60 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ→横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	61 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	62 縄文住I	後期	斜削文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
12118 (P92)	63 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	64 縄文住I	後期	縄文→沈線		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		厚紙
	65 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	66 縄文住I	後期	縄文→沈線→ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	67 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		No582 同一断片・スズ付着
	68 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	69 縄文住I	後期	沈線→ナデ		茶褐色	横ナデ→横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	70 縄文住I	後期	縄文→沈線→ナデ		茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		スズ付着
	71 縄文住I	後期	縄文→沈線→横ヘラ研磨		茶褐色	横ヘラ研磨→ナデ	茶褐色	○	○		金箔片
	72 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	73 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨・ナデ		茶褐色	横ヘラ研磨→ナデ	茶褐色	○	○		No74-75-762 同一断片
74 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨・ナデ		茶褐色	横ヘラ研磨→ナデ	茶褐色	○	○		No73-75-762 同一断片	
75 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨・ナデ		茶褐色	横ヘラ研磨→ナデ	茶褐色	○	○		No73-74-762 同一断片	
76 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨・ナデ		茶褐色	横ヘラ研磨→ナデ	茶褐色	○	○		No73-74-752 同一断片	
77 縄文住I	後期	縄文→口縁部に沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
78 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ→横ヘラ研磨	茶褐色	○	○			
79 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		No802 同一断片	
80 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
81 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		外底スズ内面塗コテ	
82 縄文住I	後期	縄文→沈線→ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		赤色粒	
12254 (P93)	83 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	沈線→横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		粗製土器
	84 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	85 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	86 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	87 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	88 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	89 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	90 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	91 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	92 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	93 縄文住I	後期	口縁部は横、下位は縦方向のナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
94 縄文住I	後期	縦帯状→横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
95 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
96 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
97 縄文住I	後期	横ナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
98 縄文住I	後期	横ナデ→横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
99 縄文住I	後期	横ヘラ研磨		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
100 縄文住I	後期	横ナデ→口縁部近くは横いナデ		茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			

第2表-3 手崎遺跡出土縄文土器観察表

遺物番号	出土位置	時期 分類	文様の特徴と器面調査の方法		色調	内 磨	色 類	筋			備 考
			外	内				内凹	長	石 瓦	
123番 (P94)	101 縄文土器1	後期	1)縁は縦方向のナデ	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○		○	
	102 縄文土器1	後期	1)縁部に横筋状ナデ	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		スス付着
	103 縄文土器1	後期	横筋ナデ	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	104 縄文土器1	後期	横筋ナデ	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	105 縄文土器1	後期	底面に横ナデ、他山境へウ結筋	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	106 縄文土器1	後期	底面に横ナデ、上縁は横へウ結筋	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	107 縄文土器1	後期	横へウ結筋	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		スス付着
	108 縄文土器1	後期	横ナデ	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	109 縄文土器1	後期	縁部に横ナデ、腹部は横へウ結筋	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		スス付着
	110 縄文土器1	後期	横ナデ	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	132番 (P100)	1 9号土器	晩期	横へウ結筋・リボ状突起	刷毛色	緑ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○	
2 9号土器		晩期	表裏→ナデ→沈底	赤褐色	横ナデ・横へウ結筋	刷毛色	刷毛色	○	○		No2と同一個体
3 9号土器		晩期	表裏→ナデ→沈底	赤褐色	表裏→へウ結筋	刷毛色	刷毛色	○	○		No2と同一個体
4 106号土器		後期	表裏→ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
5 106号土器		後期	内念へウ結筋	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
6 106号土器		後期	沈底→横へウ結筋	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
7 118号土器		後期	横へウ結筋	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		スス付着
8 118号土器		晩期	訂正リボ状突起の筋→横へウ結筋	赤褐色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
9 118号土器		晩期	表裏→ナデ	刷毛色	表裏→へウ結筋	刷毛色	刷毛色	○	○		スス付着
142番 (P11)	1 E-4K-4樹下層	早期	5区5の山形文を帝族編文	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	2 E-3L-5樹上層	早期	ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	3 E-3L-4樹中層	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	4 E-4K-5樹上層	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	5 E-3K-5樹下層	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	6 E-4K-5樹上層	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		厚手
	7 E-3K-5樹上層	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	8 E-3K-5樹上層	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	9 E-4E-4樹中層	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		厚手
	10 E-3E-5樹上層	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	11 E-4E-5樹上層	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		厚手
143番 (P113)	1 D-D3E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	ナデ→横凹文	赤褐色	赤褐色	○	○		
	2 C-F6E-4樹	早期	横凹文が非脱	赤褐色	横凹文→整体赤褐色	赤褐色	赤褐色	○	○		
	3 C-F6E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	横凹文→整体赤褐色	赤褐色	赤褐色	○	○		
	4 C-F5E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		1)縁が小さい
	5 C-F6E-4樹	早期	横凹文→ナデ	赤褐色	(剥落)	赤褐色	赤褐色	○	○		
	6 C-F6E-4樹	早期	横凹文→ナデ	刷毛色	ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	7 E-3E-3樹	早期	横凹凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	8 C-F6E-4樹	早期	横凹文→帝族編文?	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	9 C-F6E-4樹	早期	横凹文	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	10 C-F5E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	11 C-F6E-4樹	早期	横凹文	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	12 1ト-2層	早期	横凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		重縁近く
	13 D-D3E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	14 C-F4E-4樹	早期	横凹文	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	15 C-F5E-4樹上層	早期	横凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	16 E-3E-4樹上層	早期	横凹文	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	17 E-3E-4樹上層	早期	横凹凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	18 C-4樹	早期	横凹凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	19 D-D3E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	20 C-E6E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		厚縁
	21 C-F5E-4樹	早期	横凹文	刷毛色	ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	22 D-D3E-4樹	早期	横凹文→ナデ?帝族	赤褐色	ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
23 D-D3E-4樹	早期	横凹文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○			
144番 (P114)	24 E-4E-4樹上層	早期	ナデ→山形文	刷毛色	横凹文→整体赤褐色	刷毛色	刷毛色	○	○		内面にスス付着
	25 E-3E-4樹中層	早期	横凹凹の山形文	赤褐色	ナデ→整体赤褐色	赤褐色	赤褐色	○	○		
	26 E-4E-4樹	早期	ナデ→山形文	赤褐色	山形文→整体赤褐色	赤褐色	赤褐色	○	○		外面にスス付着
	27 E-10E-4樹上層	早期	山形文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	28 E-3E-4樹	早期	山形文	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	29 E-3E-4樹	早期	山形文→ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	30 E-3E-4樹	早期	横凹文?帝族状	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	31 表紙	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	32 C-G5E-4樹	早期	ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	33 C-H5E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	34 C-2樹	早期?	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	35 C-F5E-4樹	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○		
	36 C-F5E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	37 C-G5E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	38 C-G5E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	39 C-G4E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	40 C-F5E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	41 C-G5E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
	42 C-E3E-4樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ(剥落)	赤褐色	赤褐色	○	○		
	43 D-E3E-3樹	早期	横ナデ	赤褐色	横ナデ	赤褐色	赤褐色	○	○		
44 C-F5E-4樹	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○			
45 C-F5E-4樹	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○			
46 C-F6E-4樹	早期	横ナデ	刷毛色	横ナデ	刷毛色	刷毛色	○	○			

第2表-4 手稲遺跡出土縄文土器観察表

遺物番号	出土位置	時期 分類	文様の形迹と器面観察の方法				土				備考
			外	内	面	底	高野石	長石	石灰	その他	
(P115)	47 C-B4E-3層	早期	条痕→横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	48 C-F4E-4a層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	49 C-H5E-2層	早期	ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	明褐色	○	○			
	50 C-G4E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	51 E-4E-4a層上面	早期	横ナデ	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	52 D-4E-壺穴層上	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		連続	
	53 C-F5E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	54 C-4層	早期	横ナデ	明褐色	横ナデ(→海苔痕)	明褐色	○	○			
	55 C-F5E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	56 C-E4E-4a層	早期	横ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○			
	57 D-10号壺穴層上	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	58 D-4号壺穴層上	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	59 C-G4E	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	60 C-F4E-4層	早期	横ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○		遺物集中部	
	61 C-G5E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		全灰付	
62 C-F4E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
63 C-E4E-4a層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
64 C-F4E-4層	早期	横ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○		遺物集中部		
(P116)	65 4層文化1	早期	横ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○		成人	
	66 C-F4E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		口縁スス付着	
	67 C-F5E-4層	早期	横ナデ	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	68 C-G5E-3-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	暗褐色	○	○			
	69 C-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	70 C-F5E	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	71 C-B4E-F4E-4層	早期	ナデ、横ナデ	茶褐色	ナデ、横ナデ	茶褐色	○	○			
	72 C-F4E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	73 D-8号壺穴層上	早期	ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	○	○			
	74 C-F5E-4層	早期	ナデ、横ナデ	明褐色	横ナデ、溝痕	明褐色	○	○			
	75 C-4層	早期	ナデ?摩滅	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○			
	76 C-G4E-4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
77 C-F4E-4層	早期	隆帯文→斜目、横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
78 C-1層-4層	早期	粗点山形文、隆帯文→連続縄文	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○				
79 E-3層	早期	粗点山形文→ナデ	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
80 E-2E3a層上面	早期	粗点山形文?→連続縄文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		スス付着		
81 E-1E1a層上面	早期	山形文、隆帯文→斜目、沈線文	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○				
82 C-F4E-4層	早期	ナデ→沈線(割痕)	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		全灰付		
83 E-3E-4a層	早期	ナデ→沈線	明褐色	横ナデ(割痕)	明褐色	○	○				
84 E-2E-4層	早期	ナデ→沈線	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○		スス付着		
85 E-2E-5層上面	早期	ナデ→沈線	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○		5層上面		
86 E-3E-4a層上面	早期	条痕?粗い沈線	明褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○		No83-84-85と同型一器体		
87 E-2E-3a層上面	早期	ナデ→沈線→ナデ(スス付着)	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○				
88 C-E4E-4層	早期	ナデ→斜文	茶褐色	条痕→ナデ	暗褐色	○	○		全灰付		
89 C-E4E-4層	早期	横ナデ→斜文→沈線 口縁部に斜目	明褐色	横ナデ→沈線	茶褐色	○	○		全灰付		
(P118)	90 D-3E-3層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	条痕→横ナデ	暗褐色	○	○		全灰付	
	91 C-G4E-4層	前期	隆帯文→凹圧による磨痕	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		全灰付 No112と同型一器体	
	92 D-2E-3層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	93 E-4E-3a層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	明褐色	○	○		全灰付	
	94 C-G5E	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	横ナデ条痕	茶褐色	○	○			
	95 D-μ20	前期	隆帯文→ナデ	明褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○			
	96 E-20a層上面	前期	隆帯文→ナデ	明褐色	条痕→ナデ	明褐色	○	○			
	97 C-G5E	前期	隆帯文→ナデ	暗褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○			
	98 D-2E3E-4層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	99 D-3E-3層	前期	ナデ→隆帯文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	100 C-1号中袋塚層上	前期	ナデ→隆帯文(スス付着)	黒褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	101 F-p221	前期	条痕→ナデ→隆帯文	黒褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	102 D-G4E-3層	前期	隆帯文→ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	103 C-6号壺穴層上	前期	隆帯文、隆帯文	暗褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	104 C-4層	前期	ナデ→隆帯文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		スス付着	
105 C-E4E-4a層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
106 F-7E-2a層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○				
107 D-μ15	前期	条痕→隆帯文→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○				
108 E-4E-4a層上面	前期	ナデ→隆帯文	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○				
109 D-4D3E-4層	前期	条痕→隆帯文→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○				
110 D-10号壺穴層上	前期	隆帯文→隆帯文→ナデ	暗褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○				
111 表段	前期	条痕→隆帯文	暗褐色	ナデ	茶褐色	○	○		スス付着		
112 E-205号壺穴層上	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
113 E-3E-3a層上面	前期	条痕→ナデ→隆帯文	明褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○				
114 トロイ層	前期	隆帯文→ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○				
115 E-4E-4a層	前期	条痕→隆帯文→ナデ	明褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○		全灰付 隆帯部にスス付着		

第2表-5 手続遺跡出土縄文土器観察表

遺物番号	出土位置	時期 分類	文様の特徴と器面調子の方法			装					備考	
			形	色調	内	色調	陶質	紋	石	装		その他
149期 [P119]	116 C-F6区-3層	前期	縦方向の深い沈線→横帯文→ナデ	茶褐色	赤灰→ナデ	明褐色	○	○				No1175号-1個体
	117 C-F6区-4層上面	前期	縦方向の深い沈線→横帯文→ナデ	茶褐色	赤灰→ナデ	明褐色	○	○				No1175号-1個体
	118 C-F6区-3層	前期	縦方向の深い沈線→横帯文→ナデ	茶褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				
	119 F-16区-2a層	前期	沈線→ナデ	赤褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				溝石
	120 F-16区	前期	ナデ→沈線	赤褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				溝石
	121 D-12区-4層	前期	ナデ→横帯文	茶褐色	ナデ→横帯文	茶褐色	○	○				
	122 F-4区-2a層	前期	沈線→ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○				溝石
	123 C-F4区-3層	前期	赤灰→粗い沈線→門線	暗褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				No1252号-1個体
	124 C-F4区-4a層	前期	沈線→ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○				
	125 F-5区-2a層	前期	赤灰→粗い沈線	暗褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				No1232号-1個体
	126 C-F4区-4層	前期	ナデ→赤灰厚体による横帯文	茶褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				溝石
	127 C-F4区-4層	前期	ナデ→赤灰厚体による横帯文	茶褐色	赤灰→ナデ	明褐色	○	○				
	128 C-F4区-4層	早期?	赤灰1層部に突起→ナデ	黒褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
	129 E-3区-4a層	早期	赤灰文→横帯文→横帯	茶褐色	横ナデ	暗褐色	○	○				
	130 C-E-F4区-3層	前期	赤灰	茶褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				金箔付
	131 E-4区-4a層上面	前期	赤灰→ナデ→赤灰	暗褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				
	132 E-4区-4a層	前期	赤灰→ナデ	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				金箔付
	133 C-G4区-4層	早期?	赤灰→ナデ	暗褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				スズ付
	134 C-4層	早期?	赤灰→ナデ	明褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				スズ付
135 E-5区-4a層	前期	赤灰	赤褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○					
136 C-F6区-3層	早期?	赤灰	茶褐色	赤灰	茶褐色	○	○					
137 C-G4区-4層	早期?	赤灰	暗褐色	赤灰	暗褐色	○	○					
138 C-F6区-4層	早期?	赤灰→ナデ	茶褐色	赤灰	暗褐色	○	○					
139 C-F6区-4層	早期?	赤灰	茶褐色	赤灰	茶褐色	○	○					
140 C-F6区-4層	早期	赤灰による文様	茶褐色	赤灰	暗褐色	○	○					
141 E-5区-3a層上面	前期	粗い赤灰	茶褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○					
150期 [P121]	142 E-4-3a層	前期	赤灰→粗い沈線	暗褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				No143-144-145号-1個体
	143 C-F4区-4層	前期	赤灰→粗い沈線	暗褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				No142-143-145号-1個体
	144 E-4区-3a層	前期	赤灰→粗い沈線	暗褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				No142-143-145号-1個体
	145 E-5区-4a層	前期	赤灰→上段に粗い沈線	暗褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				No142-143-144号-1個体
	146 D-15号土器埋土	前期	縄文	茶褐色	横へう研ぎ	暗褐色	○	○				主眼15
	147 6b-13層	中期	縄文	茶褐色	赤灰	暗褐色	○	○				
	148 6b-13層	中期	縄文	茶褐色	赤灰	茶褐色	○	○				
	149 C-G4区	中期	縄文	明褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				
	150 C-G4区-3層	前期	縄文	茶褐色	赤灰→ナデ	暗褐色	○	○				
	151 C-H6区-3層	中期	ナデ→先端半輪の横文具の沈線	明褐色	ナデ	茶褐色	○	○				○
	152 C-G6区-4層	中期	ナデ→凹線文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
	153 C-D3区-3層	後期	横ナデ・凹線部に刻目	赤褐色	横ナデ	暗褐色	○	○				
	154 C-D3区-4層	後期	横ナデ・凹線部に刻目	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
	155 C-E区-4層	中期	横ナデ・凹線	明褐色	赤灰→横ナデ	明褐色	○	○				
	156 C-H5区-3層	後期	沈線→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	157 F-10区-13(2層)	後期	外巻部に縄文・沈線→へう研ぎ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
	158 F-4区-2層	後期	沈線→粗いナデ・へう研ぎ	茶褐色	横ナデ→へう研ぎ	茶褐色	○	○				205号型文様物残片
	159 C-2号型穴埋土	後期	沈線→ナデ	茶褐色	赤灰→ナデ	茶褐色	○	○				
	160 E地区	後期	沈線→へう研ぎ	茶褐色	ナデ→へう研ぎ	茶褐色	○	○				
161 D-G5区-4層	後期	横ナデ	明褐色	ナデ	暗褐色	○	○				○	
162 E-1区-3a層	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○					
163 C-F4区	後期	横ナデ	茶褐色	ナデ	暗褐色	○	○					
164 C-縄文1埋土	後期	ケズリ破線ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				砂粒	
151期 [P122]	165 D-11号型穴埋土	後期	沈線→横へう研ぎ	明褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	166 D-12区-3層	後期	沈線→横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	167 C-F4区-3-4層	後期	沈線→ナデ・へう研ぎ	黄褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	168 6b-13層	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	169 D-8号型穴埋土	後期	沈線→へう研ぎ→ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○				
	170 C-F4区-3層	後期	沈線→へう研ぎ	明褐色	横へう研ぎ	明褐色	○	○				
	171 C-F4区-3a層	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				縄文付1
	172 D-12号型穴埋土	後期	沈線→へう研ぎ	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○				
	173 C-土器埋土	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
	174 D-8号型穴埋土	後期	沈線→へう研ぎ?	黄褐色	横へう研ぎ?	茶褐色	○	○				厚減
	175 C-F5区-4層	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	176 D-3層	後期	縄文→沈線→ナデ・へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	177 C-F5区-3-4層	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	178 C-F4区-3a層	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	明褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				スズ付-縄文付1
	179 C-4層	後期	縄文→沈線→へう研ぎ	茶褐色	横ナデ	明褐色	○	○				
	180 E-3区-3a層上面	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	181 E-3区-3a層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	沈線→横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
	182 E-3区-3a層上面	後期	横へう研ぎ	暗褐色	沈線→横へう研ぎ	暗褐色	○	○				
	183 C-F6区-3層	後期	横へう研ぎ	暗褐色	沈線→横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
184 E-3区-3a層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	沈線→横へう研ぎ	茶褐色	○	○					
185 C-F6区-3層	後期	横へう研ぎ	暗褐色	沈線→横ナデ	茶褐色	○	○					
186 E-3区-3a層上面	後期	赤灰→ナデ→へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	暗褐色	○	○					
187 C-G4区-4層	後期	赤灰→沈線→ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○					
188 E-1区-3a層	後期	縄文→凹線文・横へう研ぎ	茶褐色	横ナデ→へう研ぎ	茶褐色	○	○					
189 B-pit1	後期	沈線→横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○					
190 C-F5区p埋土	後期	凹線→横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				金箔付	

第2表-6 手簡遺跡出土縄文土器観察表

遺物番号	出土位置	時期	文様の特徴と器面観察の方法				土				備考
			文様	器面	観察の方法	色調	胎質	長七石系	その他		
1520F (P123)	191 61-3層	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	白色	○	○			
	192 C-F4区-3層	後期	横へう研ぎ	白色	横ナデ	茶褐色	○	○		縄文11	
	193 C-G6区-2層	後期	横ナデ	明褐色	横ナデへう研ぎ	明褐色	○	○			
	194 E-3区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	横へう研ぎ	白色	○	○			
	195 C-F6区-4層	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ変型	明褐色	○	○			
	196 D-9号穴層上	後期	横ナデ(変型)	明褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○		スス付者	
	197 D-8号穴層土	後期	横へう研ぎ	明褐色	横へう研ぎ	黒褐色	○	○			
	198 61-3層	後期	横へう研ぎ・横ナデ	茶褐色	横ナデ	白色	○	○			
	199 C-G5区-4層	後期	横へう研ぎ	白色	横へう研ぎ	白色	○	○			
	200 61層下	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶色	○	○			
	201 E-101号穴層上	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
	202 E-3区-3層上中	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
	203 C-F6区-1層土	後期	行間に凹線、赤色顔料散布	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○		金文5	
	204 E-3区-4層上層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	暗褐色	○	○		スス付者	
	205 C-2号穴層上	後期	横ナデ	茶褐色	変型へう研ぎ	茶褐色	○	○		浅鉢?	
	206 61層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
	207 E-3区-3層	後期	横へう研ぎ	灰褐色	横へう研ぎ	黒褐色	○	○			
	208 E-4区-1層上層	後期	赤黒へナデ	茶褐色	横ナデ横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
	209 E-101号穴層土	後期	ナデへう研ぎ	黒褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○		金文5	
	210 C-F4区-4層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	211 C-G5区-2層	後期	横へう研ぎ・口縁が肥厚・突起	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
	212 C-F5区-4層	後期?	赤黒へナデ	茶褐色	赤黒	茶褐色	○	○			
	213 E-102号穴層土	後期	リボン状突起・横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	214 C-F4区	後期	赤黒へナデ・リボン状突起	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	215 C-G5区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		Na216・217同一器体	
	216 C-G5区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		Na215・217同一器体	
	217 C-G5区-3層	後期	横ナデ・1層部に突起	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		Na215・216同一器体 スス付者	
	218 E-3区-3層	後期	赤黒へナデ	暗褐色	ケズリ状・横ナデ	明褐色	○	○		スス付者、上層118	
	1530F (P124)	219 E-3区-3層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	沈跡へう研ぎ	茶褐色	○	○		
		220 C-F4区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	赤黒へナデ	茶褐色	○	○		
		221 E-3区-4層	後期	横ナデ	赤褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○		
222 C-F5区-3-4層		後期	横ナデ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
223 E-101号穴層床下		後期	赤黒へナデリ状	赤褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
224 C-F6区-4層		後期	横ナデ	茶褐色	横へう研ぎ	暗褐色	○	○			
225 E-3区-3層上層		後期	横へう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	明褐色	○	○		スス付者	
226 C-F6区-3層		後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
227 E-3区		後期	赤黒へナデ	茶褐色	横へう研ぎ	暗褐色	○	○			
228 C-F6区-3-4層		後期	赤黒へナデ	青褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
229 C-1区-4層		後期	ナデ?	明褐色	ナデ?	明褐色	○	○		厚底	
230 E-3区-3層		後期	赤黒へナデ	灰褐色	赤黒へナデ研ぎ	茶褐色	○	○		スス付者、上層118	
231 E-3区-4層		後期	赤黒へナデ	茶褐色	赤黒へナデ	明褐色	○	○			
232 C-F5区		後期	横ナデ	暗褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
233 C-F4区-3層		後期	横ナデ	暗褐色	横へう研ぎ	暗褐色	○	○			
234 D-G3区-4層		後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
235 C-F4区-3層		後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		縄文11	
236 C-4号1層上層		後期	横へう研ぎ	茶褐色	横ナデへう研ぎ	茶褐色	○	○			
237 E-3区-3層		後期	赤黒へナデ	暗褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○		上層118	
238 E-3区-3層上層		後期	ナデへう研ぎ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
239 C-G4区-4層		後期	赤黒へナデ	茶褐色	沈跡へナデ	茶褐色	○	○			
240 C-F5区-3層		後期	赤黒へナデ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
241 C-10号土層層土		後期	赤黒へナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		土層10	
242 E-2区-3層		後期	赤黒へナデ	茶褐色	横へう研ぎ	茶褐色	○	○			
243 C-1号穴層上		後期	赤黒へナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
244 C-1号穴層土		後期	赤黒へナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
245 C-H5-4区-2-3層		後期	赤黒へナデへう研ぎ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
246 C-F4区-4層		後期	赤黒へナデへう研ぎ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
247 表層		後期	赤黒へナデへう研ぎ	茶褐色	赤黒へナデ研ぎ	茶褐色	○	○			
248 3層		後期	赤黒へナデへう研ぎ	茶褐色	赤黒へナデ研ぎ	茶褐色	○	○			
1540F (P125)		249 C-2号穴層土	後期	横へう研ぎ・沈跡	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	250 E-3区-3層	後期	横へう研ぎ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		上層118	
	251 E-3区-3層	後期	行間にリボン状突起・横ナデ	茶褐色	赤黒へナデ	茶褐色	○	○		上層118	
	252 C-2号穴層上	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	253 E-4区-4層	後期	赤黒へナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○			
	254 3層	後期	縦線状汗痕	茶褐色	赤黒へう研ぎ	茶褐色	○	○			
	255 E-3区-3層	後期	横ナデ	明褐色	横ナデ	明褐色	○	○			
	256 E-4区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	赤黒へナデ	茶褐色	○	○			
	257 C-F4区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	ナデ、(割漆)	茶褐色	○	○			
	258 C-G4区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○			
259 C-G6区-3層	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
260 C-G5区-2層	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				
261 E-2区-3層	後期	横ナデ・横へう研ぎ	茶褐色	横ナデ・横へう研ぎ	茶褐色	○	○				
262 C-F5区	後期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○				

第3表-1 手簡遺跡出土石器観察表

A地区出土石器

No	地区	遺構	器種	石材	規格(寸法は破片単位)(cm)			重量 (単位g)	備考	
					長さ	幅	厚さ			
(P 25)	32	A地区	N-5区-3層	2次加工剥片	黒色燧石	2.5	1.0	0.5	0.8	
	33	A地区	N-5区-3層	使用済みの剥片	黒色燧石	3.2	2.6	0.9	5.0	
	34	A地区	N-6区-3層	石核	黒色燧石	3.5	2.5	1.3	11.1	
(P 25)	35	A地区	N-5区-4層	扁平打製石片	燧石	6.4	6.6	1.2	65.8	
	36	A地区	N-6区-3層	砥石	結晶片岩	10.2	6.3	0.8	(80.1)	

C・D地区遺構出土石器

No	地区	遺構	器種	石材	規格(寸法は破片単位)(cm)			重量 (単位g)	備考	
					長さ	幅	厚さ			
(M 9 区)	20	C地区	1号単穴建物	磨石	安山岩	11.6	10.8	9.0	1509.6	
47(区)	10	D地区	8号単穴建物	台石	凝灰岩	(31.1)	(25.3)	9.0	(6090.2)	
(P 47)	11	D地区	8号単穴建物	磨石	角閃安山岩	12.2	11.3	6.0	1217.0	
(M 9 区)	11	D地区	13号土塁	砥石	安山岩	12.7	6.1	4.2	475.3	

F地区谷調査区出土石器

No	地区	遺構	器種	石材	規格(寸法は破片単位)(cm)			重量 (単位g)	備考		
					長さ	幅	厚さ				
111(区)	9	F-谷調査区	11層	石核	中ヌカ合	3.0	1.7	0.6	2.0	残存遺物	
	(P 83)	10	F-谷調査区	9層	石核	中ヌカ合	3.1	2.0	0.8	4.0	残存遺物
		11	F-谷調査区	9層	石核	黒石英	2.6	4.6	2.2	28.7	残存遺物
112(区)	12	F-谷調査区	9層	石核	中ヌカ合	6.7	9.4	3.1	175.0	残存遺物	
	(P 83)	13	F-谷調査区	5層	磨製石片	頁岩	12.8	5.8	2.8	298.0	残存遺物
14	F-谷調査区	路肩遺上	扁平打製石片	結晶片岩	12.2	5.7	1.2	111.0			
	15	F-谷調査区	12B層	扁平打製石片	結晶片岩	(4.8)	4.7	1.1	(39.0)		

C地区縄文時代遺構出土石器

No	地区	遺構	器種	石材	規格(寸法は破片単位)(cm)			重量 (単位g)	備考		
					長さ	幅	厚さ				
124(区)	111	C地区	縄文住1	石匙	黒色燧石	6.9	2.3	0.7	6.0		
	(P 95)	112	C地区	縄文住1	2次加工剥片	黒色燧石	(3.2)	1.7	0.6	(2.9)	
	113	C地区	縄文住1	石片	黒色燧石	3.4	1.3	0.4	1.6		
	114	C地区	縄文住1	2次加工剥片	黒角差燧石	3.1	1.8	0.7	2.0	二層辺に磨製遺物が見られる	
	115	C地区	縄文住1	2次加工剥片	中ヌカ合	3.6	2.3	0.6	3.0		
	116	C地区	縄文住1	2次加工剥片	ホムンフルス	4.9	2.5	1.7	11.2		
	117	C地区	縄文住1	スライパー	中ヌカ合	3.9	(6.2)	0.8	(28.2)		
	118	C地区	縄文住1	石核	黒色燧石	3.1	2.9	1.5	(9.0)		
	125(区)	119	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	(12.4)	(7.5)	1.9	(208.0)	
(P 96)	120	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	(10.0)	6.2	1.4	(82.0)		
	121	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	10.9	9.1	1.6	198.0	No124B層合	
	122	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	(10.8)	9.7	1.3	(166.0)		
	123	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	(10.0)	9.9	1.3	(150.0)		
	124	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	(9.3)	8.3	1.5	(159.0)	No121C層合	
	125	C地区	縄文住1	扁平打製石片	安山岩	(11.7)	10.1	2.0	(238.0)		
	126	C地区	縄文住1	打製石片-未完成品?	安山岩	(10.6)	12.5	2.1	(348.0)		
	126(区)	127	C地区	縄文住1	磨石	凝灰岩	13.6	8.7	4.9	851.2	表面は砥石として使用、着下の遺物有り
	(P 97)	128	C地区	縄文住1	磨石	凝灰岩	(14.6)	(12.0)	6.4	(995.1)	1号燧石のNo1と層合
129	C地区	縄文住1	磨石	砂岩	(11.0)	(8.3)	(1.6)	(225.8)			
(M 9 区)	1	C地区	1号集石	青石	安山岩	(10.8)	(9.3)	6.0	(722.6)	不明 縄文住1のNo128と層合	

第3表-2 手前遺跡出土石器観察表

16区 番号	番号	地区	遺 跡	器 種	石 材 種	規 格 (寸法1単位・単位:cm)			収量 (個数%)	備 考
						長 さ	幅	厚 さ		
155回 (P126)	263	E地区	3F区-4層上部	石核	黒曜石(慶岳)	4.1	1.7	1.4	9.0	
	264	E地区	3F区-4層上部	2次加工剥片	珸化木	3.4	3.2	1.5	12.0	内形剥片
156回 (P126)	265	C地区	P604残片	石鏢	珸化木	(2.0)	1.8	0.4	(1.0)	
	266	E地区	整穴10残片	石鏢	黒曜石(慶岳色)	(2.6)	(1.6)	0.6	(1.8)	
157回 (P127)	267	A地区	土層1	石鏢未製品	黒曜石(慶岳色)	1.9	(1.7)	0.5	(1.0)	
	268	E地区	整穴10残片	石鏢	ササ科	2.2	1.7	0.5	1.8	
157回 (P127)	269	E地区	整穴10残片	スレイバー	黒曜石(慶岳色)	1.5	3.0	0.3	1.2	
	270	C地区	土層4	スレイバー	ササ科	3.5	3.0	0.9	8.0	
157回 (P127)	271	E地区	4区	スレイバー	ササ科	4.3	3.2	1.2	13.0	
	272	D地区	D-3区-4層	スレイバー	ササ科	5.2	2.6	1.1	11.5	
157回 (P127)	273	F地区	7区-2a層	スレイバー	ササ科	3.5	8.9	1.3	17.3	
	274	E地区	3区-4層	スレイバー	ササ科	3.6	4.9	0.8	12.0	
157回 (P127)	275	E地区	整穴10床下	スレイバー	ガラス製(山岳)	3.7	6.9	1.5	25.3	
	276	E地区	表層	スレイバー	ササ科	8.3	3.4	1.0	26.0	縦長剥片を素材としたもので、打削に密な痕跡が行われている。
157回 (P127)	277	F地区	3区-4層上部	2次加工剥片	ササ科	7.0	5.7	2.0	60.0	
	278	F地区	4区-2a層	石鏢	ササ科	7.0	3.6	0.6	11.7	
158回 (P128)	279	B地区	5区	スレイバー	珸化木(竹)	3.9	3.1	1.0	11.0	
	280	C地区	整穴1 遺土中	2次加工剥片	珸化木	5.0	4.3	1.9	34.1	
158回 (P128)	281	F地区	4区-2a層	削片	珸化木	4.5	4.0	1.0	13.5	
	282	C地区	(4層)No258	スレイバー	珸化木(玉髄)	4.3	4.1	1.6	22.5	
158回 (P128)	283	D地区	B-3F-4層	スレイバー	珸化木	(2.2)	2.5	0.9	(5.6)	
	284	A地区	11レンテ-床3層	スレイバー	ササ科	5.0	5.4	1.3	30.0	
158回 (P128)	285	E地区	B-3区-4層	13区前部の中層	珸化木(珸化木?)	5.2	3.3	1.3	15.3	
	286	E地区	3区-4層	使用済みの剥片	ササ科	8.1	9.7	1.6	109.3	
159回 (P129)	287	F地区	7区-2a層	石核	黒曜石(赤色 喜北丸相)	1.8	3.2	1.8	10.0	
	288	D地区	3区-E3層	石核	チャート製	4.9	3.4	1.5	18.0	
159回 (P129)	289	E地区	4区-5層	石核周囲のスレイバー	珸化木	3.5	3.6	1.6	18.0	
	290	F地区	4区-5層	石核	珸化木	3.9	2.9	1.8	17.5	
159回 (P129)	291	C地区	C-5区-4層	石核	珸化木	3.2	3.8	1.9	20.0	
	292	A地区	11レンテ下 日層中	石核	黒曜石(慶岳)	4.7	6.2	2.1	56.6	
160回 (P130)	293	C地区	E-5区-複層土層	石核	黒曜石(慶岳)	6.7	6.4	3.7	141	
	294	A地区	6レンテ-1a層	スレイバー	珸化木	4.9	5.4	0.9	26.5	
160回 (P130)	295	A地区	6レンテ-1a層	石核(竹)石鏢	珸化木	6.3	4.7	0.9	32.4	
	296	D地区	整穴10遺土中	スレイバー	黒炭石質安山岩	8.4	5.0	1.7	44.5	
160回 (P130)	297	E地区	E-4区-5層土層	磨平石鏢	珸化木	(6.4)	5.3	0.6	(29.0)	
	298	C地区	F4区	磨平石鏢	黒炭石質安山岩	10.1	7.5	0.9	(72.0)	
161回 (P131)	299	C地区	F4区-3層	磨平打製石鏢	珸化木	9.9	5.5	1.4	(84.0)	
	300	C地区	F4区	磨平打製石鏢	珸化木	11.0	5.4	2.0	105	
161回 (P131)	301	C地区	F5区-4層上部	磨平打製石鏢	黒炭石質安山岩	(10.8)	5.4	2.0	(48.0)	
	302	C地区	F4区-3層	磨平打製石鏢	珸化木	9.1	5.3	1.4	89.0	
161回 (P131)	303	C地区	G-4区	磨平打製石鏢	珸化木	7.7	4.9	0.9	48.0	焼痕品を再加工?
	304	C地区	F5区-3層	磨平打製石鏢	珸化木	9.3	7.3	1.2	102.0	
161回 (P131)	305	D地区	D-3区-3層	磨平打製石鏢(鏡片)	安山岩	8.8	4.6	2.4	87.9	
	306	C地区	4層	磨平打製石鏢	安山岩	(7.0)	5.3	1.5	72.0	
161回 (P131)	307	C地区	F5区-3層	磨平打製石鏢	黒炭石質安山岩	(5.9)	6.6	1.4	69.0	
	308	C地区	F5区	磨平打製石鏢	黒炭石質安山岩	10.3	7.0	2.3	217.0	
161回 (P131)	309	C地区	F4区-3層	磨平打製石鏢	安山岩	10.0	7.4	1.4	126	
	310	A地区	6レンテ3層	磨平打製石鏢	黒炭石質安山岩	(8.3)	5.9	2.4	(132.6)	
161回 (P131)	311	D地区	整穴10 残片・埋土中	磨平打製石鏢	黒炭石質安山岩	7.2	6.3	1.5	72.5	
	312	C地区	F4区-3層	磨平打製石鏢	安山岩	(5.3)	9.5	1.0	(75.0)	
161回 (P131)	313	—	倉倉層	磨平打製石鏢	安山岩	9.0	8.5	2.0	166	
	314	D地区	整穴10 埋土	磨平打製石鏢	安山岩	22.6	10.3	1.7	392	
162回 (P132)	315	F地区	5区-4層	磨平石鏢	頁岩	8.4	4.3	1.2	77.6	磨削技法により作成したもの?
	316	F地区	整穴304 残片・土層4	磨平石鏢	軟泥岩	13.5	4.3	2.9	237.5	
162回 (P132)	317	D地区	B-3区-4層	磨平石鏢	軟泥岩	12.3	4.3	1.9	131.9	
	318	C地区	F5区	磨平石鏢の未製品	黒炭石質安山岩	(8.3)	5.1	1.6	(79.0)	内蔵を分割したものを素材とする
163回 (P132)	319	C地区	(3層)	磨平石鏢	珸化木	5.2	3.6	0.9	26.0	
	320	C地区	4層	磨石	安山岩	10.1	7.7	5.7	763.9	手による下掘を磨削に使用して、内蔵に密な痕跡が見られる。
163回 (P132)	321	E地区	2区-3層土層	磨石	安山岩	10.0	9.8	4.8	689.2	
	322	D地区	D-2区-4層	磨石	安山岩	12.1	9.4	4.0	593.4	
163回 (P132)	323	C地区	4	石鏢	珸化木(安山岩)	(15.1)	(11.0)	6.0	(1334.8)	
	324	C地区	E-4区	石鏢?	玉髄	13.1	10.5	6.8	91.0	
164回 (P133)	325	C地区	F-4区-4層上部	磨石(チャックワール)	頁岩	10.3	7.6	3.1	275.0	
	326	D地区	D-3区-3層	磨石	石炭質頁岩	12.7	13.1	6.1	995.5	
164回 (P133)	327	C地区	4層	磨石(チャックワール)	安山岩	8.0	13.0	3.0	492.0	

図版 1

手嶋遺跡の立地する
段丘面と大山川
(北から)



A地区
空中写真



C地区
空中写真





C地区、D地区
空中写真



C地区空中写真
中央：縄文時代
1号竪穴住居



E地区空中写真

手崎遺跡 A地区

A地区
全景
完掘後
(西から)



A地区
出土状態
(北から)



A地区
1号土壇
完掘後
(南から)





A 地区
2号土壇
完掘後
(南から)



手崎遺跡 C地区

C 地区
1号竪穴建物
遺物出土状況
(東から)



1号竪穴建物
完掘後
(東から)



C地区1号竪穴建物出土状況

土壙内 (上から)	北壁際 (北から)
土壙内 (南から)	(西から)

C地区
3号竪穴建物
遺物出土状態
(南から)



C地区
3号竪穴建物
完掘後
(南から)



図版 6



C地区
11号土壇
(北西から)



右手前
C地区
1号掘立柱建物
(東から)



C地区
2号掘立柱建物
(南東から)

C地区
2号竪穴建物
出土遺物
(右側は7号土壙)
(北から)



C地区
2号竪穴建物
完掘後
(北から)



C地区
2号竪穴建物
カマド完掘後
(東から)





C地区
4号竪穴建物
出土状態
(東から)



C地区
4号竪穴建物
完掘後
(東から)



C地区
4号竪穴建物内
土 層 1
出土状態
(東から)

C地区
5号竪穴建物
(東から)



C地区
6号竪穴建物
(南から)



C地区
6号竪穴建物
完掘後
(南から)





C地区
7号竪穴建物
(東から)



C地区
7号土壇
カマド
検出状態
(西から)



C地区、7号土壇
出土状況(手前)
(西から、2号竪穴を切る)

C地区
1号中世墓
石材検出状態
(南東から)



C地区
1号中世墓
断面
(南東から)



C地区
1号中世墓
完掘後
(北西から)





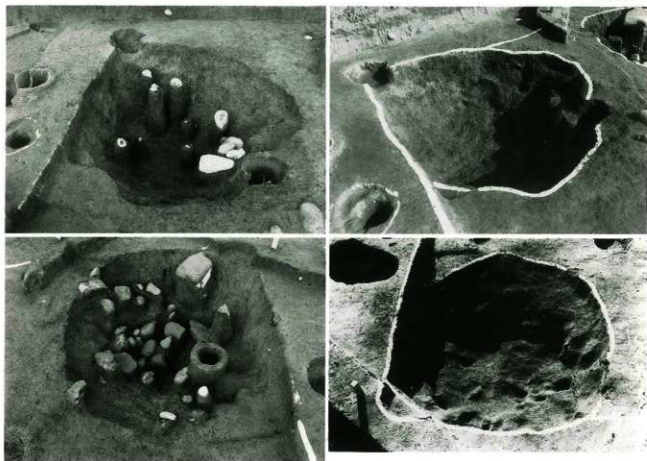
D地区
8号竪穴建物
完掘
(北から)



D地区
9号竪穴建物
12・13号土器
出土状態
(南西から)



D地区
9号竪穴建物
12・13号土器
完掘後
(北東から)



D地区	12号土坑 出土状態	12号土坑 突掘後
	13号土坑 出土状態	13号土坑 突掘後

D地区
10号竪穴建物
出土状態
(北東から)

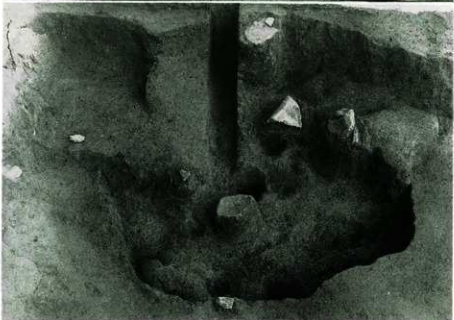




D地区
10号竪穴建物
完掘後
(北西から)



D地区
10号竪穴建物
カマド
検出状態
(北西から)



D地区
10号竪穴建物
カマド
出土状態
(北西から)



D地区 10号竖穴建物床下土壌(北西から)



D地区 10号竖穴建物床下土壌出土状態(北西から)



D地区 31号土壌、出土状態(北東から)



D地区
11号竪穴建物
出土状態
(東から)



D地区
11号竪穴建物
完掘後
(東から)



D地区
12号竪穴建物
完掘後
(西から)

D地区
32号土壌
出土状態
(11号竪穴の中央)

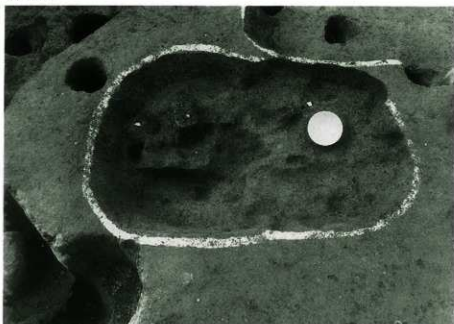


D地区
2号中世墓
検出状態
(南西から)



D地区
2号中世墓
検出状態
(南西から)





D地区
2号中世墓
副葬品出土状態
(南西から)



D地区
2号中世墓
完掘後
(南西から)



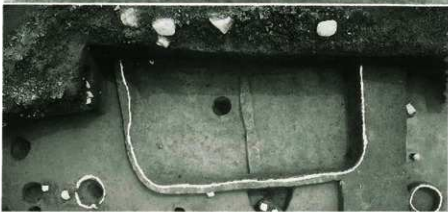
D地区
2号中世墓
副葬品
(NO.1.3)

手崎遺跡 E地区

E地区
102号竪穴建物
出土状態
(西から)



E地区
102号竪穴建物
完掘後
(真上から)



E地区
101号竪穴建物
出土状態
(南から)



E地区
101号竪穴建物
完掘後
(南から)





E地区
101号竪穴建物

カマド
検出中

突掘後
断面



E地区 101号溝



E地区 102号溝

手崎遺跡 F地区

F地区
調査前
全景
(西から)



F地区
上層遺構
完掘後
全景
(西から)



F地区
竪穴群
(南から)





F地区
203・204・205
号竪穴建物の
切り合い
(南東から)



204号と205号の関係は、調査の
最終局面で逆転する。

F地区
201・202・203・
204・205号竪穴
建物の切り合い関係
(北東から)



F地区
203号竪穴建物
遺物出土状態
(北東から)

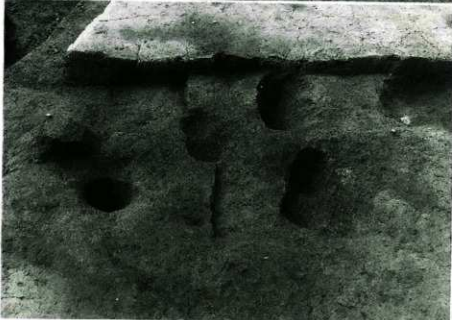
F地区
203号竪穴建物
完掘後
(北東から)



F地区
203号竪穴建物
カマド棟出状態
(北東から)



F地区
203号竪穴建物
カマド完掘後



F地区
204号竪穴建物
完掘後
(北から)



(下)
204号竪穴内遺構
カマド

横断面 遺物
出土状態

縦断面 完掘後

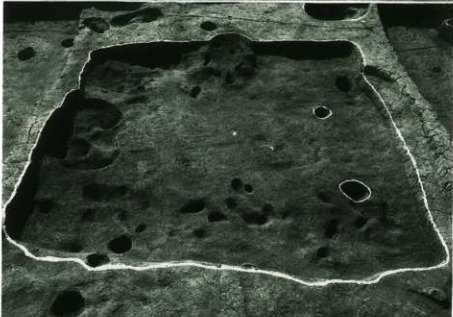
土層 2	土層 2
出土状態	完掘後
(中央220号土層)	



F地区
201号竪穴建物
遺物出土状態
(東から)



F地区
201号竪穴建物
完掘後
(東から)



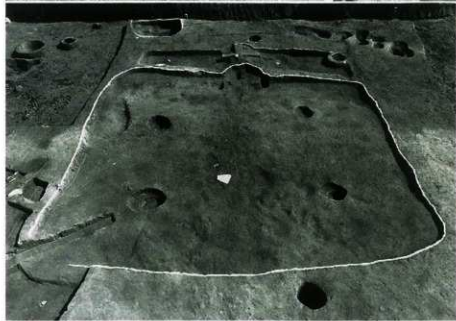
201号竪穴、カマド検出状態



201号竪穴カマド完掘後



F地区
201・202号の
切り合いと、202号
竪穴建物(手前)
遺物出土状壁
(東から)



F地区
202号竪穴建物
完掘後
(東から)



F地区
202号竪穴
カマド完掘状態
(東から)

F地区
204・205号
竪穴建物
完掘後
(西から)



F地区
205号竪穴建物
遺物出土状態
(南西から)



F地区
205号竪穴建物
完掘後
(南西から)





F地区
205号竪穴建物
カマド縦断面
(北西から)



F地区
205号竪穴建物
カマド完掘後
(南西から)



F地区
205号竪穴建物
貼り床断面
(南西から)

F地区
206号竪穴建物
完掘後
(南西から)



F地区
206号土壇
完掘後
(南西から)



F地区
207号土壇
完掘後
(南東から)





手崎遺跡F地区、谷調査区

トレンチ1
完掘後
(南から)



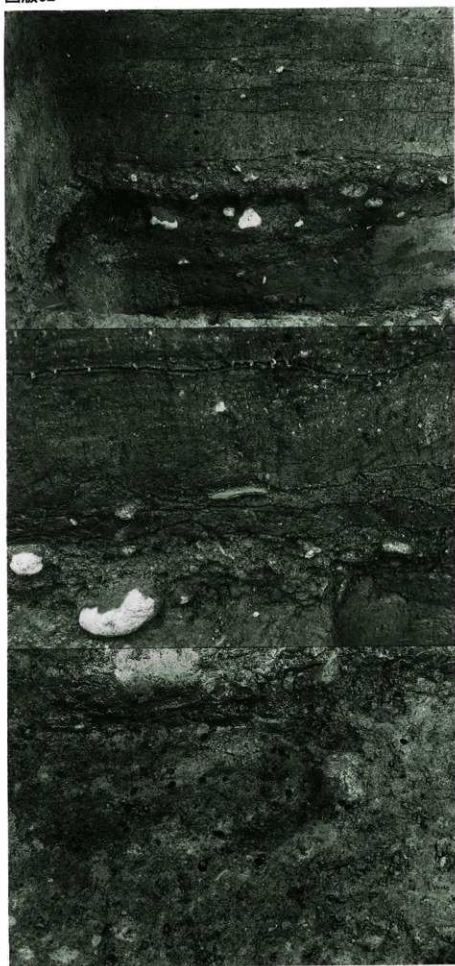
トレンチ1
東壁断面
(北西から)

トレンチ2
掘り下げ終了時
(北東から)

トレンチ2
断面
(東から)

トレンチ2
北壁断面





F地区谷調査区
トレンチ2
上部水田層
下部澁地層

トレンチ2
8層下部
土器出土状態

トレンチ2
12b層
炭化種子
出土状態

縄文時代の遺構

C地区
1号竪穴住居
上層遺物出土状態
(北から)



C地区
1号竪穴住居
下層遺物出土状態
(東から)



C地区
1号竪穴住居
下層遺物出土状態
(北西から)





C地区
1号竪穴住居
出土状態細部



C地区
1号竪穴住居
完掘後
(北から)



C地区
1号竪穴住居
完掘後
(南西から)

C地区
9号土壙
断面
(西から)

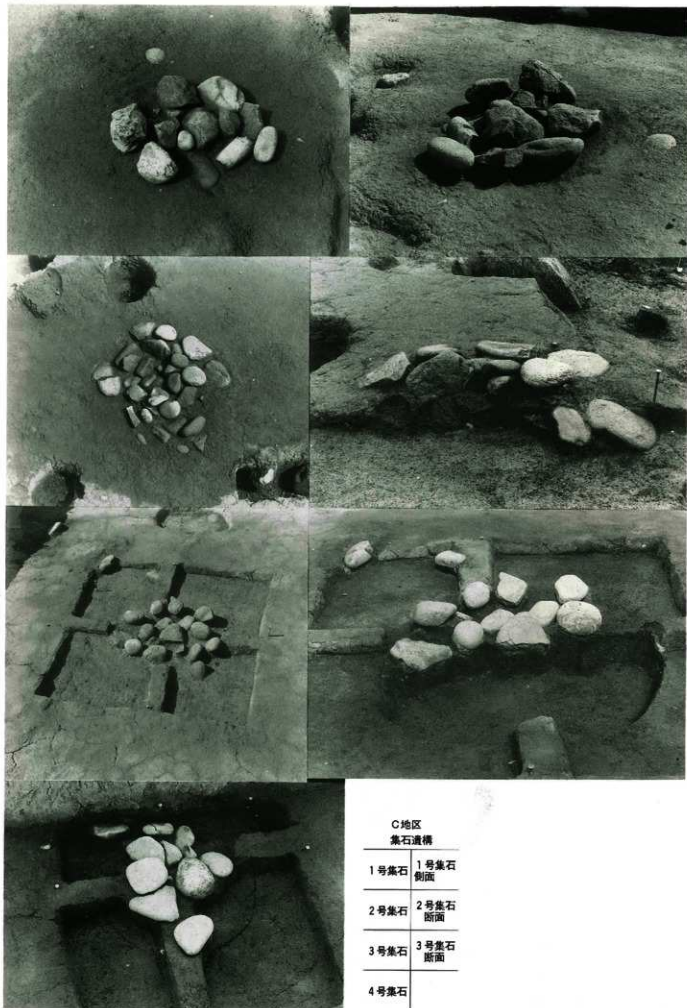


C地区
9号土壙
出土状態
(上から)



E地区
106号土壙
完掘後
(南から)





C地区
集石遺構

1号集石	1号集石 側面
2号集石	2号集石 断面
3号集石	3号集石 断面
4号集石	

縄文時代の包含層
F 地区



F 地区
縄文包含層
出土状態
(南から)



F 地区
縄文包含層
出土状態
(東から)



F 地区
第2層
出土状態
(西から)



D地区
第3层出土状態
(南から)



D地区
第3层出土状態
(南西から)



D地区
第4层出土状態
(西から)

C 地区



C 地区
第4層出土状態
(北から)



C 地区
第4層、E5区
早期土器集中点



C 地区
F4区
西壁セクション



E地区 2区
包含層出土状態
(南から)



E地区
下部包含層
調査風景
(南から)



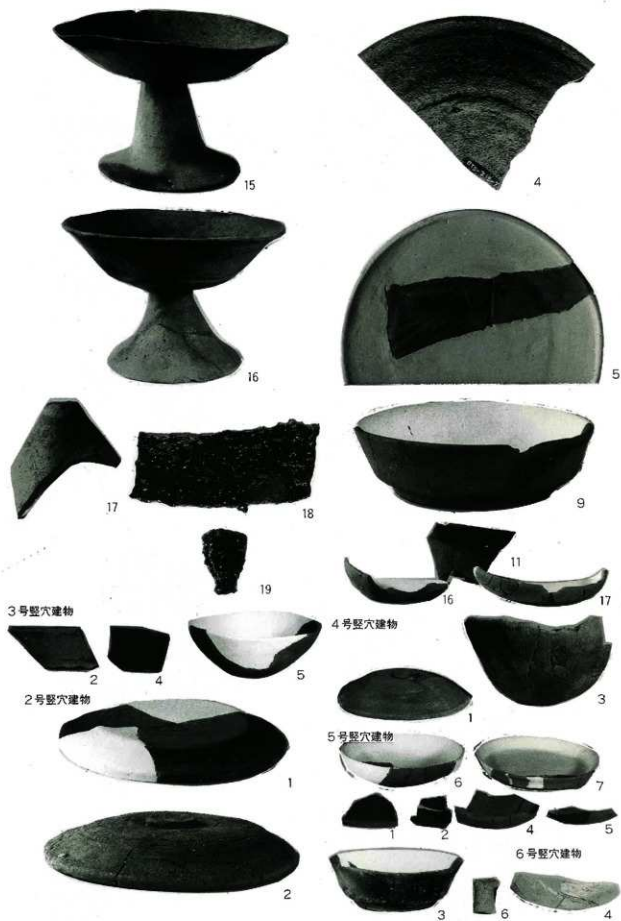
E地区 5区
東壁断面
(西から)

C地区
2号土坑



C地区 1号竖穴建物





6号竖穴



7

7号竖穴建物



2

D地区



1

13号竖穴建物



6

C地区 7号土壤



3

1



2

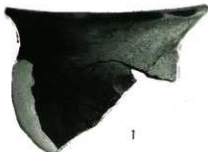
D地区



1

9号竖穴建物

C地区
8号土壤



1



2



3



4

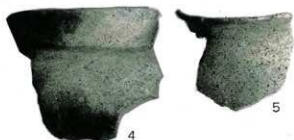
D地区
8号竖穴建物



8



7



4

5

12号土壤



11



7

D地区
15号土壤



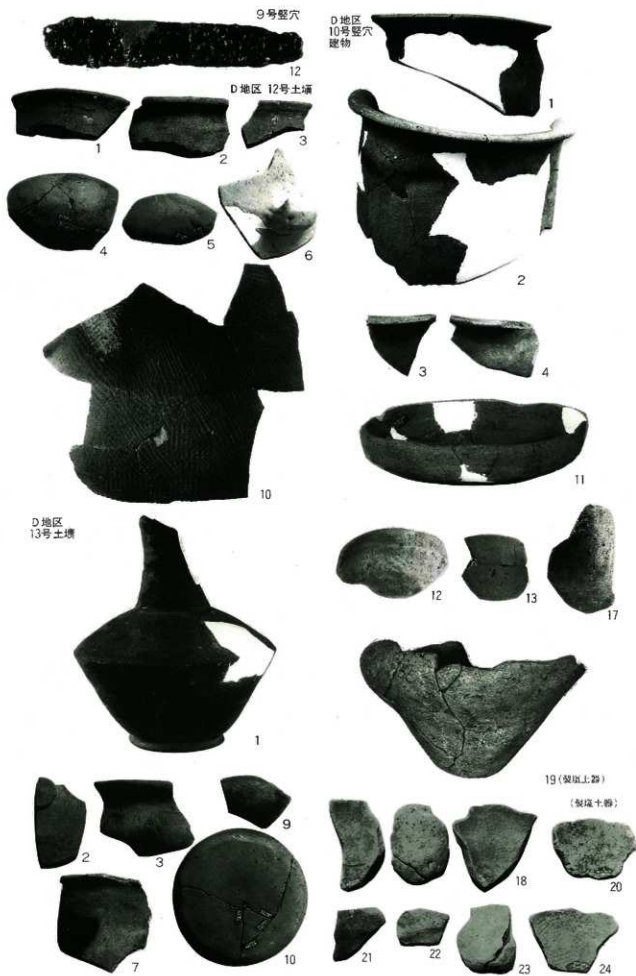
1

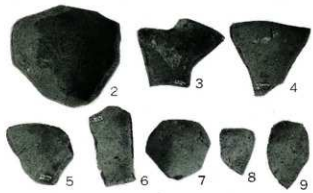
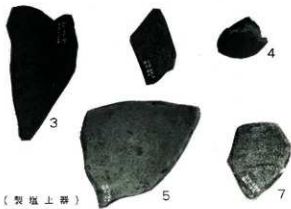


9



8





D地区
2号中世墓

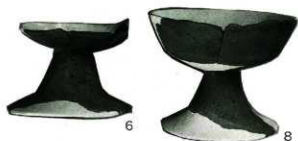
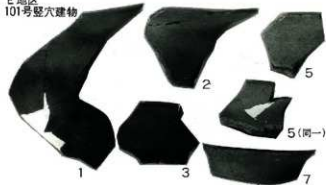


D地区
Pit 24



E地区 102号竖穴建物

E地区
101号竖穴建物



F地区
203号竖穴建物



F地区
203号
竖穴



4



3

5

6

9



7



1

2

3

F地区
204号
竖穴建物



5

F地区



4



1

201号竖穴建物



4

5

8



9

(碎片十片)

13

14



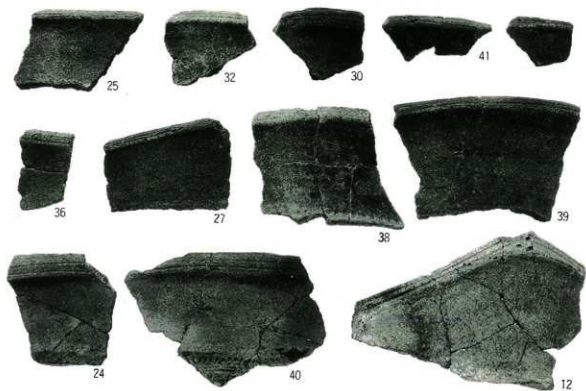
6

7

F地区
202号竖穴建物



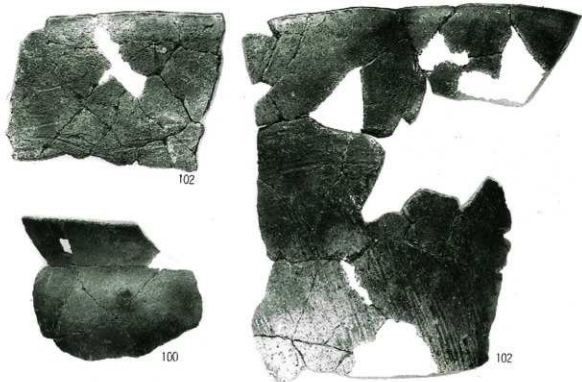
1



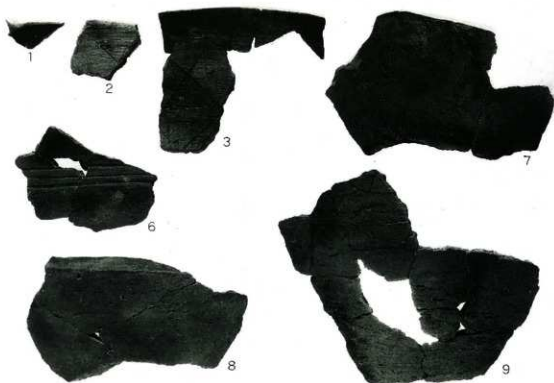
手嶋遺跡1号住居跡出土土器(1) (第118-120図)



手嶋遺跡1号住居跡出土土器(2) (第117-118図)

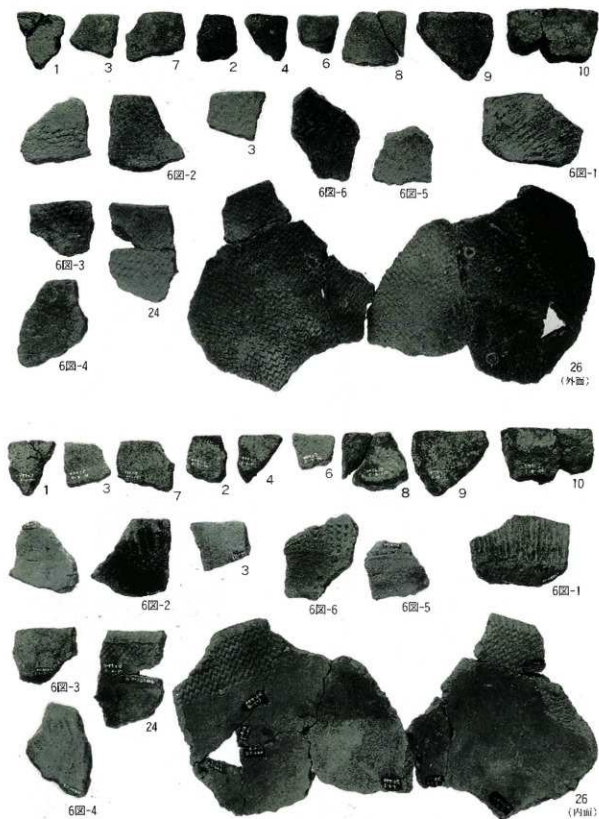


手嶋遺跡1号住居跡出土土器 (5)

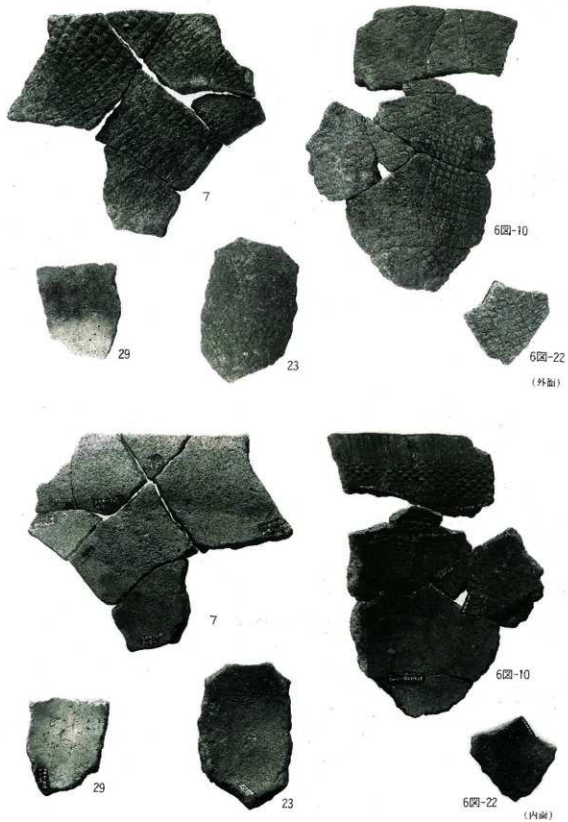


手嶋遺跡各土壇出土土器

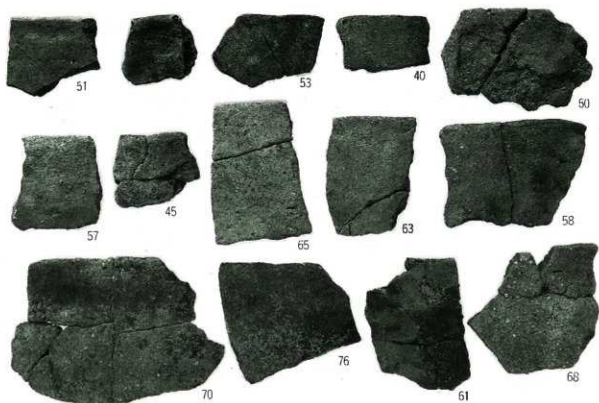
{ 1~3は9号土壇
 { 6は106号土壇
 { 7~9は118号土壇



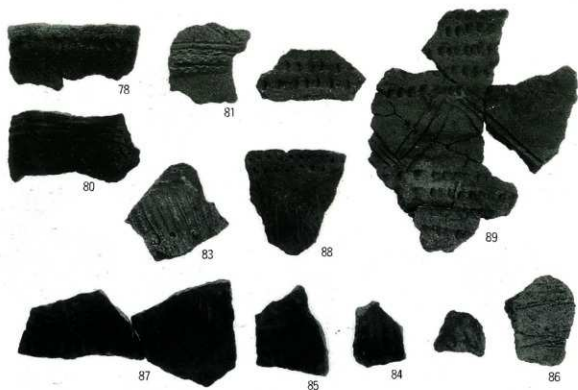
手繪遺跡出土縄文時代早期土器(1) (最上段1-10は5層出土(第144図)、6図はA地区)



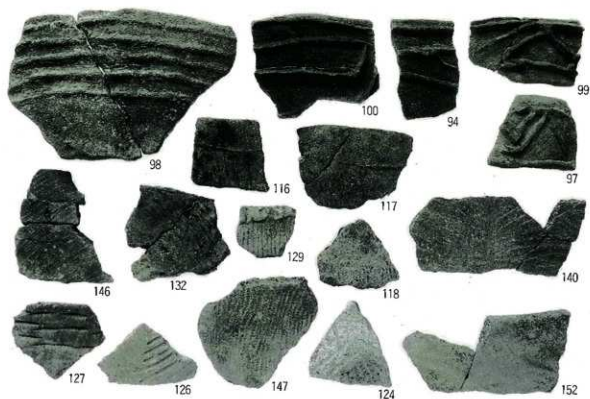
手嶋遺跡出土銅文時代早期土期2) (7・23—145圖、29—146圖)



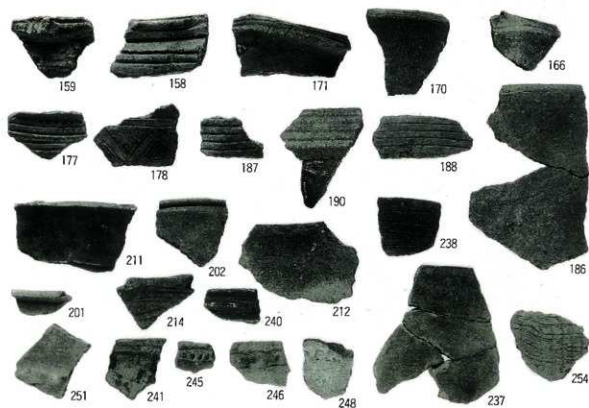
手崎遺跡出土縄文時代早期土器③(第146図~149図)



手崎遺跡出土縄文時代早期土器④(第149図)



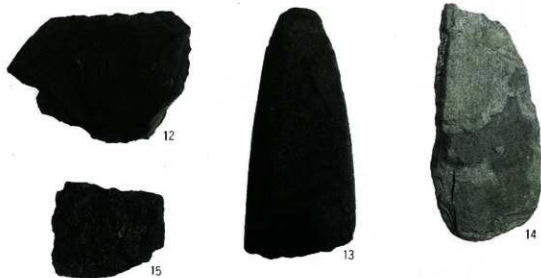
手崎遺跡出土縄文時代 前期土器 (150~152図)



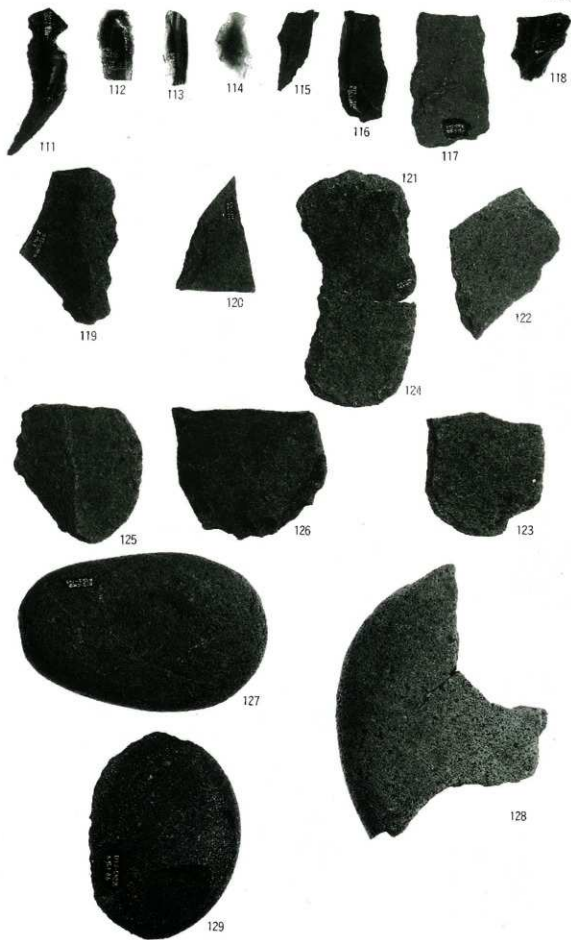
手崎遺跡出土縄文時代 後・晚期土器 (152~156図)



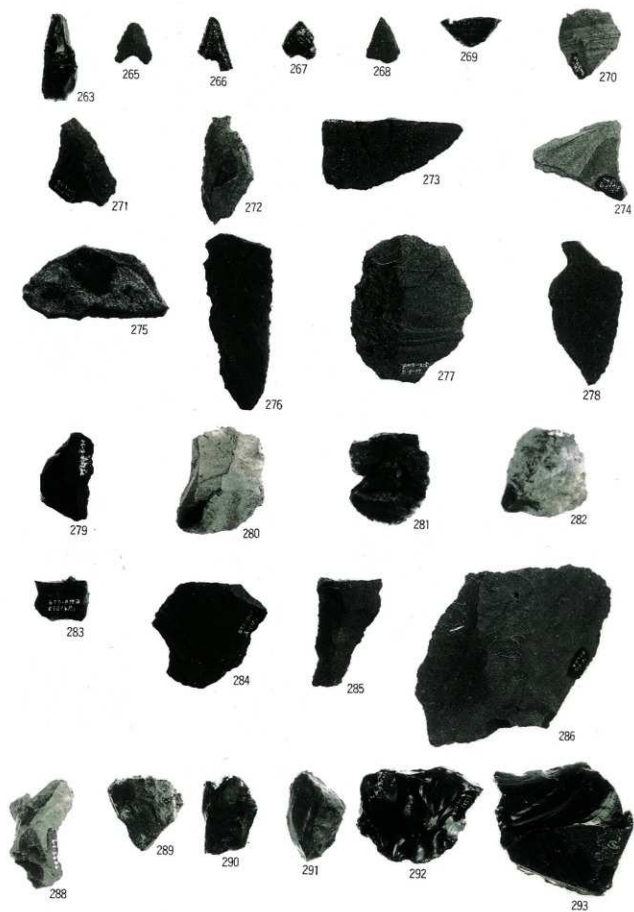
手嶋遺跡A地区出土石器



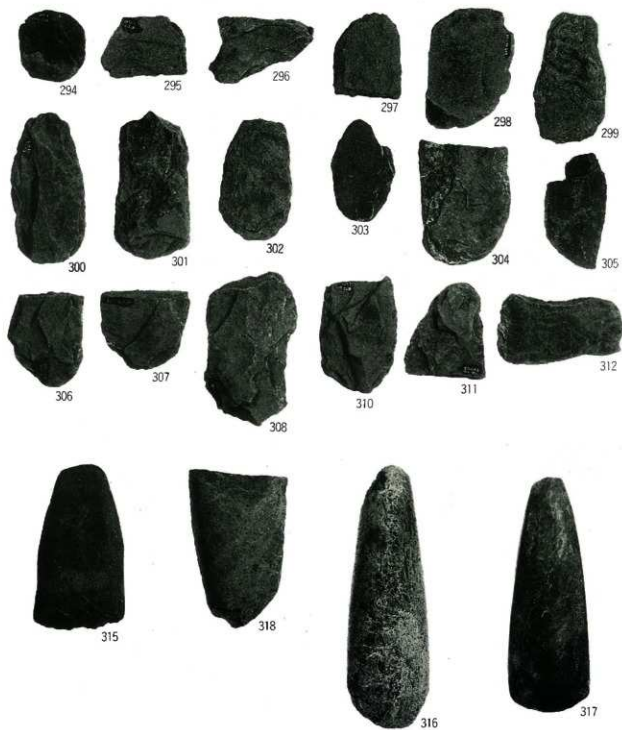
F地区谷調査区出土石器



C地区1号竖穴住居出土石器



手筒遗址C·D·E·F地区包含层出土石器 (1)



手嶋遺跡C·D·E·F地区包含層出土石器 (2)



320



321



322



323

手崎遺跡C·D·E·F地区包含層出土石器(3)

第4章 大部遺跡

第1節、大部遺跡の調査経過と概要

大部遺跡は大山川をはさんで、手崎遺跡の対岸に位置する。調査は本線部分と進入道路部分と作業ヤード範囲におよぶ。斜面及び平坦部全面を、ユンボによる表土剥ぎをおこない遺跡の発見につとめた(第1図)。その結果、進入道路部分と本線平坦面の二ヶ所で遺構を発見した。前者をA地区、後者をB地区とした。A地区は谷状地形の緩い斜面部で、縄文後期の遺物と須恵器を採集したが、

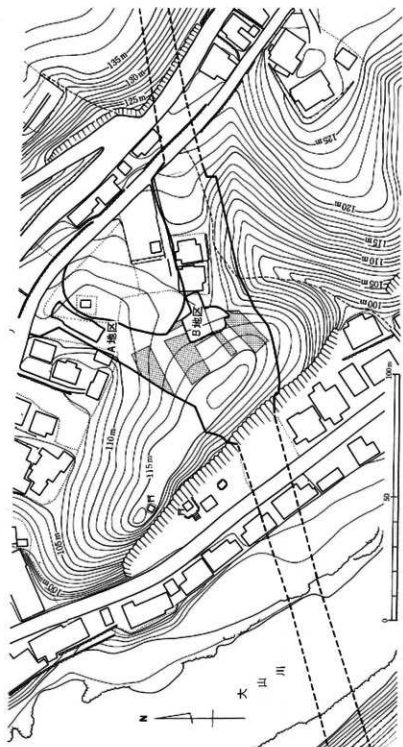
遺構は柱穴が散漫に分布し、建物を構成することはなかった。B地区は尾根の鞍部平坦面上で、奈良時代の備面が焼けて炭層が堆積したいわゆる焼土層5基を検出した。

奈良時代の遺構検出面の下は縄文時代早期から晩期の包含層で、早期は押型文土器の時期である。遺構としては縄文時代早期と推定される集石遺構3箇所と加穴3箇所を検出した。集石は被熱し、伊穴の底は焼土が堆積していた。(田中)

第2節、大部遺跡の立地と現状

(第1図、図版1)

大部遺跡は第1図のように、大山川に向けた独立丘陵風の尾根先端からつづく鞍部に立地する。大山川にせりだすこの小丘陵は、河面からの比高は約25mをはかり、大山川に向かって切り立った崖になっている。西北から南西にのびる約100m程の丘陵頂部は、「大



第1図 大部遺跡の調査区 (1/500)

立地

尾根の鞍部

な安山岩の基盤からなり、現在は稲荷社の神社敷になっていた。その頂上から東側の主丘陵にむかって長さ100mほどの馬の背状の鞍部がある。尾根を挟むように鋭い谷が入るがどちらの奥にも自然湧水はない。かりにこの状態が縄文時代まで変わらなかったとすると、生活用水は大山川の水を利用する以外にない。また遺跡東側の主丘陵にあがって尾根上を南にたどると、天瀬川の五馬台地にいたる。狩猟に適した台地と河川流域の低地の接点という位置にある。(田中)

試掘

第3節、試掘調査
調査はまず本道部分(B地区)と、進入道路部分(A地区)の2箇所をわけ、重機による試掘調査をおこなった。B地区東側の住宅が2棟たっている地点から県道にかけては宅地が階段状に造成されており、遺跡は大きく破壊されていた。取り付け道路部分は谷状地形の傾斜地で、須恵器・縄文土器片が採集されたので本調査をおこなう(A地区)こととし、本道部分では縄文土器が採集された鞍部を本調査することにした(B地区)。なお小丘陵の頂上部や斜面では全く遺構がなかった。(田中)

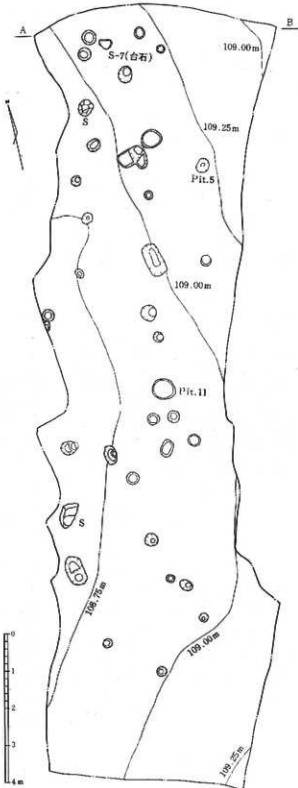
A地区

第4節、遺構と遺物
1)、A地区(第2図、図版1)
東西約5m、南北約20mにわたる調査区を設けて掘り下げた(第2図)。

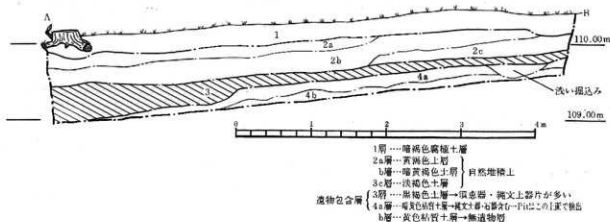
基本層序

基本層序は現表土(第1層)の下に、自然堆積土と考えられる第2層が数10cmにわたって堆積している(第3図・写真1)。この自然堆積土は、黄褐色を基調とする層で、遺物の混入は第3・4層よりかえって少なく、表土(第1層)で採集される近世近代陶磁器もほとんど含まない。比較的短期間にしかも人為を介在させない堆積層と考えられる。その時期は第3層で最も新しい遺物が8世紀の須恵器で、第1層の最古の遺物が近世陶磁器であるから、9-16世紀の中世の自然堆積層と推定される。第2層の堆積時代には、あまりこの地点には人の居住がなかったと考えられる。

第2層の下には須恵器・土器と縄文



第2図 大部遺跡A地区遺構配置図(1/100)



第3図 大部遺跡A地区土層断面図 (1/50)

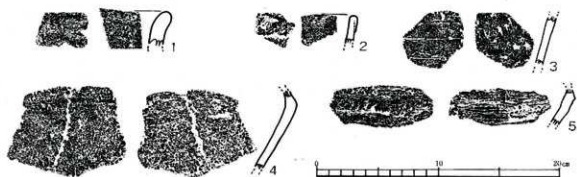


写真1 大部遺跡A地区の層序 (東壁)

土器が混在する黒褐色の第3層が、傾斜が下に向かうほど厚く堆積していた。この第3層は黒色化の状態と出土遺物からみて奈良時代前後の生活層と考えられる。

この第3層を除去して遺構検出作業をおこなった結果が第2図の遺構配置図である。さらに第4b層の縄文土器・石器を含む薄い包含層が厚さ10cmほど堆積し、その下の第4b層には遺物を含まなかった。第3層中から巨大な基盤の岩石が露出するようになり、第4層上面における検出遺構は柱穴とも木の根痕ともつかぬ pit が20箇所ほど検出できた。その中には多くの場合小土器片が1・2点混入していた。pit 5では須恵器の坏身片(第5図1)が、pit 11では弥生土器の类底部片(第5図2)が出土した。これらの pit 群は縄文時代の包含層である4a層に掘り込まれており、弥生時代から奈良時代にわたる人の生活の痕跡の一端を表しているといえる。(田中)

pit 群



第4図 大部遺跡A地区出土土器 (1/3)

出土縄文土器 (第4図、図版7上)

縄文土器

A地区から出土した縄文土器は、縄文晩期を主体としている。ただ、第4図1は縄文早期の無文厚手の土器で、早水台式土器や稻荷山式土器に伴って出土する場合が多い。また2～5の土器は縄文時代晩期の土器であるが、浅鉢の口縁部や肩部の形態は、晩期中葉のものに類似する。深鉢の肩部も「く」の字状に屈曲し、やはり晩期中葉の特徴に近い。(坂本)

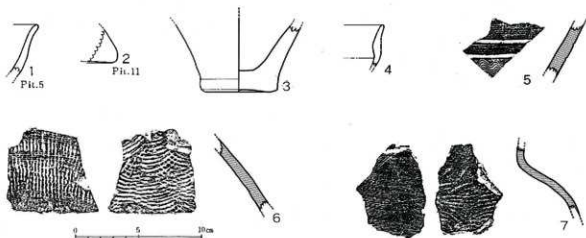
弥生時代以後の出土遺物 (第5図)

須恵器

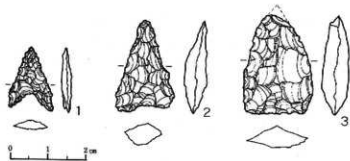
1はpit5埋土出土の須恵器坏身片で、胎土には砂粒は少なくわずかに小石英が目立つ。回転ナデ調整で焼成は良好。淡青灰色を呈し8世紀代のものである。2はpit11埋土出土の弥生時代前中期ごろの裏底部片である。胎土には角閃石・長石の小粒子を多く含む日田在地の胎土を使用している。橙褐色に変色し二次加熱を受けている。3は第3層出土の弥生前ないし中期出土の裏底部片で1～2mm大の角閃石と小石英を含む在地の胎土である。底径は6.0cmほどで内面はナデ調整で外面は2次加熱による橙褐色の変色と剝落で調整は観察できない。4は第3層出土の2・3と同じ在地産胎土を用いた土師器小型鉢片である。ヨコナデ調整で淡褐色を呈する。古墳時代前期である。5・6・7はいずれも第3層出土の須恵器片である。5は壺の口縁片で、2条沈線の下に櫛掻きの波状文をいれ、淡灰色を呈する。6は甕あるいは壺の胴部片で、外面には縦方向の平行タタキ、内面には同心円文がある。濃灰色から濃青灰色。7は甕胴部片で内面にはタタキ成形の同心円文が残り、外面にはカキ目が施されている。濃青灰色を呈する。(山中)

弥生土器

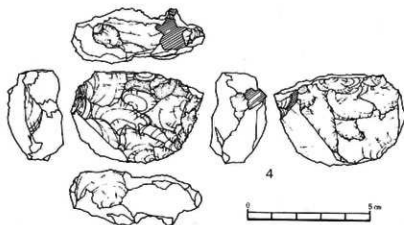
1はpit5埋土出土の須恵器坏身片で、胎土には砂粒は少なくわずかに小石英が目立つ。回転ナデ調整で焼成は良好。淡青灰色を呈し8世紀代のものである。2はpit11埋土出土の弥生時代前中期ごろの裏底部片である。胎土には角閃石・長石の小粒子を多く含む日田在地の胎土を使用している。橙褐色に変色し二次加熱を受けている。3は第3層出土の弥生前ないし中期出土の裏底部片で1～2mm大の角閃石と小石英を含む在地の胎土である。底径は6.0cmほどで内面はナデ調整で外面は2次加熱による橙褐色の変色と剝落で調整は観察できない。4は第3層出土の2・3と同じ在地産胎土を用いた土師器小型鉢片である。ヨコナデ調整で淡褐色を呈する。古墳時代前期である。5・6・7はいずれも第3層出土の須恵器片である。5は壺の口縁片で、2条沈線の下に櫛掻きの波状文をいれ、淡灰色を呈する。6は甕あるいは壺の胴部片で、外面には縦方向の平行タタキ、内面には同心円文がある。濃灰色から濃青灰色。7は甕胴部片で内面にはタタキ成形の同心円文が残り、外面にはカキ目が施されている。濃青灰色を呈する。(山中)



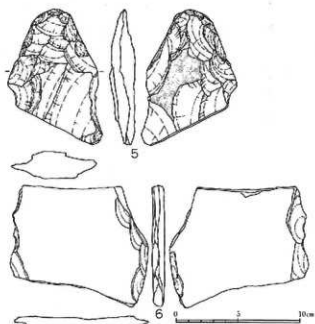
第5図 A地区出土遺物実測図 (1/3) - 弥生時代以後 -



第6図 大部遺跡A地区出土石器(1)―石鏃― (1/1)



第7図 大部遺跡A地区出土石器(2)―石核― (2/3)



第8図 大部遺跡A地区出土石器(3)―打製石斧― (1/3)

出土石器(第6~9図)

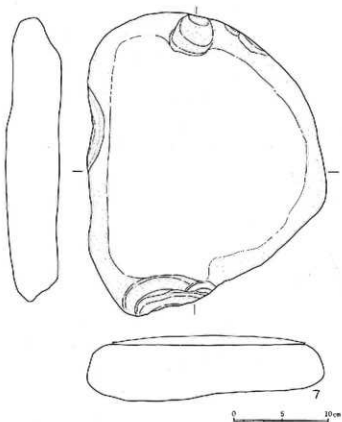
第3、4層から石鏃3点、石核1点、扁平打製石斧2点、台石1点が出土している。石鏃の1点は伊万里産とみられる良質の黒色黒曜石製の小型のもので挟りも深い。他の2点はサヌカイト製の挟りが浅いものと平基のもので、仕上げも粗い。石核は、玉髄質の不定形のものである。扁平打製石斧は板状の安山岩を素材とするもので一つは磨滅の著しい先端部、他は両端を欠くが大型のものである。台石は、長径30cmを越す扁平な安山岩片断をそのまま使用している。(清水)

石鏃

石核

打製石斧

台石



第9図 大部遺跡A地区出土石器(4)―台石― (1/4)

2)、B地区(第10・11図、図版2上)

調査区 調査区は地形と試掘の結果にあわせて鞍部に設定し、十字に4分割し、A1・A2・A3・A4区とした(第11図)。その4区を調査したのち、東北部に調査区を拡張しA3区とした。

層序 調査区全体の層序をまず解説する(第10図・写真2)。第1層の現表土層をほとんど黄褐色軟質土の第2層が広がり、調査区のほぼ全面に厚さ20~30cmである。この層中には縄文時代後期の土器を中心に早前期の土器石器が少数包含されていた(第1・2表)。そして奈良時代の遺構と推定される1~5号土壇はいずれもこの第2層の上面で検出された。以上の点から第2層は縄文時代後期の包含層と評価されるが、その時期の遺構は検出されなかった。第3層は暗褐色軟質土で第2層から漸移的に変化しその境界は明瞭ではない。この層からは縄文時代早期の押型土器や無文土器が出土する。前期の土器もこの層中の上部から第2層にかけてが多い。ただし実測できた3点(第18図21~23)はいずれも第1層に浮いたものであった。

遺構の検出層序 1~3号炉穴は第3層の掘り下げ中、その上部で検出した。また1~3号集石は第2層最下部(第10図3号集石の位置)から第3層上部で検出している。第4・5層は地山礫を多く含む無遺物層であった。(山中)



写真2 B地区、B2区南壁断面層序

1、縄文時代の遺構と遺物(図版2下)

1号集石(第12図、図版3上)

被熱 B1区の西よりの3号穴と2号炉穴の間に位置し、第3層最上面で検出した。集石の規模は南北約70cm、東西約100cmで、不整形に広がるがそれほど密集していない礫群である。大半が被熱礫で河原石を利用している。礫群の断面形態はほぼ水平となっており、新生遺跡の分類の3類にあたる(註1)。集石内には共存する土器等は見当らなかったが、遺跡全体の配置と層序との関係からみて縄文時代早期押型文期の遺構と推定される。

早期

註1、栗田勝弘「新生遺跡」「F藩遺跡・新生遺跡」野津町教育委員会 1984

2号集石(第13図、図版3中)

被熱 B2区南部の2号炉穴の近くに位置する。第2層下部から第3層上部で検出した。南北約80cm、東西約100cmほどのほぼ円形に礫が散布するがあまり密集していない。河原石と地山に含まれる安山岩角礫が混用されており、大半が被熱している。断面形態は水平で1号集石同様、新生遺跡の3類にあたる。集石からは腰舌産と推定される黒曜石片が出たのみで土器を伴っていないが、縄文時代

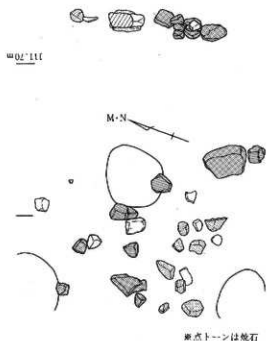
早期の遺構の可能性が高い。

早期

3号集石 (第14回、図版3下)

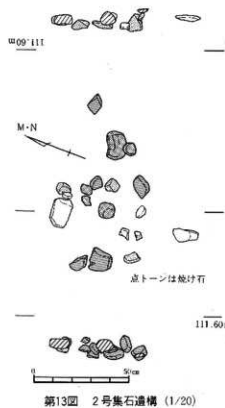
— 集石の中では最も低い位置にあり、鞍部の中心近くに位置する。第2層下部から第3層上部で検出した。集石遺構としてよいか判断にとまどう程度の集中で、被熱していない。南北約60cm、東西約50cmほどの規模でやや凹み状に見える。共存遺物は無く縄文時代早前期の集石遺構かあるいは、後晩期の竪穴住居後の石組みの残骸とも考えられる。

早期?



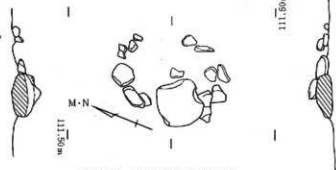
111.70m

第12図 1号集石遺構 (1/20)

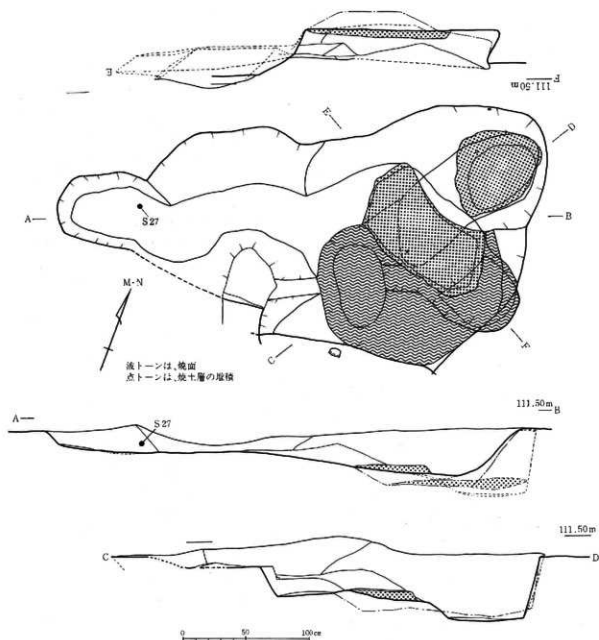


111.60m

第13図 2号集石遺構 (1/20)



第14図 3号集石遺構 (1/20)



第15図 1号炉穴 (1/30)

1号炉穴(第15図、写真3、図版4上)

B1区南端の最も高い位置で検出した。全長約390cm、幅約200cmの西側が狭く浅いのに対し、東側が広く深い。この構造からみて西側が入り口で、東側が炉の熱炕施設といえる。東部はその底から壁面にかけて壁が広い範囲で焼けており、第15図

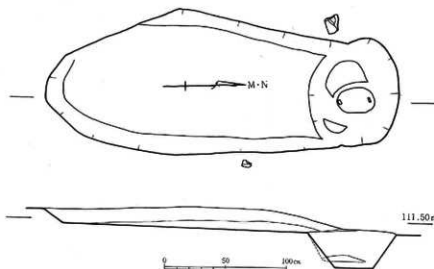
燃焼部



写真3 1号炉穴遺物出土状態(南から)

のDとFの二方向に深い掘り込みが伸び、その底に厚さ10cmあまりの焼土層の堆積がみられた。この炉穴の焼土層上の堆積土は上下二層にわかれ、下部は暗褐色粘質土が堆積し1cm大の焼土片を多量に含んでいた。上層は同じく暗褐色粘質土だが黄色土や黒色土のブロックを含み、焼土片は少ない。少量の縄文時代早期の土器小片（第18図10）と磨石（第23図27）が出土した。時期は縄文時代早期と考えられる。

早期



第16図 2号炉穴 (1/30)

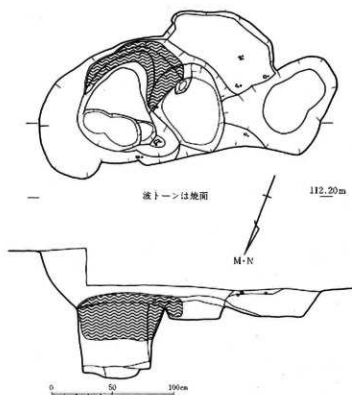
2号炉穴 (第16図)

調査区の南端で第2層を削いだ時点で検出した長楕円形の土壌である。北端が円形に深く掘り込まれている。全長約290cm程で幅は約110cmであるが、土壌中には焼土面や焼土は見つからな

炉穴?

かった。しかし一方が低くなるという形態的特徴とその規模、出土した土器からみて縄文時代早期の遺構と推定されるので炉穴とした。埋土は暗褐色粘質土の単一層で縄文時代の上器片が数点混入していた（第18図11）。

早期



第17図 3号炉穴 (1/30)

3号炉穴 (第17図、図版4下)

1号炉穴と2号炉穴の中間の第3層上面で検出した炉穴である。全長約245cm、幅約100cmで4つの土壌が複合したような形状である。最も深い土壌部の片側面とその上面が焼けて焼土が堆積していた。埋土の最下層には焼土混じりの暗褐色土が堆積している。埋土上層には数点の土器小片（第18図13）と石片が1・2

早期

点検出される。上器片と層序からみて縄文早期の炉穴と推定される。

(田中)

包含層（第11図、図版2中）

層序の解説でふれたように第2層には縄文時代後晩期の土器片が多く、第3層には縄文時代早期の土器片を多く含む。しかしその層序の境界は明瞭ではなく、遺物のレベルも必ずしも古いものが下層にあるというわけではなく、単に数量的傾向を表わすにすぎない。

土器の分布

縄文土器の分布の傾向は、早期の押型文土器・無文土器は全体的に鞍部の平坦部に濃密に分布し、集石遺構や炉穴の周辺では少ない。集石や炉穴が集中する部分が、生活空間内の調理などの食生活に密接に関わる空間だとすれば、鞍部の土器が集中する空間は土器片が最終的に廃棄される施設があった場所、すなわち調査では認識されなかったが浅い炉穴遺構などの住空間が広がっていたと推定される。同じ傾向は前期・後期・晩期の土器の分布にも認められる。



(田中) 写真4 縄文早期土器出土状態 (B I区-2)

出土縄文土器（第18・19図、図版7上）

大部遺跡では、古墳時代後期から奈良時代の遺構検出面が、縄文時代の遺物包含層になっている。このため、A地区、B地区とも縄文土器が出土した。また、この層からは、縄文早期の集石遺構3基も検出されている。

早期

押型文土器

B地区からは縄文時代早・後・晩期の土器が出土している。縄文早期の土器は、口縁部の形態、押型文の施文方向、内面の原体条痕の有無、押型文の原体の大きさ、底部の形態などが時期決定の大きな要素となっている。そこで、B地区出土の押型文土器を見ると、山形文は文様が小さく、第18図6だけが縦方向の施文で、ほかは横方向の施文である。こうした押型文土器は、稲荷山式土器・早水台式土器・下菅生B式土器と呼ばれる土器型式の範疇に入るものである。しかし1・3の口縁部の内面には原体条痕も押型文も施文されておらず、さきの土器型式の概念とは異なる面も見られる。ところで、楕円文は山形文に比較すると、大粒であり、新しい要素を持っている。2は、外反する端部を欠く口縁部の資料であるが、大粒の楕円文が横方向に施文され、内面には太い原体条痕が施文されている。このような特徴は、田村式土器に近いものである。

以上のような文様要素から、B地区の押型文土器は早水台式土器から田村土器にかけての時期が考えられる。

条痕文土器

第18図10-19の条痕文土器のうち、胎上や色調・器調整の方法の類似性から、13-19は同一個体と判断する。また、口縁部の10-12もその可能性が高い。これらの土器は、縄文前期の森B式土器に伴うか、先行する条痕文土器である。

曾根系

第18図20は器面に連続爪形文が施文されていることから、縄文前期の瀬戸内系土器の可能性が高い。また21・22は器面に短沈線が連続して施文されており、縄文前期の曾根式土器の系統とと思われるが、文様施文が退化しており、後出的なものとする。

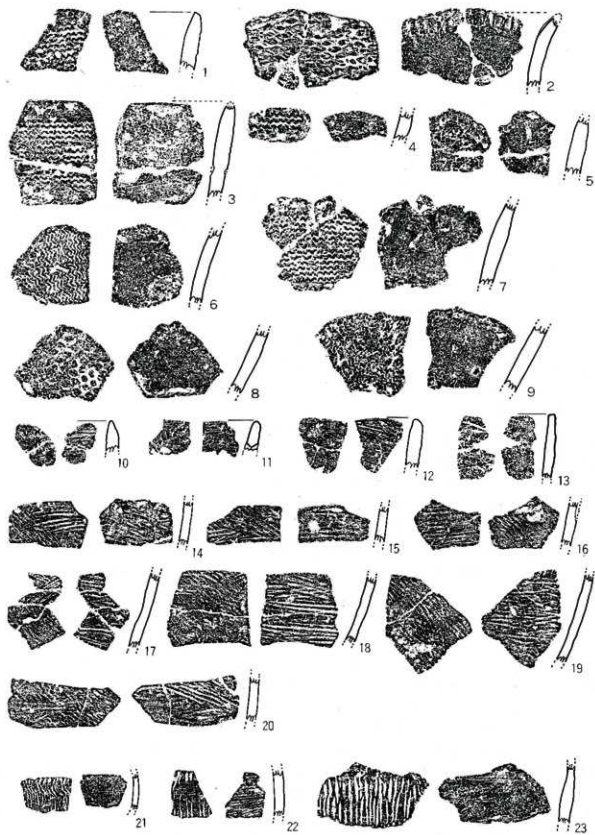
後期

三方田式

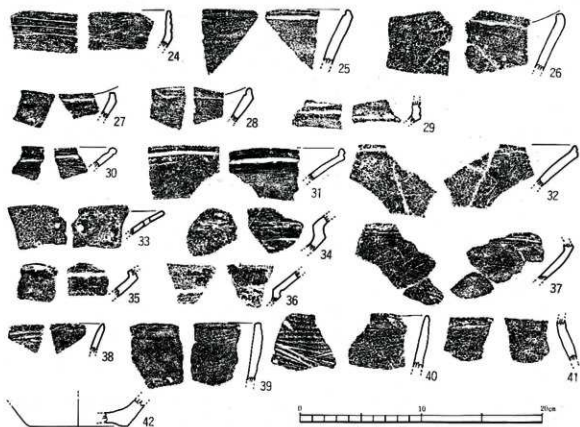
第19図は24-29は25-28のように口縁部内面に沈線が1条めぐることや、24のように口縁部外面に沈線が3条めぐることなどから、縄文後期の三方田式土器に属する。類似する土器相を出土する遺跡としては、大分県大野町駒方C遺跡があり、これらの土器がセットとしてとらえられている。

晩期

第19図31-33は縄文晩期の浅鉢形土器である。口縁部の31と32を比較すると、端部の立ち上がり、32は強く外面に沈線が1条めぐることが、31は弱い。このことから、32が31に比べ古式と考える。



第18图 大部遺跡B地区出土土器(1) (1/3)



第19図 大部遺跡B地区出土土器(2) (1/3)

また37~42の無文土器・条痕文土器・底部の資料は、こうした、晩期の土器に伴う可能性が強い。

以上のように大部遺跡から出土した縄文土器は、数量は少ないが、縄文早期・前期・後期・晩期と多時期にわたる。こうした様相は、筑後川の支流である大山川を挟んで対峙する手崎遺跡と同様であり、各時期を通じて、同じ生活圏として存在していたものと考えられる。(坂本)

出土石器 (第20-24図、図版8)

石鏃 (第20図)。12点の石鏃が出土している。石材別にみると、姫島産黒曜石2点(1・5)、伊万里産黒曜石3点(8・10・12)、サヌカイト7点(2・3・4・6・7・9・11)となり、サヌカイトの比率が高い。形態的にみると、共通して抉りの深いものであるが、1・2・3についてはやや浅い。4・5・6は、脚部の先端部が尖るもので、9・11は半平坦になる。7は円脚としてよいものである。12は典型的な嶽形鏃、仕上げが細かく入念である。11も同じ形態だと思われる。

その他の剝片石器 (第21図13-16、18-20、第24図28・29)

13は伊万里産黒曜石製の掻器(エンドスクレイパー)である。自然面を残した幅広の剝片を素材とするもので半円状の刃部をもつ。また、側辺のエッジは使用痕とみられる細かい剝離面が観察される。14、15・18・19・20・28・29は2次加工のある剝片。18、19・29は、薄手の剝片を利用した片面加工、28は両面加工のサイドスクレイパーである。19、28・29はサヌカイト、18は珪化木製である。19・28のサヌカイトは風化度が進んでおり、29は風化が新しい。20はチャート製の剝片の薄くなった端部に片面から細かい剝離を施しているもので、彫飾的な用途が考えられる。

石核 (第22図21-25)

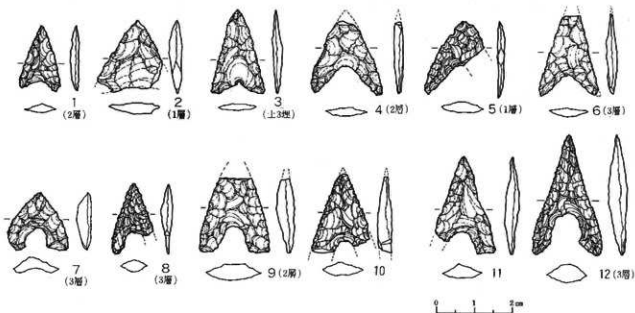
21は剝片利用、22は円礫面を多くのこす石核、24は打面を二面もち、25は単一打面のほぼ円筒形をなす石核である。他にやや大型の珪質岩製の石核がある。これらは、亜角礫の一端に打面形成を施した後、数回の剝片作業を行っているが、材質そのものが均質でないため、良好な剝片は得られなかったと考えられる。

磨製石斧 (第21図17)

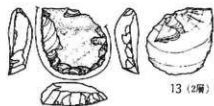
磨製石斧の刃部に近い部分の破片である。破片となった後に、折部以外の三辺に2次的な加工を加えており、裏面が内湾するその形状からみて掻器として使用したものとみられる。

磨石ほか (第23図26、27)

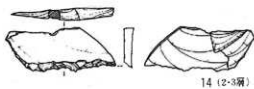
26は、片面に磨面をもつものであるが、それほど顕著ではない。27は、片面と側面の一方に磨面、他方に敲面をもつ敲石兼用のものである。これはまた、火熱による変成をうけて大きくヒビ割れている。集石炉に二次的に利用されたものとみられる。



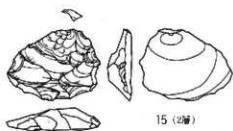
第20図 大部遺跡B地区出土石器(1)一石鏃一(1/1)



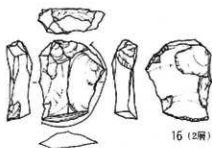
13 (2層)



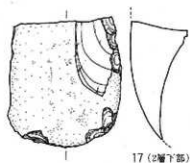
14 (2-3層)



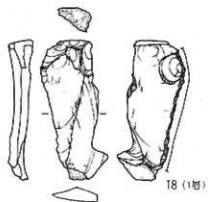
15 (2層)



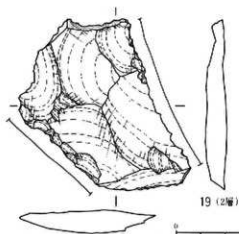
16 (2層)



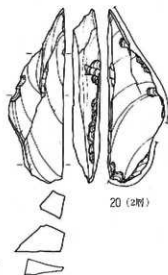
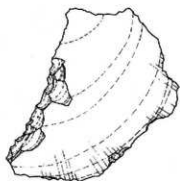
17 (2層下部)



18 (1層)

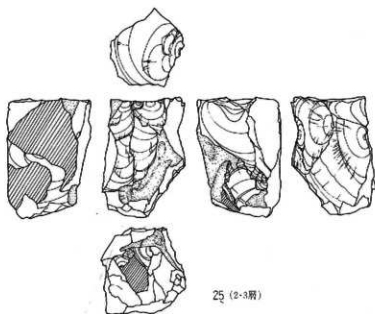
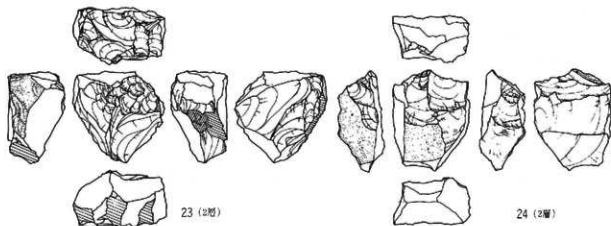
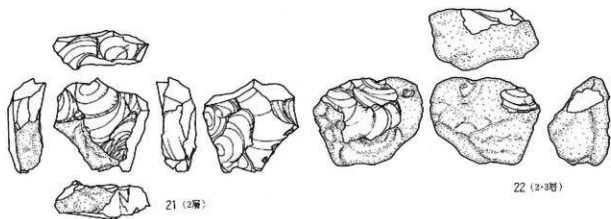


19 (2層)



20 (2層)

第21圖 大部遺跡B地区出土石器(2)一 (2/3)



第22图 大部遺跡B地区出土石器(3)-(2/3)-石核-

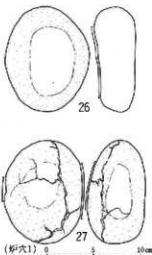
小結

A地区

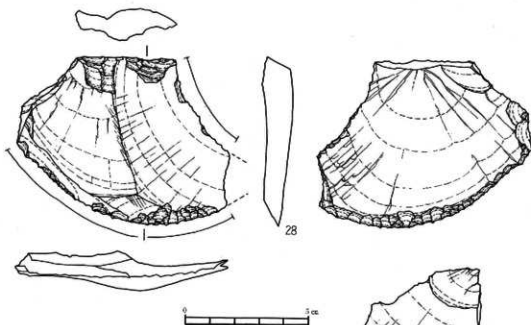
A地区の石器については、出土点数も少なく、時期の特徴を示す石器については、2点の扁平打製石斧が目立つ程度である。

B地区

B地区については、比較的古土遺物が多くいくつかの特徴が指摘される。その中で、石鏃は、3種の石材が使われており、形態的に鍔形鏃をはじめ挟りの深いものがあり、縄文早期に大半が属するものとみられる。石材の黒曜石については、姫島産と伊万里産が使われているが、後者が優勢である。サヌカイトの産地については不明である。スクレイパー類については、大型と小型のものに大別され、前者はサヌカイト製が使用されている。小型のものは、形態・石材とも多様である。その中で黒曜石製の搔器(エンド・スクレイパー)は加工が人念であり、使用痕も認められる。剥離面の風化度からみても縄文早期の段階のものとみられる。サヌカイト製のスクレイパー類はいずれも大型の幅広剥片のエッジに両面もしくは片面に加工を加えたものである。形態的には、削器とされるものであるが、剥離面の風化度にかなり差がある。これは時期差によるのかあるいはサヌカイトの質(産地)によるのかは判断できない。



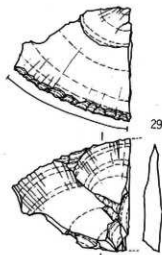
第23図 大部遺跡B地区
出土石器(5)
- 箭石1 - (1/4)
▲矢印は使用痕を示す



第24図 大部B地区出土石器(6)-弥生時代?- (2/3)

石材産地

石材の産地について付言してみる。黒曜石については、前述のとおり2ヶ所に限られる。サヌカイトについては、2ヶ所以上の可能性があるが、佐賀県多久、小城地方が主とみられる。珪化木等の珪質石類については、筑後川水系の河床の転漣としてみられるようであるので、とくに遠地に原産地を求めることはないと思われる。ただ、この石材は、材質的に均質なものが得にくいものであったようであり、そのため遠隔地の黒曜石・サヌカイトの剥片石器素材への依存が高いものであったと考えられる。(清水)

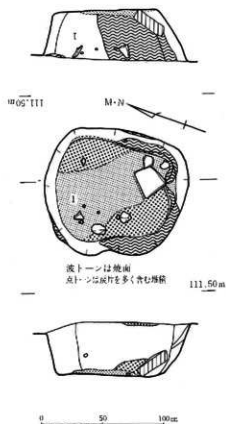


2、奈良時代の遺構と遺物

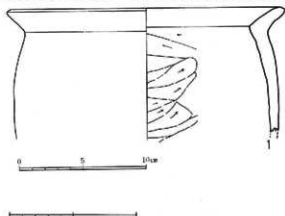
1号土壌 (第25図、図版5上中)

A2区北側の標高111m付近のやや谷部よりに位置する。長軸約120cm、短軸約100cmの不整形で深さ約50cmの箱形に掘られた土壌である。壁の側面のかなりの部分が被熱しているが、底面は炭化物層の堆積が厚く広がってその下は焼けていない。炭層を底面にこしらえて燃焼部を作っていると考えられる。なんらかのものを焼く機能を実行することを目的に掘削された土壌である。土壌の下層には黒褐色の軟質土が堆積

焼土壌



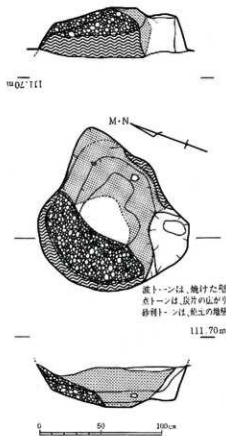
第25図 1号土壌 (1/30)



第26図 大部遺跡土壌1出土土器 (1/3)

し被熱した礫、炭、焼土に土器片を含む。上層は暗黄褐色軟質土で下層と同じ内容である。上下層とも土壌の機能停止後の堆積である。土器は破片として混入した状態である。1は土師器根製の甕で、内面ヘラケズリ成形で、外面はナデ調整で仕上げる(第26図1)。この形態からみて奈良時代の土器である。この土壌は奈良時代に機能した、ものを焼く施設と考えられる。

土師器甕



第27図 2号土壌 (1/30)

2号土壌 (第27図、図版5下)

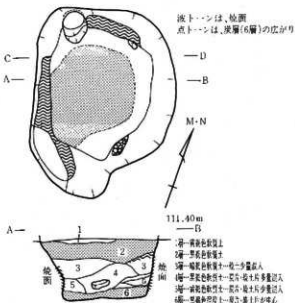
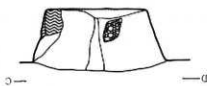
A1区の谷の落ち際に位置する。長軸約120cm、幅約100cm程の不整形形の土壌で、深さ約30-40cmと中央を深くした箱形に掘り込まれている。側壁が被熱して焼土面となっており、底面には厚さ2-3cmの炭化物層が堆積している。しかし底面そのものは焼けていない。1号土壌と同じ状態である。西側すなわち鞍部平坦面方向から流れこむように焼土層が堆積していた。また土中から数点の上器片が流入していたが、いずれも内面ヘラケズリの土師器片で1号土壌と同じ時期と推定される。機能もほぼ同一であろうと推定される。

焼土壌

3号土壙 (第28回、写真5、図版6上)

焼土壙

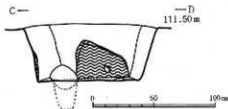
A3区1号土壙の近くに位置する。長軸長約155cm、短軸長約120cmをはかる。深さ約50cm程で底面が平坦な箱形をなす。1・2号土壙同様に側面の一部が被熱し、底部全面に数cmの厚さで炭化物を多く含む6層が堆積する。その下は焼けておらず火の使用は明らかで、この土壙の掘削の目的がなにかの燃焼すなわち炉の機能をはたすために設けられたことは明らかである。廃絶直後に5層土が投棄され4・3・2・1層の順で堆積したと推定される。1層はうめ戻したようなきれいな黄褐色軟質土である。埋土には鏝が混入しているのみで土器はみあたらない。そのため時期の特定は難しいが、土壙の内容が1・2号土壙と同様なので奈良時代の遺構と推定される。



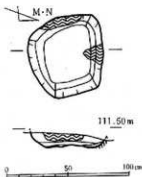
4号土壙 (第29回、図版6中)

焼土壙

A1区に位置し、2号土壙と5号土壙の間にある小型の土壙である。長軸長約75cm、短軸長約60cm程の膨らんだ方形で、深さ10cmほどの底部が残存していた。他の土壙と同じく側面が2箇所焼けており、底面は焼けずに炭化物層が広がっていた。1~3号土壙と同じ性格・時期の土壙とみられる。



第28回 3号土壙 (1/30)



第29回 4号土壙 (1/30)

波トーンは焼けている範囲

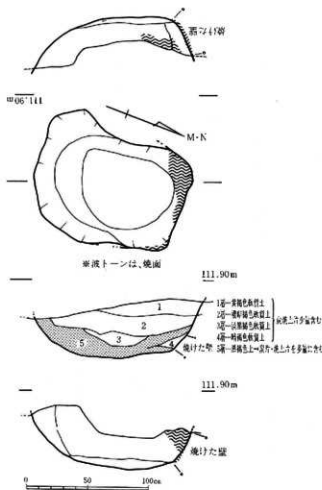


写真5 B地区A1区3号土壙層序 (南から)

5号土壌 (第30図、図版6下)

A1区の南端、市の谷の落ち際に位置する。不整な長方形の土壌である長軸長約130cm、短軸長約110cm、深さ約50cmである。北側の壁面上部が焼けている。最下の6層は炭・焼土泥じりの黒褐色土層で、3・2・1層と順次堆積し、1層は3号土壌の1層と同じく埋め戻したような黄褐色軟質土が堆積していた。3号土壌の埋積状態とよく似ている。出土土器等はないが、土壌の構造等からみて、ほかの上層と同じく奈良時代の遺構とみられる。

焼土壌



第30図 5号土壌 (1/30)

小結 土壌はいずれも長軸長100cm、短軸長80cm、深さ50cmほどの長円形の土壌の底部に炭層が堆積し、側面は赤く焼けていた。用途は不明だが炭窯などと関係するかもしれない。火葬窯という可能性も考えられたが、埋土中に人骨片などはまったく検出されなかった。近年大分市の松岡地区の山地の遺跡群から、居住遺構とも墓地とも異なると考えられ

奈良時代

る以上のような焼土壌が数多く発見されており、時期は奈良時代から平安時代の古代の遺構と推定されている(註1)。大部遺跡の1-5号土壌は、住居跡などの生活遺構を伴わない点からみて、同じように奈良時代の山地の森林資源の利用に関わる施設と推定される。(田中)

目的?

註1、「スポーツ公園建設に伴う調査」『大分県埋蔵文化財年報』6 大分県教育委員会 1998

5). まとめ

大部遺跡の調査によって判明した点を以下に箇条書きして、まとめにかきたい。

- ① 縄文時代の早期・前期・後期・晩期の土器が出土し、中期をのぞいて、繰り返し小規模な居住地として利用されていたと推定される。手崎遺跡の居住時期とはほぼ重なっており、大部遺跡と手崎遺跡の縄文時代集落は密接な関係にあったといえる。
- ② 縄文時代早期の遺構と遺物の分布の特徴は、一般的な早期押型文期の遺構配置と共通する。すなわち、鞍部の最も低い位置が遺物分布の密度が高く、市側の尾根頂部に向かいやや高くなる位置に1-3号集石があり、さらにその外縁に炉穴が分布する。遺構の配置と遺物分布のこのような関係は、県内では大野郡野津町の新生遺跡(註1)や皆無山遺跡(註2)の遺構配置と規模こそ異なるが共通の特徴といえる。大部遺跡のような小規模な遺跡でも土器集石・集石遺構・炉穴がやや場所をこなしながら配置され、縄文時代早期押型文期の遺構配置のパターンを示すことは、押型文期の生活様式の一端を示すものとして興味深い。

縄文時代

早期の小集落

奈良時代

- ③ 弥生・古墳時代の遺物が数点確認されているが、明確な遺構を残していない。
- ④ 奈良時代に焼土壇5基が作られている。併存していたものか、順次作り替えていったものか、不明であるが、周辺に生活遺構を残さない点からみて、炭焼き等の森林資源の利用を目的とした施設と推定され、奈良時代の山地の開発の一面を伝える資料と推定される。
- ⑤ 以後近世までこの場所が積極的に利用された形跡はない。

註1、栗田勝弘「新生遺跡」「下藤遺跡・新生遺跡」野津町教育委員会 1984

註2、坂本嘉弘「菅無田遺跡」野津町教育委員会 1986

第1表 大部遺跡出土縄文土器観察表

A地区

遺物番号	出土位置	時期分類	文様の特徴と器面調整の方法			胎土				備考
			外面	色調	内面	色調	角閃石	長石	G奥	
第4区 (P212)	1 3・4層	早期	横ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	2 3・4層	晩期	ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		
	3 3・4層	晩期	ナデ→浅い沈線	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	4 3・4層	晩期	ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		
	5 表深	晩期	条痕→横ナデ	茶褐色	条痕→横ヘラ研磨	黒色	○	○		

B地区

遺物番号	出土位置	時期分類	文様の特徴と器面調整の方法			胎土				備考
			外面	色調	内面	色調	角閃石	長石	G奥	
第18区 (P221)	1 1層	早期	山形文	黄褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	2 A-2区3層	早期	粗大横門文	茶褐色	厚底条痕→ナデ	茶褐色	○	○		
	3 A-1区3層	早期	山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	4 A-2区3層	早期	山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	5 A-1区3層	早期	ナデ	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	6 A-2区3層	早期	山形文	暗褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	7 A-1区3層	早期	山形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	8 A-2区3層	早期	横門文	茶褐色	横ナデ	暗褐色	○	○		
	9 A-2区3層	早期	粗大横門文	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		
	10 1号炉穴	早期	ナデ	赤褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○		底部近く 伊豆園辺土上
	11 表椽	早期	ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○		焼成後穿孔
	12 2号炉穴	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○		
	13 3号炉穴	早期	横方向の熟糸文	茶褐色	横ナデ	暗褐色	○	○		
	14 A-2区2層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.13-No.19例-個体
	15 A-2区2層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.15-No.19例-個体
	16 A-1区3層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.13-No.19例-個体
	17 A-2区2層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.13-No.19例-個体
	18 A-2区2層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.13-No.19例-個体・スス付者
	19 A-2区2層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.13-No.19例-個体
	20 A-2区2層	早期	条痕→ナデ	茶褐色	条痕→ナデ	茶褐色	○	○	金雲母	No.15-No.19例-個体・スス付者
	21 1層	前期	連続爪形文	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		表土
	22 1層	前期	ナデ→母洗線文	黄褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		表土
23 1層	前期	ナデ→母洗線文(母洗)	茶褐色	横ナデ	茶褐色	○	○	◎	表土	
第19区 (P222)	24 A-1区2層	後期	細い沈線→ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	25 A-2区2層	後期	横ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	26 A-1区2層	後期		暗褐色	粗いヘラ研磨	黄褐色	○	○		
	27 A-2区3層	後期	横ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	28 B-2区2層	後期	横ヘラ研磨	茶褐色	沈線→ヘラ研磨	茶褐色	○	○		
	29 A-2区2層	後期	横ナデ・ヘラ研磨	暗褐色	横ナデ	明褐色	○	○		
	30 1層	晩期	横ヘラ研磨	茶褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		表土
	31 A-2区2層	晩期	横ヘラ研磨	黒褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○		
	32 A-3区2層	晩期	磨滅	暗褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○		
	33 A-3区2層	晩期		黒褐色		黒褐色	○	○		磨滅・焼成後穿孔
	34 A-3区2層	晩期	磨滅	横ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○	
	35 A-3区2層	晩期	磨滅	横ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○	
	36 A-3区2層	晩期	磨滅	横ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○	
	37 B-2区2層	晩期	磨滅	横ヘラ研磨	明褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○	磨滅
	38 A-1区3層	晩期	条痕→ナデ	明褐色	横ヘラ研磨	茶褐色	○	○		磨滅
	39 B-2区2層	晩期	横ナデ	明褐色	横ナデ	茶褐色	○	○		
	40 1層	晩期	条痕→ナデ	茶褐色	横ヘラ研磨	黒褐色	○	○		表土
	41 1層	晩期	ナデ	茶褐色	ナデ	茶褐色	○	○		
42 B-2区2層	晩期	ナデ	明褐色	ナデ(スス付者)	茶褐色	○	○		黒曜石	

第2表・大部遺跡出土石器観察表

A地区

遺物番号 (P213)	遺構	器種	石材	規格 (1つまたは破片・単位[cm])			重量 (単位g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
第6回	1 3・4層	石鏃	黒色黒曜石	1.7	1.2	0.2	0.3	
	2 3・4層	石鏃	サスカイト	2.4	1.5	0.6	1.6	
	3 3・4層	石鏃	サスカイト	(2.6)	1.8	0.7	(3.3)	先端部欠損
第7回	4 3・4層	石核	珩	3.8	5.4	2.3	50.0	
第8回	5 3・4層	扁平打製石斧	輝石安山岩	(10.9)	7.7	2.1	(150.0)	全面風化
	6 3・4層	扁平打製石斧?	輝石安山岩	(9.8)	11.2	1.0	(150.0)	全面風化
第9回	7 3・4層	台石	安山岩	25.5	32.1	6.7	8500.0	顕著な磨滅は認められない

B地区

遺物番号	遺構	器種	石材	規格 (1つまたは破片・単位[cm])			重量 (単位g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
第20回 (P223)	1 2層	石鏃	椋島産黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.4	
	2 1層	石鏃	サスカイト	(1.9)	(1.7)	0.4	(0.9)	両かえり欠損
	3 3号土塚	石鏃	サスカイト	2.2	1.4	0.3	0.7	
	4 2層	石鏃	サスカイト	(1.9)	1.9	0.3	(0.7)	先端欠損
	5 1層	石鏃	椋島産黒曜石	1.9	(1.6)	0.3	(0.5)	右かえり欠損
	6 3層	石鏃	サスカイト	(2.1)	1.5	0.3	(0.7)	先端欠損
	7 3層	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.6	
	8 3層	石鏃	黒色黒曜石	1.8	(1.1)	0.3	(0.4)	右かえり欠損
	9 2層	石鏃	サスカイト	(2.0)	1.9	0.5	(1.4)	先端欠損
	10 2・3層	石鏃	黒色黒曜石	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.9)	先端・両かえり欠損
	11 1層	石鏃	サスカイト	2.6	(1.6)	0.4	(1.0)	左かえり欠損
	12 3層	石鏃	黒色黒曜石	3.2	1.9	0.5	1.3	
第21回 (P224)	13 2層	スクレイパー	黒色黒曜石	2.7	2.7	1.0	6.0	顔器(エンドスクレイパー)
	14 2・3層	2次加工剥片	ガラス質安山岩	1.8	4.5	5.0	4.2	
	15 2層	2次加工剥片	ガラス質安山岩	2.8	3.8	1.0	-	
	16 2層	2次加工剥片	鉄石英	3.3	2.7	1.0	9.0	
	17 2層下部	磨製石斧	安山岩	(5.3)	4.6	2.3	(51.0)	刃部の一部
	18 1層	2次加工剥片	珩化木	5.7	4.7	1.0	8.0	削器
	19 2層	スクレイパー	サスカイト	8.1	5.9	0.9	35.0	削器
第22回 (P225)	20 2層	2次加工剥片	チャート	7.1	2.3	1.1	16.0	
	21 2層	スクレイパー	珩化木	3.9	3.9	1.6	20.0	石核?
	22 2層	石核	珩質岩	3.5	4.5	2.5	39.0	
	23 2層	石核	鉄石英?	3.7	3.8	2.3	33.1	
	24 2・3層	石核	鉄石英(珩化木?)	4.1	3.1	1.9	23.0	
	25 2・3層	石核	鉄石英?(珩化木)	4.9	3.4	3.4	71.9	
第23回 (P226)	26 3層	磨石	安山岩	11.1	9.0	4.4	588.7	
	27 1号炉穴	磨石	安山岩	10.8	8.2	6.1	696.0	
	28 2層下部	スクレイパー	サスカイト	(9.3)	6.9	1.6	(63.0)	一部欠損(弥生時代?)
第24回 (P226)	29 2・3層	スクレイパー	サスカイト	(4.7)	4.6	0.8	(13.0)	削器(サイドスクレイパー) (弥生時代?)

大部遺跡



大部遺跡
遠景
(東から)



手前A地区
向こうB地区
(東から)



A地区
発掘状態
(西から)

図版 2



B地区全景
完掘後
(南西から)



B地区
第2・3層遺物
出土状態
(南から)



B地区
縄文時代
早期遺構の
集中(B1区)
(南南東から)

B地区
1号集石遺構
(北から)



B地区
2号集石遺構
(北から)



B地区
3号集石遺構
(東から)



図版 4



B地区、1号炉穴 完掘後 (南から)



B地区、3号炉穴遺物出土状態(西から)

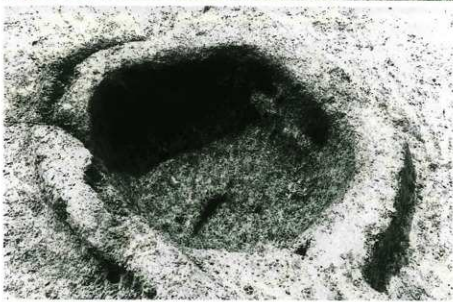


B地区、3号炉穴 完掘後(東から)

B地区
(A2区)
1号土窟
出土状態
(東から)



B地区
1号土窟
完掘後
(東から)



B地区
(A1区)
2号土窟
(北西から)



図版 6



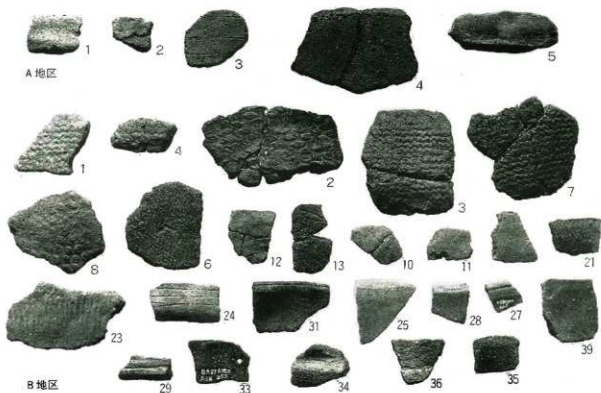
B地区A3区
3号土坑
(南から)



B地区A1区
4号土坑
(西から)



B地区A1区
5号土坑
発掘後
(西から)



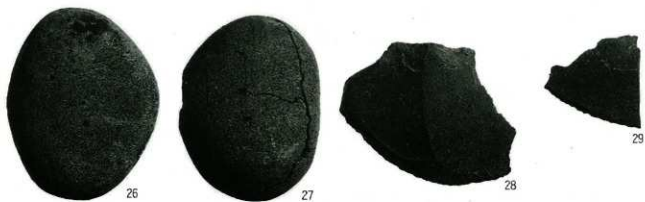
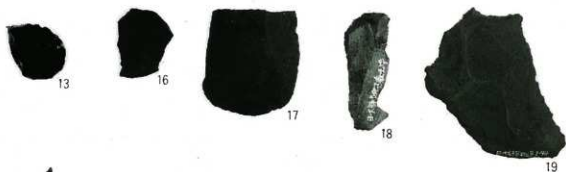
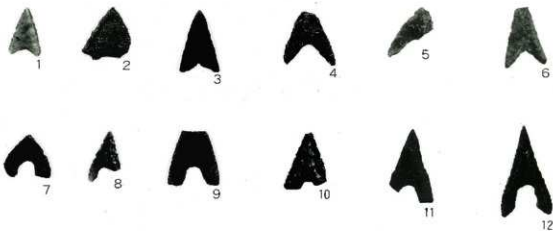
大部遺跡出土縄文土器 (1-5はA地区 1-39はB地区)



大部遺跡A地区出土石器 (1-3は、打製石核)



大部遺跡A地区出土石器 (4・石核 5-6打製石斧)



大部滙跡B地区出土石器

第5章

自然科学的分析

日田市手崎遺跡の花粉分析

畑中 健一
(北九州大学名誉教授)

大分県日田市大字高瀬字手崎に所在する手崎遺跡のD地区谷調査区第2トレンチの壁面から採取した試料について花粉分析を行い、本遺跡周辺の古植物について考察した。

分析試料と分析法

分析に供した試料は、トレンチ壁面の表層(5cm: I層)および90cm～220cmの堆積物(Ⅷ～XIV層)から10cm間隔に採取し、上位から順次試料番号(No. 1～15)を付した。

これらの試料は室内で風乾後破砕して、アセトリンス法により処理を行い、グリセリン・ジェリーに包埋した。

検鏡は通常400倍の光学顕微鏡で行なったが、イネ科花粉については、通常の検鏡が終了した後、位相差顕微鏡(倍率: ×1000)で観察を行い、イネ属(型)花粉と野生型花粉を識別した。

分析結果の表示

分析結果は、各試料ごとに検出された樹木花粉(Arboreal pollen; AP)の総数を基数とし各分類群(属もしくは)の百分率を求め、表1に示した。また、主要花粉・胞子の清長は図1(花粉ダイアグラム)に示した。

結果と考察

分析に供した15点の試料のうち、No. 2～5(Ⅷ～IX層)、No. 7(XI層)、No. 11(XII層c)、No. 13～14(XV層)、No. 15(XVI層)からは化石花粉・胞子は検出されなかった。

本遺跡の堆積物は、その花粉組成から次の2花粉帯に区分することができる。これを便宜的に下位堆積物をTe-1花粉帯(-190～-130cm: XII d～X層)、表層堆積物をTe-2花粉帯として考察する。

Te-1花粉帯

本帯(試料12-10-9-8-6)の花粉群集は照葉樹林要素のアガシ亜属の圧倒的優占によって特徴づけられる。シイノキ属は2～6%の出現率を示し、-160cmより下位の層帯ではカキノキ属が13～46%出現するに際し、マツ属の出現率は低く、モミ属は-170～-130cmの層帯に限って数%出現するに

すぎない。草本類は劣性で、-130cmの層準でイネ科が14%出現するにすぎない。カヤツリグサ科、ヨモギ属は下位層準から上位層準にかけてわずかに増加する傾向がみられるが、-130cmの層準でも4~8%で出現率は低い。

このような花粉組成は明らかにアカガシ亜属(おそらくイチイガシ-Cyclobalanopsisgilva-)の優占する照葉樹林の存在を示唆するもので、縄文後期頃の本道跡周辺の原植生を示していると考えられる。

なお、Te-1花粉帯ではイネ属花粉は殆ど検出されず、草本類の花粉も少ないことから、農耕活動を暗示する花粉学的証拠はみとめられない。

Te-2花粉帯

本帯(試料1)の花粉群集は、Te-1花粉帯とは対照的にマツ属とスギ属が高率に出現し、Te-1帯で優占したアカガシ亜属の出現率は4%に減少する。一方下位の層準では少ないイネ科(野生型)・イネ属(イネ-Oryza sativa)・カヤツリグサ科・キク科・アカガ科・アブラナ科・ハコベ属・ゲンゲ属(種としてはレンゲツウ)が出現し、とくにイネ科(野生型)は159%、イネ属は107%と高率に出現する。アカガシ亜属の減少は、人為干渉によって本地域の自然植生である照葉樹林の破壊が進んだことを示し、またマツ属・スギ属の増加は、自然林の衰退した跡地にその代償植生としてアカマツ二次林とスギ人工林が拡大したことを示すものである。

イネ属の出現は、当然のことながら水稻耕作の集約化によるものであり、このような農耕活動の活発化は周辺地の森林破壊と並行して進んだと推定される。草本類各属の増加も人間活動による森林破壊や農耕にともなう土地の攪乱・改変によるもので、マツ属やスギ属のいちじるしい増加とともに現在の日田地域の現存植生を忠実に反映していると考えられる。

図1 寺崎遺跡F地区各調査区画2トレンチの花粉ダイアグラム

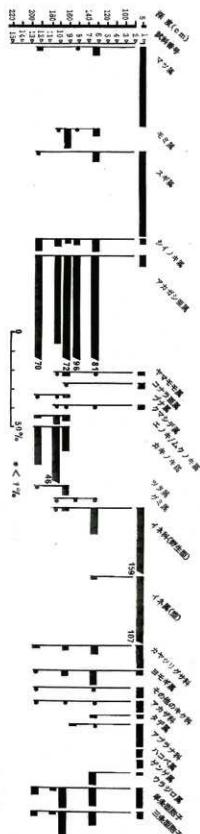


表1 日田市手崎遺跡(F地区, 谷2 Tr.)花粉分析表

土 層	I	VI	IX			X	XI	XIIa	XIIb		XIIc	XIId	XV		XVI
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
深 度 (cm)	5	90	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220
A P (樹木花粉)	(%)					(%)		(%)	(%)	(%)		(%)			
<i>Pinus</i> 7群	42.1	-	-	-	-	3.1	-	0.6	-	-	-	-	1.6	-	-
<i>Abies</i> 3群	-	-	-	-	-	3.5	-	0.6	5.0	0.4	-	-	-	-	-
<i>Tsuga</i> 9群	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cryptomeria</i> 8群	44.1	-	-	-	-	3.9	-	-	-	-	-	-	0.5	-	-
<i>Podocarpus</i> 4群	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Castanopsis</i> 7群	2.6	-	-	-	-	6.1	-	3.4	2.2	4.0	-	-	5.3	-	-
<i>Cyclobalanopsis</i> 7群	3.9	-	-	-	-	80.7	-	95.5	71.9	45.4	-	-	68.8	-	-
<i>Myrica</i> 4群	1.3	-	-	-	-	0.4	-	-	1.4	0.4	-	-	-	-	-
<i>Canolla</i> 9群	-	-	-	-	-	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Lepidobalanus</i> 3群	2.6	-	-	-	-	-	-	-	0.7	-	-	-	-	-	-
<i>Fagus</i> 4群	-	-	-	-	-	-	-	-	1.4	0.4	-	-	0.5	-	-
<i>Carpinus</i> 9群	2.0	-	-	-	-	0.4	-	-	0.7	0.4	-	-	-	-	-
<i>Ulmus/Zelkova</i> 2群	0.7	-	-	-	-	-	-	-	0.7	-	-	-	1.0	-	-
<i>Celtis/Aphananthe</i> 1群	-	-	-	-	-	-	-	-	2.2	3.1	-	-	1.0	-	-
<i>Malolus</i> 7群	-	-	-	-	-	-	-	-	0.7	-	-	-	-	-	-
<i>Diosyros</i> 2群	-	-	-	-	-	-	-	-	12.9	45.8	-	-	19.3	-	-
Rutaceae 2群	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
N A P (非樹木花粉)															
<i>Vitis</i> 1群	-	-	-	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	-
<i>Parthenocissus</i> 1群	-	-	-	-	-	-	-	-	5.0	-	-	-	0.5	-	-
<i>Elaeagnus</i> 1群	-	-	-	-	-	0.9	-	0.6	0.9	-	-	-	-	-	-
<i>Caesalpinia</i> 1群	-	-	-	-	-	0.9	-	-	0.7	-	-	-	0.5	-	-
<i>Ilex</i> 1群	-	-	-	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	0.5	-	-
Gramineae(wild type) (雑草類)	158.6	-	-	-	-	14.0	-	-	1.4	0.4	-	-	-	-	-
<i>Oryza</i> 1群	107.2	-	-	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyperaceae 3群	7.2	-	-	-	-	4.4	-	-	-	-	-	-	1.0	-	-
<i>Artemisia</i> 3群	2.0	-	-	-	-	7.8	-	-	2.2	-	-	-	0.5	-	-
Other Compositae 4群	5.3	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	-	0.5	-	-
Chenopodiaceae 1群	5.9	-	-	-	-	0.9	-	-	0.7	-	-	-	0.5	-	-
<i>Panicum</i> 1群	2.0	-	-	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cruciferae 7群	11.8	-	-	-	-	0.4	-	1.1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stellaria</i> 1群	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Astragalus</i> 1群	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Justicia</i> 1群	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Haloragis</i> 1群	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ranunculaceae 1群	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Impatiens</i> 1群	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
FS (シダ植物孢子)															
<i>Gleichenia</i> 1群	1.3	-	-	-	-	5.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pyrrosia</i> 1群	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	-	-	-	-	-	-
Monolete type 1群	10.5	-	-	-	-	9.2	-	-	9.4	1.3	-	-	4.2	-	-
Trilete type 3群	3.3	-	-	-	-	6.6	-	-	13.7	1.3	-	-	2.1	-	-

注：各分類群の出現率は、各試料毎に検出された樹木花粉(A P)の総数を基数とした百分率で示した。

日田バイパス(大部、手崎)遺跡出土のサヌカイト、 黒曜石製遺物の原産地分析

齋科 哲男
(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探るという目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{1,2,3)}。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異間があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の手操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からない場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれと対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

日田バイパス(大部、手崎)遺跡から出土した遺物のうち黒曜石製遺物14個およびサヌカイト製遺物26個の合計40個について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト、黒曜石原石の分析

サヌカイト、黒曜石両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトではK/Ca、Ti/Ca、Mu/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srを、また黒曜石ではCa/K、Ti/K、Mu/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて28ヶ所の調査を終えている。図1にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質なサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。これらの原石を良質な原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると39個の原石群に分類でき、その結果を表1に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西(城山)群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図2に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがかつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると表2に示すように99個の原石群に分かれ



図1 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

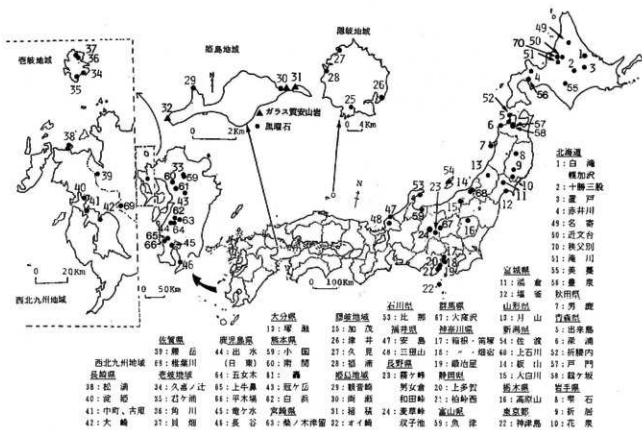


図2 黒曜石原産地

る。佐賀県の腰岳地域および大分県の嵯峨地域、観音崎、両瀬の両地区は黒曜石の有名な原産地で、
姫島地域ではガラス質安山岩もみられ、これについても分析を行なった。隴岐島、巻岐島、青森県、
和田峠の一部の黒曜石には、Srの含有量が非常に少なく、この特徴が産地分析を行う際に他の原産
地と区別する、有用な指標となっている。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分
と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、
圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方
黒曜石製のものには風化に対して安定で、表面に薄い水層が形成されているすぎないため、表面の
泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果をサヌ
カイト、黒曜石に分けて表3、4に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するための原石群との比較を相関を考慮した多変量統計の手
法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞ
れの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4, 5)}。例えば産地分析の結果の確率「金山東群
(1%)」が得られた場合、金山原産地のに1%の確率でこの遺物と同じ組成の原石があり、言い替
えると金山原石10個の中に1個は必ずあると言える。この確率を各産地の原石群について求める。
黒曜石原産地では99個の原石群で、サヌカイト原産地28箇所の39個の原石群と比較して帰属確率を
求める。各原石の確率を全て報告すると1個の遺物につき1ページが必要で、ページの制限もあり、
確率の高い原石産地のものだけを選んで表5に記した。原石産地(確率)の欄にマハラノビスの距離
 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている。0.1%の確率に達しなかった遺物で
この D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原
石群の組成と似ているため、推定確率は低い、その原石産地と考えてほぼ間違いないと判断さ
れたものである。

九州西北地域の針尾島の古里、中町、淀姫の各原産地、松浦半島および腰岳の両原産地採取された原
石は、相互に組成が似た原石がみられる(表6)。西北の九州地域で似た組成を示す黒曜石の原石群
は、腰岳、古里第一、松浦第一の各群(腰岳系と仮称する)および淀姫、中町第一、古里第二、松浦
第四の各群(淀姫系と仮称する)などである。また、古里第二群原石と肉眼的および成分的に似た原
石は埴野町椎葉川地区でも採取でき、この原石は姫島産乳灰色黒曜石と同色調をしているが、組
成によって姫島産の黒曜石と容易に区別できる。もし似た組成の原石で遺物が作られたとき、この遺
物は複数の原産地に帰属され原産地を特定できない場合がある。たとえ遺物の原石産地がこれら
腰岳系、淀姫系の原石群の中の一群および古里第二群のみに帰属されても、この遺物の原石産地は
腰岳系、淀姫系および古里第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならない。角礫の黒
曜石の原産地は腰岳および淀姫で、円礫は松浦、中町、古里(第二群は角礫)各産地で産出している
ことから、似た組成の原石産地の区別は遺物の自然面から円礫か角礫かを判定に有用な情報となる。

今回分析した大部遺跡の7個の遺物の中で黒曜石製遺物の産地分析の結果は小国産原石が1個、
腰岳系原石が1個、また風化層が厚く分析値が新鮮面と異なるために産地が特定できなかった黒曜
石製遺物1個で、サヌカイト製遺物では、多久産原石が2個で原石産地不明の後述の手崎遺跡のガ
ラス質安山岩と同じ産地と推測される原石が2個使用されていることが明らかになった。手崎遺跡
出土の33個では産地が特定できた黒曜石遺物は、小国産が4個、淀姫系が1個、サヌカイト製遺物
では、多久産が12個、岡本産と老松山産がそれぞれ1個づつ使用されていることが明らかになった。
一方、産地が特定されなかったNo.15、No.34の白色黒曜石は相互に似た元素組成の黒曜石で同じ産

地の原石の可能性が推測された。また、大部遺跡のNo.5、No.6および手崎遺跡のNo.18、No.21、No.33、No.40のガラス質安山岩の元素組成は相互に似ていることから同じ産地の原石の可能性が考えられる。No.26とNo.29の黒曜石製遺物は肉眼観察では似ていて元素組成ではY/Zr比値が相互に少し異なることが、同じ原石産地の可能性を否定する理由にはならないであろう。産地分析の結果で交流の活発な原石地地方の原石が多く使用されると考えると、手崎遺跡では距離的に近い小国産地以外に多久、老松山、岡本の原石産地が集中する多久周辺地方の原石が主体的に使用され、また手崎遺跡では淀橋系の、大部遺跡では腰岳系の黒曜石も見られることから西北九州地方との交流も持たれていたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 齋科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 齋科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学、10、11:53-81:33-47
- 3) 齋科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1980)、考古学と物理化学。学生社

第2表-2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地 原石群名	分析 回数	Ca/K ±σ	Ti/K ±σ	Mn/Zr ±σ	Fe/Zr ±σ	Rb/Zr ±σ	Sr/Zr ±σ	Y/Zr ±σ	Nb/Zr ±σ	Al/K ±σ	Si/K ±σ
栃木県 高野山	49	0.738±0.067	0.200±0.010	0.644±0.007	2.018±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.823±0.014	0.836±0.002	0.518±0.012
東京都 神代第一	58	0.381±0.014	0.138±0.005	0.182±0.011	1.728±0.070	0.471±0.027	0.659±0.027	0.247±0.021	0.880±0.028	0.076±0.003	0.568±0.012
神奈川 箱根・田代 湖・芦ノ湖	30 31	0.765±0.254 2.005±0.094	0.219±0.057 0.659±0.019	0.228±0.019 0.878±0.007	0.282±0.822 2.912±1.104	0.948±0.017 0.982±0.007	1.757±0.061 0.680±0.029	0.252±0.017 0.282±0.011	0.025±0.019 0.011±0.010	0.142±0.008 0.098±0.005	0.538±0.046 1.128±0.021
静岡県 上多賀 北郷	31	1.229±0.078	0.294±0.013	0.911±0.006	0.697±0.065	0.987±0.006	0.351±0.023	0.138±0.011	0.019±0.009	0.059±0.004	0.638±0.018
滋賀県 比叟	12	0.278±0.013	0.085±0.004	0.901±0.006	2.084±0.095	0.908±0.057	0.641±0.048	0.194±0.014	0.102±0.021	0.077±0.002	0.372±0.009
石川県 比叟	17	0.379±0.014	0.087±0.004	0.960±0.009	2.699±0.187	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.005	0.052±0.018	0.032±0.003	0.398±0.017
福井県 安土 三上山	21	0.407±0.007	0.122±0.005	0.838±0.006	1.628±0.051	0.943±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.802±0.002	0.450±0.010
群馬県 大塚	42	1.481±0.117	0.488±0.021	0.942±0.006	2.005±0.125	1.162±0.011	0.841±0.034	0.185±0.010	0.009±0.000	0.833±0.005	0.458±0.012
長野県 霧ヶ峰 御前平第一	17 13	0.132±0.008 0.167±0.028	0.056±0.002 0.048±0.006	0.104±0.011 0.117±0.011	1.339±0.057 1.346±0.085	1.339±0.047 1.853±0.124	0.309±0.023 0.112±0.006	0.275±0.010 0.409±0.048	0.112±0.028 0.139±0.028	0.026±0.002 0.025±0.002	0.361±0.013 0.335±0.016
〃 第二	17	0.145±0.003	0.022±0.001	0.153±0.019	1.481±0.039	2.449±0.133	0.630±0.012	0.547±0.044	0.196±0.025	0.027±0.002	0.388±0.007
〃 第三	62	0.248±0.048	0.061±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.104	0.274±0.194	0.374±0.048	0.172±0.034	0.025±0.003	0.348±0.017
〃 第四	37	0.142±0.017	0.063±0.004	0.909±0.009	1.733±0.065	1.311±0.037	0.296±0.039	0.203±0.038	0.098±0.022	0.024±0.002	0.331±0.019
〃 第五	47	0.176±0.016	0.075±0.010	0.373±0.011	1.282±0.098	1.553±0.196	0.273±0.269	0.384±0.042	0.366±0.023	0.021±0.002	0.388±0.013
〃 第六	53	0.158±0.011	0.055±0.005	0.865±0.012	1.733±0.094	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.019±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
〃 第七	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.019	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.019	0.442±0.039	0.142±0.022	0.028±0.002	0.386±0.010
男女舎 変質帯	118	0.223±0.026	0.162±0.010	0.659±0.006	1.109±0.081	0.791±0.109	0.499±0.052	0.128±0.024	0.063±0.017	0.028±0.002	0.384±0.010
変質帯 双子	86	0.283±0.026	0.138±0.011	0.849±0.008	1.403±0.069	0.533±0.048	0.784±0.031	0.113±0.018	0.086±0.018	0.029±0.002	0.401±0.017
〃 双子	84	0.248±0.025	0.138±0.010	0.854±0.009	1.486±0.154	0.686±0.056	0.785±0.017	0.118±0.022	0.037±0.028	0.016±0.004	0.391±0.008
鳥取県 茂 久次	20	0.154±0.005	0.092±0.006	0.918±0.003	0.943±0.029	0.288±0.016	0.068±0.003	0.047±0.010	0.144±0.015	0.022±0.001	0.288±0.017
久次	30	0.150±0.008	0.160±0.003	0.813±0.002	0.818±0.033	0.395±0.010	0.913±0.003	0.048±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006
見立	31	0.142±0.004	0.081±0.006	0.929±0.003	0.960±0.046	0.389±0.013	0.801±0.002	0.031±0.015	0.029±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006
大分県 霧ヶ峰 阿蘇第一	41 32	0.216±0.017 0.221±0.021	0.045±0.003 0.045±0.003	0.428±0.037 0.450±0.061	6.807±0.808 7.246±0.988	1.829±0.220 1.917±0.124	1.572±0.189 1.320±0.057	0.320±0.066 0.335±0.057	0.035±0.009 0.069±0.015	0.035±0.002 0.035±0.002	0.418±0.011 0.418±0.009
〃 第二	32	0.024±0.007	0.140±0.013	0.194±0.026	3.389±0.322	0.414±0.077	3.182±0.189	0.144±0.021	0.249±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
〃 第三	18	0.153±0.146	0.211±0.028	0.128±0.019	4.491±0.231	0.636±0.067	0.005±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.041±0.004	0.471±0.017
〃 第四	16	0.174±0.016	0.254±0.028	0.122±0.012	3.480±0.193	0.298±0.048	0.310±0.187	0.112±0.022	0.133±0.024	0.040±0.005	0.488±0.013
〃 第五	25	0.653±0.066	0.141±0.018	0.189±0.039	3.308±0.425	0.603±0.096	3.234±0.284	0.151±0.033	0.345±0.059	0.037±0.002	0.448±0.015
〃 第六	30	0.313±0.023	0.177±0.009	0.959±0.019	1.489±0.124	0.680±0.051	0.686±0.082	0.175±0.018	0.082±0.029	0.028±0.002	0.371±0.009

×: 平均値, σ: 標準偏差, * : ガラス質黒曜石

第2表-3 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地 原石群名	分析 回数	Ca/K ±σ	Ti/K ±σ	Mn/Zr ±σ	Fe/Zr ±σ	Rb/Zr ±σ	Sr/Zr ±σ	Y/Zr ±σ	Nb/Zr ±σ	Al/K ±σ	Si/K ±σ
佐賀県 藤 葉川	56 59	0.214±0.015 0.487±0.010	0.828±0.001 0.873±0.003	0.878±0.012 0.694±0.013	2.694±0.119 2.712±0.126	1.688±0.085 1.269±0.080	0.441±0.030 0.694±0.105	0.203±0.019 0.103±0.007	0.257±0.029 0.240±0.040	0.027±0.002 0.020±0.004	0.356±0.008 0.321±0.006
長崎県 久寿/江 戸ヶ嶽	37	0.165±0.012	0.699±0.032	0.634±0.003	1.197±0.030	0.483±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.291±0.008
〃 戸ヶ嶽	28	0.161±0.013	0.954±0.022	0.074±0.003	1.209±0.032	0.402±0.009	0.305±0.004	0.118±0.016	0.222±0.016	0.025±0.002	0.294±0.008
〃 川	29	0.138±0.010	0.037±0.002	0.058±0.007	1.741±0.063	1.886±0.076	0.912±0.012	0.303±0.038	0.062±0.036	0.026±0.002	0.258±0.010
〃 第一	21	0.218±0.080	0.029±0.002	0.865±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.236±0.028	0.027±0.002	0.399±0.012
〃 第二	17	0.178±0.016	0.030±0.004	0.962±0.022	2.361±0.389	1.607±0.245	0.389±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.028±0.002	0.361±0.010
〃 第三	16	0.245±0.018	0.060±0.006	0.995±0.012	1.975±0.289	0.678±0.099	0.421±0.081	0.120±0.039	0.145±0.023	0.026±0.002	0.338±0.013
〃 第四	32	0.287±0.019	0.067±0.004	0.644±0.007	1.905±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.113±0.025	0.117±0.018	0.023±0.001	0.287±0.007
〃 第五	44	0.329±0.014	0.090±0.005	0.642±0.007	1.804±0.085	0.539±0.022	0.504±0.025	0.077±0.018	0.117±0.014	0.023±0.002	0.374±0.008
〃 第六	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.957±0.007	1.894±0.095	0.632±0.062	0.403±0.028	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.318±0.007
〃 第七	17	0.327±0.029	0.089±0.017	0.545±0.007	1.832±0.074	0.633±0.066	0.439±0.020	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.012
〃 第八	19	0.163±0.010	0.027±0.001	0.889±0.016	2.699±0.215	1.766±0.194	0.418±0.085	0.312±0.056	0.259±0.040	0.027±0.002	0.386±0.010
〃 第九	22	0.414±0.012	0.074±0.006	0.107±0.015	2.460±0.301	1.221±0.064	1.851±0.182	0.133±0.047	0.131±0.024	0.031±0.002	0.382±0.010
〃 第十	19	0.257±0.026	0.062±0.009	0.954±0.009	1.936±0.131	0.812±0.113	0.438±0.052	0.081±0.028	0.145±0.037	0.028±0.002	0.384±0.011
〃 第十一	25	0.181±0.011	0.048±0.002	0.837±0.008	1.718±0.058	0.948±0.039	0.170±0.018	0.103±0.028	0.137±0.019	0.028±0.002	0.340±0.006
熊本県 小南 田原	37	0.317±0.023	0.127±0.005	0.683±0.007	1.441±0.070	0.811±0.032	0.703±0.044	0.175±0.033	0.897±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007
〃 田原	30	0.281±0.016	0.124±0.007	0.854±0.003	0.785±0.033	0.328±0.012	0.238±0.015	0.099±0.012	0.813±0.009	0.021±0.002	0.281±0.008
〃 島 野ヶ岳	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.328±0.017	0.275±0.010	0.968±0.011	0.033±0.009	0.020±0.002	0.243±0.008
〃 島 野ヶ岳	39	0.261±0.012	0.211±0.009	0.032±0.003	0.789±0.038	0.324±0.011	0.275±0.017	0.964±0.011	0.037±0.006	0.025±0.002	0.217±0.009
〃 島 野ヶ岳	19	0.197±0.026	0.161±0.006	0.925±0.006	1.405±0.073	1.048±0.067	0.348±0.028	0.183±0.023	0.633±0.017	0.019±0.001	0.273±0.007
宮崎県 島/大塚 第二	47 37	0.207±0.015 0.281±0.015	0.094±0.006 0.094±0.006	0.470±0.009 0.685±0.010	1.521±0.075 1.743±0.083	1.080±0.048 0.795±0.039	0.418±0.030 0.205±0.029	0.206±0.024 0.205±0.029	0.063±0.024 0.022±0.002	0.020±0.003 0.022±0.002	0.314±0.011 0.323±0.019
鹿児島県 日 文女木 上牛島 平木島 電ヶ岳	42 41 41 36	0.282±0.018 0.286±0.021 1.629±0.086 1.944±0.054	0.143±0.006 0.103±0.008 0.804±0.037 0.912±0.028	0.022±0.004 0.013±0.003 0.853±0.006 0.962±0.005	1.178±0.040 1.170±0.061 3.342±0.215 3.975±0.182	0.712±0.020 0.795±0.027 0.188±0.013 0.194±0.011	0.408±0.028 0.425±0.021 1.186±0.056 0.986±0.049	0.180±0.018 1.088±0.015 0.822±0.009 0.821±0.019	0.819±0.013 0.019±0.001 0.036±0.002 0.021±0.003	0.019±0.001 0.019±0.001 0.488±0.013 0.488±0.013	
〃 永 吉川	30	0.514±0.032	0.171±0.008	0.863±0.009	1.524±0.079	0.919±0.038	0.719±0.054	0.115±0.018	0.082±0.016	0.037±0.001	0.522±0.019
〃 永 吉川	36	0.380±0.032	0.137±0.006	0.865±0.010	1.681±0.062	0.844±0.038	0.553±0.029	0.149±0.021	0.098±0.029	0.037±0.003	0.543±0.012
〃 永 吉川	12	0.735±0.010	0.202±0.005	0.678±0.011	3.750±0.111	0.980±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.481±0.004

×: 平均値, σ: 標準偏差, * : ガラス質黒曜石

*) Ando, A., Kuratsune, H., Osumi, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples J0-1 granodiorite and J0-1 basalt. Geochimical Journal Vol.8, 175-182.

第3表 日田バイパス(大部、手筒)遺跡出土のサヌカイト製遺物分析結果

分析 番号	元 素 比										
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
45387	.861	.420	.056	4.372	.552	.089	.891	.232	.020	.219	
45389	1.585	.345	.042	1.224	.305	.045	.720	.077	.034	.493	
45390	1.485	.317	.047	1.159	.300	.044	.634	.038	.034	.477	
45391	.727	.327	.078	6.644	.608	.075	.807	.201	.017	.211	
45392	.724	.333	.080	6.318	.568	.069	.849	.209	.017	.196	
45393	.810	.368	.058	4.689	.570	.034	.921	.265	.019	.216	
45394	1.616	.336	.060	3.419	.451	.037	.470	.114	.026	.301	
45396	.720	.379	.077	5.111	.510	.055	.876	.221	.016	.197	
45397	.836	.402	.050	4.239	.531	.064	.892	.229	.016	.216	
45398	.702	.396	.060	4.982	.437	.046	.800	.231	.015	.187	
45400	.622	.362	.075	5.908	.491	.057	.829	.244	.014	.165	
45401	.431	.284	.065	5.945	.405	.031	.540	.134	.011	.126	
45402	1.390	.300	.051	1.210	.289	.038	.705	.048	.029	.449	
45405	.711	.351	.082	6.432	.535	.054	.848	.266	.016	.200	
45406	1.429	.319	.040	1.262	.278	.057	.730	.051	.032	.460	
45407	.879	.346	.078	4.870	.668	.025	.870	.247	.020	.236	
45408	.721	.348	.077	6.307	.603	.102	.829	.206	.016	.202	
45409	.749	.337	.077	6.447	.655	.051	.797	.232	.018	.221	
45410	.427	.458	.057	4.616	.131	.050	.866	.055	.013	.136	
45413	.628	.357	.076	5.779	.503	.086	.858	.225	.015	.165	
45415	.877	.281	.080	5.534	.564	.062	.698	.229	.018	.186	
45416	.862	.368	.054	4.519	.641	.098	.898	.227	.021	.236	
45417	.663	.362	.061	5.768	.498	.066	.866	.232	.015	.185	
45418	1.435	.309	.046	1.268	.287	.062	.704	.034	.037	.466	
45421	.201	.349	.081	5.059	.063	.061	.442	.034	.010	.083	
45426	1.415	.306	.032	1.174	.281	.013	.728	.046	.030	.437	

第4表 日田バイパス(大部、手筒)遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果

分析 番号	元 素 比										
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
45384	.270	.127	.065	1.410	.617	.656	.196	.085	.014	.256	
45385	.099	.014	.077	2.335	2.452	.474	.199	.238	.009	.134	
45386	.198	.032	.061	2.337	1.676	.415	.313	.233	.016	.247	
45395	.280	.119	.069	1.427	.662	.679	.193	.110	.018	.255	
45399	.339	.115	.059	2.119	.815	.943	.100	.114	.018	.256	
45403	.340	.082	.045	1.887	.564	.548	.071	.123	.019	.275	
45411	.395	.125	.039	1.832	.630	1.088	.102	.075	.021	.301	
45412	.285	.119	.055	1.275	.615	.659	.174	.080	.019	.253	
45414	.436	.135	.035	1.946	.606	1.111	.142	.098	.020	.330	
45419	.382	.139	.059	2.127	.765	.967	.131	.097	.017	.248	
45422	.261	.120	.050	1.249	.585	.585	.209	.073	.019	.264	
45423	.393	.130	.039	1.837	.651	1.088	.100	.082	.020	.294	
45424	.150	.062	.055	1.322	.716	.747	.178	.079	.012	.151	
45425	.332	.131	.066	1.579	.670	.741	.206	.117	.018	.265	

第5表 日田バイパス(大部、手簡)遺跡出土黒曜石、ササカイト製造物の原産地推定結果

分析号	遺物番号、注記	原産地(確率)	判定	時代時期(伴出土器形式)	遺物品名(備考)
	大部遺跡				
45384	1. A区2・3層	小国(38%)、塚瀬(37%)	小国	縄文早一晩期	削片
45385	2. A区2・3層	風化層厚い	*	*	*
45386	3. A区3・4層	古里第一群(12%)、豊谷(6%)、松浦第一群(2%)	豊谷	*	*
45387	4. A区3・4層	多久第二群(0.2%)	多久	*	*
45389	5. B地区3号穴	ガラス買安山岩	*	縄文時代早期	*
45390	6. B地区No.218	*	*	*	*
45391	7. B地区No.231	多久第二群(0.1%)	多久	*	*
	手簡遺跡				
45392	8. 1トレ1a層(A地区)	多久第二群(1%)	多久	縄文早一晩期	*
45393	9. A地区36	*	*	縄文早一晩期	*
45394	10. A地区N5区(3層)	*	*	縄文早一晩期	*
45395	11. A地区M区グッド3層)	塚瀬(54%)、小国(47%)	小国	縄文早一晩期	*
45396	12. C地区縄文1-63	多久第一群(1%)	多久	縄文時代後期西平式	*
45397	13. C地区縄文1-357a	多久第二群(1%)	*	縄文時代後期西平式	*
45398	14. C地区縄文1	多久第一群(2%)	*	縄文時代後期西平式	*
45399	15. *	白色黒曜石	*	縄文時代後期西平式	*
45400	16. *	多久第二群(9%)	多久	縄文時代後期西平式	*
45401	17. *	岡本・寺山(0.1%)	岡本	縄文時代後期西平式	*
45402	18. C地区塚穴1-34	ガラス買安山岩	*	残屑	*
45403	19. C地区塚穴1(5層)	渡瀬(67%)、古里海岸(51%)、松浦第一群(12%)	渡瀬	*	*
45405	20. C地区塚穴1埋土中	多久第二群(22%)	多久	*	*
45406	21. *	ガラス買安山岩	*	*	*
45407	22. C地区土溝9	多久第二群(8%)	多久	縄文・後一晩期	*
45408	23. C地区P1a9	*(0.2%)	*	*	*
45409	24. C地区3層	*(1%)	*	*	*
45410	25. C地区G4区3層-No.102	*	*	*	*

分析号	手簡遺跡	原産地	判定	時代時期	遺物品名
45411	26. C地区G4区3・4層	球果の多い黒曜石		縄文早一晩期	削片
45412	26. C地区(4層)No.422	小国(21%)、塚瀬(13%)	小国	*	*
45413	28. C地区(4層)No.127	多久第二群(1%)	多久	*	*
45414	29. C地区G5区(4層)	球果の多い黒曜石	*	*	*
45415	30. C地区F5区(4層)	老松山(11%)、岡本・寺山(1%)	老松山	*	*
45416	31. C地区G5,6,7層-No.11	多久第一群(0.1%)	多久	*	*
45417	32. 2次E区-7	多久第二群(11%)	*	縄文早一晩期	*
45418	33. 2次E-4区No.32	ガラス買安山岩	*	*	*
45419	34. 2次F-4区No.47	白色黒曜石	*	*	*
45421	35. 2次E-3区No.183	*	*	縄文早期	*
45422	36. II4区2・3層	塚瀬(6%)	小国	縄文早一晩期	*
45423	37. M4区3・4層	風化層厚い	*	*	*
45424	38. E4区(4a層)	*	*	*	*
45425	39. F4区(3・4a層)	塚瀬(67%)、小国(12%)	小国	*	*
45426	40. 2次E3区5層	ガラス買安山岩	*	縄文早期前干	*

第6表 九州西北地域原産地採取黒石が各原石群に判定される割合の百分率(%)

原石群	九州西北地域原産地地名(原石個数)					
	鎌岳(26)	渡瀬(44)	古里陸地(66)	古里海岸(21)	中町(44)	牟田(46) 大石(39)
鎌岳群	100					
渡瀬群	100	37			24	33
古里第一群	100		63	5		43
第二群		8	57			
第三群		95	25	33	91	50
中町第一群		12	14	24	61	26
第二群			14	24	64	39
松浦第一群		88	98	32	5	24
第二群		96	51	5	2	39
第三群		51	24	33	82	54
第四群		86	17	24	82	52

第6章 総括

調査で判明した遺跡の歴史をまとめておきたい。

- 旧石器時代** 旧石器時代 手崎遺跡E地区の第5層や上位の縄文時代包含層から旧石器時代の石核らしき石器が出土しており、その時代にこの付近で人の活動の痕跡があったことは確実である。
- 縄文早期** 縄文時代早期 この時代以前は今日Hの地形環境とは大きく異なる景観であったと推定される。手崎遺跡の立地する現在の低位段丘2面はまだ形成途中で、遺跡の立地する面をふくめて大山川の氾濫がたびたび及ぶ場所であった。一方大部遺跡は、その大山川流域を見下ろす安全な山地尾根上に営まれている。小規模な遺跡とはいえ集石遺構・炉穴を伴い早期集落の典型的な姿を留めている。手崎遺跡は、周辺の景観を復元するとまったく違う性格が浮かび上がる。つまり大部遺跡にくらべればはるかに多くの遺物を残す大遺跡であるが、河川周辺の危険な場所に立地していたのである。この時期に伴うことが明確な集石遺構・炉穴が検出されなかったことは、あるいは遺跡の性格の違いを表しているのかもしれない。
- 立地** 縄文時代前期～晩期 この時期からほぼ現在の景観ができあがる。河岸段丘が形成され、流れる湧水の浸食によって現在の湧水谷もできあがる。前期以後に手崎遺跡に居住した縄文人は明らかに段丘地形と湧水谷の存在を前提に生活を営んでいる。
- 後期晩期には堅穴住居が造られ、扁平打製石斧が多くもちいられることからみても、湧水の周辺に定住し、一定程度の「耕作」を行わないながら、ここを基地に周辺で狩猟・採集活動を行っていたと推定される。
- 弥生時代** 弥生時代 縄文時代晩期をもって縄文時代の集落は営まれなくなり、弥生時代後期後半に再び堅穴建物が建設されるまで、空白の時代がつづく。大分県の大野川流域などの他の地域の台地地帯の集落の動向と一致する現象である。より水田耕作へ適した場所に集落が立地をかえたために起こった現象であると推定される。弥生時代中期のC地区2号上層が落し穴であるとなると、この時代には湧水の周辺には、その水を利用する動物を捕獲するための施設が置かれていたような状態であったと考えられる。つまり手崎遺跡周辺では、まだ湧水谷の水田化も行なわれておらず、湧水を利用する人間を動物からまもり、また湧水に集まる動物を捕獲するために落し穴が造られるという土地利用状態と思われる。
- 弥生時代後期後半になってはじめて102号堅穴建物が造られる。ほかの台地上に近接する障が原辻原遺跡などの調査成果からみて、湧水谷の水田開発に伴う可能性がある。谷調査区の成果からはその時代の水田の存在を裏付ける資料は得ていないが、谷調査区的位置が湧水点から100m以上離れており、湧水点に近い部分で小規模な水田が営まれた可能性は否定できない。
- 湧水点の関** 古墳時代 古墳時代前期～7世紀 古墳時代前期・中期・後期に間欠的に最小単位の集落展開がみられる。ほかにこの時期に属する柱穴群が存在している可能性が高いが、奈良時代と中世の柱穴に重複するため分離できなかった。全体として古墳時代前期から7世紀には小集落が湧水の近くに立地している。湧水の近くで小規模な水田を営みながら周辺で畑地をおこなう生活が展開したものと推定される。しかし湧水谷の規模からみても水田はきわめてわずかで、大規模な集落の展開は望めない。
- 奈良時代** 奈良時代 律令国家成立期に、手崎遺跡・大部遺跡の所在する場所は豊後国臼田郡石井郷に編成された。それからほどなく、まとまった集落が8世紀第二四半世紀を中心に長く後半世紀ほどの短期間展開する。集落は突然始まり、突然終るようである。集落共同の倉庫をもち、居住区をいくつかの「宅地」に分かった集落が営まれる。集落が全体として移転してきたというよりも、民俗習慣を異にするいくつかの母集団からそれぞれ小集団を集めて集落をつくったような在り方である。一部の「宅地」内での製塩土器の多量廃棄状態からみて、塩流通の中継をおこなう小集団がこの中

に生活していたと推定される。同時に湧水谷の水田は継続しているので、手崎遺跡のなかには湧水谷の水田を管理・耕作する集落もいたにちがいない。集落の規模と水田・畑地の規模からみて、とうてい農業開発のためにこの場所に集落が展開したとは考えられないし、各「宅地」の住人が自発的・自然にあつまって集落を形成したとは、その民俗習慣の多様性からみて思えない。交通あるいは物資流通などの目的で権力的に組織された集落の可能性を考慮しておきたい。ときはあたかも律令国家の最盛期である。同時に大部遺跡では同じ時代に焼土壇が5基つくられている。山間部の森林資源開発に伴う遺構と推定されるが、このような遺構が手崎遺跡で奈良時代集落が展開する頃とはほぼ同時期につくられている事実は、きわめて興味深い。

以上のように8世紀の第2四半世紀を中心に短期間のみに限って展開する集落は、手崎遺跡の西の台地上に立地する、同じ石井郷内の上野第1遺跡でも知られている(註1)。この時期にかなり大規模な集落の移動があったことは確実である。さらに日田郡域をこえて玖珠川をさかのぼった九重町松木遺跡(玖珠郡)でもまったく同じ時期短期間集落が展開することが明らかにされている(註2)。それぞれ地形環境や生産条件が異なるところで、同一の時期に短期間集落が展開する現象が、特定の地域だけでなく郡の領域をこえて起こるということは、奈良時代にあっては少なくとも豊後国が関係するような事業や政策がその背景にあるのではないかと考えさせる。具体的な事柄の検討は今度にゆだね、現象の指摘に留めたい。

そしてその後奈良時代の後半には再び、この場所は畑に帰ってしまうと推定される。

平安時代 F地区220号土壇で9世紀前半の小土壇を確認した以外、平安時代の遺物はほとんど
平安時代
無い。一方F地区谷調査区の水田層からみて水田耕作に切れ目はないので、この時代にも湧水を利用した小規模な水田は継続していたことは疑いない。

中世前期 13世紀ごろに再び、手崎遺跡が居住地として利用されるようになる。中世の遺構として
中世前期
は配石土壇墓2基と柱穴多数を検出した。墓の周辺に中世遺物が混入した柱穴が多いので、この2基の墓の周囲には掘立柱建物群が存在したはずである。F地区の203・204・205号掘立柱建物は、
屋敷
その一部であった可能性がある。また1号中世墓と2号中世墓は単独で存在し20m以上離れており、墓の集中する墓域があったとは思われない。おそらく建物群から構成される屋敷地の一角に単独で葬られた屋敷墓であった可能性が高いのである。とすれば鎌倉時代の屋敷墓として貴重な資料となろう。

中世後期の遺構遺物はまったくない。再三再四集落は原野かあるいは畑地にかえるのである。そして13世紀の集落以後この場所は現代まで原敷地になることはなかったと考えられる。

近世 集落はまったく立地しないが、水田が途絶えるわけではなく、101・102号溝の畑地境界溝
近世以後
の存在から考えて遺跡は畑地として利用され続ける。

近代 大正時代まで近世の景観が継続するが、昭和初期の1930年代に段丘面に用水がきて、発掘調査時のような段丘面全面の水田化が達成される。
畑

手崎遺跡の土地利用は以上のように変化したと推定される。(田中)

註1、田中裕介『上野第1遺跡』(一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(5))
大分県教育委員会 1993

註2、五十川孝正『松木遺跡』(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書7)大分県教育委員会
1997

報 告 書 抄 録

ふりがな		ひたしなかせいせきくんのちようき						
書名		日田市高瀬遺跡群の調査2						
副書名		手崎遺跡 大部遺跡						
巻次		2						
シリーズ名		一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号		II						
編著者名		田中裕介・坂本高弘・清水宗昭・高富豊・丸尾博志・畑中健一・濑科哲男						
編集機関		大分県教育委員会						
所在地		〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1 TEL. 0975-34-1111						
発行年月日		西暦 1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
て 手 崎	大分県日田市 大字高瀬字手崎	44204-6	651208	33°17'	130°57'	910509 ～920124 9307 ～9312	6,200	道路建設
お お 大 部	大分県日田市 大字日高字牧原	44204-6	651207	33°17'	130°57'	920212 ～920327	2,200	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
手 崎	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中世 近世		竪穴住居・土塙 竪穴建物 竪穴建物 竪穴建物・掘立柱建物・土塙 中世墓 畑地境界溝		縄文早前後晩期土器石器 弥生土器 土師器 青磁碗		
大 部	集落	縄文時代 奈良時代		炉穴・集石 焼土塙		縄文早前後晩期土器石器		

日田市高瀬遺跡群の調査2

手 崎 遺 跡 大 部 遺 跡

一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

1998年3月31日

編集 大分県教育庁文化課
発行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL. 0975(36)1111
印刷 日の九印刷株式会社

